山岳
第一年
第二號
山岳會

山岳

第一年
第二號

本號目次

○附圖

○白馬岳白馬尻附近より大雪溪を望む　○利尻島利尻山　○松川內川の合流點より白馬連山を遠望す
○白馬岳離山附近より鑓ヶ岳背面を望む　○信州御嶽三ノ池　○御嶽八合目金剛童子より繼母岳を望む
○沼津方面の山腹より見たる愛鷹山　○天城山八丁の池附近の殘雪

○本欄

北海道の火山　理學博士　神保小虎　一頁
樺太の山　農學士　志賀重昂　七
新高山紀行　尾崎白水　一〇
利尻山と其植物　牧野富太郎　二五
愛鷹山と天城八丁の池　高野鷹藏　三七
甲州八ヶ岳　武田久吉　四九
白馬籠城記　河田默　五九
白馬岳及鑓ヶ岳　武田久吉　七四
那須山と大峠越　志村烏嶺　八〇
日光より南會津への山越　理學士　梅澤親行　八五
仙元嶺と鐘乳洞　白井光太郎　九五
梅澤親光

御嶽採集記　川崎義介　一〇五
守門嶽に登る記　大平晟　一一〇
鞍掛山に遊ぶの記　高頭式　一一九
富士紀行　小林すゝむ子　一二四

○雜錄　自一三〇至一五二

○千島群島の山岳研究に就て(式)　○登山の導者養成に就きて(烏水)　○山岳會の設立地(烏水)　○再び落機山中の高峰に就て(H、T)　○ヒマラヤの意義(H、T)○御嶽の小草(其蜩)　○山岳の名稱を冐せる植物(H、T)　○日本植物景觀日光植物(三脚生)　○高山に於ける植物の保護(K、J)　○登山の携帶品(伊東湖川)　○新高山探檢順路の高度及び氣溫(一記者)　○新高山登山の準備と携帶品(一記者)

○雜報　自一五二至一五七

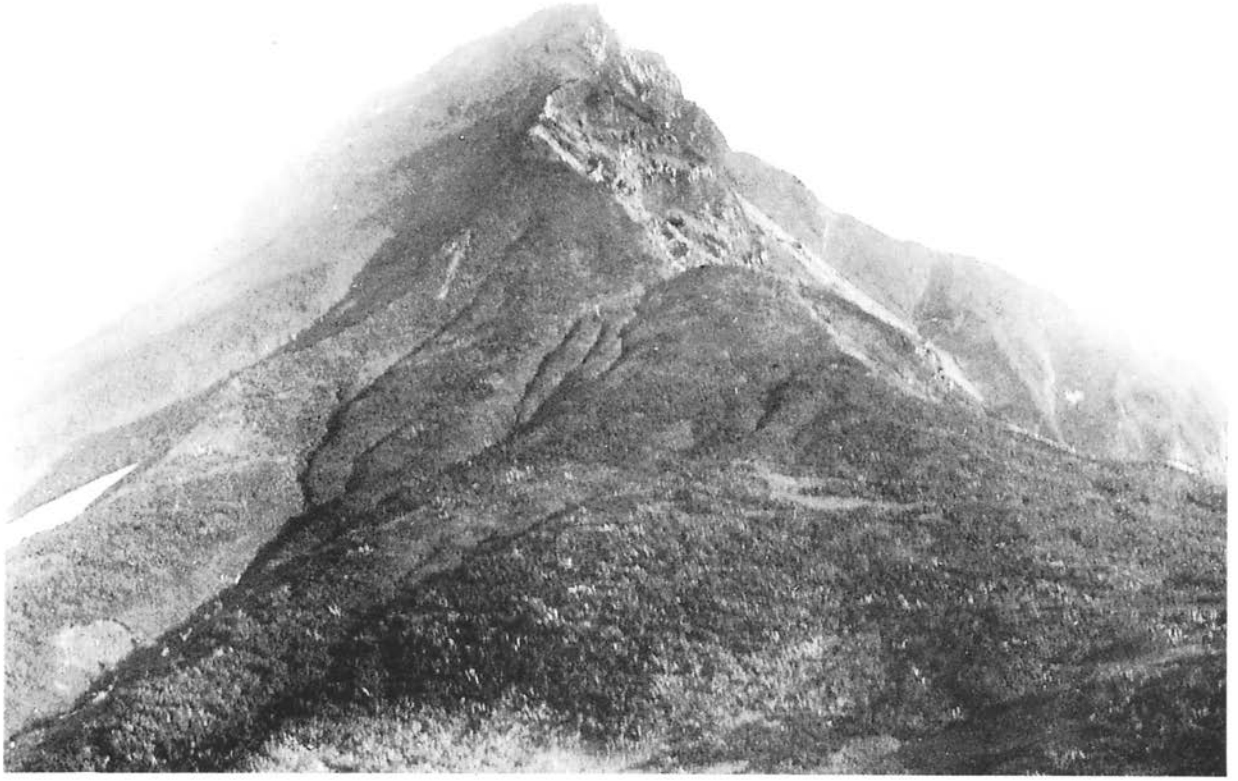
○ヴエスウヰアス山の大噴火　○八丈島冲の噴煙　○本年の富士初登山　○淺間山の鳴動及晩雪　○近江富士の水品　○富士山の夏裝

○會報　自一五七至一六二

○二支部の設立　○横濱支部記事　○新潟縣支部記事　○會員動靜　○次號の本誌　○會員諸君に　○會員氏名

○附錄

日本山嶽志第一增補



子爵 加藤泰秋氏撮影

利尻島利尻山

高野鷹藏氏撮影

沼津方面の山腹より見たる愛鷹山

増田吾助氏撮影

天城山八丁の池附近の殘雪

白馬嶽　　杓子嶽　　鑓ヶ嶽

志村寛氏撮影

松川内川の合流點より白馬連山を遠望す

理學士　矢部吉禎氏撮影

白馬嶽白馬尻附近より大雪渓を望む

志村寛氏撮影

白馬嶽離山附近より鑓ヶ嶽背面を望む

小島烏水氏所藏

信州御嶽　三の池

小島烏水氏所藏

御嶽八合目金剛童子より繼母岳を望む

山岳
第一年第二號

北海道の火山

理學博士　神保小虎

小島（コジマ）は渡島の西南隅海上に在る一小島にして、福山を距ること西方六里、南北十丁東西十六丁、周回一里二十一丁、不規律なる形狀を有し、海面に屹立せる一火山島なり。

本島北岸の絶壁は、安山岩層及び火山逆發物の積層より成り、大なる石屏之を貫きたる所あり、且つ「ヤマセドマリ」「アイトマリ」の間に突出する小隆起は、高さ五十尺餘、全く輝石安山岩質の熔岩より成り、西北隅に近く海中に峙ちたる、大「ヒヤク」小「ヒヤク」と稱する高き

明治三十九年
六月十五日發行
（禁轉載）

岩嶼も亦、本岩なるが如きを以て見れば、本島は其成層火山島なること疑なし。

フクヤマヤよりの小島を見る(石川)

「ヤマセドマリ」より嶮岨を攀ぢて山上に至る。高所は熊笹密生し、楓樹野桑等繁茂せり、余の達せし最高點は、其高さ凡一千尺にして、山上より西方を望めば、島の中央に平地あり、其果して舊時火口の遺跡なるや否やは之れを實踐確定するに暇あらざりし、(以上石川貞治氏記事)

大島は、小島の西北二十二海里に在る突兀たる一火山島にして、「マツマイ」郡「エラマチ」を去る凡そ十二里餘、全島殆圓形にして、東西の直徑一里、南北二十三町、周圍は凡三里半なり。

クマイシとクドーの間よりの大島を見る(石川)

沿海水深く、海岸は出入少なく斷崖屹立して碇泊に便なるの地なし、南岸字「ベンテン」より上陸す、同所背後の山側を登り、其頂上二千八百尺の峰上に達す、而して其正東に當りて高さ略ぼ相伯仲すべき一峯あり、北方には赭禿なる一の圓錐峰を瞰る、其最高部は即ち噴火口壁の南側にして、高さ二千五百尺餘、外方に向て三十二度の傾斜を有す。

該噴火口は楕圓形をなし、其長徑南六十度西に走りて長さ大約百間、短徑七十間にして甚だ深し、噴火口壁内部の上端に近く三ヶ所に於て蒸氣昇騰せり、火口壁は急斜して下降する事難し、口底には火山迸發物塡塞す、或は曰く、其内部に石膏を産すと、然れども之れを檢定するの暇を得ず、松前舊事記に因れば、本島は寛保元年辛酉七月十九日(西暦千七百四十一年)噴火し、「マツマイ」郡「子プタ」村より「ニシ」郡「クマイシ」村に至るの海岸海嘯を生じ、家屋流失し溺死千餘人、灰降りて白晝暗夜の如しと。

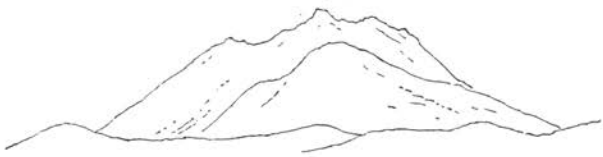
本島沿岸の險崖は、火山迸發物及び安山熔岩より成り、數個の石屏之れを貫通せるものあり、此二種の岩石は交互重疊せるを以て、本島は所謂成層火山に屬するものなり。

安山岩は輝石を含有し、黑色多孔質の熔岩及び淡白色にして大なる長石の結晶を包有

○北海道の火山　神保

するものあり、別に余の達したる最高點(二千八百尺)に於て淡灰色を帶び著しく硝子質なる同岩の小片を發見せり、之れ去る二十三年度千島國「エトロプ」島「アトサヌプリ」火山の絶頂噴火口側に於て得たるものと同質なり、共に他の安山岩片中に混じ甚だ稀少なり、(石川貞治氏記上)

「エニワ」岳　サッポロ市街の南に聳ゆたる頂上尖りたる一の火山あり、名づけて「エニワ」と云ふ、「シコッ」湖の西北岸に立ちて著るしく突出し、欝林の間に所々の褐色斷崖ありて其高さ凡五千尺に近かるべし、此山は湖に向て急斜を示し、他の方向に於て稍緩斜を顯せり、故に登山をなさんと欲すれば、湖の方より登る事稍困難なり、特に溪谷は多く絶壁にて圍まれ、又其底面は屢絶壁を以て下だり、平日は水枯るれども大雨の時は溪水飛瀑を爲して此れ等の斷崖を下るべし、故に登山する人は通例「イチャリ」川筋より行くを善しとすと云ふ、「エニワ」岳の南側に一の平たき高地ありて「タプコプ」と名づく、其下に在る湖岸を「タプコプラ」と云ふ、即ち舊溫泉家屋の在る所にして、余は其傍なる一の溪谷より登りて、凡そ湖岸より二時間にして「タプコプ」(エニワ岳の中段の平たき所)の上に達せり、尙進で上昇せば容易に「エニワ」岳の上方に達すべしと聞けり、然れども眞の頂上に達する事は極めて困難にして、未だ其上に達したる人なく、又火口中の硫黄に達したる土人は尙甚稀なりと云へり、頂上の西南に一の小湖ありて、其水は「オコタヌン



サッポロよりエニワ岳を見る　(石川)

シリキシナイよりエサンサ岳を見る　(神保)

べ」の澤に下だりて湖に注ぐ者なりと云ふ、然れども眞の火坑は山の東方に開きて其東壁破損せり、故に「イ

西南に向てエサンの岳汽噴を見る（石川）

オシヤマンベの邊よりコマガ岳を見る（石川）

西北に向てコマガ岳の部上汽噴を見る（石川）

ヂャリ」驛の道路より其内部を望むべし（又時に噴氣を見る事ありと云ふ）、（神保小虎記事）

「エサン」岳火山　此火山は「カメダ」郡の東南端に有りて、海上凡一九一四尺の高さを有し、頂上の形半圓に

して中央に略ぼ圓形の火口あり、其直徑凡一四八五尺なり、此火口壁の東南方のみ保存せられ、火口よりは常に硫氣を噴出せり、此火口底には泥土より成れる多くの小圓錐丘ありて、常に其位置を變せり、然れども大なる噴出を爲す事を聞かず、「エサン」岳の火口は成層火山の構造を示せり、(西山正吾氏記事)

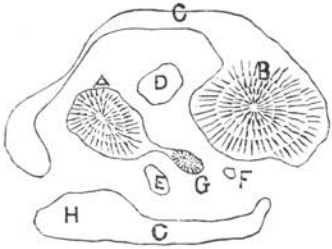
ハコダテよりコマガ岳を見る(神保)

「コマガタケ」火山　「ウチウラ」の南岸に立ちて、少しく缺損せる正しき圓錐形の山を爲し中央に一の太噴出口あり、火口底は海面上凡そ二六〇〇尺にありて、火口壁は缺損して東に開き、「コマガタケ」と稱するは海上三千五百餘尺に近き一峯にして、西南壁に立ち、又た「サワラ」岳と稱するは北壁を爲せる高所の全體を云ふ、火口内には二個の小坑ありて、一は中央にありて楕圓形を爲し、長徑一〇五〇尺餘、短徑八九〇尺餘、深さ凡二百尺ありて、安政の初硫泥と浮石を噴出せり、他の一個は此坑の少しく西北に當りて其直徑凡八三〇尺に達し、明治二十一年の小噴出は此坑に起れり、現今は其の周圍に硫黄を含みたる泥土の堆積ありて、其の深さは坑内濃煙あるを以て量り知るべからず、「コマガタケ」の水口壁は、成層火山の構造を示し、安山岩の熔岩と火山より噴出せる多孔質の細片より成れり、「コマガタケ」の尖峰は、此の成層狀の者を貫きたる安山岩の噴出塊より成れり、(西山氏實見)

○北海道の火山　神保

前號の本欄に掲げたる、神保博士の「北海道の火山」附圖

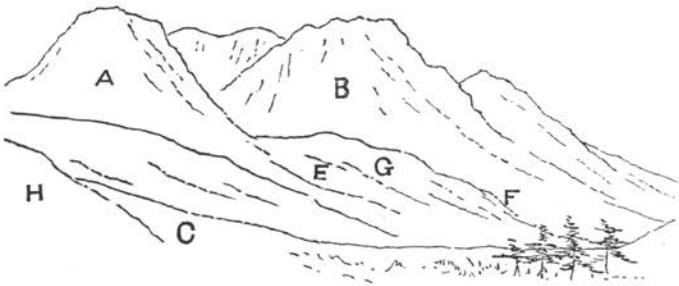
ウス岳の平面圖（明治二十二年頃石川）



A及B岩石にて成りたる塊
DEF凹み
C外輪山の部分
H政西五年より文政五年の破裂に泥流出でたり（？）

ウスルイマタ岳を望む（明治二十三年神保）

ウスベツ河の口より見たる岩石の塊（明治二十二年頃神保）



ウス岳を東南より見たる圖（明治二十二年頃、石川）

樺太の山

農學士　志賀重昂

樺太の面積は、我九州と臺灣を合せたるものより少しく大きい。扨て日露兩國の間に北緯五十度線を以て南北に折半したる以上、圓數を以て現はせば、露領は五分五厘となり、日本領は殘りの四分五厘となる。然れば極めて概算にて申せば露領が九州の面積あり、日本領が臺灣の面積ある。そこで日本領の面積は大約三百萬町歩ある、此内、海岸の不毛地が多いとしても、又市街地植民地(其實市街地植民地は餘り多からずと雖も)を半分と見れば、殘部即ち百五十萬町歩が山林である。

元來樺太は山多きが故に、山林の面積は百五十萬町歩より以上ありと信ず。併しながら極く少なくとしても、此町歩位はある。然れども山の多きに係らず、山と云ふ山は孰れも高度の低いものにて、海拔二千尺、即ち嚴格に言へば岡陵とも云ふべきものが高山と仰がれて居る。日本領、即ち南樺太の入口は二個の大半島より成れるが、左側半島(ノトロ岬側)の最高點が海拔壹千尺のウィンジス山である、右側半島(シレトコ岬側)の最高點が海拔二千五百尺のスヽヤ山である。此の二個の半島を去りて北に行くと、ベルニセット山がある、是は海拔四千尺以下である。夫れより北に行くと、外形の麗はしきイチャラ山がある、是は海拔四千尺で、全樺太第一の高山である。夫れより北緯五十度線を過ぎ、露領に入ると、直ちにオノル山が聳ゑて居る、是れも外形の麗しき山にて、海拔三千尺位と思ふ。此邊は、見渡す限りシャコタン松(落葉松の一種)の喬木の純林にして、宛ども海の如くに見ゆる。十月上旬、恰もシャコタン松が黃葉する頃、夕方に眺むれば晩照に反射して宛然黃金世界の如く、其間に、「ポロナイ河」(樺太第一の大河)の上流がウネリ〳〵と銀を溶す如くに流れて居り、河の西、海の如きシャコタン松の金波の上より、オノール山が峰頂に少しの雪を戴きて突然と孤聳する、其の景象は如何にも壯嚴で豪宕である。オノール山以北は、山又山が連續し居るけれども是と云ふて傑出し居るものは殆んど認めない、樺太第一の大河ポロナイと同第二の大河ツィムとの分水脊は此邊にあるが、其の高度が僅

かに三一三米突に過ぎざるを以ても高山の無きことが判かる。唯北緯五十二度近く即ち露領樺太の殆んど中央に當り、エングイス山がある、是は海拔二千尺以上のものなれども、近傍の山々が孰れも甚だ低い故に、他の山々の上に卓然と聳ゑて居るより、其の高度は低き割合には何處からよりも仰ぎ見る事が出來る。夫れ故に此近傍に居る土人、即ちギリヤーク人にてもオロチョン人にても、エングイス、パーラ即ちエングイス山と呼びて目標となして居る。陸軍陸地測量部の樺太圖は、現代にある最も完全なる樺太圖なりと稱へられ居るが、是に『エングイス、パール山』と掲げてある、是は露西亞語より直に翻譯したるものらしきが、「パール」はギリヤーク語の山即ちパーラの誤りにして、エングイスパーラである。併しながら夫れにしたる所が、「エングイスパール山」と掲げてあるは、西洋人が我が富士山を「マウント富士山」と呼ぶと同一の重複にて、「エングイス山山」である。偖て明治三十八年九月二十一日の日記に此川の事を記してある。

九月二十一日、雪、雪後、天晴れて一空洗ふが如く、當面なるドゞ松の幽林愈〻翠にして染むるが如く、其上より雪白の尖峯露はる、土人指して曰く、エングイスパーラ(パーラは土語「山」の義)なりと、須臾にして、天風外套の裙を吹き、大塊の雪二三片飛び來る、予古句を朗吟して曰く「凉州九月如花雪、飛着征人故敝裘」と土人も亦た丸木舟の楫を敲きて「アワラー、ウーラー、ラー」と哦ぶ、エングイス、パーラは海拔二千餘呎、北樺太屈指の高山にして、其の峰頂の尖りたる所、最も畫くに堪ゆ。

と、此の如く傑出せる山なれば、清朝の書籍類には「英額申山」と記してある。元來滿洲は清朝發祥地の關係よりして、亞細亞の北部は比較的精細に調査して居り、此のエングイス山を英額申山と掲げあるは、日本の現時の地圖にすら「エングイスパール山」と掲げてあるのと比較し、百餘年前の清國の書籍の方が優に正確である。

エングイス山より以北には、高山とても千尺位にて是と云ふ山はない。唯全島の北端に二千尺計りの山があるとの事なるが、是は予の未だ見ざる所なれば、何とも御話し申し上げる事は出來ぬ。

以上にて樺太の山の大體を申上げたるが、扨て是等の山は左まで古き地層のものは少ない。併しながら新しき地層も少ない故に、概して云へば、古生層、次に第三期層位が多いのである。新火山岩は所々に見ゆれども

舊火山岩とては予の視察したる地方にては一個所と雖も認めなかつたのである。

是等の山々に如何なる植物が生へて居るかと云へば、濕地、平地又は山麓にはシァコタン松が帆柱の如くに亭々と並び立つて生へて居る。北海道にもシァコタン松の林はあれども、其他の針葉樹なり濶葉樹なりと混生して居る。然るに樺太には、シァコタン松のみの純林が多いのである。少しく山の麓より以上に往くと、トゞ松、蝦夷松、赤蝦夷松がシァコタン松に交つて來るのである。是等の針葉樹は、最大なるものは周圍一丈、直徑三尺五寸、高サ十三四間もある。併しながら最も普通なるは直徑一尺位のものである。此の針葉樹林の下草は、濕地なれば殆んど悉く燈心草、パールアルシュ、谷地芭蕉にして、谷地芭蕉は春の末より夏へかけて白き大なる花を示して居る。夫れより山の麓より段々登ると、一面に草蘇鐵と欵冬とが下草になつて居る、其間に木賊、虎杖などが交つて居る。北へ行けば行く程、針葉樹の間に樺が交りて、下草は石楠花が多い。樺は白樺と黄な樺との二種あるが、北へ行けば行く程多くなりて、秋の末頃、其の得も言はれぬ美しき黄葉が溪水に映る所などは、如何にも幽玄なる景象である。併し下草は一面に石楠花で、彈性があれば、歩行する時に跳返つて中々煩はしい。扨て又濶葉樹には白楊（最大なるものは直徑五尺）、赤楊、ミヤマハンノキ、谷地タモ、赤タモ、ナヽカマド、楊、楢、栩、楡、イタヤ楓、オニグルミ、ニハトコなどである。偃松は、平地殊に海岸の白き砂の上に生へ居りて、青は白を粉し白は青を抹し、中々面白き景象である。又偃杜松の一種が白き砂の上に這つて居るが、其初め予は全く杜松なりとは思はず、苔なりと思つた、護衛して居る五人の兵士も苔なりと思ひ、内部にて食料の絶へたる時、屡々此實を摘み、其の甘き酸き實は口に叶ふ故に、予は護衛兵と共に此實の恩惠に厚く預かりたることが、五人の兵士は「苔の實を採りますか」と云ひたる所を見れば、彼等も予と同樣に苔なりと思つたのである。扨て此の紫の珠の如き美しき實を採る毎に、如何にも香ばしき松脂の香を放つ故に、不思議やと能く見れば全く偃杜松にして、其莖は苔よりも細く、此の細き枝より更に細くして糸の如き小枝を延ばし居り、よく〳〵精細に認めざれば全く苔と見誤るのである。此の如く偃松だの偃杜松のある所は、林業經濟より云へば、全く林業經營以外の土地にして、何等の利益なき所なれども、風景としては内地人などに見せ

たき面白き處である。

樺太の山林の經濟論に關しては、予は大日本山林會第二十五回紀念會に講演したるが、此は林業經濟上の問題に係り、山岳とは關係なければ、先づ御話は是にて止め置くべし。

新高山紀行（第一稿）

尾崎白水

『新高山紀行』は、在臺灣未見の友。白水氏よりの寄稿に係はる、近來新高登山記の、諸新聞雜誌に散見するものありと雖も、未だこの篇の如く、精緻明細なる作品を見ず、只だ非常に長篇なるため、全文を六號活字にして、本誌三冊に割載するの止むを得ざるに至りたるは、余の著者に對して、深謝するところなり。（烏水生）

犬と水牛との外に獸と云ふ動物あることを知らず、鷲と雀との他に禽鳥の屬あるを解せず、凡そ樹木と云へば相思樹のこと、山は大屯河は淡水とのみ御存じの憐れなる都人士の爲めに聊か名山大嶽の神秘的景物を語らん、而して予等の新高に登りたるは、彼の專門科學者の夫れの如く、石を採らん爲めにもあらず、草花を拗切らんにもあらず、唯從來未だ何人にも其眞面目を紹介せられざりし、所謂臺灣第一の高山を見んが爲めなり、請ふ先づ順序として其途上より敍さんか。

▲十一月四日　拂曉登山の一行は期を約して鰹舟停車場に會す、白水先づ到る黑羅紗の古けたる上着に縞子ル半ズボン、鳥打帽に脚絆草鞋がけの扮裝、生蕃袋と水筒とを左右ぶつ違へに懸けたる中々異樣なり、尋で烏犍到る、脊廣半ズボンに是も水筒と望遠鏡とを手襁にかけ時計の鎖さへ胸にかゝれり、服の衣嚢の甚く膨れたるは備品の用意多きを知るべし、淡海は後れたりとて急はしく車を走らせ來る、服は制服の二つ釦を取り外し下も半ズボンに直したる振の見ゆるを穿てり、肩には望遠鏡とパロメートルとを懸けたり、烏犍が白切符を買ひたるは新高行者の主義に戾れりとの議論も起りしが、下り一番の列車は猶豫無く輾り出せり、烏亭簍江の二三子停車場まで見送り來る。

此日天氣少しく曇り風寒くして汽車の新竹あたりを過ぐる頃は雨さへ加はりたれば、痛く前途の天候を氣遣しに、臺中の平野を經て濁水を渡る頃は落日斜に車窓を射り、暮雲次第に滑くなり行けり。

汽車の中は端無く乘合せたる雲林先生の氣焰にて持切り、詩を談じ歌を語り山を評し水を品して終日興殊に多かりき、葫蘆墩にて午餐をしたゝむ、亭名の新高屋と云へるも緣の淺からざるを覺えぬ祝杯を擧げんとて此日同車したる横山鳳山も加はる、鳳山は携ふる所の行厨を開き、香魚と松茸との香に一座の舌を鼓せしむ、雲林は朝陽號より携へたる酒ありとて白鶴と銘打ちたる一瓶を取り出し爛を亭婢に命じたるに、小時ありて溫め來

れるを待構へて飲み下せば、思ひきや酒にはあらで茶の滋味を帶びたるなれば、一座顏見合せて覺えず吹き出しぬ、雲林が吾々を茶にせんとの惡戲か、但しは雲林が茶にされたるか、登山の門出偖も興多き酒宴なりと打笑ひぬ。

平山長水極めて沒趣味なる中部の鐵道線路には、何等か車中の讀もの無くては叶はずとて、皆々思ひ思ひに一二の冊子を袖中に收め居れり、また山中の徒然を慰せんとの用意なり、淡海は何にやあらん時代のつきたる歌集一二冊、烏巢は杜詩一卷と萬葉全集との外に二三の詩集を携へ、白水は李太白の詩集と詩韻含英とを用意せり、讀んで杜詩の會當凌絕頂、一覽衆山小。に到り又太白が登高望四海。天地何漫々。に及び覺えず卷を投じぬ、蓋し予等は今より彼の崔嵬を攀ぢ大嶽を窮めんとする者、古人以外一字の着くべき所なきを悟れり。

日暮斗六に着く、荒賀中田諸君停車場に出迎へらる、新高に登るに途を斗六方面に取るもの、濁水より直に林圯埔に赴くを順路と爲す、予等一行が濁水に下車せずして斗六に赴きたるは、此行豫め同廳に就いて山中の狀況を聞き、隨て登山の準備を整へんとの計畫ありしに由れり、雲林館に投じ夜深に至るまで同地諸君の盡力に依り、諸般の準備に就き協議す、曰く糧食、曰く防寒衣、曰く頂上紀念品、曰く何曰く何、總べて明日午前中に之を整頓せんことゝし、日記と通信とを認め終て寢に就く、夜に入り月色晴る。

▲五日　天日和清、朝斗六の市中を觀る、斗六は本島最近に於て發達したる一市街にして、今より二十年前までは落々たる一寒村に過ぎざりしが、光緒十三年剏めて雲林縣を此地に定めしより爾來井然たる一市街を爲すに至り、領臺の後ち辨務署の設置あり又守備隊の駐屯せるあり、現に廳治の所在地として稍や繁華の一區たり、前月守備隊の交代と共に其兵員を減じて現に僅に中隊を駐むるに過ぎざるを以て、著しく市況を殺ぐに至りしと云ふも、尙ほ市中所在に內地雜貨店の招牌を散見し又氣の利きたる料理屋の二三も見にたり、官衙の建物としては郵便局最も目立ちて田舍には少なき構へなり、縱貫鐵道の開通してより、停車の便利ある爲め貨物の集散に土人間の商況は稍や活氣を覺にたりと云ふ、蓋し本島中路の市街中嘉義、彰化、臺中に次ぎてはまさに斗六なるべきか。

午前中何彼と登山の準備を整ふ、然れど登山に就いて必要なる品は、大概林圯埔にて整ふるに難からざれば、運賃を費やして此所より携ふるにも及ばざるべしとの説もありたれば、林圯埔にて求め難かるべしと思はるゝ品のみを購ふ、ウヰスキーの如き飲料、牛肉其他の罐詰の如きは臺北より携帶するにあらざれば必ず此地にて整ふるを要す。

頂上に留むべき紀念品に就き荒賀廳長其他の諸氏に謀る、國旗を峰頭に樹つる可なり、然れども風雨の爲めに久しきに耐へず、姓名を石上に題する可なり、風蝕剝落するの虞あるを奈何、偶廳長藏する所の巨鈴一個、嘗て之を同廳下湖口の沿岸に漂着難破したる外國船中に得たりと云ふ、重さ二十餘斤、形狀梵鐘の如く、直徑尺餘、高さ之に叶ふ、蓋し珍什なり、廳長贈つて之を一行に屬して曰く、若し此洪鐘を携へ去て能く一萬四千尺の絕巔に懸くるあらば、長へに名山の鎭として、又東洋の警鐘たるに足らんと、執て之を打てば殷々として巨鯨の吼ゆるが如し、一行手を拍て喜ぶ乃ち之を携ふるに決す、別に姓名を石上に題する爲め鑿と鐵槌とを購ひ、又黑漆と金色墨汁とを得たり烏巢詩あり人間一死不留骨。欲向名山題姓名。午後一時十七分の上り列車にて斗六を發す、同廳有志諸君の盛んなる見送りを受く厚意謝するに堪へたり、約二十分にして濁水に着し直に林圯埔に

赴くべく輕鐵車を傭ふ、偶林圯埔支廳の野添警部補出で迎へらるゝに會ふ、氏は實に予等一行の東道として登山の行を共にせらるゝなり、聞く十年職を此地に奉じ或は蕃界警備に或は土匪討伐に雲林一帶の江山足跡殆んど到らざる無しと云ふ、觸口山下を繞り清水溪の下流を涉つて頭を擧ぐれば右方高く聳ゆるものは大安山なり、左方遙かに雲表を抽くものは集々大山なり、其中央に位し蔚蒼として天半を摩するものを鳳凰山と稱す、一路未だ濁水の平野を行き盡さずして既に身は群山重疊の裏に落つるの想ひあり、中崎庄と和溪厝庄との間を過ぎ、稍や小高き丘に上れば林圯埔の村外れに着く、此間里程約三里なりと云へど上り路にて僅かに一時間と二十分を費やしたるのみ、此附近元と土匪の巣窟として知られ、數年前までは容易に旅行も出來ざる土地なりしが、三十五年匪賊を剿討し盡してより民人悉く堵に安んじ、今は鐵車載夢度雲林の安らけき代となりしこそ嬉けれ三時林圯埔街に入り木浦支廳長の家に投ず、足を濯ぐとて持出したる盥の見事なる梧の柾もて造られたるに流石は名山の麓なりと感じぬ、此夜山鳩の料理を喰ふ、濁水溪の附近は鳩の獵場なりと聞きしに、其味も一入なりき。

▲林圯埔

新高登山の順路を斗六方面よりせば林圯埔は實に其起點にして、富士山に於ける御殿場の如く必ず一たび此地を經過せざるべからず、一二同地に關する沿革と見聞とを語らん。

嘗て之を梅陰兄に聞く、林圯埔は元ヴオヌム族蕃人の據れる所にして、日月潭を中心とし、南林圯埔より北は埔里社に至る一帶の地を、水沙連蕃地と稱したりしが、康熙の初年即ち今より約二百四十年前、鄭氏の武將に林圯と云へる者あり、部下二百餘名と共に深く中部の高原に進入し、蕃人を驅逐して地を此間に相し、以て一大富源を開拓せんと企てたり、當時此地に占據し居たる蕃人は現今の郡大社に屬する部族にして、頗る兇暴を極め一時驅逐せられて林圯埔を距ること約二里餘の山中東埔蚋の東方に移りしが、尙ほ幾たびとなく逆襲を企て、數年の後ち遂に林圯埔を奪ひ、林圯以下百餘名を殘殺せり、斯くて林氏の一族は一たび其根據を失ひしが、遺族は更に不屈不撓の精神を以て再擧を謀り、漸く蕃人を東埔蚋以東の山地に追ひ退け、此に隘勇線を敷設し、始めて開墾拓植の基礎を定め、爾來春秋二百餘年、遂に今日の市街を爲すに至れり、是れ實に林圯埔の名の由て來れる所にして、現に市街の中央に結構壯麗を極めたる林氏の義廟あり年々祭祀を絶たず、長へに開山の遺德を稱せり光緒十一年雲林縣を置く、初め廳を此地に定めたりしが、土地山間に僻在して交通の便ならざるのみならず、一面は連山重疊たる蕃界に接し、三面は悉く濁水溪と清水溪との流域に限られ、一朝雨期に際せば、交通全く杜絶して年々約半年間は、殆んど他の地方との完全なる連絡を爲すこと能はざるに至るを以て、縣治の所在地としては頗る不適當なりとの議あり遂に一兩年にして今の斗六に移轉せりと云ふ、領臺の當時撫墾署を置き、後ち辨務署の設置あり、廢縣置廳の當時支廳を置きて、斗六廳に屬せり。

林圯埔街は戶數約七百を有し、支廳、郵便電信局、公學校、公醫等あり、內地人の數は官吏民間を併せて約七十人にして、內地人の營業者は春日館と稱する旅人宿一、客室四を有せり、風月と稱する料理屋一、藝妓二人酌婦三人を養へりと云ふ、其他雜貨を鬻ぐもの二、材木屋一、賣藥屋一、菓子屋一、理髮店一、他は皆土人商估なり、聞く曩に守備隊の駐在したる當時は、尙ほ料理屋の二三もありて稍や繁華なりしが、前月交代の時に當り悉く引揚げて、今は一兵をも餘さずなりたる爲め、市況全く寂寥を呈し、兵營練兵場附近も何となく秋風の落寞たるを感ぜり、尙ほ此地商業上の現

況を聞くに、土人間に在りては守備隊の引揚げ等に就き著しき影響を認めず、本年は一般に農作物の豐穰なりし爲め却りて活氣を呈せるものゝ如し、殊に縱貫鐵道の開通と共に一般商取引上に多大の變動を來し、從來商品の仕入ものは多く鹿港若くは彰化に取引し來れるもの、今は殆んど一變して汽車便に依り臺南に輸むるに至れりと云ふ。

記錄の傳ふる所に據れば、林圯埔郊外九十九坎の旌義亭内に前山第一城の碑あり、高さ六尺、廣さ三尺にして前山第一城の五字を正書す、光緒十三年前の邑令陳世烈の勒する所なりと云ふ、支廳に就いて其所在を問ふに、今は既に廢頽して碑石を存せず、幾たびか之を求めたるも遂に得ず。

▲臺灣產の馬

支廳の宿舍に馬一頭を飼へり、臺灣に產したる馬なりと云ふ、其狀甚だしく内地の產に異ならず、内地の馬よりは稍や小さくして、土佐駒と普通の馬とをかけ合せたらん如し、臺灣に固有の馬の在ることをば今まで之を知らず、現に幕僚の獸醫部あたりに就いて調べたることもあしりが、何人も知らざるものゝ如く、臺灣が馬の產出若くは發育に適するや否やの問題は、當局者の間には久しき疑問として、今も尙ほ研究中なりとのことなるが實際聞く所に依れば、本島中部の山地には舊政府時代より馬を飼養するもの尠なからず、唯農耕に使役するには水牛の方利益多きを以て、其繁殖に努めず、又古來多くは去勢して使ふの風習あるを以て其數は餘り增加せずとなり、支廳にて飼へるは八歲ばかりにて、數年來能く馴れたるものゝ如く、乘馬として長途の山路を駈けるに中々强くして、内地產の夫れよりも良しとか、兎に角予が多年抱ける臺灣と馬の飼養と云へる問題は、是にて一部の解決を得たり、其筋にても何等か調査あるべし、淡海は馬の道にかけては黑人なり、深く思ふ所ありたるものゝ如くなりき、馬と駢べて小さき箱の中に羌仔一頭を飼へり可愛らしきものなり。

▲登山準備

林圯埔に着し野添警部補の盡力に依り登山の準備を整ふ、後の登山者の參考の爲めに少しく登山の準備を說かん、而して予は予等一行が登山に就いて敎へられたる先輩烏水兄の日本山嶽美論中に著述せる登山準備論の一節を摘記して其資料に充てんとす、

登山者は創世紀中の人の如く天曠埌莽の間に特立して人間の事は自ら總てを主宰せざるべからず氣候の炎暑沍寒も之を避くべき棲處を有せざるが故に天然を支配する術を講ぜざるべからず衣食及び日常の措置又平常と異なり奴婢に一任したること例へば炊を取り爨を主どる如きも自ら之を試みざるを得ず故に携帶品も普通の旅行と違ひあるや言を俟たず併せて山項の氣候天象等の變化が人間に及ぼす關係をも研究する要あり斯の如き注意と準備とは登山の成績に影響すること大なり衣海く餉糧續かず運搬不如意にして器具缺乏する如くんば體格の剛健意志の强固も之を何かせむ。

然り吾人は今回の登山に於いて、以上所論の決して机上の空論にあらざるを感ぜり、而して烏水兄は更に一歩を進めて、吾人の爲めに登山に關する多大の敎訓を與へたり、曰く

先づ平生目的地の地圖を多く集めて相互に之を比較し其距離並に方向の正否を試み若し地名等に異同あらば更に之を考按し山麓に達する道路の廣狹難易遠近等に就き充分の檢覈を加へて巡回線を假設し或は里程の長短に隨ひて日割を豫定し又紀行文、寫眞、旅行誌等に就いて山川森林里閭の記事に注視し大體を暗記或は抄錄して座右に控ふるを可とす若し一二里の迂路なれば時日に餘裕を存する限り附近の勝地をも併せて巡覽す

るを要す然らざれば一時の勞を吝んで永久に悔を貽すことあらん況んや同一土地の跋渉再擧を企つる如きは億刼にして殆んど行ふべからざるをや然れどもこゝに一條の注意すべきことあり人惡河を訣く何ぞ知らん其人は雨後水量嵩まり濁浪洶湧岩石を轉ばして聲四山に反響するが如き時に於て之を相したるを而して平生水涸れ沙長く石の大小凹凸相撲ち起伏互に背き雜草延びて三寸小花その間に點綴するを想はざるなり人凡山を嗤ふ焉んぞ知らん其人前に大嶽を登攀して後之に臨みたるものなるを而して初めて躋る人の困憊色に出づるを想はざるなり故に榛名山を去て妙義山に登る人は其淺きを訣くに遑あらずして先づ其奇を讀すべく淺間山を下りて後妙義山に向へる人は其奇を觀るに及ばずして先づ其淺きを難ずべし譬人は山を尖描す然れども躋る人は山中の客たるを知らずして緩歩し得綿密なる人は野稿圖を製作するに當り羅針を以て方向を定め踏歩の數の多少に依て距離の遠近を定め其縮尺の命ずる如く紙上に線を引て何山何水の間道程幾何と云ふ然れども夕刻の一歩は昧爽發程の一歩と寸尺を殊にするを知らずや展張障列する山中に拔き八千よりも驛外の平楚に孤彈せる四千尺を高しとすることなきにあらず御殿場より近く觀たる富士山は頗る低く遠望するに隨ひて愈よ高し夏秋平靜蚤の爲めに夢結び難かりし人は山中石室の構造粗陋を慊らずして其苦を訣けど黑風白雨を避けたる人は其恩惠の浩大を感謝すべし森林は時季に因りて或は蒼或は黃或は大にし或は小にし隨ひて是より源を發する河流を或は急にし或は緩にす故同一の山水を豪壯といふもあるべく纖細と云ふもあるべく夏は以て鬱蒼の詩を作るべく秋は以て冷瘦の詩を作るべし。

夫れ斯の如く登山の準備と注意との如何は、直ちに惹いて登山をして困難ならしめ、容易ならしめ、不快ならしむ、愉快ならしむ、否甚だしきに至つては登山をして全然何等益なきに終らしむ、現に予等の一行は今回の登山に就いては少なくとも後の登山者に向つて東道者たるべき覺悟を以て、登山の準備に就いては、豫め幾多の研究を重ねしが尙ほ其實地に就いて、頗る不滿を抱きたること多かりき、請ふ是より予等一行の登山準備を語らん。

▲登山準備

登山に就いて最も注意を要するは服裝と食料品とにして、予等一行は臺北出發の際、出來得る限り服裝其の他の準備を整へたり。

服裝は洋服にて輕便を旨とし烏犍は脊廣、淡海と予とは詰襟、何れも半窄袴、脚絆にて草鞋がけ、帽子は鳥打ち、斷崖絶壁を攀ぢ荊棘茅茨を法する時に是非必要なりとて手袋も思ひ〳〵に用意す、烏犍のは革製、淡海のも馬に乘る時用ゐるものとて丈夫さうなり、われのみ薄きメリヤス製のものなれば不安心なりと思ひたれど、途中にて遲かりし、脚絆は予と淡海とは普通の日本式、烏犍のは釦には留めるべき和洋折衷式の毛織物製。

襯衣は防寒用としても、着更の爲めにも最も多く必要なりとて、各五六枚より十枚を用意す、孰れも毛織りものにて莫大小又はネルに限れり、又防寒の爲めにはチョッキを二三枚準備し、其間へ眞綿を入れたるもありたり、窄袴下、股引も同じく毛織ものにて三四枚づゝは豫備を携へたり、毛布は露營には缺くべからず、一人四枚づゝ携へたり、又野添氏は厚褥を所持せり、淡海はフランネルの寢衣を用意し、予は裕と羽織とを携ふ、烏犍は洋服の儘にて全く着更を持たず、但窄袴の豫備一着を所持せり。

足袋は一人三足づゝとのことにて、中には靴下又は室內用の足袋を別に持ちたるあり、草鞋は一人前一日二足平均にて、林圯埔にて購ふ、總べて臺

○新高山紀行　尾崎

灌草鞋は内地製のものより久しさに堪ふる樣なり。

携帶品は思ひ〳〵なれど、登山の必要品としては、望遠鏡二個、バロメートル一個、水筒二個烏犍は水を詰め予は酒を容る、暖寒計一個、地圖數葉、時計と磁石とは云ふまでも無く皆々所持し、手帖と鉛筆も無論のこと、寫眞機械は手札形にて淡海の品なり、種板は十枚を用意す、油紙は防水用としても、敷物としても、包裝用としても効用多ければとて皆々五六枚づゝ、細引は樹に攀づる時、巖を下る時、携帶品を括る時、露營地の建築の時、總べて必要なりとて是も五六筋、ナイフも三人の衣囊に一個づゝ、淡海は護身用にとて短銃を携へ、小田原提燈と蠟燭をも用意せり、烏犍は途中にて水を飲むにとてアンチモニー製の水呑を衣囊に收む、予は鋸一挺印刀一本、是は山上にて何か刻して見んとの好奇心より印材二個をも鞄に容れたり。

其他手拭、手巾の類、石鹼、齒磨粉、楊枝、燐寸の如きものまで夫々用意し、淡海は今回登山の爲めに特に新調したるズック製の大鞄一個と、普通の旅行鞄一個とに收め、烏犍はズックの大囊一個、予は旅行鞄の外に毛布を油紙に包み、部合併せて五個となれり、小道具類をば、生蕃袋の中に容れて自ら背負へり。

雨具は山麓にて土人の竹の于笠と簑とを購ほんとのことにて用意せず、洋傘、杖の如きも、山に入りては適宜の木を伐りて金剛杖と爲すに如かずとて持たず、若し携へ行きたらば厄介なりしならん。

食料は林圯埔にて經驗ある人に其準備を託せんとて、臺北より多く携へず、牛肉其他魚肉の罐詰、福神漬、梅干、乾魚、味噌、ウィスキー等を思ひ思ひに少づゝ持てり、野添氏の手にて準備せられたる食品は、白米四斗、一行三人と同氏の外に巡査一名途中より同行の豫定にて山中一週間の見積り、酒、醬油、砂糖、鷄三羽、鹽節三本、食鹽、罐詰類臺北より携へたるをも加へ一人一日一個位の割合、鹽鮭、鱈の干物、乾烏賊等を取揃へたり、肉類は山中の蕃社にても多く得らるゝとのことなり。

食器其他炊事道具の用意も整へり、洗面盤三個に顏を洗ふ爲めにはあらで、飯を爨き汁を煮、湯を沸かさん鍋と鐵瓶の代用に充てたり、土瓶一個、茶碗と木椀各一人一個づつ、飯と汁を盛らん爲めなり、飯行李一人一個づゝ、書辨當の用に供せり、匙、箸は山中木を斬り造るも妨げざれど用意に持てり、鑵切り、栓拔き各一個、庖丁は蕃人の携へたる蕃刀にて一切を辨ずるに好しとて携へず、其他何彼と不足なき樣に取揃へ炭を容るゝ竹籠に收め三個ばかりになれり。

天幕は露營に必要なりとて、大なるを林圯埔にて借り、莫産は途中は荷物を包み露營の時は敷物にすとて七八枚持てり。

尙ほ他に是非共用意せざるべからざるは、烏布五六十反、燐寸數十箱なり、防寒の爲めにあらず、火を焚く爲めにもあらず。

▲登山の强力

登山の準備は整へり、而して予等一行の登山行李は、食料と携帶品とを併せて總べて十個となれり、輕重等差あり、重きは七八十斤、輕きも三四十斤を下らず、之を負はしむるに蕃人十人を要す、卽ち内地の强力なるものなり、若し土人の苦力を用ゐば甚だ便利なるに似たるも、土人苦力の臆病なるや、到底蕃界の深山に入るを肯ぜず、又縱令强いて之を伴ふも、溪山行路の險難なると、絶巓氣溫の低度なること

に對し、決して耐へ得べき所にあらず、故に足一たび蕃界に入れば、必ず蕃人の强力を使役せざるべからず、而して路を斗六方面に取るに、其沿線に當つて蕃社三あり、曰く楠仔脚萬、曰く和社、曰く東埔、此三社中登山の强力として、何れの蕃人を使役すべきかは、大に研究を要する問題なりとす、何となれば楠仔脚萬と和社とは最も平地に近くして、其種族はツォ、に屬し、所謂阿里山蕃の一部なり、東埔は最も奥蕃にして八通關に近く、其種族はヴォヌム に屬し郡大社の一部なり、隨て兩種族は其地域相接續して、僅かに一小溪流を隔つるに過ぎざれども、古來常に相反目して、殆んど讐敵の間に在り、故に甲を伴はんか乙の蕃社を通過するに當つて不便を感ずること少なからず、乙を隨へんか甲の境界内に於いては戰々競々として白刄を踏むの狀あり、然かも已むを得ず其一を擇はざるべからず、而して楠仔脚萬の如きは最も平地に近く、現に我が警官派出所の設置さへあり、久しき以前より全然馘首の惡弊を脱し、近年漸く王化の民に近づきし爲め、彼の達邦社等の如く、多少帝國の貨幣を使用するの道をも知るに至りたれば、之を使役する點に於て頗る便利あり、之に反して東埔社は連山重疊の間に僻在して、未だ全く島澤に浴するに至らず、時に彼の兇猛なる馘首蕃人と相交通し、貨幣の如きは毫も使用の道を知らず、爲めに之を使役せんは多少の不便を免れず、然れども予等一行の目的地たる新高山は、實に彼等の狩獵區域に屬し、其八通關を距ること僅かに一日行程の地に在るを以て、登山の案内者としては前者に比して一層の便利あり、予は此點に於て多少の危險をも、總べての不利をも之を顧みず、斷然東埔社蕃人を伴ふことゝなせり。

▲烏布と燐寸　予等一行の伴ふべき强力は斯の如く未開の蕃人なるを以て、其苦力賃として仕拂ふべきものは、紙幣にあらず銀貨にあらず、貨幣は彼等に取りては一片の塵紙にも價せざるなり、金錢は實に土芥の如きのみ、唯彼等は粟と蕃薯とを耕やし、鹿と猪とを屠り、以て開濟たる終年の生命を托するの外、殆んど何ものをも望まざるなり、若し彼等の生活の上に、彼等の手に依りて製作も得べからざる物ありとすれば、彼等は實に之を其生命よりも多く貴重せり、故に彼等を使役して之に仕拂ふべき貨幣は、即ち此物品を以てせざるべからず、而して彼等が日常生活の上に必要缺くべからざる、而も彼等の手に製作し得べからざるものは、極めて單純にして僅かに數種に過ぎず、衣類にすべき綿布、食用に供すべき鹽、疾病を治癒すべき藥品、火を發すべき燐寸、裝飾に供すべき毛糸、釦等是れなり、殊に彼等の最も貴重して貨幣に代用するに便利なるは、土人の衣服を製し若くは頭上に纏へる黑色の綿布、上名烏布と稱するものなりとす、故に予等一行は登山準備の最大條件として、烏布數十反と燐寸の多數を携帶し、別に食鹽、毛糸、絲吳絽、釦の類をも用意せり、而して彼等一日の苦力賃としては通常烏布二尋を與ふるなり。

曩に川上技師の一行が强力として隨へたる蕃人は阿里山蕃と稱する達邦社、知母勝社等の蕃人にして、昨年予が阿里山に赴きし時も伴ひしが、彼等は領臺以前より久しく支那人と交通し、殊に領臺以後は我が撫墾署時代より、最も熱心なる化育を受け、今は寧ろ本島人部落よりも進歩せる狀態にて、夙に我が貨幣の貴重すべきを知るを以て、苦力賃としては毎日銀貨二三十錢にて足り、經濟上烏布を以つてするよりも遙に利益なり、楠仔脚萬和社の如きは阿里山蕃の一部なるを以て、多少銀貨を使用し得るも、達邦、知母勝に比すれば遙に未開にして、尙ほ烏布燐寸の類を銀貨以上に尊重せるものゝ如し。

▲登山と藥品　登山の前に當つて尙一の必ず準備せざるべからざるものあり、藥品是れなり、淹留幾日無人の境上に在りて、天地人間

のこと總べて我自ら之を主宰せざるべからざる場合に當り、吾人が飢餓以上に最も顧慮すべきものは、疾病にして少なくとも衣食以外に必ず用意せざるべからざるものは藥品なりとす、平地の旅行に在りても此點に於いては何人も多少の準備を爲せり、殊に奔湍激流を越に、懸崖絶壁を渡つて、日に死生の間を往來するもの豈此點に用意無きを許さんや、而して藥品の使用に就いては自から制裁あり、素より之を濫用することを許さざと雖も、藥局法中の普通藥若くは賣藥の類にて、優に救急的治療を奏効し得るに足るものありと信ず、此の準備に就いては登山の前に當つて專門醫師の示導を受くるを最も安全なりとするも、少しく參考の爲めに予の携帶したる藥品と衛生材料とを記さん。

山河を跋渉する場合に於て最も多く起るべき、手足顏面等の外科的創傷、例令ば刺創、擦過傷、裂創、打撲傷等を治療するには、其創傷の種類狀態の如何に依り一定せず、殊に重傷に在りては到底專門醫師の手を藉るにあらざれば治め難しと雖も兎に角山中無人の境に在りては、救急的手術を施さゞるべからず、此準備として予は繃帶と絆創膏と綿紗と綿花と膏藥とを材料とし、ピンセットとメスと鋏とを手術器械とし、硼酸と酒精と其他二三の外科用藥品とを携帶せり、外に絆創膏は何物を措いても必要にして若し、英國製絆創膏と護謨絆創膏との二種を有せば、一は微細なる部分に用ひ一は稍や大なる創傷若くは容易に剥離せざる爲めに、時として縫合以上の効力を示せり、ピンセットは刺傷等の治療に必要なり、酒精は外科用としては、創面を洗滌するに用ひ、若くは卒倒したる際の如き、興奮藥として（ブランデーならば尙可なり）鈇くべからず、又酒精燈を必要とする場合なしとせず、繃帶も必要なり、若し山中其用意無くして、創面の出血等を來せる場合は、手拭、帶、犢鼻褌等にて救急するの外なきも、是等は爲めに不潔なる黴菌を創面に傳染せしむる危險あるを以つて、注意せざるべからず、足蹠等の刺傷にて水の侵入を防がんには、軟膏を貼するを可とす、要するに創傷の危險は多量の出血と腐敗菌の侵入とにあり。

內用藥としては其種類素より一ならず、隨て準備等も限り無きを以て、單に急救藥として、二三を用意するのみ、興奮藥としては酒精類と寶丹、是は淸凉劑としても旅行には鈇ぐべからず、解熱劑としてはアンチピリン最も佳なれども劇藥なれば醫師の指圖無かるべからず、賣藥あれども効力保證し難も、規尼涅は濫用すべからず却て危害あり下劑も一二必用なる場合あり、更に下痢を止める藥品は忘るべからず、予は次硝酸蒼鉛を携へたり旅行にて恐るべきは中毒なり、是を救急するには必ず吐劑無かるべからず、鎭痛藥も携帶したし、然れど是等は多く劇毒藥に屬するを以て、予は故らに之を記さず、必ず醫師の指圖に依るべし、其他は賣藥にて淸心丹の如き淸凉劑を成るべく多く携ふべし、自ら用ふる場合よりは、番人等に與へて非常に喜ばしめ、且つ之を以て番人を利用する場合も少なからず、重炭酸ナトリューム、炭酸マグネシュームの如き危害無き藥品を携帶するも可なり、又登山に就いて往々起るべき衄血其他の出血を止むる爲め單寧酸、頭痛心悸亢進等を鎭靜せしむる爲め臭素加里。

更に登山に當つて途中最も警戒すべきは麻剌里亞にして、殊に本島に於いては殆んど免るべからざる危險あり、之に對しては除蟲菊を準備して蚊軍の襲來を防ぐこと最も急務なり、然れども蚊帳の設備なき番屋に假泊する時の如き、除蟲菊のみにて充分なる安心を得ること能はず、故に必ず麻剌里亞豫防藥を携帶すべし、豫防藥としては規尼涅丸も不可なるにあらざれども、予が昨年以來の實驗に徵すれば、目下獨逸國留學中の木下醫學校助教授が處方せるエスアノフエレス丸なり、何物を措ても此一劑は登山者の必携すべき守本尊なりとす。

○新高山紀行　尾崎

▲六日　晴天にして風無し、六時氣温六十二度、今日は登山の第一日なり、未明より起き出でゝ急はしく支度を整へ、行李の始末は事に馴れたる野添氏に托して、我等は先きに出立つ、七時を過ぎたる頃なり、前の日蕃害のありたる爲め支廳へ報告にとて來合せたる、牛輜軺の庄司派出所長も歸途に就くとて相伴ふ、街外れより五六町行きて道は左右に分る、此より新高に行くに路條二つあり、右に登れば山路にて東埔蚋、崎脚、崎頭、新寮、羌仔寮、大水窟、二城、項城等の諸庄を過ぎ、鳳凰山を越え苦苓脚より百布仔溪に下り陳有闌溪に出づ、吳光亮の開きたる道路は是なり、左なるは溪路にて社寮より濁水溪に沿ひ、流を縫うて牛輜軺に溯り、夫れより山を越えて陳有闌溪に出づるなり、里程は右に取れば楠仔脚萬社まで十二里、左は十四里なれども共に一日にては着き難し、山路は路の困難なる上に途中にて宿すべき場所なく溪路は路稍や遠きも水の落ちたる頃は、歩行にも苦しからず、途中に牛輜軺の派出所さへあれば、宿泊にも多少の便宜を得べし、我等は豫定の如く左に取りて進む、路は畦畝の間に通じ極めて平坦なり、三角潭と云へる一村を過ぎ江西林と云ふに入る、此附近蕃薯の産出多く、其滋味また他に比類なしと云ふ、路に沿ひて電線の幾條と無く懸れるを見、登山の路には似合しからずと思ひて電信線路圖を開き見るに、集々街より濁水の上流を横斷して林圯埔に通ずる、南北通信の幹線なりき、電線の上には幾千と云ふ數さへ知り難き燕子の留まりて、我等の進むまゝに飛び去りては遙か行手の線に遷り、近づけば又飛び遷る態の愛らしさに、興を催して夫れを追ひ越さんと進むまゝに、覺えず一里ばかりは過ぎたり、霜月の頃燕子の群れ居る景色、臺北附近にても珍らしさに、内地の人に見せば如何に驚きたらん、又途中にて紫鷸鴫の鳴くをも聞きたり、斯るは永澤教授の材料に上ちん。

崎仔脚溪を過ぎ杜藤湖の村を離れて又潭溪あり、木履ヶ溪とて細けき小川なれど、竹を編みて高く橋を架せり、溪の彼方は山脚庄にて林圯埔より此處までは全く一帶の平地なれど、是より少しく小山に近づけり、路は尚ほ平遠なり、少頃行く程に彼方より三人の蕃人、通事を伴ひて來るに遇ふ、我等の一行を迎へんとて來れるにやと、通事を招きて尋ねたるに、彼等は臺東の蕃人にてィシロ社なりと答へたれど、社名は言語の不充分なる爲め確かには聞き取り難かりき、彼等の一行は八人にて通事は社寮の者なれば、昨夜通事の家に泊り、三人は今より林圯埔へ米鹽を買べく赴くなりと云ふ。

庄司警部は流石に職掌柄なり彼等蕃人の通過したる道にて、前々日（四日）の夕方に蕃害のありたれば、或は彼等が途中にて首狩りせしにはあらずや、然らずとも加害蕃人に就き何等かの手がゝりもやと、通事を介して訊ね試みたれど、彼等は臺東の蕃社を出でゝより六日目に社寮に着し、蕃害の場所を通過せしは昨日のことにて、通事も蕃社より彼等を伴ひたれど何事をも覺えずとのことなりき、左れば用なしとて別れ行く程に、又一人の蕃人擔子の上に一人の土人を載せ、如何にも苦しげに滝なす汗を流しながら喘ぎ〳〵來れるに遇ふ、是も前の蕃人の伴れなるべし、さるにても蕃人は體力の強きものにて、如何なる重荷を負ふとも自在に崎嶇たる山路を跋渉して苦しむ氣色なしと聞きしに一人の土人を負ふさへ斯くまで疲勞の色あるは何事にやと怪しみたりしが、後にて聞けば蕃人は深山大嶽の躋攀には野獸とも其捷を爭ふに足れど、平地に下りては木より落ちたる猿よりも生地なく水を離れたる魚類の夫れの如く、唯さへ歩き兼ねたるに大の男一人を負へるは中々の剛のものなりとか、是にて思ひ當りぬ。

山の手に他里輜と云へる庄あり、龍眼の樹多し、山麓に沿うて少しく行けば又次第に平野に出づ、此あたり路の右手は荊棘生ひ茂りて、異禽の啼き渡れるも初めて山に入れる折とて珍らしく聞えたり、道傍に咲ける野花は何と云へるにや、松龍先生ならば此處にも一時は胴籃を卸さるゝなるべ

し、二里ばかりにて過坑仔を過ぎ、十時前に社寮に着き警官派出所に憩ふ、林圯埔を我等に後れて出でたる苦力は、途中にて一行を追ひ拔け早くも此處に擔を弛め居たり。

▲社寮　林氏が今の林圯埔一帶の平原を經營してより二十餘年、此附近は尙ほ竹脚寮社と稱し、水社連蕃の根據地なりしが、漸次蕃人を驅逐して東埔蚋に警隘を置き、次で蕃人と和を約し、社商を此地に置きて貿易せしめたるより、社寮の名ありと傳へらる、派出所にて聞くに、此地の開けたるは康熙二十七年にて、初め清國人賴建、賴桂の兄弟及び杜閩、杜猛と云へる兄弟、漳州府平和縣より移りて此に住み、夫れまで此地に據りたる蕃人は、壓迫を受けて遠く山中に入れり、今の郡大社の一部なりと云ふ、派出所の前に一宇の古廟あり扁して開漳聖王と爲す、蓋し漳州より移住したる祖先を祀れるなり、廟内に古碑一基あり、嘉慶年間に建る所、題字分明なり難し、廟に續きて戶數四五十、鷄犬遠く聞え、山村の趣詩に惡しからず。

少頃にして發す、後埔庄にて苧麻を作る家二三、大根の餅賣る家抔見ゆ、水車庄を經て溪州庄に抵るまで一帶の水田、黃稻秋正に登つて午日春よりも暄かなり、村外れにて驛館より來れる者に遭ふ四尺ばかりなる弓に征矢二本を副へて杖つきたる姿の怪しきに、何の爲めぞと問へば近頃蕃害のありたれば護身にするなりと云ふ、以前は多く銃を携へたるが、今は夫を許されずなりて斯くと、村盡きて溪上に出づ、卽ち濁水溪なり、江山の風景初めて殊なる。

▲濁水溪　世に若し不思議なるものありとすれば濁水溪は確かに其一なり、彼の百年河淸を俟つと云ひけん黃河の流れは、予未だ嘗て見るに及ばざるも、濁々たる濁浪天を捲いて走るの奇觀は、恐くは絕にて其類を求め難かるべし、殊に異しむ本島中部の諸川、源を中央山脈に發するもの、悉く淸洌澄明にして之を內地の溪流に比するも多く其比を見ざる所、獨り此の一流渾々として長へに澄まず、且其支源たる郡大溪の如き、陳有蘭溪の如き、淸水溪の如き、其他大小幾百の溪流共に澄淸秋の如きもの、一たび注いで此溪に合するや、忽ちまた半點の碧を留めず、濁浪は益其勢を加へて嘗て少しくも其色を渝へざるなり、蓋し淸濁併せ呑んで遂に其本色を失はざるものか、我嘗て濁水を渡る每に覺えず一種の感に打たる、今また來つて此を過ぐ、人の此感を同うするものありや無しや、若し夫れ他日此の溪上に溯つて能く其水源を探査し、以て予が地質學上の疑問を解釋するを得ば、其快果して如何。

左岸は直ちに巉巖壁立して蜿蜒東に趨り、一帶の石屏風を建てたらん如し、巖脚に數個の隧道を穿てり、嘗て水車圳の源を發せる所、今は半ば崩れて水さへ通はねど、當年二十萬圓の巨額を投じて開鑿したる、大工事の迹は殘れり、右岸は南投廳の管內にて、遠く集々街の平野を望み、集々大山は高く其後に聳えて、恰も淡水江上に大屯山を望めるが如し、西方は遙かに開けて溪流遠く平山盡きんと欲する邊に入る、頭を擧げて東を指せば、群山重疊して或は高く或は低く、或は連なり或は絕え、尖れるあり圓きあり、蔚蒼たるあり赤裸々たるあり、一々名狀すべからず、中に就きて中央に最も秀でたるものを郡大、望鄉の二峰となす、共に地を拔くこと一萬餘尺、雲は其山腰を繞れり、翠黛笑を含んで一行を迎ふるが如く、濁水一流亂山層嶂の裏より來る。

溪に沿うて溯ぼる、左岸徑盡きて右岸に轉じ、右岸また窮まつて橋梁無く舟筏なし、濁浪を踏み奔流を亂して徒涉すること三四回、蓬山萬壑爭流

滄、溪石團々馬蹄礫。大者如鼓小如拳。溪面誰塡遞疎密。水浹沙流石動移。大石小石盪摩滌。海風横刮入溪寒。故縱溪流作鬱嶂。水方沒脛已難行。水至攔腰命呼吸。夏秋之間勢益狂。瀰漫五里無從測。往來溺此不知誰。征魂夜々溪旁泣。山崩巖壑深復深。此中定有蛟龍蟄。此詩また直ちに取て狀すべきなり。

一里半ばかりにて蕃仔寮の村外れに着き、蒹葭の叢立ちたる中を穿ちて稍上れば平かなる道あり、林圯埔より清水溝を經て牛轠轆に行くべき山越の本道なりと云ふ、山麓に傍ひて行くこと又一里ばかり、乾坑と云へる數戸の村に着く、丁度正午なれば此にて晝支度せんと樹蔭に憩ひ居れば、此村の保正なりと云ふ五十ばかりの男、腰掛を持ち來り茶など沸かして歎待す、バロメートルを見るに、林圯埔より二百二十尺ばかり登れるなり、此附近も以前は蕃人の住める所にて、蕃仔寮の名は其れの紀念と知らる。

▲石器時代の遺物

乾坑より尙ほ山麓に傍うて行くこと一里、濁水の川原に突出して半島の形したる村に着く、龜仔頭とて今は十數戸の土人部落なれど、七八十年前までは蕃人の住みたる土地なり村の出口に一叢の社あり、老木生ひ茂りて其昔首祭にてもしたらん迹にや、少頃休み居れる中不圖思ひつきて枯骨の殘れるもあらばとて、附近を見廻はすに、雷斧と云へる石器に似たる石の破片見えたれば、手に取りて檢め見るに擬ひ無き石器にて珍らしき獲物なれば、淡海烏雙も共に手を盡して之を覓むるに、幾個となく見出されたれば、尙ほ時の移るを忘れて探し居るに、同行の庄司野添二氏は待ち飽みて、まだ山にもかゝらぬ中に斯樣な石ころ抔珍らしがる人々、此先如何ばかり手間取るやらんと前途を危ぶめる色も見えたり、總て手に〳〵十數個づゝ拾ひ取りて、偖て出立たんとすれば同行の苦力は先を急ぎて早や姿さへ見えず、重けれど捨つるにも忍びずとて、銘々手巾に包みて携ふ、石器は何れも臺北附近に見ゆるものとは石質も異なり、形狀も全く別種にて、細長き柳葉狀を爲し、多くは斧狀歴々として琢磨を加へず、琢磨したるは烏雙の拾ひたる唯一個のみなり嘗て鳥居龍藏君を理科大學の教室に訪ひたる時、臺灣の石器なりとて示されたるものも多くは此類なりき、梅陰兄も昨年阿里山に同行したる時、逢邦社にて二三個拾收せられしが、是も同種なり、北部の石器と全然別種なるは人類學上大に參考に資すべき價値あるべし。

再び溪に下りて進む、竹を駢べ藤にて釣たる危橋を渡り、茫々たる平沙を步すること一里、又竹橋あり兩岸より直徑五六寸長さ百尺位なる竹數本を指出し、中央にて双方の竹を結び付けて半月形を爲し、藤にて幅三尺許りに編み、又其上六尺許り隔て、更に太き竹二條を指渡し、夫れより藤にて橋の兩邊を釣り支へたる、此附近の橋の構造は總べて同じ式なり、渡る時は手にて上の竹を把へ一人づゝ遞番に越ゆるに、尙ほ中央にては動搖して動もすれば振り落されん心地す、濁浪岸を嚙んで物凄きこと限り無し、其狀況迚も拙なき筆には盡されずとて、寫眞を撮れり、又河原の裡を行くこと小一里にて二時三十分牛轠轆に着く此日行程總べて七里、尙ほ早ければ派出所の寫眞抔映し、少頃く休み居たるに一隊の蕃人山を下り來る。川上技師一行の荷物を運べるなり、斯くて一時間ばかり經たるに、一行は漸う見にたり、急ぎ出で迎へて萬歲を唱へ、手を取て其成功を祝す。

▲牛轠轆

は林圯埔管内に屬し、濁水溪に沿へる最も蕃界に近き土人部落なり、道光の中葉までは尙ほ一帶に蕃人の根據地なりしが、今より六十年前、林偏と云へるもの濁水溪の南岸に沿うて、深く蕃界の形勢を探檢し、遂に地を此間に相し、初めて牛轠轆庄を開拓す、當時は尙ほ現在

の位置より低く溪流に沿ひ、廣袤なる一大平野ありて多く其間に開墾居住せしが、洪水の爲めに殆んど其一庄を浸沖せられしより、更に高地を選んで集團部落を形づくりたるもの、今の牛輜轆なりと梅陰兄の調査に見にたり、而して牛輜轆の地名はヴォヌム族の蕃人間にウヴンノックと云へる言葉あり、此附近を古來斯く呼びたるより、漢字にて音の近きまゝに今の名を用うるに至れるものなりと、現に戸數四十餘戸水田も少なからず、蕃界交通の要地を占め豐かなる土地なり。

夜川上氏一行と共に派出所に宿す、明日より强力として伴ふべき東埔社の蕃人十餘人、前日より來り待ちて予等の着きたる時は派出所に集ひ居りしが、川上氏一行の荷を負ひたる楠仔脚萬社の蕃人十餘人が、派出所に着きてよりは何れへか逃げ去りて姿さへ見せずなりぬ、兩社の蕃人は互に敵視して相見るを喜ばざるものゝ如し、楠仔脚萬社の蕃人類りに酒を請ひたれば、其一人に一碗の泡盛を與へたるに、我にも我にもとて十餘人更る更る詰掛け、忽ち一瓶を平らげ、尚飽かざれば止むを得ずウィスキーを與ふるに、是も二本まで盡して尚ほ飽く模樣なければ果ては許さゞりしが、夜更けて蕃婦の一人が消魂しき聲して泣き叫び、狂ひ廻るに驚きて何故なりやと問ふに酒に醉ひたるなりと云ふ、彼等は酒と云へば果ても無く飲んで、後には斯く狂ひ廻るが常なり、此後ち山に入りても酒許りは飲ませてなと、物知りたる人より注意ありたり、然れど酒少し飲みて「君が代」「四百餘州」の歌など謡ふは愛らしとも愛らし。

▲七日

海拔千尺牛輜轆は實に仙凡の別るゝ所なり、是より登つて萬里の雲山を千別くべきわれらの一行は、今より下界に下つて塵の世の汚れに染むべき川上諸氏の一行と、暫しの別を惜まんとて朝餐の膳に澤龜の一瓶を語り盡しつ、七時派出所の門を出づ、下り行く人上る人、青山影裡一夜衾を擁して仙山の秘奥を語り明かしたる、互の緣の中々に淺からざるを覺にぬ。

朝床を出づる前に我等登山の日課たる脈子を計るに、淡海は六十八、烏巒は七十予は七十二子なり此朝氣溫は六十度にて天氣澄めり。

我等の荷物を負ふべき蕃人は、總べて十人にて早くより派出所に集まり、背板の上に行李を縛し、少さき荷物は網囊の中に容れて其上に載せ、我等の力にては動かすこともならぬ、重量のものを、輕々と背負ひ出せり、背板は內地の飛驒山中あたりにて用ゆるものと略ぼ同じ樣なれど、大さ內地の二三倍あり、內地のものは兩方の肩にて背負ふに、是は總べて頭にて其綱を支ふるなり、肩にて支ふるは手を使ふに不便なるより、險阻なる山の中に住めるだけありて、自然に工風したるなるべし、蕃人は東埔社の蕃丁にて二人は蕃婦なり、彼等の名は左の如し、

アノー。ビヨン。デーバン。スバリー。モー。サリラン。スワリー。アブツ。ハンツル。アリバン。

而して彼等を率ゐる爲め、蕃通事一名を伴へり、通事の名は林仕貓里とて牛輜轆の者なれど元來東埔社の蕃婦と土人との混血兒にて、蕃社內にも一戸を構へて蕃婦を妾と爲し常に兩所を往復して、蕃產物の交換を營める者、林とは土人の姓なれど仕貓里は蕃名なり、左れば彼れ蕃情に於て通ぜざる無く、殊に物品交換人は蕃人に對し、殆んど其生殺與奪の全權を握れるを以て、如何に兇暴なる蕃人も彼に對しては毫末も犯す所なし、故に蕃社に入らんには交換人を伴ふを安全なりとす、否之を伴ふにあらずんば到底蕃社に入ること能はざるなり、而して蕃通事なる者は古來制限ありて、一社大抵一人に限り、東埔社に於ける彼れは實に其有權者なり、故に新高に登るに東埔の蕃人を伴はんには、先づ彼に交渉して總べてのこと彼の周

旋に俟たざるべからず、彼れは通事として山に入るに當り、一日一圓の手當と其食事を傭主より給與すること從來の慣例なりと云ふ。

牛轎轆の背後は直ちに屏風を建て廻はしたらん如き山なり、二三丁にて山の峠に登れば、一派の溪流遠く南方の連山中より走せて其脚底を繞るを見る、是れ即ち陳有蘭溪なり。

▲陳有蘭溪　は新高登山の途中に於て最も記憶すべき溪流にして、同溪は實に其源を八通關に發し、蜒蜿北に流るゝこと數十里、牛轎轆の東北端に至り濁水溪に合せり、故に牛轎轆より新高山麓に達するまで、行程三日常に其流域を跋渉し、水源に溯つて水終に盡くる所、即ち八通關の絶頂となす、若し夫れ新高に登らん者、絶て一人の東道無しとするも、濁水溪に沿うて牛轎轆に抵り、更に陳有蘭溪に沿うて、上ること三日ならば一歩を過たずして達するを得べし、陳有蘭溪一に朗涼溪に爲る、蓋し音相通ずるに由れり。

▲竹仔脚庄　牛轎轆より坂を越にて下れば、溪に臨み山を負うて一帶の平地あり、稻田數十甲、諸所に廢垣殘礎の迹を見る、是れ即ち竹仔脚にして今は歴史上の古村となり、絶にて人煙を見ず、聞く此地亦牛轎轆と同じく數十年來土人の手に開拓せられ、領臺の後も尚ほ山中の一庄として、我が行政區域に數へられ、地圖上にも明かに其名を留めたりしが、三十五年土匪討伐の時に當り、平地に在りて身を置くの餘地無きに至りたる匪賊は、遠く逃れて山中に潛伏せり、而して竹仔脚の如きは最も其潛伏地に適せるを以て、彼等は民屋を惡ひ糧食を掠奪して之に據らんとし、形勢頗る不穩にして庄民は一日も安んずること能はざりき、終に全庄を擧げて牛轎轆に移住することゝなり、有ゆる家什を運び盡して火を其家屋に放ち數十年來住み馴れたる青山は、憐れ一朝烏有に歸せり、爾來匪害全く鎭定せしも、今日まで再び同庄に家を爲せるものなく、唯其田園のみ牛轎轆より通ひて作れり、而して該地附近は總べて直ちに蕃界に接し庄内の山腹には一二の蕃屋さへ見にたり、我が行く路も是よりは總べて蕃界に屬せり。

涼溪に下つて上流を望めば、平坦數里に亘れる一大空曠を爲し、蒹葭蕭條として其間に點綴し、一水悠々として遠さより來る、左岸は直ちに天平風櫃斗の諸山重疊して鳳凰山の羽翼を爲し、右岸亦群巒起伏して遠く中央山脈に連なり、郡大、望鄉の諸峰歴々として其間に數ふべし、眺矚甚だ凡ならざるを覺ゆ、然れど是より漸く蕃界に入り殊に今日は曩に蕃害のありしと云ふ、風櫃斗の麓を通るなりと聞けば、口には得言はざりしも何となく氣味惡るき心地せり、淡海の寫眞するとて暫らく留まりし程に、隨行の蕃人等は早や姿さへ見えず、嬾て溪流を渉り二三丁行きて彼方の山端を望むに、蔚蒼たる深林の中より一縷の炊煙立ち揚るを見たり、蕃界の山に餘人の住める筈なければ首狩りにとて出で來りし生蕃の露營したるにもやと、通事に尋ぬるに、彼れは土人の木挽が板を造るとて在るなりと云ふ、又少しく行きて山の麓近く進む折しも、忽ち山の上より砰に響きて銃聲の聞にたれば予は痛く打驚きて通事を顧みるに彼れは耳にも入らぬ模樣にて、山の彼方に石を切り出せる工場のあれば、大方夫れならんと答へぬ此の附近山鴉多く住みて啞々として啼き渡れるに内地へ歸りたる心地せり。

又半里ばかり行くに、彼方の川原に數多の蕃人休み居たれば、我等が連れたる强力ならんと思ひ、急ぎ近づき見るに全く見知らぬ蕃人なれば、少しく意外に覺にたれど、避けん要もなければ近づきて、何れの蕃人なりやと問ふに、彼等は一行十二人にて一人の土人通事さへ伴へど、言葉の通じ難

○新高山紀行　尾崎

きに中々要領を得ざりしが、軈て頭目とも覺ゆる男懷中を探りて、一片の紙票を出すを見れば、开は臺東廳より頭目に與へたる辭令にて、同管内無樂散社と記しあり、辭令に示せる所を見るに、頭目は臺東廳より毎月金三圓づゝの給與を受くるなり、彼等は今集々街へ物品を交換する爲めに赴く途中にて、何れも鹿の乾肉、鹿角等を夥多背負ひ居たり、辭令を持てるは頭目の弟にて、交換に來るとて證明を受くる爲めに、兄の辭令を借り來れるなりと正直に語れるも可笑し。

果ても無き川原の中を行くに、時々は路を失ひて方角さへも分り兼ぬる程なれど、先きに通りたる蕃人は道知るべにせんとて、處々に石を積み重ね又茅原の中に入りては、茅の葉を結びて標と爲せり、折しも左岸の山麓に二個所ばかり蕃人の火を放ちたるあり、見る〳〵山腹に燃ゑ擴がりて、果ては天をも焦さん勢凄まじく、風さへ加はりたれば中々に何時消ゆべしとも見ゑず、人里遠き處なれど心細き樣覺ゑぬ、蕃人は耕作の代りに山野に火を放ち、其燒跡に種子を下して自然の收穫を俟つと聞きしが、是も其爲めにや然りとは餘りに險阻なる山にて、中々に攀ぢ得べき樣にも見ゑぬが抔思ひぬ。

二里許り行きて山稍や低く、川原益々廣くなれり一溪の東より來りて注げるあり、郡溪とて陳有蘭溪の本流に比すれば半ばに過ぎざれども、頗る激流にて之を徒渉するに深さ腰を浸せり、又行くこと數丁にて、一溪の西より來り合するものあり、百布仔溪とて源を鳳凰山に發すと云ふ、而して其合流點に至り、山は溪流に隨つて轉じ、凉溪の上流展望更に佳なる所、忽ち見る雲煙縹緲の間、層巒群巒の上に屹立せる三個の巨人が、笑を含んで予等一行を招くが如きものを、是れ卽ち凉溪途上初めて新高山を望めるなり、方位は南にて稍東に傾けり、形狀は前面の一峰最も高く見ゑ、次は中峰次は最後の峰にて、彼の陳夢北が「中峰尤聳。旁二峰若翼乎其左右」と云へるものと稍や其趣を異にせり、蓋し彼は當年邑治の所在地たりし嘉義に於て之を望みたるもの、其形狀の同じからざる所以か。

小憩して寫眞二葉を撮る、時に午前十一時、白雲一片其山腹より浮び、蓬々として見る〳〵新高山頂を覆ふ。

白不仔溪の上に森々たる老樹の蔚茂せるは樟湖山とて、三十四年に土匪の立籠りたるを、討伐に向ひたる大賀警部が無殘の戰死を遂げたる跡は、彼處なり抔野添氏の語るを聞きつゝ、尙ほ半里ばかり進むに、溪流は急に右岸の巉崖に迫つて、仰げば削立千尺、其下直ちに奔湍石を嚙んで、深さまた測るへからず、一路全く此に至つて盡く、乃ち斷巖に傍ひ深潭に臨んで匍匐して進む、斷巖亦極まつて攀ぢ難き處、藤を結び樹枝を横へて纔かに身を支ふ、懸棧危徑如何に其困難なるかは、通事の連れたる獵犬さへ越え兼ねて、遙かに隔たりたる山を廻り、二時間も後れて漸う一行に追ひ付きたるにても知られぬ、此を躋ればまた廣き川原なり生蕃よりも歩危を懼るこそ怖れなど打語りつゝ晝の支度せんとて暫し崖の下に憩ふ。

晝飯の辨當は臺灣米にて粘着力少なければ、唾液の需用中々に頻繁にて、半日の行程に渴き果てたる舌の根、兎角供給の足らざれば、嚥下非常に困難なり、副食物は福神漬と鰺の乾物なりしかど尙ほ足らずとて淡海は携へたる梅干の瓶を開けり烏龍は溪水を掬して頻りに舌を打つ。

折柄一人の巡査壯丁二人を隨へ何れも銃を肩にして上流より來れり、蕃害を警戒するなりと云ふ、曩に蕃害のありたるは何れの邊なりやと問ふに、丁度我等の憩へる前にて、草の上に淋漓たる血痕の尙乾きも遺らずと聞きて、漸う嚥下したる飯さへ胸に支ふる心地せり。

○新高山紀行　尾崎

▲蕃害　時は四日の午後四時、日も早や黄昏に近ければ、急ぎて我が友に夕餐の米を送らんと、茅生ひ茂れる涼溪の岸邊を辿り、風櫃斗の山懐なる腦寮さして、今しも湖松崙の森近く進める四人の苦力、彼等は今一歩づゝ死出の旅路に近づきつゝあるなり、彼等の生命は今や風前の燈火の夫れよりも危し、左れど彼等は今日の一日を稼ぎ暮して、何がしかの苦力賃を得て歸らずば、戀しき妻と可愛き我兒は、餓に泣きつゝ門に俟てり、憐れ此の危き稼ぎも思へば彼等の生命なりけり折しも起る銃の聲、呀と思ふ隙も無く前の一人は打ち倒れぬ、後に進める三人は、斯くと見るより踵を回し一目散に五丁ばかり距てる腦寮の中へ逃げ込み危き命を助かりぬ、腦丁等は夫れ蕃害よと、手に〳〵銃を用意して、急ぎ現場に駈け付けしが事既に遲し、無殘なる哉倒れたる彼は、頭顱を失ひて、胴に附きたるは手と足とのみ、淋漓たる碧血草に染みて長へに恨みを結びぬ。

尙ほ彼れが運びつゝありし一擔の米は、彼れが殘骸の傍に捨てられ、蕃人等が潛みたりし場所は、夫れより二間ばかり隔てる茅の中に、狼藉たる迹の見えたるにても、蕃人等は初めより首狩りせんとて待ちつゝありしなり、而して予等が休憩したる邊に、右岸なる內份埔の山の手より蕃人の通りたる足蹤を印し、尙ほ其途中に片足の蕃靴さへ落ち居れば、蕃人等は山を越えて巒大社の方より出草したるものと察せられぬ。

元來此附近一帶は巒大社蕃人の出草地なれど、左岸なる鳳凰山下の此處彼處には腦寮多くありて腦丁の入り込めるも多く、又此の溪底は楠仔脚萬、東埔を初めとし臺東方面より、行き通ふ蕃人も多きに、以前は絶えて蕃害のありたることをも聞かざりしが、去年の秋より既に八回まで續きて十數人の首を狩られたりとか、然れば斗六廳にては前年までは別に警備とても爲さずありしが、追々に製腦の事業も進み、蕃地開發の機運も熟したればとて、最に楠仔脚萬社に派出所を設け、牛轎軏より其處に行かん途中にも、處々に警隘を置きて、巡査と壯丁とを配置し、此附近にも郡溪と十八重溪との二個所にありて、共に一里ばかり距てるのみなるに、尙ほ時々隘寮の間を潛り來りて、斯る慘劇を演ずることあれば、廳にては此際更に隘寮を增置して、充分なる警戒を加へんと計劃しつゝありと。

紀念の爲めにとて寫眞を撮り、軈て再び出立つ、蕃害の怖しと云ふよりも、限り無き一種の感慨に打たれて、風腥き首狩の跡を行き過ぐ。

行くこと半里許、兩岸次第に迫つて溪流漸く急なり地圖を案ずるに、此附近嘗て吳光亮の開鑿したる通路の鳳凰山を越ゑて陳有蘭溪に下りたる處なるが如し、通事を顧みて其所在を問ふに、溪の左岸風櫃斗の山脚に傍うて通じたるもの今は溪上の沙岩多くは洪水の爲めに崩壞して、道路の所在殆んど知り難しと云ふ、既にして一溪の東より走せて來り合するものあり是れ即ち十八重溪なり、聞く溪の上流約一里にして一蕃社ありタクラシ社と稱す、俗に十八重溪社と云へるもの是なり、種族は東埔社と同じくヴォヌンの一部にして、今は南仔脚萬派出所の管轄に屬せり、蕃屋十一、男女合せて五十餘。

▲山通大海碑　一歩一歩、山勢漸く高く兩岸金窄る、顧みれば北方一帶遠く溪流と共に開けて、恰も山の直ちに大海に通ずるが如き觀あり「山通大海碑。在十八重溪金銀山前。高六尺寬三尺餘」。是れ采訪冊の記載せる所、蓋し吳光亮が開鑿せる通路に當り、形勝の地を擇んで刻せるもの、今ま尙ほ其の殘碑を留むと云ふ、乃ち就いて之を探らんとし、通事を嚮導として其所在を覓む、碑は實に溪の左岸に沿ひ、近く溪流を距ること十數歩に在り、而して予等一行は溪を隔てゝ其右岸を歩せり、急瀨落つるが如く鏨々として耳を聾せんとす、而かも此激流を越ゆるにあらずん

ば、終に其豐碑を探ることを得ざるなり、低徊數刻、溪流の稍や緩なる處を擇び、一行互に杖を以て相串聯し、前後相呼び相戒めて漸く岸に上る、蓋し一人一歩を過まれば一行皆足を保ち難く、相伴うて沙底の鬼たるを免れず、危さこと是より甚だしきは無からん、碑石は北方に面したる大さ屋の如き巨岩にて、碑面は采訪冊の記したる所と全く體裁を異にし、巨岩の中央に横六尺高さ二尺ばかりなる長方形の額面を劃し徑五六寸位の文字にて、山通大海の四字を正書せり、僅かに三十年餘を經過したるに過ぎざれば字面に塡塗したる丹朱は今尚ほ點々殘存するを見れども、甚だ遺憾なるは其所在溪流に瀕せる爲め出水毎に岩下の土砂崩壞して、碑石著しく下方に傾き、現在の碑面は少なくとも十度以上の傾斜を示し居れり、猶此後ち洪水に遭たらんには、碑石は全く溪底に轉落して、新高途上の一名蹟は亦尋ね難きに至らん、然れば現在の位置にては到底之を保存すべき工風も無かるべしと思はれたり石質は普通の川原石の類にて、碑面の麤造なりしと位置の稍や高きに過ぎて手の屆き兼ねたる爲め烏鍵が拓字せんとの計劃は思はしからざりき、淡海は寫眞したれど是も字面の不鮮明なりしと、光線の逆なりし爲め成功覺束なし、憐れ此後の登山者に再び探らるゝまで、題字の迹を留むるや否や亦心許なし。

夫れより左岸に沿ひ、累々たる大石巨巖の横はれる間を五六丁行けば、右手の山の麓に怪しき茅屋見ゆ、早や蕃社に着きたるにやと思へるに、蕃社にはあらで警寮なりければ、暫し悲はんとて立寄る、頭社坪の警寮にて郡溪と楠仔脚萬との中央に在るなり、構造は間口一間半、奥行二間位の大いさにて、二疊敷許りには籐を編みて、床を張り、其他は土間にて爐を其一隅に設け、四壁と屋根とは皆茅草にて掩ひ、入口には戸さへ設けず、巡査一人と壯丁二人とは常に其中に起臥するなれど、蚊帳を吊らん場所も無ければ、毛布被ぎて籐の簾の子の上に眠るなり、巡査は二十日毎に交代するなりと云ふ、壁は透間の多ければ風を凌がんこと思ひも寄らず屋根も雨には堪へ難かるべし、其慘憺たる有樣中々筆には盡されず、嘗て木曾山中に見たる炭小屋も斯程の不設備にてはあらざりき、斯くても屋頭に高く日章旗を飜へしたるは殊さらにゆかしく見えたり。

警寮より二丁程行けば、西の方より一溪の來り合するあり、地圖に名は見えざれど、源を烏松坑山に發し、蘆竹楠社の北を經て流るゝなれば蘆竹楠溪とも云ふべきか、尚ほ數丁行きて山の手に上るべき路あり、茅蘆の生ひ茂れる中を辿ること小半道、軈て小山を越ゆれば一帶の平地にて、遙かに森の中より煙の上れるは楠仔脚萬社なり、三時四十分派出所に着く。

利尻山と其植物

牧野富太郎

余が北見の國利尻島の利尻山に登つたのは、三十六年の八月である、農學士川上瀧彌君が、數年前に數十日の間此山に立籠つて、採集せられた結果を植物學雜誌に發表せられたのを、讀んでから、折があつたら自分も

一度は此山に採集に出かけ度いと思つて居たが、何分にも好機會がないので、思ひながら久しく目的を達することが出來なかつた、然るに山岳會の會員中で高山植物の採集と培養に熱心な加藤泰秋子爵が、此山の採集を思ひ立たるゝとの話を聞ひたので、若し同行が出來れば自分は大變に利益を得られるであらうと信じた所が、子爵も其當時は高山植物に充分の經驗を持つて居られなかつた點もあるので、誰か同行をして呉る人があればと捜して居られる所であつたので、自分の希望は直に子爵の厚意に依て滿足せしめられることが出來たのである、併し其約束の條件として、自分は此採集の紀行を書くことを引受けたことを第一に白狀せねばならぬ、所が俗に云ふ、鹿を逐ふ獵師は山を見ずで、植物の採集に夢中になつて居ると、山の形やら、途中の有樣やら、どうも後から考へて見れば、筆を採つて紀行文を作ると云ふことが、甚だ困難である、そこでいづれ其内にと思ひながら次第に年月は經過するし、益ゝ記憶がぼんやりするし、今日となつては紀行を書くと云ふことは、絶對に出來惡いことゝなつて仕舞た、所が此事に當初から關係して居られる諸君は、頻りに此ことを余に責められるので、今更何とも致方がない、それで幸ひに山岳會の雜誌に大略のことを載せて貰ふて、自分の責を塞ぎ、且つは加藤子爵及び其他の諸君にも此顚末を告げて謝したいと思ふ。

加藤子爵は北海道に開墾地を持て居られるので、其方に先きに出發せられて、余が東京を出發したのは七月二十六日であつた、勿論東京からは同行者もないので、青森に着いて、一二の人を訪問して、二十八日に同所を出發して、二十九日に室蘭に上陸した、此間は別に話すべきこともないが、同日の午後四時に紋別（モンベツ）を過ぎて虻田（アブタ）の村に到着した、其翌三十日には、加藤子爵の開墾地で同じ虻田村の中の幌萠（ホロモイ）と云ふ所に着いて、加藤子爵に會合することが出來た、其日と其翌日などは、其附近の植物を採集して、種々の獲物があつたが、是も今度の話の主でないから、ズット略することにしやう。

八月三日に加藤子爵の一行と札幌に到着して、山形屋に宿を取つた、所がどう云ふ加減であつたか、自分が病氣を發したので、一時は折角の思ひ立ちも、此所まで來て斷念しなければならぬかと心配をしたけれども、思つた程でもなく、翌日は殆んど全快をして仕舞つた、夫れから三日程過ぎて、六日の日であるが、札幌農學

校の宮部博士と、加藤子爵とそれから子爵の隨行の吉川眞水と云ふ人と、幌向(ホロムヒ)の泥炭(デイタン)地に採收を試みた、この日は山草家の木下友三郎君も同行せられることになつた、一寸話が前に立戻るが木下君は、東京にある時から、此度の利尻登山に同行せられるかも知れないと云ふ豫約があつて、同君も他の用を兼ねて北海道に來らるゝ都合であつたから、一同が途中で待合せつゝ幾干か日數を費すやうな譯になつたのである。

翌七日には愈利尻島に向つて進行する爲めに札幌を出發して、加藤子爵主從に木下法學士と余と都合四人外に井口正道と云ふ人が小樽に着して、色内町の越中屋に一先づ足を休めたが、井口氏は病氣を發したので、到頭小樽に殘ることになつた、余等四人は即日小樽を出發して日高丸に乘込んだ、元來利尻に行くのには、小樽から北見の稚内(ワツカナイ)への定期航海船に便乘するので、一週間に一回と云ふことであるからして、其船が歸りに利尻に寄港する時、又それに乘込んで歸るのが普通の順序であるそうだ、海上は至つて穩かであつた、午後六時頃「增毛」と云ふ所に着して、十時頃又同所を出發して、翌八日の午前六時頃、燒尻島に碇を下した、と云ふ程もなく、直に同所を出發して又七時に天賣(テウリ)に一時進行を止めて、又北に向つて出發した、午前十一時頃であつたろうと思ふ、利尻島の内で、鬼脇(フニワキ)と云ふ港に着いた、此港は利尻の内で第一の都會と云つても宜しいのである、それから午後一時二十分と云ふに、愈一行が上陸すべき鴛泊の港に投錨した、直に上陸して熊谷と云ふ旅店に一行は陣取ることになつた。

此日は朝からして雲が多く、思ふやうに山の形を見ることも出來なかつたのでもあるし、幸ひにして海上の波は穩かであつたけれども、格別面白いこともなくして十時頃になつたのであるが、幸ひにも次第に晴天となつたので、鬼脇に着する前からして、遙かに利尻山の尖りたる峯を眺むることが出來た、早上陸する前から一同は山計りを見て、あの邊がどうであろうとか、さうではあるまいとかの評定計りで、隨分傍から見たら可笑い位であつたろうと思ふ、一行の泊つた熊谷と云ふ宿屋は、此土地では可なりの旅店で、殊に最初思つたよりは、此島が開けて居るので、格別不自由を感ずる程のこともなかつた。

此日は何のなすこともなく、日を暮らすのも勿體ないと云ふ相談から、一同打連れて近傍の植物採集に出か

けたのが、殆んど四時頃であつたろうと思ふ、大泊村の海岸へ行いた、鴛泊から西の方に當つて、大凡五六丁位の所である、人家は格別澤山もないが、所々に漁業をなすものゝ家が幾軒宛か散在して居る位である、其海岸に小さな岡があるので、其岡の上に登つて見渡したところが、一帶に島の中央に向つて高原的の地勢をなして居る、海岸の所は或は岩壁もあるし、或は濱となつて居るところもある、又海岸は雜木の生へて居るところもあれば、草原となつて居るところもあるが、兎に角森林をなして居る程のところは海岸から少し隔つて居る、其森林の樹木は、エゾマツとトドマツと云つても宜しいのである、今申した海岸の小さな岡の邊で採集した植物は先づこんなものである、ヨモギ、アキノキリンサウ、カハラナデシコ、シロワレモコウ、ハギ、ウシノケグサ、オタカラコウ、アキカラマツ、キタミアザミ、マイヅルサウ、ツルウメモドキ、ツタウルシ、ハナウド、スゝキ、スゲ、サマニモヨギ、エゾノヨギギク、ヤマハゝコ、ハマシヤシン（ツリガネニンジンの一品）、カハラマツバ、オゝヤマフスマ、イハガリヤス、ナハシロイチゴ、カウゾリナ、クサフヂ、などである、其内で、エゾノヨモギギクは日本での珍品と云つて宜しい植物である、それから此岡の下で、チシマフウロを採集した、岡の北面の絶壁を海の方に向ひて、下つたで所、岩壁の腰のあたりには、ボレヤナギが澤山に自生して居るのを見た、それから、エゾイヌナヅナは、丁度イハレンゲのやうに澤山生へて居つた、エゾノヒナノウスツボ、エゾハマハタザホ、ウシノケグサ、エゾオホバコ、ツメクサ、ノコギリサウ、イハレンゲなども、此邊に澤山あるし、中にも眼に付いたのは、シロヨモギの色が殆んど霜のやうに白かつたのである、こんな草の生へて居る其下は、直ぐに波に打たれて居るのである、岩の上部には、ヲタカラカウ、ツタウルシ、シロワレモコウ、エゾヲトギリなどが多く生へて居て、ガンコウランも此邊に生じて居るのを見た。

先づ此日は此位の採集で一同宿に歸つて、晩食後は自分は此採集品の整理に忙がしかつたので、他の諸君のことはよく覺えて居ないが、多分利尻山登山の準備に就て心配せられたであらうと思ふ、併し此島の人に尋ねても、利尻山は信心にて詣る人が日歸りに登る丈けのことで、道も素より惡いし、山上に泊るべき小屋などのある譯もないとのことで、何分にも宿屋では山の上の詳しい模樣は知ることが出來なかつた。

九日は尙前日に續いて登山の用意をすることになつた、一體は此日早朝から山に向つて踏み出すべき筈であつたが、天氣模樣が惡いので、今一日滯在して充分に用意をしたら宜からうと云ふことで、結局雨の爲めに一日滯在することになつた、午後になつて雨は漸く止んで五時頃から晴天となつたので、未だ暮れるには間があるからと云つて、一同は燈臺のある岡の近邊に採集を試みた、此岡は昨日採集した方面とは全く反對であるが、自生して居る植物の種類は、センダイハギ、ハチヂヤウナ、イヌゴマ、ハマニンニク、エゾノヒナノウスツボ、ハマエンドウ、アキカラマツ、ノゲシ、ハマハコベ、イチゴツナギ、ホソバノハマアカザ、ナミキサウ、オ、バコ、オトギリサウ、ヤマハ、コ、アキタブキ、ハマベンケイ、カセンサウ、イヌタデ、イブキジヤコウサウ、エゾオ、バコ、オチツボスミレ、シホツメクサ、エゾイヌナヅナなどであつたが、其外にノボロギクが此邊にも輸入されて居るのを見た。

十日、愈〻利尻山に登山する爲に、鴛泊の宿を拂曉に出發した、同行は例の四人の外に人足がたしか七人か八人かであろう、つまり一人に就て人足二人位の割合であつたやうに思ふて居る、兎に角辨當やら、草の入れ物やら、或は余が使用する押紙などを、澤山に持たしたのであるから、普通の人の登山に較べたら、人足の數も餘程多かつたであらうと思ふ、鴛泊の町を宿屋から南東に向つて、五六町も行つてから、右の方に折れたやうに思ふ、一體は宿を出で〻間もなく、右に曲りて登るのが利尻山への本道であるらしいが、余等の一行は、途中で、ミズゴケを採る必要があるので、ミヅゴケの澤山にあると云ふ池の方へ廻ることになつた爲めに、こんな道筋を進んだのである、町はづれから右に折れて、幾町が爪先上りに進んで行けば、高原に出るが、草が深くて道は小さいので、やつと搜して行く位である、次第に進むに從つて雜木やら、子マガリダケ、ミヤコザサなどが段々生ひ繁つて、人の丈よりも高い位であるからして、道は殆んど見ることが出來ないやうなと云ふよりも、道は全く無いと言つた方が宜いのである、そんなところを數町の間押分けながら進んで、漸く池のある所に出たが、無論此池の名はないのである、ミヅゴケが澤山此邊にあるので、一同は充分に先づ是を採集した、池の邊は、トドマツと、エゾマツが一番多く此邊は凡て喬木林をなして居る、其林中にある植物は、重な

るものを數へて見ると、ミヤマシケシダ、シロバナニガナ、ツボスミレ、ホザキナ、カマド、メシダ、オホメシダ、ジユウモンジシダ、ミヤママタ、ビ、サルナシ、バツコヤナギ、オ、バノヨツバムグラ、テンナンシヤウ、ヒトリシヅカ、ミツバベンケイサウ、ヒメジヤゴゲ、ウド、ザゼンサウ、ナンバンハコベ、ミヤマタニタデ、イハガ子ゼンマイなどである、此池から先きは、多少の斜面となつて居るので、其斜面を傳ふて登れば先づ笹原である、笹原の次が雜木である、雜木の次がエゾマツとトドマツの密生して居る森林で、道は全く形もないのに傾斜は益急である、一行は此森林の中を非常な困難をして登つたのであるが、間もなく斜面が漸く緩になると同時に、森林が變じて笹原となつて、終には谷に出ることが出來た。

此谷には水もあるので、十二時に間もないから先づ此邊で食事をしやうと云ふことになつたが、何分にも未だ利尻山の頂上も見ることが出來ないと云ふ有樣であるから、一行も殆んど何の愉快を感ずることが出來なかつたのである、加藤子爵が今では大事の盆栽として居られる、エゾマツの數本寄せ植の小さな鉢物は、此食事をした場所で岩の上に實生のかたまりがあつたのを、木下君がいたづら半分に採られたのであつたと思ふ、其當時はあんなに美事の盆栽にならうとは思はなかつたが、人の丹精と云ふものは誠に怖しいものであると思ふ程の盆栽となつたのである。

食事をした場所から先きは、水のある谷を傳ふて遡つて行くのであつて、別段道と云ふ道は更にない、谷の兩岸は孰れも雜木やら笹原やらで、谷の中にある石は重に丸味勝の石であつたやうに覺へて居る、進むに從つて谷は漸く窮まつて、水も次第に少なくなる、其邊からして谷を捨てゝ、右の方へ横に這入つたが、傾斜が益益急で殊に笹が密生して登るのには非常に困難を感じた、此邊でザゼンサウを採集したと思ふ、笹原の急な傾斜も終には盡きて、低いエゾノタケカンバ或は其他の樹の、ハヒマツに混じて生へて居るところに出たが、孰れも高くないだけに、或時には跨ぐことも出來るが、又或る時には腰を屈めて潜らなければならぬと云ふ有樣で、隨分登る時には樂でない道筋であつた、此邊一體のハヒマツは、山火に燒けたのであるか、枝が枯れて白く曝されたやうに成つて、それも山上に登つてから眺めると云ふと、殆んど雪でも積つて居るかと思ふ程に白

く見えるところが、隨分と廣いのである、困難に困難を重ねて、一行は殆んど弱り切つて仕舞つた頃に、漸く道路らしいものに出ることが出來たが、是が鶯泊の町から、利尻山に登る本道であるとのことである、道路と云つても固より山道であるからして、至つて小さい上に又勾配も急である。

此邊には、イハツツジが澤山に生へて居た、勿論花は既に稀であつたが、此イハツツジの果實は赤い色のもので、食ふことも出來るし又芳はしい香があるのである、それから花はないが、此邊には既にキバナノシャクナゲも澤山自生して居た、其外にはエゾフスマなどが生じて居つたと思ふ、此邊から先きは殆んど峰傳ひに頂上に向つて進むと云ふ有樣である、此處が恐らく藥師山と稱せられる峰であるだらうと思ふ、若しさうであるとすれば、標高四千尺位の所に一同は既に達して居るのである、それから數町の間は峰傳ひとは言ひながら、たるみがあるので、此邊から前面を望めば頂上も格別遠くなく仰ぐことが出來るけれども、此日はミヅゴケ採集の爲め迂廻して少なからぬ時間を費したので、頂上まで登つて充分の採集をして、鶯泊まで歸着すると云ふことは、餘程困難に思はれて來たけれども、此邊からして思ひ〳〵に採集しつゝ進むので、或は遲れた者もあるし、或はズツト先に駈拔けて居るものもあるし、中々相談をして下山のことを何れにか決定すると云ふことが出來ないのである、段々たるみのところを進んで行く內に、風は次第に强くなるし、時刻も段々移つて來たので、何とか話を極めねばなるまいと思つて居る時、子爵は率先して餘程登られたやうであつたが、此時どうと云う引返して來られたし、木下氏も丁度餘り遠からぬ所に居られたので、一同相談を始めた、其相談の結果は、子爵だけは老體のことでもあるし、勿論露營の準備等もないのである上に第一食物の用意がないので、終に人足の大部分を率ひて下山せらるゝことになつた、山に殘るものは、人足が二人それに木下君と自分と都合四人である、所が此四人も勿論食事の用意は更にないのであるからして、下山した人足の內で、直に食物と露營の防寒具等を携へて、再び登り來るやうに命じて殆んど日沒に間近きころ、余等は加藤子爵の一行と袂を分つことになつた。

前にも言つた通り山上に一泊の豫定でなかつたから、何等の用意もないので、どうして一夜を明したら宜し

いかと一同殆ど當惑したが、第一に水を得なければ困るのであるから、其邊を搜して見たところが、左の方に草を分けて一町程も下れば、其所に水もある、又水の邊に小さな小屋があつたらしい跡がある、是が今から考へて見ると、川上君などが此山に籠つた處であろうと思ふ、それから先づ木下君と余は共に夏服であるからして、唯さへ夜になれば冷氣を感ずる位であるから、此高山の上では益〻寒氣が强く堪へられないのは勿論である、從つて充分に火を焚いて暖を取ることが肝要であるから、人足に命じて可成多くの燃料を集めさせた、又其次には小屋と云ふ小屋は無論ないから、何とかして自分等二人の身體を入れる丈のものを拵へたいと思つたが、それも思ふやうには出來ないので、止を得ないから、此邊の雜木はつまり、エゾノタケカンバとミヤマハンノキと中に少しづゝ、ハヒマツも混じつて居るが、高サが三四尺位しかないのであるから、それを二人の身體が半分位宛入れられる程結び合せて、其下に木下君と共に腰から上丈を入れるやうに拵へ上げたのである。

此晩は幸にして晴天で、雨の心配はなかつたが、風は中々强いので、寒氣は膚を徹すると云ふ程であつた、實は此山上から鴛泊の町まで格別の遠サでもないと思つたから、加藤子爵と共に下山した足人が、直ぐに食物と防寒具を持つて登つたならば、遲くも九時か十時頃までには來て呉れるだろうと思つて居つた、ところが、十時が十一時になつても誰も登つて來るものがない、食物さへも殆ど用意がないので、加藤子爵其他の人の殘したのを僅に食した位で、益〻寒氣を感ずることが强いので、止を得ず只無暗と樹の枝を焚いて身體を暖めることになつた、後に鴛泊に降つて聞けば、我々の焚火が町からもよく見えたので、知らぬ人は不思議に思つて居たとのことであつた。

充分に眠ることも出來なかつたが、先づ無事に十一日の朝となつた所が、夜が明けても人足は一向に登つて來ない、そこで差當り困るのは最早食物は少しもないのである、詮方なく遠くにも行かれず、唯此附近の植物の採集を始めた、此朝採つたものは、ジンエフスイバ、キクバクハガタ、イハレンゲサウ、リシリトリカブト、ゴヤウイチゴ、イハオトギリ、シシウドなどが重なるのもであつた、兎角する內に午前十時頃となつて、漸く町に下つた人足等が登つて來て、朝の食事をすることが出來た、人足等は宿に着いて直に踏出したさうである

が、何分にも深夜になつて登ることが出來ないので、遂に途中に一泊したとのことであつた、加藤子爵も昨夜下山の途に就かれたが、途中子マガリダケやらミヤコザサやら道に横はつて居て、益〻足場が惡くなり、非常に疲勞せられたので、鷲泊に歸着されたのは、十二時過る頃であつたとのことである、それを考へて見ると、山上に露營した方が、或は樂であつたかも知れない、十一日の日には木下君は、充分の採集をしたからと云つて、終に人足と共に下山せられるとの事であるが、余は何分にもまだ此山を捨て〻去ることが出來ないので、終に一人踏止まつて、尙一夜を明かすことに決心した。

峰に向つて進んで行けば、砂礫の地に達するのであるが、此邊には樹は殆んどないと云つても宜しい、尤も夥しく生へて居るのが、チシマヒナゲシである、其株の尤も大なのは直徑が五寸程もあるかと思ふ、併し此邊には、他の草は餘り多くない方であつて、チシマヒナゲシも又此土地を除いて外の部分には、殆んど見當らなかつたのである、ヤマハナサウ、シコタンサウ、シコタンハコベ、エゾコザクラ、リシリイリンドウ、チシマリンダウなども、此邊から絶頂に達する間に自生して居た。

絶頂に達すると、木造の小さな祠があるが、確か不動尊を祀つてあると云ふ話しであつた、絶頂は別段平地がある譯でもなく、又此邊には樹は生へて居なくて皆草計りである、草は少ない方ではないと云つて宜しかろう、此邊に、タカネワウギの自生して居るのを見た、絶頂から少し向ふへ下る所まで、木下君と同行したが、此所でとう〳〵同君と分れて、自分は一人となつた、其邊にリシリワウギ、ヒメハナワラビ、ミヤマハナワラビなどが生へて居る。

此絶頂に立つて眺むると云ふと、東北の方に當つては、宗谷灣が明かに見ることが出來て、白雲が其邊から南の方に棚引いて、廣き線を引いて居つて、幽かに天鹽の國の山々を見ることが出來た、西の方は禮文島を鮮かに見ることが出來て、其外には所謂日本海で何にも眼に遮ぎるものはなく、唯時々雲の動くのを見る計りである、それから今は日本の領地となつたのであるが、樺太の方は、此時朦朧として、何れが山であるか雲であるかを見分ることも出來ない有樣であつた、最も愉快であつたのは、夕陽が西に廻るに從つて、利尻山の影が

東の海上にあり〳〵と映つて、富士山でよく人の見ると云ふ、影富士と同樣のものを、此北海の波上に見ることが出來たのである、尙それよりも愉快であつたのは、午後四時頃であつたと思ふ、此利尻山の絕頂に於て、所謂御來光を見ることが出來た、即ち自分の姿が判然と自分の前を顯はれるのを見ることが出來たのである。

絕頂より尙前面を見れば第二の峰が聳えて居るのであるが、時間が無くなつたので此日は第二の峰に行かずして、前夜の露營地まで戻ることになつた、今日は隨分採集をしたのであるからして、其始末をするに、多くの時間を費して、終に徹夜をするやうな有樣になつた、乍併、前夜に比すれば、防寒具なども人足等が携へ來つたのであるから、大いに寒氣を凌ぐことが出來た。

十二日の日も幸ひにして晴天であつた、午前三時頃露營の小屋を出でゝ仰ぎ見れば孤月高く天半に懸つて、利尻山の絕頂は突兀として月下に聳えて居る、此間の風物は何んとも言ひやうのない有樣である、三時頃からして東の方が漸く明るくなつて、四時半には太陽が地平線上に出た、此時西北の方を仰ぎ見ると、昨日は多少雲もあつたが、今日は更に一點の浮雲もないので、禮文の方は益〻鮮かに見ることが出來た上に、宗谷の方も東に無論見ゆるし、東北の方に一ッの小さな島を見ることが來た、此島は無論樺太に屬するものである、朝の食事を終つてから再び絕頂に進んで、それから尙第二の峰に向つて足を進めたが、其間は僅に三四町に過ぎないと云つても宜しいであらう、勿論足場はよくないけれ共、無論第一の峰程の困難はないのである、第二の峰には餘り石などはないのであるが、自生して居る草は、チシマラッキョウ、エゾヨツバシホガマ、ホソバオンタデ、リシリサウなどで、殊にキバナノシャクナゲが甚だ夥しく自生して居た、第二峰の先きに第三の峰があるが、此峰に行くのは甚だ困難で、中間に絕壁の殆んど足場の得難いものがあるので、殘念ながら全く斷念することの止を得ないのを認めた、第二峰から西の斜面に降つたところに、蠟燭岩と云ふ大きな岩がある、岩の上にはタカネツメクサやらコイハレンゲなどが生じて居て、又其岩の下には、チシマイハブキやら、エゾコザクラの花のあるのなどが生じて居つた、此邊は雪が消へて間もないやうな模樣であつたが、併し殘雪は認めなかつた。

既に第三峰に行くのを斷念したから、此峰から後戻りをして、第一峰に歸り、それから少し下つて右の斜面に這入て見たら、此邊は一面に草があつて、其中にはアラシグサが澤山生へて居つた、尙それから少し下ると雪が澤山に殘つて居る、其大サは幅が十間計りもあつたであろうか、長く下の方まで連つて居るので其長サがどの位あるか殆んど窮めが附かない、此雪の兩側にはキンバイサウが黃金色の花を開いて夥しく生じて居つた、其萼瓣が十枚以上あつて、或は一の新種ではなかろうかと思はれる程である、リシリキンバイサウも此邊に生じて居たし、エゾコザクラも丁度花盛りであつた、無論此殘雪のあるあたりは、幾分谷のやうな形をなして居て、其谷の兩側は殆んど一面にハイマツが土を掩ふて居る、其ハイマツを越へて、雪の左の方に向つて進んで行けば、露營地の下の谷のところへ出られるのである、漸く此邊に達した時分に天氣が變つて來て、終に雨が降り出した。

餘り所々を採集して時間が遲くなつたから人足が毛布を振つて頻りに余を呼んで居る、モウ隨分滿足することが出來る程採集したから、それより立ち戻つて露營地に着した時は、日も漸く西の波間に沒せんとする頃であつた、愈仕度を整へて、下山の途に就たのは七時に近い頃であつて、余と此時まで山上に止まつて居たのは人足が二人である、少し下つたかと思ふと、日は全く暮れて仕舞て、下るに中々困難で、加藤子爵の一昨夜のことも益ゝ察せられた、殊に人足等は重い荷物を背負つて居るから大變に後れるのであるからして、余は提灯を點けてズン〳〵先きに進み、ハヒマツの燒けて白くなつて居る所まで行つて、人足等の下つて來るのを待つて居つたが、段々夜は更けるし、殊に何だか大きな鳥が時々飛んで來て、何やら氣味が惡いやうな心持もするし、今から考へて見ると、大方北海に名高い鷲であろうかと思ふが、其時は何の鳥と云ふ考もなく、時々棒を振つて打とうとするが、中々それが屆く程低くは飛んで來ないのである。

人足も來たので、又打連れて下つた、終に笹原の中に這入つて幾度かつまづいたり、轉んだりして、終に一ツの溪流のあるところまで下つた、其時は十一時頃であつた、斯うなつては迚も鶯泊まで行かれさうもないから、いつその事此處で露營した方がと思ふた、それはツマリ此石のゴロ〳〵した谷を傳ふて下るのであるから、

迚も今迄のやうなことではないと云ふ話であつたから、止を得ず其ことに決した、此所に落付くことになつたが、何分にも下は濕つて居るし、寒くはあるし、中々眠ることは出來ない、其上に雨は本式に降り出したので、何んとも云へない困難をした。

十三日の朝になつて、漸く宿に着した時には、素より笠もないのであるからして、まるで濡鼠のやうになつて、衣服は全く水漬になつて仕舞つたのである、そんな有樣であるから、雨の降るのを幸ひに十三日一日は宿に閉籠つて休憩をして、其次の十四日には雨も霽れたから、加藤木下兩氏と共に多少の散歩をした位で、十五日になつてから、やつと小樽行の船が鴛泊に着したので是に乘込んだ、勿論往きに乘つた日高丸が歸つて來る筈であるが、どう云ふ都合か其船の代りに駿河丸が來たので、それに乘つて十六日の夜の十二時頃小樽の越中屋に歸着した、それから先は或は札幌の方に足を止られた人もあるし、或は東京に急いで歸られた人もあるから、思ひ〳〵に分れて仕舞つたが、兎に角利尻山の採集は茲に全く其局を結んだのである。

余の記憶に殘つて居るのはこんなことであつて、誠に紀行とも言へないし、採集記とも勿論言へない位であるから、若し詳しいことを知りたいと云ふ方は植物學雜誌に出て居る、川上君の『利尻島に於ける植物分布の狀態』と云ふ論文を御覽になれば、山の模樣から植物の分布の有樣も一層明かになるであろうと思ふ、併し兎に角前にも言つた通り、登山の紀行を書かなければならぬと云ふ事になつて居るのであるから、申譯ながらせめて御話だけでもして、自分の責を塞ぐ積りである、どうか其お積りで讀んで頂きたい。

愛鷹山と天城、八丁ノ池

高野鷹藏

一、愛鷹山登山

嘗て修善寺に遊ぶ、東方桂川溪谷の極る所、一錐形をなせる山あり、地圖を按して其達磨山なるを知り、登攀の念禁じ難く、同好A氏兄弟、Y氏、K氏、を得て修善寺を發す、路を桂川の溪谷に取りて進む、然れども途上諸品の採集をなすあり、且つ發するの時遲かりしを以て、遂に絶巔の壯快を極むる能はずして降る、爾來兩三年再遊するの機なく未だ其尖端を知らず、同好の畏友小島烏水氏達磨山頂の壯觀を說く事、極めて詳細、再遊の念勃々として起る、本年四月初日より同志の士と共に、天城山に採集するの約あり（日本博物學同志會採集旅行）即ち此期を利用して、達磨山頂の富士を眺めんと欲し、諸友に先立つ事三日、吾が家を發せり。

三月三十日。此日細雨霏々として降る、友人を訪ひ、夜の十時新橋發神戸直行列車に乘じて、沼津に至らんとせしも、明日の天候を氣遣ひて、徒らに心を勞するのみ、一憂一喜雲の往來に動く、午後に至りて雨止む、風少しく加はりて、雨雲の往來するに忙し、日光の雲間より漏るゝに遇ひ、勇氣勃如として起り、家に歸りて、出發の用意に忙し。

九時過ぐる事半ば、弟妹に送られて、家を出づ、先づ神奈川驛に至りて、乘車せんとし（總て神戸直行の列車は横濱驛に寄らず）電車を横濱停車場前に待つ然れ共來らず、徒らに時を費して、定刻に遲れん事を恐れ、瀧車に乘じて（午後十時發）神奈川に至る、親しき友人小橋貫一君は停車場に見送らる、感謝するに言葉なし、成功を約し手を握て別る、神奈川に至つて列車を待つ、定刻に餘す事五十分餘り、徒然に苦しむ、列車至る、其乘客多きに驚く、十時五十分神奈川を發す、車中睡魔の襲ふ所となり、ボーイに命じて、沼津に至るの時起すべきを以てし一睡す、目醒むれば、既に國府津に在り、時に三十日を過ぐる事三十分。

三月三十一日。再び夢路に、汽車は箱根の險を越へ、御殿場に至る、宵天に羅列せる星辰は朝の日の晴天な

るべきを豫示す、列車の馳走する事、極めて速かなり、佐野、三島を過ぎ三時五分沼津に至る、予を起すべく命じたりし、ボーイは車扉によりて、居眠むれるも可笑し、車外に出づれば、風强し、今迄スチイームに暖かなりし吾れ、急激に、富士嵐の寒風に觸れて、齒の根打ち振ふも笑止なり、停車場前に客待ちせる、車に乘じて、戸田通の滊船發着所に向ふ、停車場より南に向ひて、眞直に、車の音は、夜の寂寞を破りて、走る、街路諸々に電燈の、吾が物顏に足元を輝せるも快なり、八九町もありなんか、やがて、黑白も判らぬ、道を曲り屈りて、水の音、風の音相和して、聞ゆる所に至れり、問はずして狩野川畔に來りしを知る、二三町にして至る一旅宿を叩きて宿る、風益々烈しく、明朝の出帆を氣遣ふ、寢具の不備、風の音、浪の音は、吾が勞れし目を閉づるに難し、思ひを家路にたどり、明日の天候を祈りつゝ、まどろむとしはなけれど、目醒むれば既に外は明るし。

夜來の風未だ收らず、時辰は五時を報ずれど、更らに發船するの樣もなし、戸田通の滊船は潮汐の具合によりて、一定せざれども、每朝五時六時の頃(其當時)發船するとか聞き及べり、今にも出帆すべきかと、空ら賴みに待ちしかど、五時半となり、六時となり、然らに人の動くけはいだになし、二人三人降りて聞き合す樣なりしが、空しく荷を負ふて歸れり、愈々出帆はせざるべきかと、宿の女呼びて問ふに、「とても此風にては空しかるべし」と云ふに、然らば風止まば何時にても船出すべきかと聞く、「否なとよ、今朝發船するにあらざれば明朝迄待たざるべからず」と、明朝迄待ちて、戸田に至り達磨山に登りて修善寺に降り、湯ヶ島迄行かんは、荷さへなくば左程苦しみならねど、例の七ッ道具の外に、寫眞器、三脚等、いとも重きもの加りて、とても耐ふべくも覺へず。

嘗て達磨山に登りしは、東方修善寺よりして、修善寺に歸へりたれば、更らに道を變じて、沼津より滊船にて戸田に至り、そこの風光を賞して、更らに達磨山頂の北方を通じて、修善寺村に至る街道瞽女峠(七百八十五米)を越へ、其峠の絕頂により南方に登りて達磨山巓に至り、再び峠に下りて、修善寺に行き、玆に一日の勞を温泉に洗ひ、其翌日(四月一日に)修善寺を去つて狩野川畔を南下して、天城山麓に湧出せる、湯ヶ島温泉

に至つて、諸友を待ち、天城山に登り、伊東に行き、熱海、湯ヶ原、箱根を經て歸らんとせしも、到底明朝（即ち四月一日）沼津を發し、戸田に至りて、修善寺に下り、更らに湯ヶ島迄行かんは、多少の困難あるべきを察し、達磨登山は、再び他日を期し、今日直ちに修善寺に至り（豆相線により）明日諸友の來るを待たんとし、匆匆荷物を整へて宿を出づ、停車場に至らんと欲し、途中狩野川に架せる橋上より、北方沼津市街の背後に油然として一山の聳立せるあり問はずして愛鷹山（アシタカ）なるを知る、白妙の衣纒へる富士は愛鷹の背後に、魏然として、其秀峰を聳つ、更らに瞳を轉じて背後を眺むれば、狩野川は流れて、兩岸、茅蘆の風に颯々の聲をなす、達磨山は其尖端を顯し、東方修善寺方面に美しき裾野を展き、箱根火山は東北方に數多の凸凹を起せり、風益〻强く、橋上に寫眞器を樹つる能はず、更らに停車場に至らんと欲し、沼津の町を愛鷹山に面して進む、道を誤りて、町の西端に出づ、路傍の人に聽いて、停車場に至る、時に八時、上り列車の來る事一時間半の後ならざるべからず、愛鷹山を撮影せんと欲し、停車場の背後に出づれば、愛鷹山は數峯に分れ、富士山は其背後に、恰も其れが中央火口丘にやと思はる、とかくして、餘りに其秀麗なるに見とれ、登攀の念漠然として起る、即ち意を決して、直ちに愛鷹山に進む、途中金岡村（沼津より半里）に至りて案内を賃せんと欲し、田圃開けたる道を進む、途上一農夫に遇ひ、人夫の有無を問ふ、尙ほ進んで、金岡村字西熊堂（クマンド）に至る、流れに、物洗へる老嫗あり、案内すべきもの、あるべきや否やを問ふ、兎角にして、「近くに一人あり、さあれど家に在るべきや否や、心もとなし、乞ふ、しばらく、待て」と、馳せ去る、予は其後に從ひて行くに、幸にして家に在り、愛鷹山に案内すべきを求む、彼れ「愛鷹山の何れに登らんと、欲するにや、伴次郎岳には今より到底至り難し、愛鷹山なれば十分なり」と云ふ、予は愛鷹山に登れば可なるべきを云ひ、倉皇用意せしむ、時に八時過ぐる事三十分。

八時四十分西熊堂（クマンド）村の案内山田源七の家を發す、道は愛鷹火山の裾野を北へ〳〵と進む、極めて緩慢なる傾斜をなせる、畑、松林の中を行く、絶へず前面に愛鷹群峯を眺め、一躍直ちに其頂に達し得るが如し。

乞ふ暫く山勢に就て述べしめよ、山は富士山の南に、聳立せる、一ヶ優大の消火山にして、其舊火口壁は、

雨風の爲めに消磨し、數峰に分たれ、遠く之れを眺むれば、其火山たるの形貌を認むるに難し、山巓は實に五ケの峰頭に分たれ、此等全般を稱して、愛鷹火山と云ふ、愛鷹火山なる名稱は、其一峰、愛鷹山に起因せるものなるべく、山は駿河國駿東、富士、兩郡に跨り最高峰は越前岳（標高一五〇五米――陸地測量部五萬分一地形圖による）にして、以下、呼子岳（海拔一三一三米――震災豫防調査會報告二十四號による）、位牌岳（一四五七米――地形圖による）、愛鷹山（一一八七米――地形圖による）に至る、越前岳は最北にありて、以下呼子、位牌、愛鷹と南方に連なる、呼子、位牌岳を以て圍める一大深刻なる、絕谷は、實に愛鷹火山の舊火口の遺跡なりと云ふ、（愛鷹火山の地質構造地形等に就て詳細は震災豫防調査會報告第二十四號富士愛鷹火山地質調査報文――三十二年二月を觀られたし）余が登攀したるは、實に最も南端に占居せる一峰愛鷹山にして標高一一八七、六米（五萬分一地形圖による）、山の東、南一面は駿東郡に屬し、西部は富士郡に隷す、北は、約一〇〇〇米內外の、連嶺によつて、位牌岳に連る、南は遠く裾野を曳きて沼津平原に及ぶ、東は佐野方面に延きて、箱根火山と連り、所謂裾合谷を構成して、黃瀨川は之れを潤す、黃瀨川は、愛鷹、富士の兩火山に、其源を發して、途上愛鷹山の集塊泥流及び富士熔岩上を浸蝕して、急湍瀑を爲すもの多し、佐野瀑園、三島鮎壺瀧等は人口に膾炙せり、然れども、其形貌たる極めて小なりと雖も、碧流奇巖を洗ふの盆景的景色は、以て優大侵すべからざる、大自然、富士山と、相對稱して配置の妙を極む、川は南流して、狩野川に合し、沼津の東面を浸して、海に貫す、西は浮島沼、吉原に曳き、遂に海に至つて止む、日本山嶽志によれば、蘆鷹山、葦高山、足高山、鋸岳の異名あり、此山名の起因に關しては小島烏水氏の說く所あり、（日本山水論三二九頁）「愛鷹山」の條下に、曰く、

『富士山下、大石寺所藏によりて、刊行したりと傳へらるゝ、異本會我物語卷の十に曰く、

鎌倉殿富士野を出でさせ給ひて、伊豆國の住人に、尾河三郎を召て、汝會我のものどもに緣ありと聞、彼等が首を足高に入て、曾我の里へ送り葬らせよと仰せければ、畏て悅びつゝ、二つの首を古鄕へぞ送りける。

とあり、足高とは机の如き物にて、古くより物の臺に用ひしなりとか、富士山下の愛鷹山の名、古書に往々足

高と書けるあり、はじめは宛字ならむと思ひたりしが、之にて解するに、或はこの器物より思ひ合はせたる名なるべきか、愛鷹の文字は後代に、宛てられたるものなること、初めより論なし、甲斐の天目山は、天目の形したるより、名けられたりとは、坊間の書に見るところなれど、足高は必ずしも形態の、その器物と相似たるがためにあらずして、山の位置たる東海道の方面より之を仰ぐに、富士の半腹以下に横はりて、この臺礎を成せるにさも似たれば、かくは名けられたるものならむ。(或はおもふ、足高は「ハシダカ」即ち兩端突起の謂歟)』

此山は、古來野馬を以て現る、然れども現今は其隻影だに見る事難し、明治三年官、命じて一掃し盡せりと云ふ、山頂に愛鷹明神の神祠あり、瓊々杵尊を祭ると云ふ、毎年舊曆二月八日、十七日は愛鷹明神の大祭にして遠近の老若登山して、參拜する者多しと云ふ。

既にして西熊堂を去りて、一里餘りの地に至る、此邊數村の共同して開墾せるの土地なりとか、今尚ほ鋭意事業に從ひつゝあり、既にして、途上の一丘、高山(海拔三九一、七米——五萬分一地形圖による)の南より西へと迂廻して進む、十時カマイシノホラ(釜石のほら?ほらは凹みの意か、溪谷又は山巓の凹處をほらと云ふ事あり)に休む、此邊畑圃の開墾せるもの多く麥を植ゆ、前面に最も近く、左端に聳立するものは實に吾が愛鷹山にして、右に遠く隆起せる一峰は位牌岳なりとす、陸地測量部出版輯製二十萬分一圖、靜岡圖幅に伴次郎岳とせるものは、實に此の位牌岳を指せるものにして、土人は位牌岳と稱する事なく、伴次郎、又はシラカレン(意義詳かならず)と稱す、又同圖に鷲巣山とあるは越前岳にあらざるなきや(標高は同く相等し)、十時十五分玆を發す、尚ほ半里餘りにして、山狹り漸く溪谷に入る、嘗て牧牛をなせし殘家なりと云ふ陋屋を望んで進む、道は漸く爪先上りとなる、時は春風駘蕩たるの時なれど、炎熱甚しきに苦しむ、且つ此山は溪水の喉を潤すべきものなし、十時四十五分ニシノヤリ(西の槍?)に休む、山は閉ぢて涼風來らず、未だ流汗を拂ふに難し、一休して發足す、時に十一時に餘す事十五分なり、路は愈〻急に、谷は愈〻狹く、眺望の見るべきなく、渴を醫するに溪水なし、漸くにして炭燒小屋に至り湯を乞ひ、辨當を喰ふ、進むにつれ、登るにつれ、路は愈〻難に、汗は愈〻滴る、此邊炭燒小屋の散在せるもの多し。

既にしてニシノヤリを離る半里餘り、谷愈〻極る所に至つて左方の山上に登る、予が經過し來りし溪谷を土人はホンサワ(Honsawa.)(本澤?)と呼ぶ、此谷一ヶ所の水滴る所もなき空澤にして、此邊住へる炭小屋にては、雨水を貯へて飲料に供するとか、左方の山上に至れば、駿河灣は双眸の内にあり、遠く、達磨、天城の諸山を望む、此邊海拔八百米、山巓に近く、一水の滴るありと聞き勇氣更らに加はる、尙ほ登る事二百米ばかりにして休む、此邊ニシオツタテ(西押立?嘗て磐梯山に登る、途中押立溫泉と稱するものあり、呼ぶにオツタテを以てす、意義詳かならずと雖も或は同字にはあらざるなきか)と云ふ時に十二時三十分なり、辨當に頰鼓を打ち、駿河灣頭吹き來るの春風に涼を取る、東方を望めば箱根火山は數多の小峰を隆起す、眸を轉じて、南方を眺むれば、遠く、將に日を期して登攀せんとする天城の諸山、伴二郎、矢筈山等手に取る如く、駿河灣の東緣には達磨舊火山の美しき裾野を望む、眼下を望めば三島、沼津の町には、青毛氈を敷きたらんが如き田、畑、の中に點々散在し、狩野川は白帶を漂せ、豆相鐵道は、一條の直柱の横臥したるが如し、狩野川の海に朝するの所臥牛山はあり、尙ほ目を石に轉ずれば沿岸一列の青松連り田圃は青疊を敷ける如く區劃整然たり、遠く淸水港を望む、往來する漁舟、瀛船は此れ皆な一個庭園中のものに過ぎず、山は高からずと雖も、海に近く聳ち眼界を隔るものなし、絶景を以て鳴る、江の浦、田子の浦、三保は皆な双眸の内に映ず、長汀曲浦駿河灣は、打寄す白浪に、白色の笹緣を附けたるが如く、沿岸一列の松林は、更らに青黑色に緣取りたるが如し、此の自然の美景、然れども未だ雄大壯嚴なりと云ふ能はず、等しく皆な箱庭的なるを遺憾なりとす、一時玆を立つて頂上に向ふ、此邊一樹のあるなし、御手洗水に着す、細徑を下る事數間、老杉の下泉水は滴々として落つ、海拔一千米もあらんか、愛鷹山中稀有なるものと云ふ、登山者は以て一掬の水に咽を鳴して積勞を醫すべく、參拜者は以て、身體を淸めて頂の神祠を拜すべし、此れ、御手洗水の名起れるなるべし。

一時三十分御手洗水を發す、一掬の水に勇氣更らに加る、漸くにして、道は熊笹(?)の内に沒す、目に入るの景なく、汗を吹き去るの風なし、漸くにして頂上に愛鷹明神の神祠に達す、十段餘りの石階を登り直ちに、祠の背後最高點に至る、時に一時を過ぐる事四十五分。

愛鷹山の絶巓、南駿河灣に面する部分は樹木生ひ茂りて南方を望む能はず、唯だ北西方を望むに足る、愛鷹明神の神祠は一間四方もあらんか、石造の堅固なるものなり、其前に二間に一間半位の木造の參籠堂あり、愛鷹山の最高點は、今實に予が直立せるの所、今更らに予が身長の一一八七、六米加りたる事を喜ぶ、三角櫓の基石あり、北方に當つて吾が大八洲大自然の盟主富士山は雲霧を衝きて聳てり、全山皆な白、崇高と云はんか、絶妙と云はんか、余輩筆緑に遠き者、之れを云ひ說くべき術なし、烏水氏達磨山巓の富士を說く事、詳かなり、余は不幸にして、其の妙を極むる能はざりしと雖も、思ふに一一八七米の頂上愛鷹山巓に伏して、此の大自然の帝王の膝下に跪きしに及ばざるべし、余は富士山を見る、常に平々凡々敢て何等の興味の湧くなく、常に何等の感想を與る事なかりき、吾れの富士山を謬れるや久し、今に至つて、余は富士の美に感ずる事、遲かりしを悲む、遙に西北方を眺れば、遠く一座の白妙の山あり、三姉妹(スリシスターズ)を以て擬せらるゝ駒ヶ岳、地藏、鳳凰の諸山南に降つては白峰連嶺の北岳、荒川岳、農鳥の諸峯、高く白峯を雲表に出す、近く北方には愛鷹火山の一峯、位牌岳(土人はシラカレンと云ふ)あり、尙ほ遠く富士の膝下には、越前岳あり(愛鷹火山の一峯)西方を望めば富士川は北より南駿河灣に注ずるを見る、愛鷹山中數多の溪谷は樹木鬱蒼たり。

富士の膝下に、横つて、休む事四十五分、二時半頂上を發す、來路と異りて、ブナの疎林の下、熊笹(?)をかき分け〳〵降る、十二三町餘りにして急傾斜せる一草原に至る、五六町にして、又、ブナの疎林に入る事約一里 Cho-shi. (銚子?)に休む、時に三時十分、又降る事一時間餘り四時十五分登路牧場の殘屋の傍らに出づ、再び來路を急ぎ、途上二休して步む、田畑の間を進み、西熊堂の案內山田の家に着したるは六時十分、夕陽將に西山に春くの頃なり、暫く休息して、六時三十分、疲れたる足を引ずり、重き荷を双肩に負ひて、月の光を浴びて沼津に向ふ、沼津停車場は、凱旋兵の歡迎にやあらん、樂隊の音、騷し、朝は飛ぶが如く來りし道も、疲れたる身には二倍三倍にも遠くなりたらんが如く、やがて停車場前の宿屋に、疲れ切つたる身を横へたるは七時五分にてありき。

二、天城山行

博物之友第三十號は報じて曰く、四月一日より豆相方面へ採集旅行をなすべしと、經路は、東京より三島を經て豆相線により大仁に下車、湯ヶ島に至り、天城山八丁の池に至り、其れより降りて冷川に出で、伊東、網代、熱海、伊豆山、湯ヶ原、箱根を經て、歸京せんとすと、僕も其一員たらんと欲したが、前章に述べた如く達磨山に登るつもりで、先發したのであつたが、不幸にして目的を達する事が、出來ずにしまつたが、其代りに愛鷹山に登つたのは前章の通りである、天城紀行は諸君の一讀を願ふのは、如何あらうかとも、思はるゝので、其理由は外でもない、天城に行つた事は前後二回あるが、一度として、其巔伴二郎岳に登つた事はなく、何時でも八丁の池迄しか、行かなかつたので敢て登山紀行とは云へないが、膽太くも載せる事とした。

初め一行の連中と、修善寺又は湯ヶ島で、會ふ約束であつたが、豫定の通りに行かなかつたので、三島で一行と會ふ事とした。

四月一日、今日も亦好晴である、上りの汽車は九時三十分と一時二十一分とである、一行は新橋を、七時の大垣行に乘つて、三島に十二時七分に着して、一時二十七分三島發の豆相線に乘る筈である、所で九時の汽車では三島で約四時間待たねばならず、三島で四時間遊ぶ事は、つまらぬ事と思ふたので、一時二十一分の汽車は丁度三島發一時二十七分の汽車に聯絡するので、此の汽車で三島に行く事にした、午前の内は町を見たり寫眞屋に行つて種板を入れ代へたり、買物をしたりして過した、やがて晝食を濟して、停車場に行つて見ると、出札口の上に、乘客が多く、到底乘り切る事は出來ないから、二等三等の切符は賣らないと云ふ、意味の掲示がしてある、此汽車に乘れないとなると、一行より非常に遲れてしまうので、是非乘らねばならず、然し二等三等の切符は賣らんとあつて見れば如何ともし難いが、一等は賣らんともないので、一等を買うと思つて、三島迄一等を下さいと、云ふと、御氣の毒ですが一等は謝絶しますと云ふので、つまり何等に限らず、御客は乘せないと云ふ事なのである、然し今更ら馬車で三島迄走つても、一時の豆相線には間に合ふ筈もなし、困つたものだと思つたが、尙ほ詳しく聞いて見ると、若し此汽車(一時二十一分の)に乘れないならば次の汽車(五時四十五分)に乘ると云ふ人ならば賣ると云ふので、乘れるか乘れないか、其んな事は知らないが、賣る丈けは賣

つてやると云ふ樣なもので至極無責任なものである、然し此れでも止むを得ないので、運を天に任して、三島迄切符を買つた。

汽車は二十分ばかり延着したが、成程よく押し込んだものである、客車のデッキは云ふに及ばず、ブレーキ、バンに迄乘り込んで居る、僕は七ッ道具に、寫眞器や、何にかを持つて居るので中々乘れない、此列車に乘りそこねると大變と思つたから、一生懸命、無茶苦茶に、割り込んで、やつと客車のデッキに乘る事が出來た、然し、七ッ道具が、つかへて、動く事も出來ない、聞けば大阪からデッキに立つて來た人さへあると云ふ事である、汽車は、漸く沼津を發して三島に着した、見ると一行はもう汽車に乘つて居る、勿論僕が茲で、落ち合うとは思はなかつたのである、橋を渡つて、列車の方へ近づくと一行大に驚かれた、然し僕は未だ、大仁行の切符を、買ひ代へなければならんので、荷物を預けて大急ぎで出札口に飛んで行つた、切符を買つて來て見ると、來るだらうと思つた人が、來なかつたり、來まいと思つた人が來て居つた、一行大に僕の不意の來襲に驚いた樣であるが、此度位汽車で苦しめられた事は初めてである。

豆相線の汽車も、官線が遲れたので、一時三十五分に發車すべきのが一時五十分三島を發した、三島驛では停車場前の凱旋門に驚かされて、大場、原木と過ぎ、蛭ヶ小島は、彼處かと、北條、南條、田京と過ぎ、二時四十分大仁驛に着した、自分は下田街道の湯ヶ島迄は曾遊の地ではあるし、別に採集物もないと云ふ見込で、茲から馬車に乘る事にして、同志二人と、其れから途中、旭の瀧に採集するので、一足先へ行うと云ふ、三人と、都合六人、先づ水盃的のガタ馬車に乘る事にした。

愈〻大仁を出たのは、三時近かつたであらう、下田街道は絶へず狩野川畔を南へ〳〵と行くのである、立野村に來ると、旭ノ瀧行の三氏は下車して、殘るは三人、馬子は遠慮なく、叩くし道は例の如く、大石がゴロ〳〵して居るので、車の動搖する事極めて甚しく天の上から海の底迄、落されると形容したい程である、道は何時來ても變る事なく、如何にも平凡な道を馳せて、青羽根、下船原、月ヶ瀨、門野原と打ち過ぎて、漸く湯ヶ島に來たのである、湯ヶ島の馬車の立場は村の入口で、其所から宿屋のある所迄は尙ほ三四町あるので、大抵は

其所で降されるのであるが、前に一度來た事があるので、宿屋の所迄馬車を、進めさした、程なく落合樓と札の立つてある所で降りて所定の賃錢二十六錢宛を拂つた。

湯ヶ島には温泉宿が二軒ある、湯本屋と號する家と、外に今晩一行が宿るべき筈の落合樓とである、何れがよいやら、敢て比較研究をしたのでもないから判らぬ、温泉は狩野川畔から湧出するのであるから、大抵温泉宿は街道から下の方、川縁りにあるが落合も道路から一二町降りて、行くのであるが、川に吊り橋が懸つて居つたりして、何んとなく、面白さうな處である、吾々三人が着いたのは五時少し前であつた、部屋や何にかの要意をさして待つて居ると、五時四十分頃になつてそろ〳〵一行が着した。

四月二日、四時二十分起床、戸を開いて外を見ると、星はきら〳〵と光つて、好天氣である事を示して居る、夜には大分珍談が多かつたそうであるが、天機漏すべからずである、愈〻出發したのは、六時二十分、道を狩野川の右岸、下田街道に取つて南へ進む事、七八町木橋を渡つて右折して坂を登ると、一寸平らな人家が少しある所に出た、此所は與市阪と云ふて居る、此邊に着したのは七時、尙ほ進むと、宮内省の殺生禁斷の標木がある、此の傍らに御料局の苗塲があつて、檜の苗を何萬本となく、植ゑ附けてある、此れから、追々傾斜が急で少しの間は、木がないので、小春日和の此頃でさへ、其熱い事、夏の眞中に、嘗て登つた時に敗けない位である、半里ばかり登ると、小さな杉林の中に入つたので、少しは凉しくなつた、やがて木の間にある殘雪、小規模な殘雪を見付けて、雪を喰ひ〳〵汗を拭きつゝ登る、後ろを振り返つて見ると目の前に達磨山、其右手の方には、沼津の海、富士、一昨日登つた愛鷹山、遠くは甲斐の山々、白峰、駒ヶ岳などの山々が白く、「コバルト」色の空中に、突立つて居る、沼津から三島近邊の、小丘は箱庭の山とでも云ふ樣に見へる、一休しては登り、一息しては攀ると、やがてブナの林に入つた、追々と進んで與市坂から一里半も登つたかと思ふ處、丁度白田道と、八丁池へ行く道との分岐點に來た時は、八時五十分、此處を「三本ゑのき」と云ふて居る樣である、其れは此の處に、三四本のもみの大きなのが樹つて居るから、誤稱したのであらう。

茲で一休して、八丁の池に向つた、道は巨大な落葉濶葉樹の下を、殆んど登り降りもない位に進む、すゝだ

○愛鷹山と天城、八丁ノ池　高野

け生ひ茂つて、殘雪諸所にある、二十町も來たかと思ふと、だら〳〵降り二三町進むと、九時四十分八丁の池畔に出た、八丁の池は、所謂火口湖なるものであるそうで、南北に長く稍〻心臟形をして居る、南北凡そ二百米、東西百五十米ばかりの直徑がある、湖畔は低濕な地で、みづごけ其他の雜草が生じて居る、四周の山々は高くはなく懸崖などと云ふべき所は少しもない、湖畔の西部は稍〻平らである八丁の池、如何なる理由で然か云ふのであるか、判然はして居らんが、周廻が八丁あるとか云ふ事らしい、水は淺く、嘗て夏來た時は、もつと淺かつたが、魚も棲まぬ樣である、湖畔の枯草に、身を横へて居ると、實に何んとも云ひ樣のない心持である。

十時半湖水を見捨てゝ、來路を、三本えのき迄歸つた、時に十一時で復玆に一休して、路を白田道に取り發した、路は斷へず山の中腹を、左程の登り降りもなく、うね〳〵と屈曲して行くので、木の下道ではあるし、未だ殘雪はあるし、道は中々歩み惡い、初めの間は、達磨山、駿河の海、などが見へたが、後には眺望更らになく、落葉濶葉樹林の中を行くのであるから、唯々として歩くばかりである、半道餘りも來たと思ふ所で、道が叉になつて、小さやかな標木が、白田道と、地藏堂の方へ下る道とを示して居る、其所で道を左に取つて、行くと、やがて三本えのきから一里餘り、二里に近いであらうか、來て山の一角を、曲ると、木もなく、其れこそ岩石磊々とでも云ふ樣な、慘たる所が現れた、嘗て此の所の樹木を拂下げた爲めに、殘らず切つてしまつて跡に植附けをしなかつたもので、雨や風や雪の爲めに、土壤は洗ひ去られ、岩床は露出する、大きな石ころも爲めに小さな石ころになると、云ふた樣な、まるで火山が吹き出した跡の樣である、であるから、草木などは生へ得るものでない、左樣此んな所が、幅平均七八町もあらうか、長さ、南北には一里近いであらう、此れから地藏堂に出るには、立派な、橇道が出來て居る、此所から材木を運ぶ爲めに作つたものであらう。

此哀れな、人間に譬へたなら、人の毛を一本々々拔かれて、藥罐になつた樣な所を北へ〳〵と降つて行く、道は橇道で木枝が萬遍なく列べてあるので、反つて歩み惡い事は甚しいのである、段々降つて行くと、杉の植林地に行く、雪は道を沒めて、雪の爲めに折られた若木は道を遮つて居る、殆んど北へ〳〵と、一里半も降る

と、一軒の家があつた、此所は地藏堂迄は半道少し位であらうか、一休して發すると山は一面の茅山で、同じ樣な、至極迷ひそうな道を、どうにかこうにか、地藏堂の村端れに出た、時に一時半、三本えのきから三里半はあるのであらうか、河畔で顏を洗ひ、手を清めて辨當を濟し、二時に玆を出て、地藏堂の村、丁度湯ヶ島と伊東との街道の所で案内と別れ、案内は西に僕等の健在を祈つて、僕等は東に案内の勞を謝して、右と左に袂を別つた、其れから吾々は、單調な道を、原保(ハラボ)、中原戸と過ぎ、大幡野(オホハタ)、大幡峠と云ふかも知れない、峠の樣な、坂を登つてやれ嬉しやと一休みして、ひよつと前へ出ると廣い〳〵野原、天城の裾野の一凸起なのであらう、誰れかゞ天城は二つあつても、伴二郎は二つないと、土地の者に驚かされた、天城最高點、伴二郎も見える、此の峠であらうか、大幡野であらうか、此の樣な所を下つて冷川(ヒエ)に出て、其れから柏峠、伊東峠とも云ふて居る(後者の方が一般に通ずる樣である)を提燈附けて越へ、伊東に着いて、泊つた。

其れから翌日は、伊東から、湯ヶ原迄行き、其翌日は、湯ヶ原から鞍掛山に出て、元箱根、(舊道)畑を經て、湯本に降り國府津から瀧車で歸つた。

天城は二度行つて、二度共、最高峰を知らず、初めての時は、二度と此んな、つまらぬ(何んにも採集品のない)所へは來まいと、思ふて居つたが、復來たのも面白く感じた、で天城の方は登山記(最高點に達する事を、登山の意義と假定して)ではないが、マツカリヌプリに登らずの記、と云ふのさへ書かれる時代であるから、敢て諸君の一讀を願ふのである、予は最後に、永々と非文章的な記事を讀まれたを讀者諸君に感謝するのである。

(完)

甲州八ヶ嶽

武田久吉

明治三十八年八月八日！　甲武鐵道の下り一番列車は、今や四ッ谷の隧道を出でゝ、信濃町の停車場に近づくのであつた、東は最早白んだが、世間はまだ眠りより醒めず、ひッそりとして、天地はなほ寂寞の境、鮫が橋や權田原の町からは、所々にかすかな炊煙が一條二すぢ立ち昇るのみであるが、夜の帳は已にあがり、活動の世界は將に現出せんとして居る、汽車はけたゝましき響をたてゝ、一直線に此の靜謐を破り行くので、恰も疾く起きてつとめよ、みそら渡る日晷のすぎぬまにいそしめよと云ふがごと、戸毎に呼びさまし、告げ促し行くであつた。

車窓から首さし出して居た自分は、汽車がプラットフォームに入るや、幽かな電燈の陰に、黑くうごめける人影の中から、洋裝の二人を認めた、何れも學校の正服にて、草鞋脚袢に身をかため、肩と手には、雜囊、胴亂、寫眞器等をさげて居たが、ヤーッと云ふ聲と共に、戸を排して、自分の室に入つて來た、二人は同志會に其人ありと知られたる、河田默君と、柳澤秀雄君とである、河田君が此處から乘ろうとは、豫期して居ないでもなかつたが、柳澤君が同行とは、意外の感なき能はずであつた、聞けば同君は、八王子で下車して、相模川の沿岸に志さるゝとか。

降るべかりし空も、幸に明るく、中野、荻窪と過ぎ行けば、朝霞霧きて、黑く佇める樣なる杉の木立や、綠濃き雜木林にかゝり、しつとりと露に潤へる畑や草間には、蟲のすだく聲哀氣に聞えて居る。

汽車はいつしか多摩川の鐵橋を渡つて八王子に着く、柳澤君は我々と別れて獨り下車された、さう〳〵自分等も乘換えであつたのだと、急いで仕度して、鞄、胴亂、傘、莫蓙、カメラ、三脚、金剛杖、包等ありとあらゆる道具をかつぎ出して、中央線の客車に移る。

汽罐車に近き一室に入れば、幸ひすいて居たので、荷物を夫々始末して、腰を卸すと、何處から嗅ぎつけて

來たか蚤の來襲だ、膝の上にとまつて、何處に行かうかと熟考中の蚤殿の、頭上に大きな鐵の鋏が舞ひ下つて體をおさへたと思ふ間もなく、哀れや壓殺されたのや、或は胴切になつたのもあつた、それは鑷子と解剖刀の手術を受けたのであつたが、それに恐れての蚤軍脆くも敗北して、更に抵抗するものもなくなつた。

淺川を出ると小佛の隧道にかゝる、十幾つかの隧道をくゞつては出で、出でゝはくゞつて、上野原へ來ると桂川の開けた磧が直に目に入る、汽車は此より此の川に沿ふて走るので、沿岸の佳景は人のよく知る所、文士の筆、旅行家の口に上る處で、自分も嘗ては賞したこともあつたが、今春多摩川の上流に溯つての歸途、車窓より眺めた此の景に對しては、遺憾ながら多くの讃辭を呈することが出來なかつた、いや之を決して佳くないと云ふのではない、桂川の沿岸少くとも吉田迄、佳景とか奇勝とかゞ少くはない、しかし今春は不幸にして、多摩の上流で限りある賞讃の辭を使ひ盡してしまつたからであつたらう。

大月へ着く。四日前には、富士山を越へて、此處から乘車して、歸京したのであつたが、今や復た旅裝を整へて、此の驛を過るのである。きゝやう、なでしこ、こまつなぎ等に美しく飾られたる笹子峠を、闇々裡にすぎて初鹿野に出で、連續したる隧道に告別して、鹽山に着く、有名なる鹽山は停車場から程もない所に見えて居る、無論名ほどでもない小丘ではあるが、芝の愛宕山より少しは高からうかと思はれる、萩原山から雁坂嶺更に金峰の方に連なつたる六七千尺の高山を初めとして、西も南もおしや雲に閉ざされて望むことが出來ぬ、只冷風にそよぐ青田のみを見ながら甲府に着く。

河田君は此處で下車さるゝ、何處へ？と問へば、若し都合よければ、これより御嶽に行きて其處に宿う、明日金峰に攀づる心算、さなくば鰍澤に友を尋ねん考なりとの答、明日は自分は八ヶ嶽に登る筈故、兩方の山頂で何か合圖をしやうと言つて、袂を別つた、勿論我々は狼火や喇叭の用意がある譯ではなかつたのだ。

暫く停車して後甲府を發す、龍王を過ると、韮崎で、嘗て信州の八ヶ嶽に登つた翌月、甲斐駒を究めんとて甲州に遊んだ時には、甲府以遠は鐵道未だ竣功せずして、不便なガタ馬車にゆられながら、未成線路を横ぎり或は七里岩の上に、屢々ハッパの音を聞いたが、今や其の路を汽車に乘つて進んで行くのである。吹く風に雲

は動き出して、茅ヶ嶽、金ヶ嶽は眼前に見えて來たが、小雨も亦そぼ〳〵降り出した、勾配の急な道を汽車は煤煙を吐きながら走る響が、恰も喘ぎ〳〵坂を駈け上る樣に聞えて、日野春に近づくに及んで、鳳凰山が幽かに現れたが、又雲中のものとなつた。

案内兼人足の老爺に、輕からぬ行李と鞄とを負はせて、日野春驛を出掛けたのは、一時頃であつたか、雨は小降りとなり、ちぎれては飛ぶ雲間からは、時々日光が漏れる、道々老爺と話をしながら行く、彼は越後の者とかで、諸國の鑛山をあるき、此の日野春に來て留ること三十年、此の邊の地理には百目掛だと云ふて居る、我が兎耳の草鞋を穿てるを見て、山地に旅行する者と合點したらしい。

日野春から塚川へ出る、路傍の雜草は取り出でゝ擧げる程でもないが、先づざつと左の樣なもの、

○いぶきばうふう　○かはらなでしこ　○ぬまとらのを　○たちふうろ　○かはらけつめい　○ひきよもぎ　○うつぼぐさ　○をとこよもぎ
○まゝこな　○あおなへ　○ねず　○いぬよもぎ　○たかとうだい　○つゞらふぢ　○こまつなぎ　○ねぢばな　○やはずはぎ　○かはらさいこ　○いぬはぎ　○われもかう　○をみなへし　○かはらまつば　○めどはぎ　○まつむしさう　○はぎ　○ひめしをん　○かせんさう

道は或は平野を行き、或はくり、くぬぎ、なら、やまうるし、からまつ、あかまつ等より成る雜木林を穿つて行く、時に稻田があり、又は畑圃がある。二時間足らずで、大八田に來た、みやこぐさ、かはらさいこ、かうぞりなの黃に、いぬごま、なんてんはぎは紅紫に、おかとらのをは白く、其の間にひるがほが淡紅の花を綴つて居る。

田の間を縫ひ、畑の小徑をたどり、川を渡り、流を越えて、やがて大泉村の字谷戸に來た、目ざす藤森と云ふ姓の家が、一軒や二軒でないので、途中屢〻尋ねたが同姓の一軒に、横濱の學生で、八ヶ岳を越えて來た人が泊つて居ると聞いたので、てつきり片平重次君であらうと察して、其家に赴くことゝ定め、やうやう探しあてゝ着いたのが四時頃。荷負ひの老爺は頗る奇人で、汗をふき〳〵言ひ草が面白い、「荷物は擔ぎ出すのは樂しみであるが、さて到着しておろすとなると洵にいやなものである、殊に今日の樣に距離の短かい時は、尙更あつけなくつて……。」

案の如く片平君が泊つて居るのであつたが、三時頃から外出して、まだ歸らぬといふので、座敷に上つて休息すること半時許り、農業が主で、旅宿は兼業の兼業の兼業である爲か、四十分待つても茶一つ呉れぬのだ、催促するも乙でないと、下駄ばきで附近に散歩すべく出掛けた。途中から霽れた天氣は、やゝ風を催し雲は東へ飛び行き、暑い〳〵日は輝いて、雨にぬれた田、畑、山、林を乾かして居る、西南の方を望むと鳳凰山、駒ヶ嶽は其の大部分を顯はし、日は其の西陰にまはつて、山の東面は暗黑色を呈して居る、海拔九千九百尺の駒ヶ嶽の北は急に低くなつて鞍掛山と云ふ四千九百尺に足らぬ山となり、尙だら〳〵と北に延びて、八ヶ嶽の裾野と衝突して、三千五百餘尺の富士見峠をなして居る、其の鞍掛山邊にあたつて、此の連山の骨をなせる花崗岩の、懸崖くづれて急坂をなし、日がこれに照りつけて、銀白色に輝き、百丈の大瀑布が中天に懸れるかの樣に見ゆる。

日はいよ〳〵低く落ちて、山の影長く東にのび、自分も將に其の影に包まれんとするに心づいて、森を出でて宿にかへつた、程なく片平君も戻つて來て、山の話に夜を更した、これぞまことの四方山の話であらう。

片平君は七月の末に出發して、高野君と共に淺間山麓の追分に留まり、其の附近及び淺間山に採集を試み、更に御代田より南下して、本澤より八ヶ嶽に登り、連峰を踏破して、峰傳ひに甲州に下る豫定であつたのが、不幸高野君が病氣となり、急に追分から歸濱したので、單身豫定の如く本澤に來り、雨を犯して硫黃岳に登つた處が、暴風雨の爲めに道を失ひ海尻に下り、山麓を匝つて數日前大泉に來たとのこと、然し未だ好天氣がないので、甲州方面からの登山もせず、日和を待つて居るのであつた。自分は嘗て三十六年の七月に、河田君と共に、本澤より八ヶ岳に登り（本誌前號信州八ヶ嶽參照）最高峰赤嶽迄行つて其の間の植物を採集して來て、其の高山帶植物に就いては、粗雜ながら日本博物學同志會の雜誌『博物之友』第二十四號以來に載せて居たので、一度甲州方面からも登山を試みて、其の植物景を見たいと思ひ、丁度白馬に出かける途すがら、特に其の爲めに一兩日を費やしたのである。

日取りが定まつて居るので、日和を待つて居ることも出來ず、明日は天氣の如何にかゝはらず、是非に登山

をせねばならぬ、若し天候非常に險惡で、到底登攀が出來ぬとならば、止むことを得ないから中止しても、其の翌日は諏訪に向はねばならぬのであつた。夜更けて空を窺へば、雲斷續して、月影が漏れて居る。

九日午前三時起床して、蠟燭を點じて井戸端に顏を洗ひに行つた、昨日から吹きつゞけて居る西風は未だやまず、ともすると火が消えさうになる、顏を洗つた水を井戸端へあけると、不思議やザッと音して又井戸の中に流れ込む。

身仕度して出たのは五時頃であつたが、空は一面に曇つて居る、七月の三十日が晴天、それ以來隔日に晴天であつたので、九日も晴天と豫想して出發したのに、八日の雨が足らぬ故にや、今日は曇天である、然し風も西だし後には霽れるだらうと、危なげな希望を抱いて、西井出(ニシヰデ)に向つて出發した、霧は深く罩めて、遠くは見わけ難い、山は雲にかくれて居る、雲中の登山は暑くなくつてよい等と負惜みを言ひながら、やがて西井出に着く。此處に案内の家を訪ねて、まもなく出發である。小流、松林、雜木林、草原何れも平々凡々な爪先上りの道で、一里許行くと鬼窪口(オニクボグチ)(當字)に達する、此の邊にいぶきじやかうさうが頗る多い、片平君に聞くと、海尻から大泉に來る道にも隨所に見かけたとやら、思ふに此の草は八ヶ岳の裾を取り圍んで生じて居るのであらう兎に角一休みと腰を下して、案内は煙管を出す、我々は鉛筆を握る。

鬼窪口から勾配がやゝ急になつて、小松などの生じて居る坂を登つて行くと、やがて材木尾根(ザイモクヲネ)(當字)にかかる、右は長澤(ナガサワ)の邊一帶の地を望むことが出來るが、生憎雲が低く垂れて居るので、瞭かに認め難い、山の方では梢に叫ぶ風の聲が獅子が吼ゆる樣に聞える、峰へ出たら吹き飛ばされはすまいかと思はるゝのである。きゝやう、なでしこ、かうりんくわ、うつぼぐさ、いたどり、かうぞりな等美しく咲いて居る。

草原は漸く熔岩のごろ〳〵して居る路となつた、しもつけさうやつりがねにんじん、なでしこ、ききやうは相變らず所々に咲いて居る、間もなく道の左に入ると、此から頂上までの間に唯一の泉のイゲー水と云ふのがある、じく〳〵と泥の間から流れ出して居るので、靜にコップですくつて飲む程である、最早八時に近いので第一中食をやる、烈風は霧を飛ばして、手は凍り辛うじて、箸子を持つ程である、長く休めば尙ほ寒氣を感ず

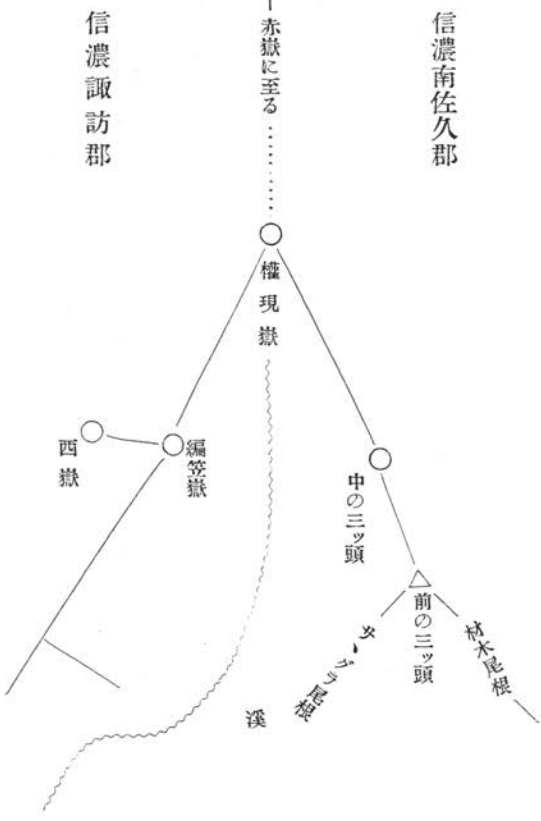
る許りであるから、匆々切りあげて出立した。路は又も砂礫の上を行くので、風は漸く劇しくなつて、霧は益益深く、四方の眺望は愚か、採集等に手間取つて、四五間離れると、同行者を見失ふ程で、從て山の大體、地理の模樣を察することが出來なかつたのは遺憾であつた。

イゲー水から二十丁許り上ると、石の觀音がある、灌木が處々に立つて、やまをだまき、まつむしさう、うすゆきさう等が咲き揃つて居る。ききやうは最早趾をたつて、ひめしやじんが獨り美しい、常のかはらまつばに交はつて、きばなのかはらまつば一株があつたが、極めて少いので、其の他に見掛けなかつた。霧が濃密なので、殆んど觀音に衝突せんとして、初めて氣がついた位である、石ではあるが此の烈風濃霧にふきさらされて、寒さうな顏もせずに立つて居る、此處を土俗出會(デアヒ)の觀音(クワンオン)と呼ぶので、平澤(ヒラサハ)及び長澤からの登山道が合する處で、「出會」と云ふ名もそれによつて起つたことゝ思はれる。

出會の觀音から又二十丁許も登ると、つがの森林に入るので、樹下には笹が深く、傾斜は中々急峻である、霧は遂に雨となつて來たが、風が强いので、宛然雲が飛ぶ樣に降つて來る。上るに從つて氣候は益ゝ寒くなつて、吐く息は白く、それが又雲となり、雨となつて降つて來るのではないかと怪まるゝ。嘗て信州から八ヶ嶽に登つた時も初めの日は風雨に苦しめられた、日光の女體では屢ゝ經驗がある、つい此の前々月にも登山をやつた、七月には白根の烈風と大霧に遭つて、可なり修養してある筈であるが、今日は中々寒い、白狀すれば實は自分がわるいので、荷物を減ずる爲めと、暴風雨を豫期しなかつた爲めとで、冬服は白馬行の荷に入れて信州に送つてしまつて、此の日は前日着て來た夏服のまゝ登山したのである、然しもとよりフランネルのシャツを着け、上衣とチョッキは毛の入つて居るものではあるが、いくら背折つて急坂を登つても、寒氣は用捨なく襲つて來る、彌ゝ最後の手段として、案内に持たして來たゴム引きの外套を着ることに決し、同じく――而も小倉の――夏服で寒がつて居る片平君も、外套を着ることにした、自分はも一ッ用心に外套と共に携帶した、冬服のチョッキをも着やうと、雨中に上衣をぬぐやら大さわぎである、やがて外套も着た、處でこれから上は岩石磊々たるリッヂを行くことのこと故、尙更風雨の强いことを慮り、豫てかゝる時の爲にと造つて置いた、兜形

のウォータープルーフキャップの試用は此の時と、前年戸隱で使用しそこねた埋合せに、これをも被ることにした、さて仕度も全く整つたので更に勇を鼓して攀ぢ登ると、間もなく森林を出はなれて、前の三ッ頭に達した、時に十時三十五分。

前の三ッ頭と呼ばるゝ所には、一臺の三角測量櫓が立つて居る、此から權現嶽までは、山の脊を傳つて行くので途中に中の三頭と云ふ一角があつて、奥の三ッ頭が即ち權現嶽である、此の名だけは明に存じて居るが、何處が中の三ッ頭やら明瞭にわからぬ、土地でも人によつて場所が異るとか。今大體の位置を示すと次の樣な工合である。



前の三ッ頭から權現嶽迄の間は、大部記憶から逸して、明瞭に述ぶることが出來ぬ、今おぼろ氣なる記憶を強て喚起して、片平君とも相談した結果が、大體次の如くであつたらうかと思はるゝに過ぎない、即ち――前の三ッ頭を出て、少し岩石をふんで上ると、又つがやとうひの森林に入る、之を中の三ッ頭と覺にて居る、やはずはんのき、しらかんば、たけかんば等も混生して居る、忽にして之を上りつめると、又も岩石のごろ〳〵したる山の脊に出でる、脊をつたつて、巨石の間を上下すること少時で、はひまつの間に出る、密生せるはひまつの間を泳ぎながら、灌木などの交はつて居る間を通りぬけ、又岩の露出した山角を上るので、勿論其の間一上一下であるが、最後に岩角の端に出て急に下り、又だら〳〵上りでしらかんばだのみやまはんのき等の灌木林に入り、暫く上つて、左に折れて巨岩についで、右にさはり、又急な山脊を上ると、まもなく權現嶽の頂上であつたと思ふ。

前の三ッ頭から權現嶽の絶頂まで、我々は二時間を費した、其の間採集の外は少しも足をやすめないのであつたが、暴風が激烈に左側から吹きつけるので、莫蓙は旗の如くあほり、雨にぬれたる岩角に、ともすると足を奪はれ、胴亂ははひまつの枝に引きかゝつて、引きもどさるゝことが一度に止まらぬ、其の困難は名狀すべからずと言つて置くの外、適當なる形容詞を知らないのである。

權現嶽の頂上には、小さな祠が岩の陰に安置されて、鳥居や、劍の樣なものがあつたと覺にて居る。風は今や盡く雲を東方の谷に吹きつけて、左は溪をへだてゝ、編笠嶽の屹立して居るのが顯れた、西方は霽れて、日光が輝きはじめた、遙か下の方に見ゆるのは小淵澤(コブチザハ)であらう、首を回して東の方をのぞむと、黑雲が一面にかたまつて、谷を埋め山を包んで、金峰山は愚か、近い赤嶽の方面さへ見にない、岩の陰にひそんで、第二回の中食をやつたが、手がこゞえて自由に箸を使用することすら出來ぬ、風は益〻荒れ狂ひ、岩角に激して怒號する音の恐ろしきこと。

權現嶽から赤嶽までの間は、特に目ざした區域であつて、最早程もないのであるが、假令雲間から日光が漏れても、天候がどう變ずるか知れず、又時間も餘り餘裕がないので、歸りが夜となつては不都合であるから、

殘念ながら、次回迄延期として、權現嶽の絶頂で此の行を中止した。後で聞けば、河田君も、同日金峰に登られたが、風雨に妨げられて、絶頂まで行かれなかつたとやら、(博物之友第五年第二十八號所載甲州金峰山記事參照)。我々は遂に約束の合圖をすることが出來なかつた、否々大にやつたのであつた——それは風と、霧と、雨とで。

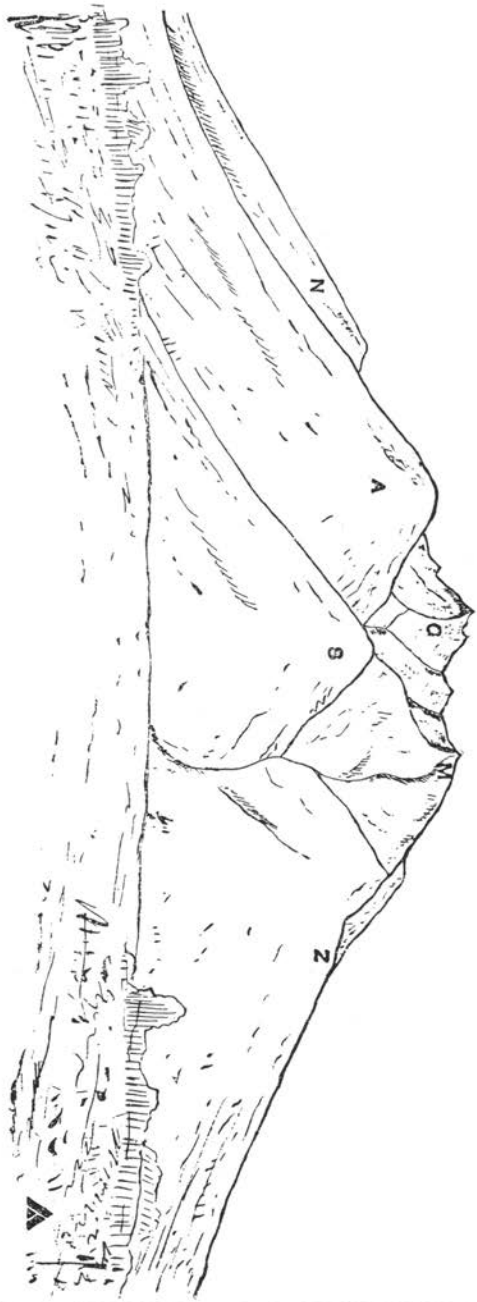
午後一時、憾をのんで權現嶽の絶頂を辭し、下山の途についた、途中で雲の切れ間から赤岳を望んだのも、須臾の間であつた。雨はやんだが、風は依然として烈しい、吹き上げる風に向つて下るので、折々兩足が地をはなれて、軀が宙に飛び上がる、風に倚りかゝつて歩行して居ると、風が息をつく拍子に前にのめる、胴亂の眞田紐はぶん〳〵うなつて、右方に吊つてある胴亂は左の方に吹き飛んでしまふ、草一つとつて、中に入れやうとすると大變、蓋をあけるが最後、中のものは見ぬまに吹き飛ばされてしまふ。

或は岩に縋り、或は匍匐する樣にして、一時間半許りで前の三ッ頭の三角檜の下にたどりついた、此から往路の材木尾根を下るも妙でないと、サ、グラ尾根を降る。木の低き下枝をくぐり、岩につかまつて匍ひおりる處もある風をさける爲めにかゞんで、時には土をなめる程だ、幽かな徑がある樣な、ない樣な、いや、徑はないのだ、道らしい樣子をした處が折々あるのみである、草をふみ岩を越えて、只々案内の後をついて行くのみ、其の他は風に倒されぬ用心に、氣のおちつく暇もない。左には、小谿を距てゝ、材木尾根が見ゆる。

樹木の密生せる所もいつしか通りぬけて、草原に出た、ききやう、すゝき、をみなへし、なでしこは再び裾野の景を呈する、やがて勾配の緩かな原へ出ると、馬道が幾條となくついて居て、草刈馬の三々五々歸路につくのに出會つた。松林を通る、人家が見ゆる、最早谷戸へ來たのだ。天氣は已に恢復して、日が照つて居る、只八ヶ嶽の山頂のみ暗雲に包まれて。かはらさいこの黄花をふみつゝ、宿へ歸着したのは、五時五十分。

十日。昨日に引きかへて、天には一點の雲もない、昧爽より起きて、荷ごしらへに忙しかつた我々は、午前八時谷戸を出發した、片平君は、凱歌をあげて歸濱する爲め、一名の人夫に荷を負はしめて日野春に向ふ、自分は諏訪で河田君と落合ふ爲め、小淵澤に行くので、此に二人は袂を別つた。さらば、無事に！

○甲州八ヶ嶽　武田



む望を嶽ヶ八に北りよ村泉小

N　西
A　編
G　横
M　南の三ツ頭
S　尾ヶ根
Z　村木尾根

今日は晴天で實に愉快である、四方の山は皆姿を顯はして居る、――八ヶ嶽も、駒ヶ嶽も、鳳凰山も、金峰山も、――屢〻人夫の影を見失ふのも意とせずして、石に踞して山の形をスケッチする。烈しき西風に、展べ

た地圖は屢々吹き飛ばされんとしつ。

路は概ね田の間を行くので、路傍には目を留むべき草もない、只泥濘をよけて行けば充分なのである、小泉村を過ぎて、やがて小淵澤に入る、此の邊松林が少くない、三四尺もあるきせわた、花盛なるほつゝじ、共に胴亂中のものとなつた。

九時五十五分小淵澤驛に着く、書面幾通かを認めて、尙ほ多少の暇があつたので、停車場の眞正面に峙立せる八ヶ嶽を復た略寫した。かれこれする間に汽車が來た、乘る、出る、走る、留る、最早富士見驛！

是より先きは白馬の記事に讓る。

白馬籠城記

河田默
武田久吉

中央東線の汽車が、甲斐の韮崎を發してから、地藏ケ嶽、鳳凰山、駒ケ嶽等を左に見て、八ケ嶽の裾野を廻り廻つて、上りつめた所が富士見の停車場で、丁度八ヶ嶽に於ける富士見驛は、富士に於ける御殿場の如きものである、八ヶ嶽は其の面前に聳え、釜無の流はこゝより東南に出で、宮川に西北に流れて、甲斐盆地と、諏訪の平とが、自から境界をなして居る。

昨三十八年の八月十日、八ヶ嶽の登山（別項甲州八ヶ嶽參照）を濟ました武田生は、十一時五十分と云ふに富士見驛に着いた、行李やら鞄やらの手荷物があつたので、いや〳〵ながらも馬車に乘ることに決し、茶屋に休むこと二十五分許り、大きからぬガタ馬車に詰め込まれて、轍の響馬蹄の音と共に出發した、富士見から諏

訪迄は凡そ三百數十尺下るので、道は始終下り坂である。今日は幸晴天で、日は照り輝いて居るが、馬車が疾走するにつれて、風が起り、強い西風と共に、帽子も飛ぶかと思はるゝ程吹くのである。金澤(カナザハ)を過ぎると、間もなく茅野(チノ)で、道は宮川のヴレイに沿ふて下つて行く、此の邊から人家がつゞいて、中々繁華である、二時間半を費して、上諏訪(カミスワ)に着き、旅舍牡丹屋に投じた。富士見から上諏訪迄は、四里餘りで、路は樂であるから、荷物のない人は徒歩にかぎる、乘合馬車は動搖が激烈で、しつかり馬車につかまつて居ないと、體軀を投げ出されさうになる、曲り角では、若しや轉覆しはせぬかと、はたで見てもひや〳〵する位、乘つて居てはびく〳〵ものので、安き心地もないのである、我々に遲るゝこと十二三日頃、或人が此の馬車へ乘つて一寸居眠りをしたら、其の間に他人から預つて首へ懸けて居た、大事の〳〵バロメターを、どこかへ打つけてメチャ〳〵にしたと云ふ話だから、貴重な物品を持つた人は、徒歩で行くとも、決してかゝる馬車へは乘るべからずである、尤も現今では、鐵道が岡谷(クカヤ)まで延長したから、此處では其の心配は無用であらう。

金峯山登り(博物之友第五年第二十八號所載甲州金峰山參照)をして、此の朝御嶽(ミタケ)を出立した河田生は、一汽車遲れて富士見に着いたが、荷物の發送や何かで二時間餘を費し、此處を出發したのは午後の四時であつた、驛の前面に峙てる八ヶ嶽を眺めなどして、ふと側を見ると杙があつて、「富士見停車場基面海拔三千五百三十五尺」と記してある、停車場を離れて少し行くと、道路の側の小高い所に、「海拔三千五百三十五尺餘地」と記した木標があつた、三十五尺餘地とは面白いことを書いたものではないか、成程停車場の所よりも此所の方が少し高いからであらう。道は諏訪の方へだら〳〵下りで、幅も可なりの大道ではあるが、車の輪だちが一尺餘も堀れ込んで、凹凸が頗る甚だしい、胴亂と寫眞器を擔いで、膝栗毛に鞭うち、諏訪に着いたのが七時四十分、牡丹屋に行つて武田生はと見ると、已に四時間も前に到着して、濕つた紙を干すやら採品を壓すに一時は混雜を極めたが、最早それも終つて今しがた食事を濟ました處、河田生は如何にと首さしのべて待つて居た處であつた。此處で始めて白馬採集隊が成立したので、地圖を展べ紀行を擴げなどして、作戰計畫に夜を更した。

「おい、東京から手紙が來はしないかね」とは、翌十一日の朝、牡丹屋の番頭を呼んで第一に尋ねた言葉であつた、それは武田生の荷物を鐵道便で明科(アカシナ)へ送つた、其の引換證が來る筈であつたからである、然しまだ參りませんと云ふ答であつた、鹽尻驛迄荷物運搬の爲めに人夫を依頼したら、便利屋と云ふものをよこして呉れた其の便利屋も來たが、手紙は依然として來ない、是れがなければ、明科へ行つて荷物を受取ることが出來ぬと思つて大に心配したが、來ないものは仕方がない、時はたつばかりであるから止むことを得ず、午前八時に上諏訪を出發した、途に郵便局へ立寄つて尋ねて見たが、同じく來て居ないと云ふ答。

湖水に沿ふて人家が續いて居る、諏訪湖と云へば、山中の幽邃な湖水と、見ぬ人は往々想像を抱くが、湖の周圍は殆んど人家が連なり、諏訪平は山で四方は圍まれては居るが、まことに殷盛なる土地である。鐵道は湖畔を匝つて、今や天龍川(テンリウガハ)の落口の岡谷まで通じて居るが、昨夏當時は線路の布設を終つた處で、途中の土地が陷落した爲め、復た修理すると云ふさはぎであつた。

一里許りで下諏訪に到り、秋の宮に參詣して歸つて來ると、分れ道で待つて居た便利屋先生、荷物が重過ぎて到底歩けぬから、寫眞器だけもつて行つて呉れと云ふ、小さな行李に輕い鞄一個其の上に寫眞器を持つては重くて行けぬとは、頗る不便利屋であると思つたが、此の日は採集の目的はないのだから、大まけにまけて、請願の段聞き届け遣はすと云ふことにした。

豫て鹽尻峠には近道があると聞いて居たから、峠へかゝる少し手前で、往來の人に聞いて見ると、それはもう來過ぎてしまつたので、もツと後から曲るのだと敎へて呉れた、それではと少し戻ると、我々より少し遲れて來た例の便利屋が「何、近道はもつと先きからはいるのだ」と云ふ、まるで虚つき横町へでも來た樣で、どちらが本當であるかと云ふことは、よーツく聞いても中々分らぬ、便利屋の言もあまりあてにもならないが、全然虚でもないらしいし、戻るよりは進む方が氣に入つたので、便利屋の說に從つた、少し行つて本道が大迂りに迂つて、遙か左の方へ行つて居る所から右に分れ、森へ入つて二三丁行くと峠の上に出た、此處には一軒の茶店があつて、氷水や餡飩などを販いて居る、峠へ着いたのが十一時で、彼の茶店に休憩した、此處の眺は又格別で、脚下には諏訪の盆地が横はつて、湖は其の中心を占め、此の盆地を取り圍む、山岳中では、東南に聳立せる八ヶ嶽が最も顯著で、其の右方には近い連山の後ろに遠く甲の富士山が見ゆる、尙其の右には甲斐の駒ヶ嶽が屹立し、遙か遠くに白峰(シラネ)が幽かに見ゆる、ずつと近く木曾の御嶽(オンタケ)の頂上が中天に聳えて居る、此處で八ヶ嶽を撮影したが、不結果であつた。

三十分許休憩して、出立した、一二丁下りかけると、西に當つてえらい高山が峙つて居る、恐らくは乘鞍であらうと思はるゝが、殘雪數條溪を埋めたる樣子が、餘り壯大であつたので、レンズに收めやうとして居ると

下からやつて來た一人の田舍の爺さんが、我々に向つてだしぬけに、「槍ケ岳が大變に折れたねー」と云ふ、驚いて「何、槍が岳が折れた？一體あの山は何ですね」と聞くと、「あれは越中の立山だ、立山の中の槍ケ岳が大變に折れたねー」と云ふ、餘り可笑しいのでそこ〳〵逃出した。

間道やら本道やらを歩いて、一時十五分に鹽尻驛に着いた、停車場には人が大勢居る、茶店に休んだ處が、汽車は急に出ませんと云ふ、はて變なと停車場に行て驛員に尋ねると、汽車は何時に出るか分りませんと云ふしかしそらと云ふ時の用心に、切符を求めて、行李を托すると、間もなく改札口が開かれる、急いで出て列車に乘り込むと、時間表の通り一時三十分に發車した。

睡い目を強いて引張りあけて、明科驛に下車したのが二時四十分。先づ停車場前の明科館に本陣を据えて、それから荷物受取の談判に赴いた、若し此時法相寺の入道的の肩書を記した端書大の名刺を出したなら、一も二もなく荷を渡して呉れたのだらうが、我々如き無官の大夫に對しては中々さうは行かぬ、驛長心得の某が出て來て「どうも引換券がなければ、只御渡し申すことは出來ません、誰か此の近所に證人に立つて貰ふ樣な御知人はありませんか」と云ふ譯だ、明科などゝ云ふ所は、出發前に荷物を出した時に、信濃町停車場の驛員すら知らなかつた位の所だもの、どうして我々の知已がかゝる所にある筈はない、そこで種々事狀を陳述した末、河田生が證人に立つて、二人連名で假受取證を出すことゝなつた、處で二人共印行を携帶して居らぬので、やつと拇印で勘辨して、貰ふことゝした、おまけに先方でも面倒だものだから、河田生の荷物の二日分の保管料などは入らぬと云つて免除してくれた。

さて荷物を並べて見ると自分ながら驚いた程多量なので、これからどうして運搬しやうかと思つた、何しろ二人で二百斤以上であるから、乘合馬車の前などへは到底乘せて行かれない、晝食をしながら協議した末、運送馬車を一輛雇つて、池田町まで送らせることにして、我等は午後四時五十分と云ふに、徒歩明科を出發した。

三四丁行くと犀川の岸へ出る、蜿蜒二百六十間の長橋は虹の如くかゝつて居る、然るに其の先端は彼岸に達

せずして斷絶して居る、行かれるのであらうかどうかと大に遲疑したが、人の渡り行くのを認めて行つて見ると、川の左岸二三十間許曩日の洪水に破られたので、餘り太からぬ亞鉛の針金で板を釣つて、應急修理をして、無理に人間だけの通行をして居る、車は空車の外通行が出來ぬので、荷車は荷を途中へ殘して行て一つ〳〵人の肩で運んで行くのである、從て乘合馬車は川向の下押野からでなければ出ぬのであつた。

下押野から程なく七貴に來る、此の邊であつたか岐路に木標を立てゝ、「左穗高街道」と穗高へ通ずる道を指示してある、其の穗高街道と云ふのが何となく氣に入つた。行手には中央山系の尤物が頭をならべ、夕陽は已に山陰に隱れて、暮雲が山から谷へと徐に流れて行く。七時に前つこと五分、池田町に着いて、吉野屋に投じた。

夕食後主人を呼んで荷物運搬のことを相談した、種々奔走の末、梁塲と云ふ所まで兎に角運送馬車を賴んで來て呉れて、そこで北城の方から來る馬車に繼ぎかへたらよからうとのことで、其の說に從ふことにした。

十二日、午前六時四十五分池田町を出發した、主人は親切に種々のことを注意して呉れる、大町から三里餘の、中綱湖と青木湖の間に梁塲と云ふ所があつて、其處は坂の上りつめた所で、北城の方へは下り口である、其所に西山要藏と云ふ家があつて、湖水に臨んで中々景のよい所であるから、中食はそこがよいので、休んで居る間には運送も來るから、其處で繼ぎかへをして行けば遲くならぬ間に北城に着かれますと云ふ、我々は其の厚意を謝して出かけた。池田町の直西には、信濃富士の稱ある有明山が目の前に見ゆる、二三十丁も行くと、左には高瀨川の河床が見え初めた、水は奔騰して白沫を飛ばし、すさまじい勢で流れて行く、やがて道が川に沿ふ所に來ると、所々出水の爲に削られて道幅が二間に足りない所がある、農具川橋を渡ると、松川通りからの路が合する、二里餘の道を機械的に歩んで、九時に大町に入つた。

大町は北安曇郡の郡役所のある所で、市街櫛比し、洵に其の名に違はぬ。此處で砂糖、罐詰物等、山中の用品を整へた。大町を後にして一里半許行くと、木崎湖畔へ出る、之に沿ふて進むこと半里許り、中綱湖の下流は細溪をなして木崎湖に注いで居る。左には、針の木峠の連山か、一萬尺の屛風をなして、天に聳えて居る、

景は漸く佳くなつて、足は屢〻石に躓く。山の峽を通ると間もなく中綱の小湖が現れた、此の邊整理耕地の水田があつて、農夫は孜々として之に從事して居る。十一時二十五分梁場の小部落へ來た、西山要藏と云ふ標札をさがして行くと、一軒同姓名の家を見出した、池田で聞いたことによつて、梁場は多少繁華な所で、西山と云ふ家は小綺麗な所であらうと想像して來たのに、今同姓名の家を見るに甚だ心元ないので、もつと先きだらうと行けばもうこれで部落は終りである、それでは矢張りあの家かと、何だか狐にでもつまゝれた樣な氣がしながらも、つと入つて腰を卸す、家内には主婦と十七八の娘とが、爐邊へ坐して褶をくべて居る處であつた、早速中食の準備をなすべく命じて、休憩する。青木湖の水は、此の家の後を、木立の間より流れ來て、さゞら波立てゝ流れて行く、然し池田で聞いた如く、坐して中綱青木の兩湖をながむることも出來ぬのには我々兩人共にケヾンな顏つき。間もなく中食の膳を並べられたので、箸を採つたが、うまからぬ鱒の丸煮に頗る降參して瓜にかける爲に醬油を求むると、酢の如きものを呉れる、そこ〳〵に箸を置いて、逸早く菓子屋へ駈つけた河田生が、折角買つて來た最中を食べると、おや〳〵餡がないと云ふ始末、早速解剖して見ると、餡がないのではない、確にあるのだ、しかし入れてあると云ふよりも寧ろ敷いてあるので、尤も郵便切手のゴム糊よりは稍厚いが。

一時半頃になると、雨が降つて來たが、荷物は一向姿も見えぬ、べん〳〵と待つて居る譯にも行かないから繼ぎかへのことを西山方に依賴して出發したのは、丁度一時四十分。

車道は青木湖の東岸を行くのだが、徒歩の人は皆西岸の間道を往來する。木崎、中綱、青木の三湖は、南から北へと瓢形に連なつて居る、其の中最も景の佳いのが此の青木湖で、湖畔を過ぐると間もなく下り坂になる、此處は小區域ではあるが、分水脊をなして居るので、以南の水は太平洋へ、以北の水は日本海に注ぐのである、澤渡（サワタリ）、飯森（イヒモリ）を過ぎて行けば、一旦止みたる雨が又ばら〳〵と降り掛る、辻堂に雨やみして、後飯田を過ぎて行く、此の邊すべて神城（カミジヤウ）村と號する。平坦なる道路は田圃の間に通じ、さはぎきやうの花も綻び初めたる樣子。糸魚川（ガハ）街道を南へ〳〵と志し、やがて北城（ホクジヤウ）村字四ッ谷（ヨツヤ）に着き、余屋松澤貞逸方に投じたのは、午後の四時二十五分

であつた。

我が帝國の脊梁をなして居る信飛境上の大山脈は、所々に槍ヶ嶽、御嶽、乘鞍ヶ嶽、常念ヶ嶽等の、一萬尺以上の高山大嶽が天を摩して聳え、所謂日本アルプスをなし、重疊して南より北に連り、遂に越中越後の界に至つて、夫の有名なる親不知子不知の天險をなして、其の脚を將に北海に投ぜんとする前に、一度興つて海を拔くこと一萬餘尺、信濃越中に跨りて、稍其の北で越後との境界をなせる、一座の高山が毅然として天空に聳立し、髮を朔北の烈風に櫛けづらして居る、雪が稍〻消えかゝる時、馬の形の岩が現はるゝとかで、山麓の民は之を白馬(シロウマ)と呼んで居る、此の邊一帶の連山を、蓮華(レンゲ)と總稱し、又は大蓮華(オホレンゲ)、小蓮華(コレンゲ)等と分ち呼び、或は杓子(シャクシ)、鎗(ヤリ)の稱を用ゐるので、山名が極めて曖昧である、時代により、土地により又人によつて其の命名も異るので、聞けば聞く程尙更分らぬ、地圖も皆杜撰に出來て居るので、其の位置さへも判然せぬが此處に云ふ白馬は、山麓北城村の土民が今呼ぶ處に從つてあるので、此頃流行の白馬である、然し流行ると言つても、我々同好者以外には、此の山の名を知つた都人士は、皆無と言ふてもよからうか。嘗て山崎理學士が登山されて、氷河の遺跡

も望を山連馬白りよ藏地五曜月

を發見されて以來、白馬ヶ岳の名は漸く知らるゝ樣になり、其の後笠原辰治氏等の催しで登山會を催したり、矢部理學士や城法學士などが行かれてから、追々山の樣子も分る樣になると同時に、高山植物採集地として本邦第一流であることも知られて來た、しかし大抵は山中に一二泊位で、充分探究した人は未だないのであるから大いに植物の探究をやる望を懷いて、白馬ヶ嶽に登山しやうと、山麓の一小村北城村に來たのである。

元來、此の山に登山するには、北城村からするのが最便利で、東京から北城に至るには二ッの順路がある、一は明科から糸魚川街道を北上するので、一は長野から、山越しをするのである、明科まで來るには、信越線の篠井(シノイ)で篠井線に移り、南下して至るのと、我々がとつた如く、中央東線で諏訪に出で、鹽尻峠をこえて鹽尻より明科迄北上するのと、二樣あるが、本年岡谷、鹽尻間が開通する曉には、中央東線によるのが便且つ順である、長野からも亦二道あつて、一は長野から犀川に沿つて、安茂里(アモリ)、笹平(サヽダヒラ)を經て四里弱で、中條(ナカデウ)に至るので、東京より一日に此處まで至ることが出來る、翌日は高府(タカフ)、小根山(ヨネヤマ)、千見(センミ)、美麻(ミアサ)、青具(アヲク)を經て、小き峠を越し、深澤、鹽島を過りて北城に出るので、其の間八里許と云ふ、一は長野より鬼無里(キナサ)を經、柳澤峠(ヤナギサハタウゲ)を越えて北城まで十里許、途中鬼無里迄は人車を通ずるのである。

會へ着いて草鞋をぬぎ、足を洒ぎながら側を見ると、植物採集の胴亂が一つ置いてある、はて誰が來て居るのかしら、何しろ殊勝な人だなんと思ひながら、奥の一間へ通ると、椽側で植物の根を洗つて壓搾して居る人がある、さては今の胴亂の主は此人だなと行つて見ると、農科大學の池野先生であつた、先生は前日登山されて、山頂に一泊し、今歸られた處だとのこと、種々御話の中に、先生の伴はれた人足が、道を誤つたと思つて、越中へ下りたと騷いだことやら、又白馬尻迄は田圃の樣なもので、極く平々凡々だと云ふことなどを承はつた。同夜北城村字細野(ホソノ)の丸山常吉と云ふのが、飛脚を出して呼びにやつたので、尋ねて來たから、人夫等のこと萬事依賴した。

十三日、今日はいよ〳〵登山するのであると、午前三時頃から起きて準備したが、昨日の雷鳴に多少は上るのであらうと思つた雨も未だ收まらず、二股(フタマタ)の橋は流出すると云ふ次第で、到底登山が出來ないから、斷念し

て登山を中止し、一日余の奥座敷に籠城した。蠅の居ることは非常なもので、室内には百匹餘りブン〳〵言つて飛びまはつて居る、そのうるさゝと、きたなさに堪へられないので、豫て高山昆蟲採集の目的を以て、特に製作せしめて携へ來た、四ッ折の網を張つて、蠅狩を初めた、何でも一掬ひに三四十匹位はいるのである、處がそれを殺す手段に困じて、鑷子を以て、網の目から一ッ〳〵首をもぎつて退治した。永い日もごうやら終り、夜となれば早くから寢る算段、前夜は蚊帳に穴があつて、中で蠅と蚊とが鬼ナンコ（鬼事の方言）をやるので、碌々眠られなかつたから、今夜は特に注意して、新しい蚊帳を持つて來させた處が、これも大分綻びが切れて居る、早速其處を糸でくゝつて、ごうやら寢に就いたのであつた。此の日豆を煮ることを命じた所が、終日かかつて煮えないので、翌日午後やつと持つて來た、而も非常にからいので、砂糖で鍍金をして食つたのも、滑稽の一であつた。

今日こそと思つた十四日も、早朝から雨なので、又も滯在に決した、九時頃から雨稍收まり、雲が大に動き出し、青空が見え初めた。晝食の菜は二日共簡單で皿の中に汁に薄い切れの玉子燒の樣なものが浮いて居るのを持つて來るので、此の玉子燒は何が交ぜてあるのかと聞いて見ると、我々が玉子燒と思つたのが惡いので、燒麩の中へ玉子を少し交へたのだとの答、兩人顔見合して口がふさがらない。食後松川橋を渡つて、森の方面に散策した、むかしよもぎ、きせわた、ひめむかしよもぎ、ぼたんづる、くさぼたん、かはらまつば等がある、松川の河床の巨石の間に、山から流れて來たのであらうかおほいたどりの一株が生じて居た、又所々きばなのかはらまつばなども見受けた。歸宅後退屈なので宿帳を繰りひろげて見ると、前年（三十七年）來た人の中に、大學教員の寺崎留吉と云ふ人の名があつた、後で聞くと、此の名は八ヶ嶽の一登山口なる本澤の溫泉場の宿帳にも記してあつて、何でも三十八年の八月中旬に其處に來た人だとのこと、白馬ヶ岳登山の目的で來たのだから、大方理科大學あたりの教員だらうと思ふが、何にしても帝國大學一覽には、寺崎留吉と云ふ名は見當らない樣だ、少年世界の寄書家で、博物學雜誌には嘗ては屢〳〵名が見にた、標本の卸賣を内職？として居るとか云ふ同姓名の人があるが、此の人は何處かの中學校か何かの教員であつたと思ふ、同名異人か、夫とも此の寺

崎氏が我々の知らぬ間に大學の教員になられたのか、もし後者とすれば、我々は大に其の榮轉を祝するのである。夕方四ッ谷の方面に散歩した、元來四ッ谷と云ふ區は、糸魚川街道よりは引込んで居て、農を業として居るのであるが、其處の者が十數軒街道へ出て、新に四ッ谷の殖民地をなしたのである、それが此の念屋等のある處で、本來平川區と云ふべきを、新四ッ谷であるので、其儘に「四ッ谷」と稱して通じて居るが、決して全然同物ではないのである、岳の方は大分雲が薄らいだが、未だ其の全容を現はさない、山脈は北城邊の眞西に連亘して居るので、一に西山とも呼んで居る、それは勿論總稱で、或は單に岳とも云ふのである。此の夜雲の切れ間から月が顏さし出して、雨に潤へる山谷を照らし、薄雲はあれども白馬連山の姿はおぼろ氣に現れた、我等は之を眺めんと外に飛び出したが、夜氣深々人を襲ふので、初めて踵をかへし、明日は晴天と、大に望を囑して眠についた。今夜の蚊帳は又別ので、穴はないが吊ると丈が足りない。

あくれば八月十五日、午前二時半起床して見ると、昨夜一寸姿を現はした白馬連峰は、又も雲につゝまれて見えずなつた、さりとて雨も降らないので、兎も角も登山と決して、其の準備にとりかゝる、五時頃先發の人夫二名來り、荷を分配して居ると、後から又四人、都合六人に荷を持たせて、平川の念を出發したのは六時十分。抑も我等の扮裝を見てあれば、黑の冬服に紺の脚袢、同じく紺の草鞋掛、八ヶ岳の豪雨にさらせし經木の帽を被り、糸立の下よりは、武田型の特製大胴亂を見せ、手には十餘日前富士登山の際便用したる金剛杖をつきたるが武田生、同じく紺づくめの服裝して同型の大胴亂を肩にかけ、金峰の烈風に飜せし着莫蓙を纏ひ、菅笠目深に被りたるが河田生、足掻も輕々しく、田圃に通ずる畔路をば半里ばかり行き行きて、やがて細野の村に入り、丸山常吉方に着したるは、正に六時三十五分であつた。此の村戸數八十許、多數は丸山姓を冒して居る。

此處で人足は更に荷を整へ、我々は山中の食料にと白米一斗を求めた、今次に携帶品の主なるものを擧げて見やうなら、胴亂、鍐、壓搾紙、壓搾板等植物採集用のものは別として、毛布、空氣枕、フランネル襯衣、毛糸製シャツ、毛皮、豫備チツヨキ、腹卷、懷爐、細引、油紙、鍋(大小數個)、白米、豆罐詰、福神漬、コーン

スターチ、砂糖、銀世界、固形味噌、醬油エキス、梅干、干瓢、椎茸、白子乾、燒麩、馬鈴薯、味附海苔、ビスケット、鰹節、櫻鰕、葱、菓物鑵詰、ナイフ、フヲーク、匙、鑵切り、針金、西洋蠟、アセチリン燈、火繩、捕蟲具、薄荷油、苦味丁幾、寶丹、清心丹、寶効散、絆創膏、寶丹萬福、ペン、金釋等其の他、糸、紙、マッチ、鉛筆、時計、手拭、小刀、楊子、小楊子、齒磨、石鹼、鏡の如きは申すまでもない、肉類の鑵詰を省いた理由は、從來の僅少なる經驗によれば、獸肉も魚肉も高山では思はしくないからである。

六時五十分細野を出發する、平坦な原野にはきやう、をみなへし、をとこへし、まつむしさう、みやこぐさ、こまつなぎ等紅紫白黃相亂れて居る、此の邊を土俗「細野の上ッ原」とか號する。雜草共には目もくれず、只管道を急いで、四十分にして二股に着く、此處は鑓ヶ岳より出づる南股の谷と、白馬より出づる北股の溪水と落合ふ所で、此處で松川となり、流れて平川に注ぎ、北流して糸魚川となつて終に日本海に入るのである。ふと左を仰げば杓子は毅然中央に聳ゆ、言ひ難い色して雲間より其一角を現はした。一行の意氣昂り、丸木の危橋を渡る、此の橋は其夏の頻々たる雨水に流出すること屢〻であて、つい二日前にも落ちたのを、我々の爲に新にかけて呉れたのだ。橋を渡つて木立に入ると、急に深山めいて來る、みやまとんぼやなつあかねが澤山飛翔して居るので武田生はそろ〳〵網を張り初める、ゆづりはが大分生じて居て、木蔭にはあつひかづらが匍ひまはつて居る、道は常に北股の澤の右岸に沿つて行くので、左手は崖で、屢〻細流が瀧の如く流れ出でゝ澤に注いで居る、口元の瀧の澤、奥の瀧の澤を徒渉し、葭原、大平を經て進む、徑は狹く、流水は細徑にあふれて川やら路やら分らぬ程である、二股より一里許りで沼池と云ふ所に着く、此の邊一帶沮洳の池をなし、雨後には往々土地の陷落することがある、みづばせを、ざぜんさう等が所々にある。中山の澤を渡り、巨大なるぶなの下に繁れるねまがりだけを分けて行けば、やがて猿倉に來る、川原に出て休んで居ると、十分許り遲れて來た人夫の一行は、最早十時半にもなつたから此處で第一中食をやると云ふ、我々は一あし先きへと又徑を辿る。いぬがや、ゆづりはの如き常緑木を除いては、概ね落葉木の森林で、ねまがりだけは所々に密生し、往々人の丈にも超ゆる程である、樹蔭にはたまがはほとゝぎす、ならゐしだ、たけしまらん、とちばにんじん等が

ある、勾配は漸く急になつて、路は殆んど溪の中を歩む樣である、さんかえふ、おほれいじんさう、なつゆきさう等の美しい、長走り澤を渡れば間もなく瀧揃へで、おほいたどりは林をなし、喬木は漸く減じて、草本の生長驚く許りである、なつゆきさう、じやかうさう、やくるまさう、えんれいさう等と共に幾十百本のきぬがささうが簇生して居る、城法學士登山の時は、非常に大なるものがあつたさうであるが、我々は不幸にして左樣に大なる怪草を見ることが出來なかつた、此の邊は追上澤と呼ぶ由で、かつらの枝低く垂れ、草木彌〻繁茂し他に多く見難き光景である。

人聲が上の方でしたかと思ふ間もなく、白髮銀髭の人が杖をついてやつて來る、後から人足二人が脊負梯子に荷をつけた上に、大風呂敷を山の如く負ふて、扈從して來る、はて風伯が里へ旅行でもするのかと思つてよく見れば、豈はからんやこれこそは、山草界に其の名も高き小川草魚先生だ、先生は通稱を正直と云ひ、公證の激務の餘暇を以て、蘭蟲を飼用するに妙を得、其の名海内に高いのであるが、一兩年前から山草の趣味を覺り昨年は牧野氏等と戸隱に登られたが、今年は老？軀をも顧みず、前田曙山ぬし等と共に白馬登山を思ひ立たれ、數日前白馬尻迄登られた處が、豪雨に遭ひ、終に山巔を極めずして北城に下り、曙山氏等は僅に山麓より白馬を仰いだのみで歸京したが、小川氏は一週間が十日でも、登山せずには歸らぬと、獨り北城に踏止まり、三四日前天晴るゝと共に山頂に登り、今や下山さるゝ處なのである。これ幸と山上の模樣を御尋ねした處が、頂上の小屋は大破損で、少しは自分等が修繕したが、二日續けての雨降りには、雨水がザー〳〵漏り込むと云ふよりは降り込む、いや瀧となつて流れ込むので、寢ることも居ることも出來ず、隅に縮んでかぢかんだまゝ、實にみじめなものだとのこと、殊に薪はよく燃えず、寒さは骨に徹する程で、到底居たゝまれたものではないとの話、成程見れば寒さうな身仕度で、顏もやつれた有樣大に同情にたえぬ、さても篤志な人であると、此處で袂を別つて、上と下へ――此の間に小川氏について居た丸山の悴廣吉は、我等の伴へる人夫の一人とかはつて再び頂上へ引かへすことゝなり、我々二人は前進をつゞける。

路は小さい溪流に沿ひ、或は朽木を踰え、枝をくゞり益〻急となつて石はごろ〳〵して居る、右手には白雪

皚々たる谷を望んで上る、幽かな道は漸く消えて、どうやら、踏み迷つたらしい、元來た方に立ちかへると、下から人足が一人我々の行厨を持つて來で呉れたので、石に踞して中食した、時に午後の一時であつた。第二回の中食を濟ました人足と共に、白馬尻の大銀河の前に出たのが正に二時であつた、路は何處で前に我々が誤つた所と岐れたのか分らなかつた、否、今もつてわからないので、實に不思議に思つて居る。

今迄通つて來た山麓の路は、白馬尻迄は落葉喬木帶で、巨大なるぶな等が隨所に亭立して居る有樣であつたが、白馬尻へ出ると急に趣が變つて、前には大雪溪が横たはり、其の兩岸は珍草奇花で裝飾されてある、濶葉喬木帶の上に來るべき、針葉喬木帶は全く缺けて居て、直に灌木帶に移り、葱平（チヤカダヒラ）以上から草本帶となるのである、初めて白馬尻に出た時は、急に草木が一變じて、忽ち草本帶の植物が現るゝかの樣に感ずる、勿論山上から流されて來て生育した草本帶のものもあるが、熟ら觀察すると、決して灌木帶をも跳び越して、急に草本帶となるのではなく、相當の順序をふむで行く樣である、越後の妙高山（メウカウザン）の如きも針葉喬木帶を有せずして、落葉喬木帶から灌木帶に移るのである、只大銀河の景に至つては、中央大山系の逸物の外には、多くある所でない。

白馬尻にはもと小なる石小屋、否小屋とは云へぬ岩陰があつて、此に宿つた人も往々あつた、昨年に至りて別に巨大なる岩の凹みを見出して、此處なら二十人位はどうやら雨露を凌げると云ふので、前田、小川氏等の一行は此處に宿つたが、特に下部の植物を目的として行くのでなくば、一日に頂上まで登るのが得策である。

白馬尻邊より葱平（チヤカダヒラ）迄、一直線三十丁もあらうと思はるゝ大雪溪は、壯大なもので、到底我々の筆では書き現はすことが不可能である、前號の口繪は其の極めて一部の、特に缺陷を生じたる處を見せたのだが、あれを三十丁もつゞけて、もつと雪の量を增したもので、急な傾斜で山腹に懸つて居ると想像するより致方がない、其の壯絶な景に至つては、躬ら行つて見るより他に方法がない、我々が滅多矢鱈に柊的稜角文字を使用して、其の壯大を汚すのは此景の爲めに惜しいし、又我々の本意でないから筆を止めて置く。

白馬尻から彌〻此の大雪溪を登るのである、雪上を行くのであるから金標（かなかんぢき）を穿ち、午後の二時に出發した、

馴れた人夫等は重荷を負つて樏も用ひずに巧に上つて行く。白馬尻の邊には例年雪が消えて一寸した河原が出來るさうであるが、昨年は雪が溶けず、直に大銀河へ足を踏み入るゝのであつた、雪は表面龜甲形に凹んで、多少の足がゝりとすることが出來る、先年城法學士等が登られた時には、雪が非常に硬い爲め、杖等は全く透らなかつたそうだ、それ故樏など持つて行つても、到底雪に立たるまいとの御注意を承はつて居つたが、兎も角もと携帶して來た樏をはいて歩いて見ると、存外硬くないので極めて都合がよい、普通の杖も可なりよくさる。思ふに年によつて雪の工合が種々變はるものと見える。樏をつけて登ると、辷る憂がないから大に樂である、誰やらの樣に這ふ必用はない。

二時間を費して雪溪を事なく登りつめ、午後四時と云ふに葱平の一角に達した、此處に休憩して再び歩を運ぶ平と云ふても平坦ではなく、非常に急峻な坂路で、美しい草花が一面に咲き亂れて居る間を、露を拂ひ草を分けつゝ登り行くので足は中々捗らない。

一時間許りでこれを登りつめ、同じ字で讀み方の違ふ葱平に着く、此處は稍ゝ平地をなして居て、離山の東方直下に位し、同じく百花爛熳の地である。所々に巨岩があつて、其の中一つは下に僅かの凹みがあるので葱平の小屋と號して時に露を凌ぐ人もある、元より雨が降つたらみじめなものである。離山の離岩に近い所で、人夫は第三回中食をやる、最早六時に近いので、我々は一足先きに出かけた、山頂の小屋の下なる大雪田を右に望み、離山と頂上との間の尾根に出で、右へ〳〵と六七丁行くと稍ゝ平坦な小區域に、我等の居城とすべき小屋に着いた。成程小川氏の言つた通り大破損で、小屋と云ふよりも寧ろ小屋の遺趾とでも云つた方がよい位である。着いたのは正に午後七時であつた、兎に角内にもぐり込んで、蠟燭をつける、食事の準備をする、行李を解いて衣服を出す等一時は中々の混雜であつたが、幸雨も降らず、天候稍ゝ恢復の徵があるので、かさばつたものだけは外に出して置いて、火を燃し衣を厚くして眠りに就いたのは十時に近かつた、今日は疲勞したので、堅いはひまつの枝の上でもよく寢られる、足ばかりでなく手も疲れたから、今回はこれで筆を擱く。

白馬岳及鑓ヶ嶽

志村烏嶺

「日本アルプス山に登るべし」(志賀氏)の記文中に曰はく、

前略「日本アルプスに入るの行路を指點せんか云々更に北行して越中越後境上の白馬岳大蓮華山を登臨し盡し云々」(日本山岳志山嶽諸説八頁)

日本山水論中の一節に曰はく、

前略「近來氷河の遺跡を發見せられたる信越境の白馬ヶ岳に至るや、頂上附近の石室より少しく信濃方面に下れば大雪田を見云々、白馬の北方より山稜を傳ひて、森嚴なる尖頭點を見るは越後の大蓮華山云々」(同書百三十頁)

此等の記文を見るときは、大蓮華山と白馬岳とは全く別個の峻嶺なるが如く見ゆ、あゝ信越境上大蓮華山の外に白馬岳ありや、白馬岳の外に大蓮華山ありや、余は前後三回の登攀を試みたるも、白馬の外に大蓮華を見ず、大蓮華の外に白馬を見ず、白馬及大蓮華の名稱は、同一山岳に命名せられたる別名にして、信州山麓の民は白馬、西嶽或は單に嶽(西嶽及嶽は白馬連峰を意味するが如し)と稱し、越中越後の人は大蓮華と呼ぶなり、故に余曾て某誌に記して曰はく、

「信濃越中越後の三國に跨りて一大山あり、高さ一萬餘尺、實に坤輿の中樞萬邦の鎮たり、崇高雄偉天下に冠絶す、有史以來三十歳、歌仙も未だ其の崇高を歌ひしを聞かず、騒聖も未だ其の雄偉を論く能はず、朝日に映じては殘雪白駒の蒼空を奔騰するが如し、故に信州の民呼んで白馬岳と云ひ、夕陽を受けては紅蓮の空際に開けるに似たり、故に越人名けて大蓮華と稱す云々」

と以て山名の由來を知るべし、志賀氏は當代の地理學者を以て任ずるの人、日本山水論は日本の山岳通たる小島氏の名著たり、しかも本邦の山岳中學術上最趣味ありと稱せらるゝ白馬に關し記するところ斯の如し、之れ余が禿筆を揮ふの止むを得ざる所以なり、

今禿筆を揮つて此名山を記さんとす、其の大膽と不遜とは自ら驚くところなり、日本アルプスの連峰、信飛境上を北走して信越の境に入るや、こゝに數座の峻嶺あり、白馬岳實に其の盟主たり、其の右翼をなすものは杓子ヶ岳、鑓ヶ嶽(鎗ヶ岳にあらず)大黒岳等の諸山にして巍々雲表に聳ゆ、其の左肩のやゝ張れるところは蓮

華山(大蓮華にあらず)なり、越中の立山は後方に殿をなし、戸隱飯綱の諸山は唯前門を守るのみ、南方遙かに富嶽の秀峰と相呼應せり、いでや讀者の爲めに白馬及鑓ヶ岳の山容の萬一を語らんかな、

白馬岳に登らんとせば其の路四あり、(一)は信州北安曇郡小谷より登るもの、蓮華溫泉を經て頂上に達するものなり、(二)は同郡北城村より登るもの、(三)は越中方面より登るものなり、以上の外(四)は北城村より鑓ヶ嶽の裏面を迂廻して登るものなり、(二)及(三)は久しき以前より山下村民の知れるところにして、獵夫藥草採り等の往來せしところのものなり、又信州より北陸に通ずる一間道にして古來關所破りを爲せし者の往來せし路とかや、彼の史乘に見えたる佐々成政が從者數人を率ひて越えしてふ、左良左良越の間道も亦之れなりとは、口碑に傳はれるところ、眞僞は史家の研究に俟つ、

野史に曰く、「秀吉和を信雄に乞ふ、信雄之を許す、成政以爲らく、信雄孱弱事を共にするに足らず、宜しく家康と好を結び、以て中原を圖るべしと、乃ち兵を罷め疾と稱し、潛に左右數人と深雪を凌ぎ、左良左良越を踰え間道馳驅十二月濱松に抵り云々」、

(一)及(三)は余の登攀せざるところなるが故に多く語る能はず、今北城村細野より白馬尻を經て白馬の山頂を究め、(二)鑓ヶ岳の裏面を經て細野に下る(四)順序に從ひて記述せんとす、白馬山麓なる北城村は、長野を距る西北十里にして遠し、同村字四ッ屋に山木と稱する旅舍あり、素より一寒村の一旅亭、其の便否等言はずして明なり、四ッ屋より凡十八丁にして同村字細野に達すべし、細野區は白馬山麓の一部落、山中の地理に通せるもの多きを以て白馬登山者は案內者を此地に求むるを常とす、案內者は登山者の生命をも委ぬる事あるものなれば、之が撰擇に十分なる注意を要す、宜しく經驗あるものに就きて其の人物品性等を質さざるべからず、余が第一回登山の際、鑓ヶ岳に於て殆んど死地に陷りしは全く其の當時の案內者が、山路の模樣を知らざりしによるなり、登山術等を記述せるものに、案內者に就きて多く言ふもの尠なきは余の常に怪訝に堪ねざるところなり、日本アルプス連峰の如き無人の境に出入するものは、最地理に明にして身體强健、着實親切且つ膽勇なるものを求むべし、然らざれば昨夏八月乘轎に於ける悲慘を再演すべし、案內者の如何は登山者が第一に講究すべき一大問題なり。

細野より猶ほ進むこと十數町にして北ッ原と稱する草原に至るべし。

白馬岳より來る北股川と、鑓ヶ岳より來る南股川と此地に於て相合し、松川と呼ばれ、内川に合し姫川となり、日本海に入る、此兩溪流は激流奔湍をなし、川と云はんか當らず、瀧と稱するも穩かならず、實に瀧の如き川と云はゞ始めて其の實際を想像せしむべし、鑓ヶ岳に登るものは南股(兩岸とも)に沿ふて登るべし、白馬に登るには南股北股兩者の合流點より少しく上方にて南股川を渉らざるべからず、平常は馬を通ずるの架橋あれども、出水するときは直に流失するを以て、徒渉するか或は特に架橋を爲さゞるべからず、余が第一回登山の際には水深腿に達せしまでなりしを以て、徒渉したり、第三回登山の際は架橋ありしも、第二回登山の際には特に假橋を設けて渡りたりしが、其の歸途には暴風雨(乘鞍にて死者を生せし時)の爲めに水勢怒漲し、岸を崩し巨石を流し、其音百雷の轟くが如く、全山爲めに鳴動す、再三再四架橋を試みたるも、遂に渡る能はず、其の當時の慘憺たる光景は今尚ほ眼前に髣髴たるを覺ゆ、後日の登山者は登山中に豪雨あらば此川の爲めに歸途を斷たるゝ事あるを忘るゝ勿れ。

南股を渡りて進めばマイゾレと稱するところあり、路は北股の岸に沿ふ、左方の峰より北股川を流下する二瀑あり、一を口元ノ瀧ノ澤、一を奥ノ瀧ノ澤と呼ぶ、平常は殆んど水流を見ずと雖も、降雨あらば一大瀑布を生ずべし、第二回登山の歸途これを横過せしときの如きは一行皆命を賭せり、ッチアラシと稱するところを過ぎて、ヨシハラに至る、南股を渡りて半里弱の地なり、北股川はこゝに日蔭淵の深淵をなす、兩岸相迫り水最深く殆んど無底の淵なり、第二回登山の歸途南股川の爲めに歸途を阻まれ、止むを得ず岸に立てる喬木を倒して橋となし、渡らんとして此淵に臨みしときは、其の恐ろしさに衆皆戰慄せざるものなかりき、此附近に炭小舍あり、露宿をなすべし、ヨシハラを過ぎて下ノ大平に出で、之れより北股の岸を離れ上の大平に上れば、足指益〻仰ぐ、細徑全く喬木帶中を通じ、殆んど日光を見ることなく、身は始めて深山に在るを覺ゆ、鉞斧曾て入らざる太古の儘なる森林中、陰濕の氣肌に迫り、一種の不快を感ず、而して一の奇とすべきは、白馬の喬木帶中には針葉樹少なきことなり、八ヶ岳の喬木帶は殆んど針葉樹より成り、戸隱の喬木帶は兩者混淆せり、此

の現象は頗る研究の價値あるものと信ず、ヨシハラより七八町許にして沼池（ヌマイケ）に至る、小溪流あり、ツバギ澤と呼ぶ、此附近地勢低窪、往昔水を湛えて一大湖となせしも、其の岸の一部缺損して、今の干潟となりしと云ふ第一回登山の際、此附近にトガクシショウマを發見するや、人の之に注意するもの多く、後數ヶ所に其の產あるを知るに至れり。

此附近までは、登山者の爲めに細野の案內者が路傍の雜草を刈り拂ひたれども、これより前程は夏草いやが上に生え茂り、歩行頗る困難を極む、第二回登山の往復の如きは、始終降雨ありしが爲めに、此雜草の中にありては、笠も其用をなさず、衣襟悉くうるほふ、白馬尻に至るまで概ね斯の如し、案內者の言によれば、僅々數圓を投ずれば此雜草を刈り拂ふことを得べしと云ふ、山岳會の如きは年々此の刈り拂ひを實行せんこと希望して止まざるなり、沼池より少許を進めば中山澤に達す、平常にありても水量稍〻多し、第二回登山の際は實に危き獨木橋によりて之を渡れり、ヨシ原より約一里半許にして再び北股川の岸に出づ、熊ノ穴と稱するところなり、激湍轟々として天地を震撼す、白馬登山の客は、何人も不愉快なる喬木帶より暫時此岸に出で〻天日を仰ぐときは、一種の快感を覺ゆ、又岩の怪と水の奇とは天下の壯觀と云ふべし、熊ノ穴を辭して前進するに猶ほ喬木帶の中を進む、イタドリ、ウバユリ、ミヅバセウ、ヨブスマサウ、ヤグルマサウ、キヌガサ、ウ等の高地性植物は非常に盛なる繁殖をなし、イタドリの如きは三、四メートルの高さに達す、叢生せるものは竹林の如し、ミヅバセウの如き葉の長さ一メートル以上のものあり、三好博士は北海道に產するヨブスマサウの大を稱し、同草の木曾日光の諸山中に生ずるものに比すれば、形態の大なる大人の兒童に對するが如しと記されたれども、此附近に產するものには莖長三メートル位の者は珍らしからず、ヤグルマサウの如きも、飯綱戸隱邊の者に比すれば甚だ大形、車輻狀に分出せる復葉の全直徑一メートル以上の者多し、キヌガサ、ウの如きも、路傍の小溪を埋めて一面に開花せるは、恰も綠氈に紋樣あるが如し。

長走澤、逐上ゲ澤、ウシロ澤等を過ぐれば、杓子ノ大澤を過ぎて白馬尻に出づべし、既に陰鬱なる喬木帶を脫し、シモツケサウ、ナツユキサウ等一面に繁茂し、ベニバナイチゴの朱唇何をか語らんとするもの〻如し、

絶壁にかゝれるカライトサウの紅穂、風のまに〳〵ゆらげる樣、其の美筆紙に盡すべからず、特に激流奔湍の奇觀を極めし北股川も、此處に至れば全く氷結して萬古融解せざる氷雪となり、皓々皚々谷を埋む、雪上より來る冷風は凜冽として寒骨に徹し、眼に觸るゝ草木、耳に聽く鳥語、全く人界の者にあらず、吾人は既に人圏を脱せるなり、杓子の峻峰左に聳え、蓮華は巨人の如く右方に立ち、大蓮華の雄姿却て見るべからずと雖も、葱平の蘚綠遙かに吾人を迎ふ。

先年白馬に登りしものは皆白馬尻に宿泊するを常とす、然れども別に石室等あるにあらず、只一大轉石の傍に露宿せるなり、此大石も今は土砂の爲めに埋められて、露宿地としては最も不適當の地勢となれり、白馬登山の困難は道路の嶮なるが故にあらずして、全く風雨を凌ぐ設備なきが故なり、其の山路の如きは多くの高山中登攀最も容易なるものなり、之れ他山にありて胸突き鬚剃り等の名ある嶮崖を極むべき七八合目の大部分は前述の大殘雪を以て谷を埋むるが故に、吾人は雪上を渡り何の苦もなく登ることを得るなり、他の諸山の如く山中に一の祭神なく、登山參拜するものなきのみならず、山下村民は人の此山に登るときは岳暴れありと稱し、畏敬して近づかず、昨夏の如きは其の内部に伏在せる事情の如何は知らざれども、此迷信を基礎として人の此山に登るを禁ぜし程なりき、されば山中風雨を防ぐの設備なきなり、快晴の日此山に登りしものは、斯の如く登攀容易にして愉快なる山なしと感じ、風雨に遭遇せるものは、斯の如く困難なる山なしと思ふなり、余が第一回及第三回の登山には一滴の雨にも遭はざりしを以て、十分なる探險を遂ぐるを得、第二回には非常なる暴風雨に際會して備に困苦を嘗めたるを以て、始めて此山に登る人に向つては多少の注意を語るの資格あるを信ず。

我が山岳會第一の事業として、白馬尻附近に一の宿處を建設されん事を切望して止まざるなり、此小屋の建設なき間は、第二回登山の際余等一行二十餘名の宿泊せし石窟に宿泊するの外なし、此石窟たるや口碑の傳ふるところによれば、往昔盜賊の一群の巢窟たりしものなりしが、久しく其所在を知ること能はざりしに、昨夏案内人丸山嘉吉、長野中學生の先導をなして偶然に發見せしもの、窟内二三十人を容るべし、然れども暴風雨

の際には此石窟も決して安全なるものにあらず、普通觀光の客ならんには、山麓より即日頂に達することを得るが故に、白馬尻附近に宿泊するの要なしと雖も、植物採集者等の爲めには、是非此附近に完全なる宿泊所を必用とするなり。

第一回登山の際には、白馬尻を去る數町の雪上にて、多年此山に經驗ある藥草採りの老翁に遇ひ、天候の一變せん事を豫言せられ大に恐怖せしも、幸にして此豫言は當らざりき、山下の村民は、白馬の頂上より能登半島の明かに見ゆるときは、其の日の内に天候の變ずべきを信せり、前記の老翁も此理由を以て吾人を驚かせしなり、然れども信ずるに足らざるもの〻如し。

白馬尻より葱平(ネブカビラ)に至る二十町許の雪上は、登りの際には左程の困難を感せざるも、下降する際には馴れたる者も屢〻顚倒することあり、大野理學士が此の雪上に困却されしは案内者間の一談柄たり、近來は葱平の附近にて樹木の枝にて橇を作り、之に荷物と人とを載せ人夫をして牽き下らしむ、此方法によるときは、普通二時間を費す距離を二十分内外にて降るを得べし、此輕便橇を始めて使用せしは、山草熱心家小川草魚老人とす。

大殘雪の兩側は、採集家の見落すべからざる好產地なり、余が白馬にて發見せし、二種の新種ヒメウメバチサウ、シロウマワウギは、皆始めて此地に採れり、殘雪の略〻盡くるところは即ち葱平なり、葱平は白馬山中にて高山植物の豐富なるところ、採集者の低徊去る能はざるところなり、余は第一回登山の際此地に露宿せり、白馬尻附近は一の小屋を設くると同時に、葱平にも之を建設するは最も急務とするところなり、頂上附近に參謀本部測量部にて作りたる小屋あれども、七八人を容る〻に過ぎず、種々の點より見るも葱平を以て小屋を作るに最も便宜の地點と信ず、葱平の少しく上方に一大殘雪あり、雪の側に山崎理學士の所謂氷河の遺趾あり、此殘雪の附近より、峰傳へに右方に登れば、參謀本部の小屋に至るべく、猶數丁にして白馬の頂上に達するを得べし、頂上の展望の雄大なる、筆紙を以て其の萬一を述べんと企つる如きは愚と云ふべし。

余は筆を改めて、白馬頂上より鑓ヶ岳方面を記述せんとす、白馬に登りしものは尠からず、鑓ヶ岳を精査せしもの多からず、植物の珍種に富めること、白馬に讓らず、我に一の鍵あり、此寶庫を開かんとす。

伊東元帥東郷大將上村中將長野中學に來校されしを機とし白馬岳にて採集せし高山植物を贈呈せし日此稿を作る（五月十五日）

那須山と大峠越

梅澤親行

第一　裾野の夕立

思ひ出れば十年昔の七月卅一日に日本鐵道黑磯驛の停車場前なる烟草屋といへる旅店に息ひしは午前の十一時なりき。

晝食はてゝ草鞋踏しめ烟たつ那須嶽の裾野を登るに左に聳ゆる百村山より黑雲湧くと見るまに風にきほひて雨サト降り來ぬ、里人は「ア、百村山の雷だから強いぞ」とのゝしる、やがて稻妻閃なく閃き鳴神の音烈しく雨はさながら篠を束ぬる如きも身には洗ひざらせし浴衣肩に怪しき鞄のみなれば濡るゝも心ちよしと色あせたる蝙蝠傘をかざして夏山驟雨畫中の人となる。

立よらん影も那須野の夕立にしの押分て進みてぞ行く

松子、田代、廣谷地の村落を過ぎ行けば白雲峰に搖曳し蜩の聲凉しき松の枝より滴る雫に夏を忘れ「カッポー」と鳴く鳥の聲を聞きつゝ進む。

顧れば麓の那須野に走る汽車は長蛇の烟を吐きつゝ草より草に入るが如く其背景は常陸の連山にて八溝山ことに高し、五時頃湯本の橋本屋にやどかる黑磯より此處まで四里十八町。

第二　湯本の温泉

那須の温泉は湯本、板室、旭、大丸、三斗小屋、高雄股、喜多、辨天の八ヶ所に分れ其中最も賑はふを湯本としこれに次ぐを板室とす。

湯本は裾野の極まりし山腹の地にて谷間より湧出る温泉烟たてゝその中央を流れ左右の浴舍は之をひきて内

湯とし亦行人湯、鹿之湯、御所湯、中之湯、河原湯等の共同浴場もあり。

浴舍は數軒あり何れも浴客充滿の盛況なれど東京の人は少なく覺えぬ。

浴後膳に向ふにいと味なければ他に甘き物ありやと問へば番頭どの那須川の鮎こそよけれと鼻うごめかすやがて鮎の魚田と鹽燒とを持ち來たれば箸とるにジアリーと音すこはいぶかしと燈さしよせて見れば腸のまゝの料理なりし。

さるに隣室にて濁音高く此鮎は東京にてはとても、此味は何々の東京料理屋にてもなどいふ片腹痛き醉どれの料理通を聞つゝいつしか夢路をたどる。

第三　賽河原の殺生石

翌三十一日は朝疾くと頼みつるも街道の旅舍ならねばやう〳〵八時半に出立つ、人家はづれの温泉神社を拜しこれより賽の河原と呼ぶ谷間を行けば硫黄の氣彼方此方に立のぼり亦硫黄の製造場も見ゆ。

谷のつくる所に柵を以て圍みたる巨石ありこれなん世に名高き殺生石なり、吾に玄翁和尚の德、三浦之介の勇は皆無なれど制札の面を犯して石上に登れど幸ひに九尾の祟りもうけざりき、想ふに此あたりは硫氣滿ちみちし時に鳥獸はいざしらず蟲など死せしことはあらん、さるを石の毒に觸れし故とか何とか言ひ出せる者ありて程よき石に、あらぬ名を負はせたるを後世誤り傳へ談りつぎ遂に古跡となりしものか、今の位置及び周圍の景況を察するにそのあらぬ石さへ幾度か遷り變りたるもの〻如し。

野狐のあとをとゞめし石なればあやしといはぬ人やなからん

第四　茶臼嶽の噴烟

右手の細徑を登りはつれば廣やかなる坂路に出づそを一里餘進めば大丸の温泉にて浴舍一軒とおぼしく一ヶ所に設けたる水晶の如き温泉の湯槽に溢るゝさゝ見るだに心ちよし。

今朝の出立遲かりしを以て温泉廻りの胸算に違ひぬれば此處より近き旭の温泉も割愛し茶臼嶽（チヤウスダケ）さして登るに遠雷の如き響き一歩ごとにまさり、黑烟の騰ること足に從ひて急なるを覺ゆるより心に勇みを生じ喘ぎ〳〵灰

白色に骨立せる樹林の死骸を左に、怪巖層々たる朝日嶽の峻峰を右に見つゝ一里半にして茶臼嶽の絶頂に汗を拭ふ。

茶臼嶽は那須五嶽の主山にして頂上より西北の斜面に沿ひて三孔を生じ上方の孔の噴烟最も劇烈にて漸次薄くなるを覺ゆ、伏して孔中を窺ふに濛々たる硫氣鼻を撲ち、轟々たる鳴動耳を衝き久しく停りがたし亦蝙蝠傘の尖きにて地を突けば直ちに小噴孔を生じ地鳴手にとる如く聞ゆ。

すさまじき響きのうちに立のぼる烟あむるもこゝちよきかな

第五　三斗小屋の一夜

須臾にして雲下方より卷き來れば眺望の愉快絶えぬさらばと噴孔の斜面に從ひて十町あまり下れば赤錆色の溪あり渴きの甚しければ飲まばやとするを見て側に息へる人は澁味あればやめ給へ今少し下り行けば極めてよき泉ありと敎へらるゝにより急ぎ下るに山路の右手の巖より湧き出る清水の味よきこと實に甘露とやいはん、竹の皮とりいでゝ喰ふ團飯も舌皷うつ、ひた下りに下れば程なく三斗小屋の温泉場にて泉質炭酸泉温度華氏百二十度の湯は背後の山より寛にて滴り落つ、直に汗を流しぬ。

此地は那須山北の盆地を上下に分ち浴舍二軒あり、己れは上なる惠比壽屋の座敷にて山のたゝずまひを賞し居たる折しも蠻音高く罵る客、丼を辯解する主人、何事にやと耳を傾くればこはいかに己を即刻追拂ふべしといふ談判なりさても面白きことかなと聞くに其客は郡長か村長などの如き人物にて己れの占領せし上等室を欲するが故に主人を威嚇しつゝあるなり頓て仲裁人ありて果は酒々

山雨欲來風滿樓の光景眼前に現れたり、雲の幕は山谷を鎖し冷風一しきり吹く間もあらせず電光閃々霹靂殷殷雨は逆瓶の勢ひにて白玉を飛ばし谿中に瞬間の火柱を顯すこと數限りなし、こは都會の知らぬ壯觀にこそ。

第六　大峠の野馬

八月一日、雨猶やまず今朝は寒しとて炭火桶持來れり、吾は會津に越えんと思へば疾く朝飯と晝辨當をといふに呆れし顏つきして罷り去りぬ、やがて主人來りて此雨にて案内者もあらねば今日は滯留したまへと勸むる

故に測量部の二十萬分の地圖を示せば合點して去る。

雨雲踏分て廿町あまり下り白けし樹幹に會津近道と記せる小みちをわけ入れば雜木生茂りて夏草下道を埋め行てさだかならず、せんすべなければ故路に戻りてやゝ下れば廣き路に出たりこれなん板室溫泉を經て大峠(オホタウゲ)を越ゆる道ならんと右手の山路を登らんとするに樹枝を横へ路を塞ぎたり何故と問ふべき人もあらねば其理由の發見も一興と乘り越えて進む。

溪流左の谷より來るこれ那珂川の原流ならん架けし柴橋渡れば細徑右より來るおもふに先に戻りし會津の近道ならんか、羊腸たる山路汗あへて一里半ほど登りてしばし休まんと腰かけし石の側に上野岩代國境の標木あるを見て大峠の絶頂なるを悟れり雲間より折々麓の方見えつかくれつ。

徑五六寸長四五尺の樺の材を惜げもなく布き併べたる楓林の中みち行けばそゞろに狀を思ひやりて

世にしれぬ錦なるらんこの山の狀をかざれる木々の紅葉は

時しもあれ雨くらき木立のがさ〳〵と音して大きなる動物の姿チラリと見ゆたりハツト思ひて立どまれば野飼の馬群老楓の蔭につどひ居りしに今人影を見て彼は驚き山深く逃れ去らんとする所なり、愕きし胸を靜めて考ふるに麓の柵はこの馬の他山に逸出せんことを防ぐためならん。

第七　野際の昔話

岩角多き山路を足に任せて下るに草鞋やぶれたり足袋のみとなればこれもおなじ運命に陷りぬ、足のうらの痛を堪へがたきまゝに木ごり獵夫等の穿き捨し草鞋の片々を見るがまに〳〵結びつけなどして峠より二里あまり下りて野際(ノギハ)といふ一村八戸皆椀の木地をつくるを業となす山里に息つく。

構大きなる家に入りて草鞋ゆづり給はずやと乞ふに其家の翁いたく驚き鐵道開けし以來通ふ人絶たる峠をよくもひとり越に來たまふものかなわらじも參らすべけれどしばし足を休めたまへと湯をすゝめられぬこゝにて握飯を開く。

翁は話ずきにや人珍らしき故にやさまざ〳〵の物語を爲すその一二を記せば。

この山の獸に羚羊多し熊も稀には見ることあり。

會津途の椀の素地は野際八戸の特産なり見られよ前の流水に浮べる徑も長も五六寸の山毛欅の材を。

維新の際會津攻めんと峠越え來つる官軍は之を防がんとせし城兵と大戰爭なせり其時我家にも銃丸雨のごとくそゝぎぬ。

里人の言葉は他國の人に通じがたきも吾は役を勤めしを以てかくの如し。

旭嶽を越へて甲子の温泉へ行く道あれど今は夏草茂りて案内者もわかちがたし。

心ばかりの錢を與ふるに手にだにふれずさらば草鞋の料にと强てさし置く。

よはなれし野際のさとに住む人は神代のまゝのこゝろなるらん

雨やみ雲はれゆくまゝに鶴沼の流域次第に現れいづるを心あてに爪先下り三里にて大松川村に山を離れたり。

第八　湯之上の饗應

日光人參、御種人參などの稱ある人參にやあらん畑に日覆しつゝ作りたる人參圃所々にありこは大松川より鹽生に至る途中にて。

よしと聞し鹽生の旅舍にて今宵の宿をといへば主人夫婦互に顏を見合せて言葉なしいく度乞ふもおなじ他に旅宿ありやと問へば湯の上の門屋こそよからめといふさては啞にてなかりしかさらば其家まで幾許の道かと聞くに三里、日くれ草臥たれば此家に泊めずやとたのめば亦啞となる。

山王峠より會津へ出る街道を星をたよりに鶴沼川の水音を聞つゝ下る。

人影たえし大峠とはことなりてちらほら往來の人あれば旅宿やあるとゝへば異口同音に湯の上まで行かれよ旅宿はさらなり馬車も人力車もあるのみかは玉のごとき温泉も。

やう〳〵十時過ぐる頃湯の上の第一等と稱ふる某旅舍にわらじぬぎてとく温泉をといへば此方へ來ませと童子は提灯ともして嶮崖下る從ひゆくこと五町許にして鶴沼川の流のかたへなる巖を穿ち檀を構えたる温泉場に

いたる直ちに浴すれば滾々と湧きいづる靈泉頭を掠むる急湍の飛沫玲瓏たる河鹿の聲。

よの塵も旅のつかれもなかりけりくしきいでゆに夏をながして

等をしらぬ二十疊の眞中に坐せば恭しく捧げ來る菓子盆に胡麻の掛りし珍菓堆かしイザ口にせんとしゝに胡麻と見わしは蠅の糞にて菓子の實體何ともわからずこれぞまことの胡麻菓子なりとひとり笑ふ。

十二時過きに持ち出せる膳部の獻立

生鹽を溶解したる味噌汁　太古の鯨の汁　十五世紀の鰊の天麩羅

半雛の生鷄卵　砂、糠混合の米飯

無類の珍味奇體の饗應流石第一等の旅舍の價値たしかなりと感じ空腹を抱きて眠る。

翌朝宿婢はたのみたまひし馬車來れり荷物出したまへといふ吾身のみにて他に荷なしと答ふるに不思議の面つきす、何故いぶかしみぬると問へば馬車は荷を運ぶものにて人の乘るものにてはなしといふ、成程左こそあらめされば人力車はときけば月に二三回は若松より來ることありとこれ昨夜途中にてきしことを東京とひとつに思ひし己が僻事をかしともをかし。

山間に贅澤のこと思ひしは返す〳〵もおろかなりし、天然の名馬膝栗毛如くものなければ輕く鞭ち鶴沼川の流れに沿ひて若松に向へば磐梯山は悠然と近く右に飯豐山は巍然と遠く左に聳ゆ。

鶴沼の川水なれば色かへぬ千代若松にむかふなるらむ

日光より南會津への山越

理學士　白井光太郎

山登り峰入りは、容易の業で無い。櫛風沐雨は常の事で。饑渴に迫る事や。危難に出會ふ事も珍敷無い、山中で凍へたり、行衛を失つたり、谷川で押し流されたりした、人も往々有る、尤も費用次第で、充分金を掛け

て出掛れば、敢て危險を犯し、過激の勞働を爲し、粗糲(まづいもの)を食ふ、心配もないのであるが、今の吾々の境界では、ソンナ贅澤は出來ない、矢張山伏的生活をやらねばならぬのである、ソレデ山中の話などは、通常の人に話しても解り惡(ニク)い、又興味が少ない、「諸共にあはれと思へ山櫻花より外に知る人ぞなき」此歌と同感である、併し山中旅行は苦むだけ、ソレダケ愉快の事もあるので、此趣は實地に經驗のある人、探險家であるとか、地理家とか、博物家とかでなければ解らない、ソレモ人數が少いから、互に山の話をしあふなどは思も依らん事であつた、然るに山岳會といふものが起つて、雜誌が出來る、何か書けといふ幹事からの催促である、頗る愉快に思ふ、僕も山では隨分難行苦行をしたもので、危難に出會つた事も少くないが、後では紀念になつて面白い。

昨年の夏は、南會津へ用事があつて、日光の裏山から、會津の檜枝岐(ヒノエマタ)へ山越をした、其途中の話を書けと幹事よりの御注文である、此途は武田久吉氏の回避せられた事が尾瀨紀行に出て居るから、餘り人の通らぬ處である事は知れるが、ソウイフ處を通るのが面白い事がある、何の爲に出掛たかと云ふに、學術實地研究の爲に栃木福島兩縣下へ出張を命ぜられたからで、山中では植物の病害を探り且其標品を採集する、又寫眞を撮るのが目的で、會津の山中には猪苓といふものが產する、之を掘り又此より發生する猪苓まひたけといふものゝ、標本を採集するのが主なる目的である、此猪苓まひたけといふものは、此迄誰も採集して居らぬ、此を發見して寫眞にとらねばならぬのである、會津の地方で三ヶ所程猪苓の出る場處を會津の事に精敷い初瀨川といふ人、此人は漆樹の栽培で有名な人、此人に賴んで調べて置いた、ソレデ三ヶ所の中、何處ぞで採集しやうといふ計劃である、ソレデ此旅行には一人の同行者が出來た、三宅市郎といふ農科大學學生で植物採集をするので會津まで同行し、ソレカラ分れて、東北地方の高山を四十餘日も跋涉するといふ同臭の人である。

ソレデ、明治三十八年七月七日といふに、東京を立つた、僕は午前八時に澁谷停車場を發して田端迄行き、此處にて日光行に乘り換へて午後二時日光鉢石町小西旅館へ着いた。三宅氏は一瀧車後れて來た、予は日光山へは何遍來たか覺えきれない、ナンデモ一年に二度來たこともあるから、二十遍位は登つて居る、小西に着いた時はまだ二時であるから、荷物を宿に預けて、自分は直ぐに東照宮附近の林中に採集に出掛けた、歸路同山

内なる理科大學植物分園に立寄り、園中を見物し園の主任望月氏に逢ひて、昨日松村先生の東京へ歸られた事小石川植物園の園丁は今日もまだ殘り居て昨日如實山より採集せる根物を整理中なる事を聞いた。

八日は、朝八時頃宿舍を發し、山内なる理科大學植物分園に赴き、望月氏の案内にて、三宅氏と共に高山植物生育の狀態を實見した、當時園中に開花せる植物の種類を擧ぐれば左の如くである。

シヤウジヤウバカマ　ウスユキサウ　ミヤマクハガタ　コバイケイサウ
シロウマガンピ　ハクサンヲミナメシ　キソチドリ　ガンカウラン
イハベンケイ　ウラジロヨウラク　カキラン　タテヤマウツギ
クモキリサウ　チクセツニンジン　ヤハタサウ　ハクサンチドリ
ニヨハウチドリ　シコタンサウ　チングルマ　イハヒゲ
ミヅチドリ　カモメラン　ネバリノギラン　テガタチドリ
ヲノヘラン　イハヨモギ　タウキ　イブキジヤカウサウ
ヒメシヤジン　アラシグサ　クルマユリ　イハラン
タマガハホトヽギス　イハムノ　ハクサンイチゲ　オホバミゾホウヅキ
コメバツガザクラ　タウヤクリンダウ　ネバリノギラン　ハゴロモサウ
イハワウギ　マルバイチヤクサウ　ウチヤウラン　カライトサウ
シコタンハコベ　イブキトラノオ

ソレカラ、入町を過ぎ久治良原に出で、裏見の瀧に廻はり、馬返劔ヶ峰、中の茶屋大平とありふれたる道を通り、晩に中禪寺の定宿中村屋に着いた、此は同所では尻から一番目の家であるが山修行の我等には相應の宿である。

九日も天氣で、朝早くから中禪寺の宿を立ちて、道々採集をなし、湯湖(ユゴ)の瀧の腰掛で辨當を遣ひ、此處にて加藤吉藏の安否を問ふた、此男は予の二十年來懇意にする老人であるが、湯元の小屋番をして、温泉宿の薪木を伐つたり、山案内などをした者で、越後の產で元來は樵(キコリ)夫であるので、樹木の方言を能く知つて居る、ソレデ、植物家の來る度に山案内をして、自然と草木の名を覺え、今では湯元一の博士だと自稱して居るが、實に

成長せる小供といふべき人物で至極無邪氣な人間で、湯元、中禪寺、鉢石すべて此邊で、此老夫を知らぬ者はないが、加藤吉藏では解らない、綽名を云ふと解かる、ソレハ五分吉といふので一寸に足りないといふ謎だそうだ、が非常に壯健なもので、今では七十以上であるが、六七貫目の荷物を脊負ふて。僕等の空身(カラミ)で漸く歩行く場所を案内するといふ人物である、此男も今では小屋番を他人に讓り、近年は此湯湖の瀧の茶屋にて客人に茶菓を賣る仕事を初めたのであるが、今年は見世を他人に貸して、自分は湯元に來て居るとの事であつた、湯湖の瀧の上で、山猫柳の天狗巣を採集した、山猫柳の天狗巣、妙な物であるがこれは僕も初めて見たのである湯元では松本屋に泊つた、此處にて、明日栗山鄕川股温泉迄荷物を持つて來る人足を賴んだ、處が此通路が去る三十五年の暴風雨で塞がつて誰れも案内をする者が無い、吉藏なれば解(ワ)かるが外には無いといふ、ソレデ、今度も此老人を煩はす次第となつたが、老人も近年は荷物を脊負ふのは大儀なれば、大抵は斷(コト)るのであるさうだ、が、僕の爲に又々案内をする事となつた、コレデ僕の川股行は丁度三度目であるが、僕の通る道は他の人の通る道とは違つて居るといふ事である、城君などに聞いて見ると日光湯元から川股湯元に行くのにはイツモ金山道を回はつて行くとの事で僕のは金山の方へ下らずに、山の上を通つて行く、此道が兩方とも三十五年の暴風雨で山崩がして、解らくなつた、ソレデ、案内者がない、サスガは吉藏で、道が崩れやうが解らない事は有るまいといふので、川股まで行く事を受合て呉れた、實に吾等の爲には、五分吉どころではない、猿田彦大明神である。

十日天氣好し、吉藏に寫眞器械辨當抔を脊負はせ、朝八時頃より宿舍を出立ち、川股湯元に向つた日光湯元より道程凡四里半ありといふ、湯元の後より右の山に入り、山腰を廻りて進み行くこと少時にて、道の左方の谷間に小き湖水の端見ゆ、名高き蓼の海は是なりといふ、されど行手に心ひかれて空しく行き過ぎぬ、行くこと半里許にして、道の右に又一ッの湖水を見る、差渡し六七十間もあるべし、落口は山の蔭になりて見えず、刈込湖と呼ぶ、案内の說に此先六町許にて切込湖といふあり、此よりは小なりと、刈込湖迄は逗留の外國人が納凉に來ると見えて、湖邊に休憩所及茶店の設ありて「ビール」の空壜など散亂せり、此處より峻はしい坂を

登ること、半里許にて、峠の絶頂に達す、金田峠（ナカダ）といふ、湯元より峠迄一里八町ありといふ、此より下ること數町にして、右金山道、左川股道といふ追分けにいたる、金山の方は、下り道、川股の方は、山の腰を附いて木山の中を、行くやうになつて居るが、道といふ程の道ではない、少し行きて谷川の處に出づ、川を越し又少し上り笹原を横ぎり、山崩の處に掛る、此處を過ぎ向の木立ある斜面にて、道が鳥渡解らなくなつた、すこし謎つて居る中、吉藏足を蹈み外し、一間許轉がつた、木の根をツカミ倒さに成て居る、脊中に荷があるから起きられない、予は四五間先に居たが老人の叫びに驚きて見ると、此の次第である、馳せよりて扶け起こした、幸ひ怪我が無かつた老人は平氣である、此騒ぎで、僕は腰に下けて居た大事の草鞋を遺失した、併し大分苦んて居たものであるから、草鞋の失くなつた事は後で氣が付た位だ、此の先に硫黄泉の涌出する處がある之れは管（クダ）にて金山へ引いて有るといふ此處は大なる薙（ナギ）で傾斜が急で足だまりが無い、途中一番危險の場處であつた、採集胴亂が邪魔になる位であるから、吉藏老人は如何して越すかと案じた、處が難なく此處を渡つた、實に人間業とは思はれぬ位であつた、此邊山崩がつゞく此處を越すと、栂の林がある、此林中にて一息入れんとて、暫時休み、不圖あたりを見るに、落葉の間から冬蟲夏草が樺色の頭を出して居る、試に近傍の樹下に就て探ぐるに、其處此處に出て居る、根を掘つて見ると、毛虫の附て居るのもあれば、已に繭を結んだ蛹（サナギ）の附て居るのもある、吉藏に冬蟲夏草の理由を話すと、非常に喜んだ、彼は暇さへあれば何んでも山中の奇物を採集して、之を賣りて米鹽の資とするのである、ソレ故、冬蟲夏草、今まで誰も採つた事の無い品で、非常に珍らしい、何んでも在り場所を人に知らせ無いで、自分で採集に來やうといふ計劃を立てた、彼は老眼で鳥渡（チョツト）には見付られないから、吾輩の採集したものを、二ツ三ツ紙に包（クル）んで、大事に持ちかへつたが、只紙に包んだのだから、歸つてから、開て見たら、皆乾枯（ヒカ）らびて仕舞た、ソレデ大に落膽したとの事である、夫より山の腰を回はり、小高い山蔭の森の中にて辨當を遣ひ、少し上つて、不愉快な道を下り、山の左の腰を回はり、谷川に下りて水を飲み、又上に上り頂上の平地に仆れ木ある處を通り、ソレカラ谷に附て下り、又途を失ひ予と三宅とは上の途を行き、行きづまりて、跡へ戻り、谷川に下りて、吉藏と一緒になり、ソレカラ川に附て下り、途中小い谷川

を横ぎり、トウ〳〵絹川の上流に出た、ソレカラ急流を渡つて、向ふの川股湯元に着いた、以前は此處までくれば人が出て居て脊負ふて呉れたが、今は寂寞たるものである、湯場は河岸の中途に在て大い宿舍であつたが去る三十五年の洪水で押し流されて、今では跡方も無い、只湯の湧出する處が川の縁にあるので、其舊跡を想像するを得るに過ぎない、今では此湯壺に小屋掛がしてあつて、入浴する事が出來るやうにしてある、此處より二町許上の處に人家がタツタ三軒ある、其中の一軒で、湯治客を泊めるが、客間といふのは、六疊一間であるから、三人がやう〳〵である、先客が一人あつて、予等二人で部屋が一杯になつた、先づ川原の湯場に行き汗を流し、川流で洗濯をなし、一日の疲れを休めた、サテ明日は彌會津の方へ行く日取であるが、養蠶中で案内が無い、宿舍の主人を頼んだ、是も蠶養で桑を摘む用があるから、行けないといふ、檜枝岐へ行くには、往復二日かゝるから、行けないといふ、段々頼んだ處がソンナラ國境迄行く事と仕やう、其處にはタシカ、川股本村から山拝に登つて居る男が一人、山小屋に居る筈である、其男に先の案内を頼む事として、ナンデモ其處まで行かうといふ、タトヘ其男が居ないでも、先へ行くのは斷るとの事である、此小屋のある處までは、道程凡四里であるが、駄賃は一圓二十五錢を貰らひ度といふ、ソレデも不承不性に行くので、決して有難かる譯ではない、ナニシロ外に行く人の無いのであるから、彼の請求通りにて約束をなし、明朝出發する事に定め、晩食後寢に就いた、吉藏も今晩は此家に泊つた、三宅氏は押葉の整理で遲くまで起きて居つた、宿の主人に猪苔の事を聞いたら、此邊にもある處があるソシテ山毛欅(ぶなのき)の樹下にありと答へた、此日三宅氏採集の植物種類大概左の如し。

マルバネコノメ	ドクゼリ	ヴタヤクシュ	ヤブレガサ
タウゲブキ	ナガシラミ	モミヂガサ	セントウサウ
ヒヨドリバナ	オホバノヨツバムグラ	スゞメノヒエ	カサモチ
ハリスゲ	ミツガハサウ	イチヤクサウ	クルマユリ
マヒヅルサウ	カウモリサウ	マダイワウ	ヨブスマサウ
ミツバツチクリ	ハクサンヲミナメシ	バイケイサウ	ホウチヤクサウ

ヲノヘラン　クルマバツクバネサウ　テンナンシヤウ　カモメラン
ウサギギク　マムシグサ　オホバミゾホウヅキ　クルマバサウ
ヒメイチゲサウ　ハンシヤウヅル　ミノボロスゲ　ナンタイシダ
ナツユキサウ　オトコヨモギ　ホティシダ　ナラキシダ
ゴゼンタチバナ　ネコノメサウ　ユウレイサウ　ミヤマイラクサ
ツクバネサウ　シヤウキラン　ツマドリサウ　オホイトスゲ
サヽバギンラン　コイチヤクサウ　ミクリ　キゲンシヤウマ
サヽバキンラン　カキラン　ミヤマヤブタバコ　イハガネサウ
ボロギク　（以上草類）
ツルムメモドキ　ハリブキ　タラ　メダラ
ツルデマリ　オホバマサキ　ホツヽジ　エゾウハミヅザクラ
マルバシモツケ　ミツバアケビ　サイハダカンバ　バイクワウツギ
スノキ　タカネナヽカマド　ベニダウダン　キバナノタニウツギ
ミヤコザヽ　エゾイチゴ　オホカメノキ　ナガハノシラカンバ
ヤハズハンノキ　ホツヽジ　サハグルミ　ウラジロノキ
マルバシモツケ　シロシヤクナゲ　ヒロハノツリバナ　クマイチゴ
ヤマシバカヘデ　アヲハダ　ミヤマシグレ　ミヤマサルナシ
イタゴカヘデ　（以上木類）

十一日少し曇る、朝七時に宿舍を出でゝ案内を先に立てゝ行く、十町許下ると、牧場がある、馬が放し飼にしてあつた、向ふの高地に上る、此處も草原で牧場の一部になつて居る、大木が三本ある處で、案内が休むんだ、一同少憩の後、木山に入る、右に谷川左に山あり、上ること里許にて少し平な處がありて、樹蔭に清水が涌出する、此處より先には水の出る處は無いといふ事であるから、充分に飲んだ、此少し手前（テマヘ）に佐野常民氏の所有地の標木が立てゝある地面あるのを見た、夫より峰づたひにて迂回して進み、馬背の如き處に出づ、此邊根まがり竹人の丈より高く、生茂り、此をくゞる時だにが體に附いて困つた、又大木が並んで倒れて居る處もあつ

た、これは三十五年の暴風の風道に當つた塲處であるそうだ、川股の宿舍より約二里半許の處に、一軒の小屋がある、此邊すべて馬背の如き山の峰通りを行くので、兩側の谷が一眸の中に入りて壯觀であるらしいが、惜しい事には天氣がくもりて遠くが見ねなんだ、行き〳〵て、遂に人足繼立(ツギタテ)の山小屋に着いた、小屋の中を覗くとチャンと主人公が居て曲物の材を割つて居る、先づ一安心をなし、小屋に入りて辨當を遣ひ、三十分位休み檜枝岐(ヒノエマタ)へ案内の事を依頼し、駄賃は先例に從ひ一圓二十五錢と定め、相談が出來た、早速仕度をなし出で立つ四五丁許行きて國境に達す、此處には亦一軒の小屋があつた、此少し手前にて清水の出る所に山椒魚の小さいのが居るのを見た、峠より少し下りて路傍にをさばぐさの多く繁茂する塲所があつた、又水ばせをの多き處なども あつた、前の山小屋に着いた頃より雨が降り出して、だん〳〵本降りとなつた、が此邊は木山なるゆへ餘りひどくはふらなんだ、一里半許下りて谷に下り、橋の流れ落ちた塲處を通り、川の縁に下り、川を越し向の川縁を行き、ソレヨリ又石河原にいで、川の中を無茶苦茶に下る、此間が長い一里許行きて小き土橋のある處にいで、漸く人道に出た、右岸の平地に移り小憩す、此處に榜示杭があつて村より二里と記してあつた、段々人家が見えて來た、第二番目に現はれた家で草鞋を求め、漸く蘇生の思をなし、五時に檜枝岐の旅宿に着いた川股より峠まで四里、國堺より檜枝岐まで三里半としてあるが、下りの方が骨が折れて遠いやうであつた。なんでも四里半位はある。

これで山越は濟んだのであるが、此道は餘り人が通らない、日露戰爭破裂前露國公使館員がコック一人を連れて、探險に來て遁ほつた、其時巡査が荷持に爲て附て歩行いたとの事を聞いた跡で考へると、此日は非常な冒險をやつたので若し山小屋に案内が居ないとなると大變な事であつてとても始末がつかないのである、此檜枝岐より先はチャンとした村道が有て少しも差支が無い、此日三宅氏の採集せる植物の種類は左の如し、但し昨日採集のものと同品は記せず。

ヤマソテツ	キヌガササウ	ミヅバセウ	マヒヅルサウ
ゴゼンタチバナ	ハナウド	ヤマゴバウ	サンカエフ

オホナルコユリ　ムラサキヤシホツヽジ　オホバノボダイジユ　ミヅキ
（以上川俣附近の產）
フキ　シロウマガンピ　ヤナギラン　マツムシサウ
サハアザミ　ヤヘムグラ　シチトウ　ヲサノハグサ
ミツバワウレン　マムシサウ　オニグルミ　ワウレン
イハナシ　ミツモトサウ　モミヂトコロ　クロヅル
トリアシミヨウマ　イヌスギナ　サハアザミ　トクサ
コタニワタリ　オホイタドリ　モミヂカラマツ

十二日は、同郡（南會津郡）大宮村大字山口へ志して出掛けた、ソレハ、此村に猪苓產地を心得て居る人が居るからで、ソレハ山內茂三郎といふ人である、途中宮澤村に回はり河原田盛美といふ人、此人以前農商務省に出て居た人で今では縣會にでる人を訪ふた、此人も多少猪苓の事を知つて居られるとの事であつたから、面會して訊ねたが、得る所が無かつた、三宅氏は宮澤村に用が無いから、眞直に山口へ出掛けて、此處の宿舍山口屋で落ち合つて、僕の此家に着いたのは、五時頃であつたが、晩に山內氏に面會して、明日猪苓產地を實見する事を相談した、山內氏は此村にある小林區署世話人で、村の學務委員をもして居る人で、此邊の事情に明るい、自分では猪苓を見た事はないが、猪苓を掘た人を知て居るとの事で、明日其人を連れて來るとの事であつた。

十三日、朝曇る、朝八時頃八十以上の老翁が一人出て來た、此は昔猪苓を掘つた事のある人だそうであるが耳が遠くて一向に話が解らない、其內に宿屋の近所に住する漢方醫で馬場といふ人がやつて來た、此人の話に其病家の內に一人の窮民が有つて、猪苓や其他の山野の產物を採集して、生計を立てゝる者がある、此男は二三年前に多量の猪苓を掘つたとの話であるから、此老人よりは其人の方がよからうといふ事になり、老翁は斷つて歸すことにした、やがて山內氏も來て同氏を案內として、前記の窮民の住村木伏（コブシ）村といふへ出掛た、里程は一里もあつたかと思ふ、村に行き其人を尋ね當てゝ、猪苓產地へ案內して貰ふ事になつた、いぶせき伏屋の

中に老母と二人で住でいるので、丁度留守であつたのを、見付て來て出掛ることに成つた、産地は同村内桑窪の内小字一町八反の北側で、官林の地内である、道の無い傾斜の急な山の南側を木根岩角を攀ぢ、荊棘を排いて、上つた、サテ先年猪苓を掘つたといふ所を、朝から掘り初めて午後一時になつても一塊も見當らない、此處は山の峰に近い處で大ならの木が立て居るが、峰の脊の處の木は、大風の爲に顛倒して山が明くなつて居る、以前と狀態が變つて居るらしい、ソーシテ前の時取り盡して、今は種切れとなつた物と見えた、二十間四方位の地面を隈なく探がしたが、ツチトリモチ（蛇菰）といふ寄生植物を一つと、ヲカイモリといふもりの類二疋とを得たのみであつた、雨は降り出す一同落膽して、猪苓掘りは此處より歸へし、予等二人は山を下りる事となし、此度は北側へ下つた處が、段々下りて來る途中木立の中で、山内氏が足元に大い菌の生へて居るのを見付た、喜んで近寄つて見るとまがふ方のない猪苓マイケタケである。其時の予の喜は譬ふるに物なしで、コレハナンデモ天の冥助に依るならんと思ふた、根を掘て見ると猪苓がチャンと附て居るソシテ其猪苓はブナの木の根に附着して居る此は猪苓がブナ（山毛欅）の木に寄生するものなる事を明に證明する事が出來る好個の標本であるから掘取つて學校へ持歸る事にした、此日惜い事には、山内氏が菌をもぎ取つた、今日は寫眞器械を持來らなんだが、猪苓マヒタケの猪苓より生じて居る所を寫眞に取る事が出來たら、一層面白いのであるが、もぎ取てはソレが出來ない、併し大切に此結實體を胴亂に入れ宿舍へ持歸り、翌朝之を寫眞した。

十四日曇る、朝七時宿舍を發し、九時に昨日の塲處に着いた、今日は寫眞器械を持來りて、林中の模樣、猪苓の地中に在る有樣等を寫眞するのである、今日は案内者なしにて山に上つた爲め、道を失し、大分山中を歩行いたがトウ〳〵昨日の塲所に着き、首尾好く寫眞を取り、午後一時頃下山して、宿舍に歸へつた、コレデ主なる用事が濟だ譯であるから他の二箇所へ行くのは見合す事として急ぎ歸京するやうにした、コレハ往復十二日の豫定であるからデ長くは居られない十五日には山口を發し同郡田島の方に出た、途中針生峠といふ三里の峠がある、之を歩行いた、此間は人力車がきかない、峠の先に針生村がある、針生より、田島へは人力車が通ずる、寫眞器械の外山毛欅の根へ猪苓の附た標本は、此迄は人足に擔がせて來たが、此處からは人力車に載せる事が出

來て助かつた、田島に一泊したが、今夜大雨の最中近處に落雷して、雷火が起り家を燒いたが、直に消火(クシトメ)した。十六日晴、人力車にて若松に向つた、里程十二里ありといふ車賃は二圓を拂つた、途中大沼郡川路村なる初瀨川氏方を音訪れ、同家に一泊し人參の病害を見、翌日若松に行き、夫より歸京の途に就き、瀛車にて上野停車場に着き再び下界の人間となり了つたコレデ話は濟んだ譯であるが、前の木伏村の猪苓掘に同地方にて食用にする菌の種類を聞訊した其答を御負けに書付る事として、イヨ〳〵御免を蒙る事といたさう。

△獅子茸(シタケ)(ぶな原に出る)
△椎茸(シヒタケ)(なら、くりの木に生す)
△いはたけ
△一本濕地(黒みあり)
△法印もたし(是は日光にて袈裟たけといふもので白い毛の如きもの)(の生へている菌でなら、くりに生ず梅酢に漬けて食ふ)
△とんびまひたけ(茸の表の色とびいろなる故に名く)
△はつたけ(ぶなの下に出る松原に出るものとは同名異物)
△ますたけ(あかきのこ滑かなりといふ)
△舞茸(マヒタケ)(ならくぬぎの立木の根に出る)
△まつたけ
△わかへ(白ぶさ、黒ぶさの二種がある白ぶさは早く出で黒ぶさは晩く出で此はぶなの木に出る)
△濕地(シメヂ)
△ぶなまひたけ(是猪苓まひたけの事なりぶなの根に出る)
△てんぐたけ(ぬめりいぐちの事らし)
△はふきたけ(本白く末赤きもの)
△きくらげ(ぶな、なら、くはに生ず)

又毒菌を食ひて、中毒したる場合には、蕁荷の根を煎じて服用するといふ。

仙元嶺と鐘乳洞

梅澤親光

東京府下第一の高山と稱せられて居る西多摩郡の雲取山から東へ連つた脈が關東平野に終らんとする前五里、秩父山塊の東端に拔海五千餘尺を以て雄を稱するものは仙元嶺(センゲンタウゲ)の峰である、その一方の麓日原(ニツパラ)までは東京からわざ〳〵出掛る人も少なくはないが「無比の險路」「熊、狼等の徘徊」等の定つた謳し文句におびえてこの嶺を深山幽谷か何ぞの樣に考へ仙元越えの計畫は抱いたのみで引返すのが大抵である、然し何と云つても嶺は人

が越す爲に開かれた道故少しも危險等のあるべき筈はないのであるから こゝに昨年の春日本博物學同志會で 同地方に催された採集旅行の記事を以て自分が見たゞけの眞相を紹介し諸君に御一遊を御勸め申す次第であるのです。

明治三十八年四月一日。雨天ではあるが定日であるからと甲武鐵道飯田町驛に參集した一行は市河三喜、和泉友太郎、石川丈助、鳥山悌成、小川弘太郎、小谷國次郎、片平重次、田中健太郎、田中五一、内藤堯寶、山中太三郎、福岡磯次郎、小泉和雄、岸田松若、關戸信次の十五氏と自分である、他の驛から參加する人の便利の爲最滊罐車に近い一室を占め定刻を少し遲れて午前五時〇二分に發車した、これに牛込驛で武田久吉氏信濃町驛から河田默、柳澤秀雄二氏新宿驛で岡見愼次氏が加はつて二十名となつた、雨は漸々烈しくなつて來る。

六時二十分立川驛で下車して青梅鐵道に乘換えた、この滊車は石灰石の運送が主な目的なので乘客は二の次と云つた次第であるから一等客車は無く全體不潔極まる客車は一車の大さが概算高さ二米突長さ三米突幅一米突半定員十八名と云へば大體想像出來るであらうが速力は走る犬に少し劣り震動は「がた馬車」にやゝ勝る其上發車時刻は極て不正確であるまづ圓太郎滊車とでも稱すべきであらう、やがて發車したが市河、小谷兩氏の樣に平常から修養を積んだ人の他は朝が珍しく早かつた爲眠い連中も寢られぬ内に八時四十分終點の日向和田驛に下車した、この驛の大時計は自分及び知人が見た時は何時も『不良』の貼札がしてあるが餘程修繕しにくいのでゞもあらう。

一枚の桐油紙に雨を凌いで先登に立つと傘、外套、蓑、合羽思ひ〳〵の雨具を着て進んで來る一行の姿が頗面白い、多摩の清流を左に對岸吉野村の盛過ぎた梅を遠望しながら幾度となく景の美を賞しつゝ一里許で二股尾についた、妻坂峠への道の分岐點桃の名所である、うんかの樣に飛んでをるキヨコバヒの群を衝て進む路傍にはエゾスミレが幽しい香氣を放つて居る、雨で眺望のきかないのは頗遺憾であるが川が朧になつた景はまた一入である、樂な道故雨も一興と澤井も通ぎ鳩が巣淵の名勝る名だけ聞たばかりで見もせずに櫻橋、茶堂橋なぞ名ばかり雅な橋を渡つて小丹波も過ぎ棚澤の瀧とか云ふつまらぬ瀧には目もくれず採集したくも何もない道を徐に進んで白丸から金剛岩等を通つて日原川の氷川橋を渡つた、この橋は日原川が丹波川と合流して多摩川にならんとする少し前で上手に水車を望んだ景は頗よい、午後一時氷川の三河屋に休んで辨當を使つた、氷川はこの邊では大きいのだがつまらぬ町である。

分れ〳〵の一行も追々三々伍々到着し充分休んでさて 二股尾からの人足を歸して日原までの人足を賴むと 時刻が遲いから一泊料を呉れと云ふので是非に及ばずそれで賴んだ眇の男である。小川氏は寄て來た「ゴム靴」の底が破れたので草鞋にはきかへると云ふので小谷氏に「草鞋には左右がありましたつけか」と聞いた流石の小谷氏もこの返事には頗弱したらしかつた、尤もこの邊では「わんらじ」と看版に書てあるので觀察の精い小川氏の事であるから何か異點があるのを見出して左右を尋ねたのかも知らぬが何しろ一笑柄となすた足るものであらう。

二時三十分殿となつて氷川を出發し日原川の右岸に沿ふて進んだ、日向和田から氷川までは五里弱で氷川から日原までは三里とも二里八町とも云ふが二里半位であらう、日原川は多摩川の一支流と稱してはあるが氷川邊では往々丹波川より水量が多いことがある、水は丹波川より餘程清いと云ふ話しを聞てをつたが別に左樣な差は見出せない、碧の深潭、白い激水、「ばら流し」の杉丸太何れも目に樂しい、道は二人幷べる位な樂なもの

岸は高いが大した事もない、一里許で大澤村を過ぎる有名な立岩もよいとも思はなんだ、桐陰會雜誌第二十六號の秩父紀行と云ふのにこの邊の叙景が詳しく出てをるその一節に『一寸と注意を起したのは溪を越した彼岸の嶺が稜々たる巖石により成り立つてる所がある其の項の方に眞白な棒が見ゆる。八百メートル位距つてるのだから確實にはいかぬが三四尺位の長さである。此所は有名な鐘乳洞に近いから多分鐘乳石だらうと云評定だ。人は勿論猿でも攀ぢれない險崖だから、此地開けない以前より幾千年。雨に洗れながら寸一寸と伸びたのであるだらうと想像した』との文がある、自分達はかゝるものに注意を引かれなかつたのか雨で曇つた爲判然せなんだか分らぬが何しろその實狀を知らなかつたので確かには云はれぬが雨に洒された處に鐘乳石が生じ然も寸一寸と伸びるとは頗不思議である、他にかくの如き例を聞た事もなし又かくの如き鐘乳石の生因も知らぬから他日行かれる諸君が充分留心せられん事を希望しをきます。

山岳重疊の間を日原川を數十間の脚下に見アヅマイチゲの白花ハコネサウの翠葉に目をなぐさめられホソバコケシノブを味ひ等して進むと前の人足が歸つて來るのに會た、泊ると云たのは如何したと云へば「まだ日がありますから大澤村まで行くのです」と平然たるものである彼等はかうして不當の賃金を蠃けるのです實に惡むべき手段ではないか、爪先上り爪先下り大澤から一里強で路はやゝ下つて川に近くなる「カシカの瀧」とか云ふのが左方にある小さなものだ、日原の大橋を渡つて少し登れば日原である、氷川からの道は都大路とは比較出來ぬが山道と云ふ程大したものではないまた日原から氷川まで川の中を徒渉して行たと云ふ人もある程の由であるから霖雨の後等に道が崩れた處で大した心配は入らぬゞ信じます。

日原は山又山の奥ではないが大抵のものは氷川まで買ひに出ると云ふ不便な處宿屋は二軒ある一つは原島政吉（山上（當字）と云ふ）の家で他は原島熊次郎（水元屋）でこの一村は皆原島姓である、吾々は取付きの大きな家即原島政吉方に宿を定めた、海拔七百餘米突。

自分の着たのは五時四十五分であるもと〳〵採集が目的であるものだからひどく足が遲いと云ふ次第ではないが餘分の時間を要したのだ、入浴もすみ空腹にも不味い晩食も濟で明日の仙元越えを主人に相談すると「仙元は尙殘雪を存して越えられぬ事はないが東京の人等には頗困難です、何に致せ此處から二里普通に登りそれから二十町縱壁の如き登りで頂上まで三里で雪は四尺もありますからまづ腰迄入るとすれば二里降つて浦山までが精一杯です」と漢語を面白く使つての物語話し半分に聞ても中々物恐ろしい、まづ行て見ねば分らぬから人足を賴むと「人足一人は精限りで三貫迄しか持てません冬等は外套三枚を持たゞけでぶつ倒れた位で中々牛や馬と一所にはなりません何に致せ探しておきませう」と云ふそれも客たる自分等が頭を下げて精々賴んでの返事である、さて寢る段になると夜具が足りませんから一枚へ二人づゝと云ふその一枚が幅二尺許なのでとても二人寢られたものではない、自分は前に一度此家に泊つた手心があるから鳥山生と「左樣な事が出來るものか」と談判すると「そんなら出してやれ」と云て人數だけ持て來た萬事この流義である、他の水元屋の方は狹くて六七人位が關の山ではあるが頗親切であるから多人數でない限りそちらへ泊るがよいであらう。

採集品も少ないので整理も早くすまして十一時頃には大抵眠りについたが河田氏だけは十二時過ぎまで壓搾をやつて居た。

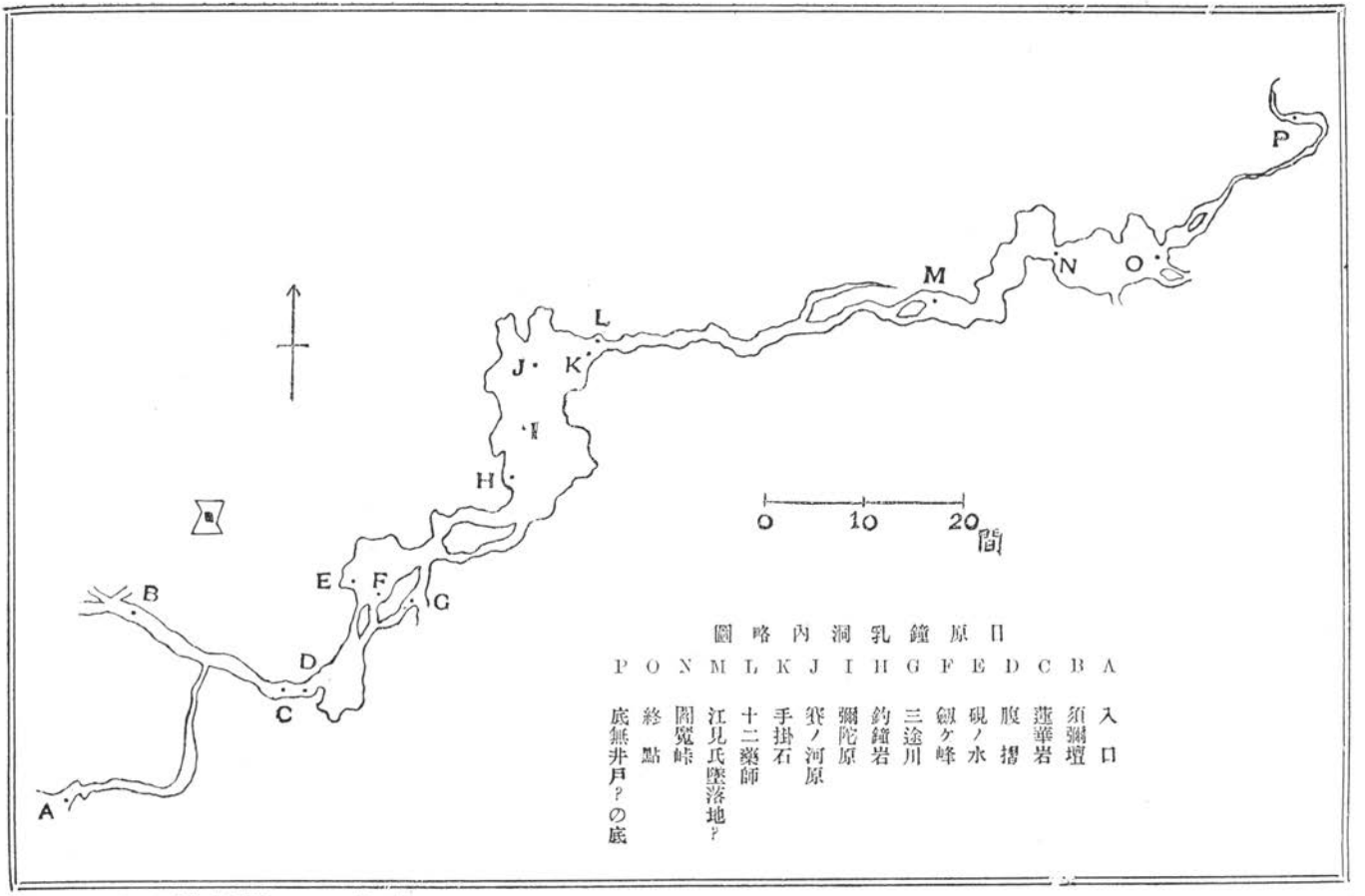
○仙元嶺と鐘乳洞　梅澤

こゝで横道ではあるがこの日原は江見水蔭氏が怪洞、竇境等の稱で紹介した日原鐘乳洞に近いので それを見物に他所から大分人が行くのである自分は前に明治三十五年三月二十六日にその洞へ行た事があるから序に紹介する事とします。

前夜の虚待は今回と大同小異であつた、同日午前六時半一行二十二人は案内者原島源吾と共に山上を出た、村を外れ黒門を過ぎて行くと道が分れて左天眞山右大和菊水山としるべがある、洞は大和菊水山即一石山にあるので右の道を日原川の左岸に沿ふて進んだ天氣は頗よい、やがて長さ十六米突許の立派な獨木橋を渡る橋下の水量は日原邊より多いかゝ思ふ程である、そこは少し平地があつて大日堂がある日原から二十町と稱する道はやゝ細くやゝよくないが奇と險で出來てをる等の形容詞は嘘である、日原川の一支流大日谷川とか云ふ殆水のない川を渡れば早洞の下である左は有名な梵天岩、東京府鄕土誌には「頂尖りて形奇なり」とあるが左樣でもない。

この洞は明治二十七年に東京の尋常師範の生徒八十人が入つたのが名を知られる殆初めで二十九年に第一高等學校の下呑、道呑、唧呑と云ふ二人が頗詳しくしらべ校友會雜誌第五十六號に三呑著薩の名でその探驗記を圖までそへて示した、其他三十年には同校の七寸生、邪苦戒生、突天生の三氏が入洞した、三十一年に某中學の生徒二人が洞内に迷つて死にかゝつた、三十三年に片岡侍從が入つた等大分有名な事實があり同年十月江見水蔭氏が探驗隊と云ふものを組織して入洞しその記事を御伽小説になれた名筆で多くの圖や繪や寫眞と共に少年世界へのせてから頗世に知られるに至つたのである。

不等邊三角形なした穴の向つて左手の入口を衝つて入つたシラカンバの炬火、アセチレンランプ、西洋蠟燭等の火で近くを照らして細い〳〵道を曲り曲つて三十間も行とやつと立て歩ける丁字路の處へ出る、左は後刻として右へ進むと蓮華岩と云ふのがある本來八葉だとの事だが一つしか見えぬ他のは空氣で出來て居るのかも知れぬ、その先きが腹摺で片岡侍從が肥大の爲通れずに引返したと云ふ處ではあるが丁字路になる少し前の方が何分の一と狹いこゝは立つたまゝ腹も摺らずに樂に通れる、大分洞が廣くなつて蝙蝠が澤山棲んでをる、少し狹まると道が分れる左はほそい右は更に分れるがその右は大分細い左を進めば前の左の方〻合するこゝが合天井（ゲフテンジヤウ）と云ふので劔ケ峰（ケンミネ）の側であるこゝの天井はアセチレンランプの光りやマグネシウムの光りでは照らせなかつたから大分高い案内は五十丈とか云た、こゝも廣い洞で弘法大師の硯ノ水と云ふのがある筈だが一向判らない、こゝを右へ下ると三途川であるが歸りとして行くと道が分れる右がよい進んで左の道と合すると非常に廣い洞へ出た、長さ三十間幅十間とか云た、釣鐘岩、彌陀原等案内が云ふが何處とも分らずに登ると死出ノ山と云ふ頂上は賽の河原と云ふのだ、弘法大師の手掛石と云ふのを越すと十二藥師と云て藥師の形をした石筍が十二本立て居たと稱する跡がある、前に某師範の生徒が入洞した節かき取てしまつたのだと云ふ事だ、かゝる名のあるものは保存して置きたかつたものである、それも石筍の標本にでもするつもりであつたのなら格別だが左樣でもなくたゞ戯にやつたのだと見えて重かつた爲か知らぬが洞を出てから歸りにそこらに捨てゝしまつたとは他日人の師となるべき徒の仕事として呆れないわけには行かぬ、何しろ惡むべき所爲である、この處に今神體即その石筍の代りに一本の幣束が立つて居る、こゝがまづ通常の人の來る終りでこの先きは弘法大師が入るのを禁じたと稱するのである、こゝからは岩壁の凸凹が甚しく降りであるから可なり歩きにくいが案内の足痕をつけて行けば樂だ、やがて


A
B
C
D
E
F
G
H
J
K
L
M
N
O
P
0
10
20
間
A 入口
B 須彌壇
C 蓮華岩
D 腹摺
E 硯ノ水
F 銀ケ峰
G 三途川
H 釣鐘岩
I 彌陀原
J 洞ノ河原
K 内手掛石
L 略十二藥師
M 圖江見氏墜落地?
N 閻魔峠
O 終點
P 底無井戸?の底

○仙元嶽と鐘乳洞　　樺澤

又道が分れる左は行きどまり右を行くとまた分れる左へ行くと江見氏の墜落したと云ふ岸の上へ出ると云ふので右を行た、その崖は右の道の左手にあつて存外勾配がある墜落等が出來る筈はない轉り落ちても大した傷を負ふ處ではない、江見氏は後に崩れて勾配が出來たのであらう等と云はれたが當時某氏が撮影したとか云ふ繪の樣な寫眞をよーく見た上何とも諸君の御推察に任せる、多分墜落した崖と云ふのは他の處なのであらうと信ずるより他はあるまいと思ふ。穴が大分廣くなると下りも爪先下りから坂道位になつて來る、泥灰の崩解した爲かこの邊には大分土がある、左右が石灰岩なのは云ふまでもない、やがて閻魔峠と命名された一寸した絶壁(?)を上り燈籠岩と云ふものも知らずに降ると洞の終點で入口から百六米突日原より七十米突降つた點についた、これが終點とは云ふものゝ尙三個の穴がある底無井戸と稱せられたもので中央のは左の穴に通じてをる事は明に見えてをるが左右の二つは先が分らない、勿論井戸と云つてもやゝ急な傾斜なので竪穴ではないのである。

さて案内の言によると右の穴は江見氏の一行で降つて見たが底に至らなかつたがその後三十四年に獨逸協會の人々が來て三十間降つて底のあるを確め更に左の方の穴へ入つて五十間も降つたが繩が不足で降れずに終つたと云ふ事だ、尙又先日村の者が二三人で降つて見たが穴が少さくて駄目だつたと云ふ、それで一行中であまり肥て居ないで丈夫な四人が降りて見る事となつたその内には今回の同行者たる市河、鳥山二氏も加はつて居るやがて四人は案内と共に降つて行つたが二十間許りで細い穴がやゝ廣くなつてその先は極めて細いので案内者と市河氏は留まつて他の三人は胴を摺る小穴を降つて遂に終點より二十三米突降つた處で穴の極點に達して歸つて來た、即底まで至つたのである自分が親しく入つたのでないから確言は出來ぬが麻繩も用がなかつたと云ふ一事で何やら繩が不足でやめた人のある穴とは考へられぬ、左の方の穴は大分急で滑りやすく繩でもなくば降り難いであらう。

これで極點を極めたものとして八時四十五分に舊路を戻つた注意して見るとまだ横穴があるそれらの底までよく究めねばこの洞の極まで至つたとは云ひ難いまた止りと云ふのも穴が人が通れぬ程細くなつた事で消えてしまうのではないが、何も吾々は探檢等云ふ物好きを喜ぶのではないのだからこれに留めたのである、九時十五分に三途川へ降つた、この邊に小さい鐘乳石があるが大きいのは何處にもない、歸りは大分急いだので入口の丁字形の左へ行た人は少ないこゝは須彌壇と云て平常水が溜つて居る由だ、當時水はなかつたが泥深いので一番先へ行た自分も三股になつた處までゝ引返し狹く細い處を這ひ出したのは九時五十分であつた。

油煙によごれた顏を洗つてテングテフが多い熟路を戻つて十一時半には山上へと歸つた。

思はず横道に暇取つたあまりいゝ心地の處ではないが一度は入つても面白い洞である、尙詳しい洞内の記事は博物之友第二卷第十二號及び第十三號に當時の事を事實以外の事迄も交ぜて出てをるから參照されたら面白からう。洞内の圖は其時村松茂氏が書かれたものを基として心付た箇所だけを修正したものであるが三呑菩薩の圖、江見氏の圖等より何分か眞に近いと思ふ、併し決して正確と云へる樣なものではないであらう。

四月二日、雨は少しあがつて居る、關戸氏は用事がある由で獨り直ぐに歸京する事に決し殘る一行は十九人となつた、やがて人足が來たので主人が「仙元を越にて大宮まで荷を持て行てくれ迷ふ路が多いが御前が行けば大丈夫だから賴む」と云ふと「何しろ雪があるから今日は歸れないから

な」と思案して見せると主人は迷路が多い、道が峻しいから荷があつては駄目だと散々吾々をおどして「では今日と歸り即明日と二日分の賃錢に大宮の宿泊料を戴てやる事にしたから」と云ふ人足は尚「だが雪と雨で道が悪いから草鞋が六足は少くとも切れるから」と云ふ主人はまた「尤だ」を數回繰返して「では草鞋代を二十錢增しででも行く事にしう」と云ふと人足も承知したので吾々も止むなくそれで二人をやとつた。

元來仙元嶺は前にも言たが割合に越えた人は少ない殊に明治三十一年十二月二十七日には東京府尋常中學校の生徒多田賢護、井上貞一二氏が凍死したので大分世に恐れられて居る、その兩氏の凍死始末を學友會雜誌第二十八號から抜書して見ると『兩氏は昨年(即三十一年)十二月二十五日秩父郡日原なる鐘乳洞に至りて礦物を採集せんとし手に斧を携へ肩に石袋を負い早朝新橋を出發し日向和田驛にて下車し玉川上流の河岸に沿うて登り小丹波の伊賀屋に泊し二十六日鑛石を採集しつゝ氷川に至り日原川に沿うて山路日原に向ひ同所水元屋に投ぜり翌二十七日午前五時床を蹴て起ち案内者を雇ひて一石山にある鐘乳洞に至り鑛石を採取し九時に至り一ど度日原に歸り辨當の用意をなさしめ浦山に向つて出發せんとせり時に天候朦朧をして細雨止むときなく旅舍の主人は出發を制し此地はかく微雨なれども山頂に至らば必ず降雪ならん常に往き交ふ獵師どもすら猶ほ恐るるに部に住み給ふ人々には大に困難し給はん一日滯留して明日を待ちて出發せられよと止めしも血氣勃々たる二人何條些々たる降雪に恐るべき脚絆の紐ひきしめて出發し登ること二十餘町樹根を求めて腰をすゑ殘を開いて腹を醫し勇を鼓して益々上る果せるかな漸く上るに從ひて雪は降りしきりて既に一寸以上の積雪となり見るまに二寸以上を積みぬ上ること一里餘にして山脊に達し東に進む或は嶮崖を攀ぢ或は斷岩を踰え羊腸たる山腹を進むこと一里漸く仙元峠に達せり。抑も二人の所持せし地圖は參謀本部二十萬分一にして該圖によれば日原より北に向つて進こと一里半にて山頂に達し山脊にそひて東に進むこと僅に十町直ちに路を北に下り二里餘にして浦山に達するものゝ如し然るに實際に於ては山脊を東すること一里餘にして北に向ふを以て今此の仙元峠に至りし時は二人は之れ道を誤りて仙元峠を通り過して遙かの東に至りたるものと想像し實際浦山に至れる道を以て他の路と誤認し遂に西に引歸へして二人の想像せる仙元峠を求めんとし足を限りに西せしものゝ如し時に雪は益々降りしきり乾坤只見るところ白皚々道路は何處の點に向つて馳するかを知らず僅に樹木の繁茂せざる地は道路なりとし益々勇氣を鼓して進みぬ時に日は既に山の端に隱れて四顧蕭條一の人語なく一の人家なく只聞ゆるものは飢狼の遠く食を求めて凄然吠ゆるあるのみ雪は益々はげしさを增し滿天只白雪と化し寒氣凜烈として身をさくばかりに烈風北より吹いて二人の面を拂へりさなきだに險崖絶壁を以て名ある秩父の深山に分け入りて此慘憺たる風光に會して二人は如何なる感を抱きけん今日之を追想するだに いと痛ましく或は樹根に攀ぢ險崖を蹴たふし樹蔭を求て息ひ溪流を掬して飢を醫し或い歩み或は息ひからくも半里餘の地を戻れり會々一條の道路北するものあり險崖により手をかざして北方を見れば此の地を越えて秩父の廣濶たる盆地を見遙に浦山の田家の燈光模糊の間に認めければ二人は之れに力を得必死となりて此の處より山麓に向ひて飛ぶか如く走るが如く此の深谷に向ひて飛下りしなり之れぞ二人の生死の別るゝ處なりと後に至つて思ひ合されげる抑も此の谷は秩父山唯一の險所と稱せられ四十有餘度の勾配をなして底ひもしらぬ深谷なり二人は解けたる草鞋の紐を結ぶに暇なく落ちたる手斧を拾ふに時なくこけ轉びつ二十餘町の谷底に陷りぬ時に四面暗黑にて咫尺を辨ぜず先に見たる人家の燈もいづこにか消えて方向を知らず會々潺々たる小流雪を分つて流るゝものありければ二人は溪流に喉をうるほ

○仙元嶺と鐘乳洞　梅澤

し疲勞を醫したるものゝ如し時しも夜は益〻深く雪は益〻強く寒氣益々烈しく耐え難く僅に所々に點在せる枯木を集め火をなして暖を取らんとせしも寒氣劇烈にして手凍え身痺れて木枝を拾ふ力なく僅に五六本の小枝を集め手帳及地圖を破りて火を點ぜしも終日の雪行にマッチはしめりて火を發せざりき暑熱の際と雖雪の絶えたることなき此の深谷に陷りて點火せんとするに術なく今は最後なりとや思ひけん井上氏は寒氣の爲めに石の袋を枕として淦然不歸の眠に就きぬ之れを見たる多田氏は急を人家に報じて共に之れを救はんとし二十間ばかり進みしが已れも次第に身體の自由を失ひたふれたる樹上に身を横へて昏頓として白玉樓中の人となりぬ時に十二月二十八日午前四時の頃なりけん雪は晴れて十五夜の月は西天に出で我信愛なる二人の青白き顏を照し一聲の寒雁高く北風に鳴きて曉星猶明かなりしならん。因に云ふ二十八日より一月八日に至るまで二人の死體は發見せられず八日に至りて初めて獵師の爲めに見出され煙にして東京に送られしと云ふ』と云た次第である大げさ過ぎてはおるが當時の狀況を親しく目にした樣に事密かに調査された報告者の手腕は實に感ずべきものである、作り話しでもかく迄うまくは判るものではないであらう。

茲に自分は謹で今更に多田、井上兩氏を吊するが兩氏が日原川の左岸に在る日原を其右岸に指定した程出鱈目な參謀本部の地圖にたよつて冬の雪中を主人が親切に留めるのを強て登山された大膽さには呆れざるを得ない、兩氏の凍死の直接の理由は正にこの無鐵砲より來たのである、然し誤つた路を示して兩氏を深谷に陷れた參謀本部二十萬分之一輯製圖は確かに兩氏を殺したとの責に任ずべきものであらう。かゝる次第であるから自分等も春であるから大丈夫とは思つたがかくも不親切な主人に賴みかくも人の惡い人足を是非なくやとつたのである。

午前八時山上を發した直ちに急な登りである頗急だ人足が後から來て「何しろ富士せんげんと云ふお山だから大抵ぢやありませんこれで二里登つて後がまたひどいのだから」と云ふいゝ加減に聞き流して行くとまた「先はずつと一本道で迷ふ事はないから御先へ御出でなさいわし等は荷が重いからゆるりと參ります」と云ふ迷路が多いと云た原島政吉の言は早嘘になつてしまつたのだ、二十町許登ると大分樂になる人足の言もあてにならぬ事甚しい、暑いので襯衣を脫で進んだ空は少し晴れ時々日光が洩れる、四分六とでも云ふべきお天氣だ、小川氏は荷を人足にたのんで手ぶらなのにも係らず頗まいつて「遲れたら浦山で泊る事としてゆつくり參りますから御先へ」と云ふ一行は分れ〳〵だ。

谷間に殘雪を求めルリタテハを追ひながら行くと一つの山の項に達した日原から一里許であらう、此所は檜木休場（ナラノキヤスンバ）と云ふと人足が云た道の左手に項が雪に隱れた雪の峰がある雪取山だと云ふ事だ、晴天の日はこゝから富士も見えて眺が甚よいとも云ふた、左もあらう。

少し降つて再登りそれから峰の尾を爪先上りに歩のである桐陰會雜誌第二十七號の秩父紀行の中に『皆はもう降りか是は有り難やと俄に勇氣が出た。成程一時はずんと降り、奈落の底へ落る樣で有つたが極まりは甚しい勾配な登り。其又苦いこと甚しい。そして之れが二里餘も續くのだから堪らぬ』とあるのは多分此所の事であらうが昇降共左程ひどい事は少しもない、また同紀行に『此峠は餘程人通り少いと見えて一抱位の樹木が路を塞いで倒れてるのもある、上下の昇降。左右の迂回。道路の經濟上不利益なること夥しい』とあるこれが三十八年七月十三日の紀行、また校友會雜誌（一高）第六十七號の三坊即前記七寸生等の草鞋紀行には『抱圍にあまる大木狼藉として道に横はる』とあるそれは三十年四月一日の事である、が幸にもその間即吾々の通つた時には左程の事もなく時に倒れてをつた木もあまり太いものではなかつた、折々路の右遠く雪間に大岳山（オホタケ）が見えるがぢさに

消えてしまう高さはこの邊と同じまたは少し低い位である、多田、井上二氏の降つた道と云ふのを隨分注意して見たが遂に分らなかつたから從て秩父盆地、浦山の家等が見えもせなんだ霧の爲めかも知れぬが多分今は左樣な人を殺す樣な危險な道は無くなされたのでもあらう、殘雪は路傍に澤山ある、登り八分降り二分で何れも緩やかである。

休場から一里餘來ると霧が濃くなつて四方の樣子は一向分らない十一時に道に休んで晝食をした、辨當の飯は壓と米とが半々位それにかびた梅干の核と皮ばかりのが附てをるのと香の物だが空腹故仕方なく詰こんで出發し雪で渴を醫してやゝ急に三町許登つて十一時五十分頂上へついた、日原より登る事八百餘米突海拔千六百米突許である。三坊子の草鞋紀行によれば頂上には二本松があり、また棚澤の方へ越える道もあるとの事だが何れも分らないたゞつぶれた小祠があつた許りである、これで人足や山上の主人が云つた二里登つた上二十町急に登ると云ふ言は全く嘘かさもなくば上下を轉倒したもので實は一里許やゝ急な登りで後二里許は爪先上り時には降る事もあると知れたのである。

內藤、田中五、小川三氏等の遲れた人々をまち合せて降りにかゝつた、降口は一寸分りにくい雪が一面である、降口の立木の幹をはいで前年の十二月に白馬會の探景隊等の通過したのが記されてある、人足が三枚の外套でつぶれたと云ふ節はこの時であらう、何しろ生木の皮を剝ぐのは美術家の樣な自然を愛する人にも似合はぬ事である。

降りの道は頗非常に急である其上雪が然も前日來の雨でゆるくなつてをるので滑る事甚しい、雪は四尺はないが三尺位は積つて居た。小川氏、岸田氏等が滑るのを止まらうとボウダラの幹につかまつて刺にさゝれたのは側で見る目もみじめであつた、更に面白いのは武田氏が金襟を着けて歩いた事であるこれで、滑りはしない筈だが雪が軟いので一歩々々踏込んでしまうから矢張り同樣で一向効能がない、某學士が信州の白馬ケ岳の有名な大河渡しの雪は非常に堅くつて金襟も立たぬから用をしないと話されたのを聞たがそれとこれとは硬軟の異い一對であると思ふ。

嶺頂では濃霧四塞であつたが少く降ると少しうすくなつて足下に一二の山頂を認めた、有馬山等云ふものであらうとその位置から推定した。滑る事は益甚しい、斜に滑つて肩まで入た人もある、座禪をくんで滑る人もある、かけ降らうとして谷へ滑り落ちそくなつて立木に支へられた人もある人足は「用心なさらぬと路をどちらへ外れても障子岩瀑へ陷てとても昇つては來られませぬ」と例の嚇しだ、地圖に障子岩瀑とあるのは路の左手の筈だが或はこの邊では落ちた處を障子岩瀑とでも云ふ方言があるのかも知れぬ、何しろ用心に如くはなしと注意して徐かに降つた、小川氏が「人の滑るのを見るのは面白いものです」と云ふとたんに四這にずる〳〵滑つたのは一入面白かつた。

少し降ると道が分れる上の道を進むと人足に呼び戻された、その道を行くと障子岩瀑へ落ると云ふ、まさか昇つて來られぬ處へ道をつけておく筈もない多分近道でもあつたのだらうとは思つたが仕方がないから戻つて右へ折れて進んだ。

殘雪に滑り雨の爲め泥に滑り原の中林の中を通つて二里で川邊へ出た嶺の終りで神社がある、進んで川を渡ると浦山（ウラヤマ）で、頂上邊から埼玉縣秩父郡なのである、浦山は日原にも劣る處で流石の小川氏も泊る氣はないと云た程であつた。又どんな足の弱い人で朝氷川から出發したとしても此處に泊る必要は決してないのだこれで仙元嶺は日原より登り三里その途中は日をよける蔭もない草山が多いから晴れたら頗難澁であらう、浦山から

○仙元嶺と鐘乳洞　梅澤

は登り二里道は隨分急であつて中々樂でない、而して他の峠の樣に山の凹所を越ずに凸點を越えるのである。夏の暑い日又は雨　雪等の日は見合はされた方が安心であらう、危いと云ふのではないが勞ばかり多くて面白くないからである、道は一本しかないから地圖をあてに等さへしなければ迷ふ事は決してない、安心して可なりである。

浦山へ着たのが午後二時三十分、これから荒川の一支流に沿てカタクリ、アヅマイチゲ等を路傍に見て行くデンゲデフが大分居た、道が極めて平なので人足は急に早くなつて大急ぎで先へ行た、吾々は別に急ぎもせずに進む、川の景は中々よいが日原川を見た目からは水が左程清くないので第一見劣りがする。

無理につめ込んだ辨當が懸しくなる程空腹を感じたが浦山には何もない清心丹を嚙んで茂ぎ等する、武田氏が福神漬に水を割て食たのも無理はないタヲツケバナをさへ食ひ兼ねない程である。

一度あがつた雨が再ふつて來たから雨やみにと影森の鐘乳洞を見た。入口に戸があつて案内を賴まずには入れないのだ、案内の小女が「何々だとかや」と云ふ無責任な說明をしてくれる内には鐘乳洞、石筍等の立派なものも多いが粘土で作つた三寶荒神、人手で積だ大黑の福俵等もあつた、また、府下の某中學校の生徒が鉄いたとやら云ふ跡も多い、行拔けの小さな洞ではあるが鐘乳洞としての價値は日原のよりよい、尤も日原には尙澤山立派な鐘乳洞があるとの話しであるからそれらと比較したら何ども知れぬ。

洞を出て見たが雨は漸々はげしい間道を急いで行つて七時四十分浦山から四里と云ふ大宮鄕の關根屋方にとまつた、大宮鄕は秩父盆地の大部で中中盛である關東平野の西端であらう、今日の整理、明日の手當もすんで早く寢てしまつた。

四月三日、日原の人足が歸ると云ふので荷物をしらべると河田氏の合羽が不足だ、「降り口の木の枝へでも引かけて落したのでせう」と平氣で居るがそれをしばつて居いた繩はちやんとあるし人足がその合羽をもつて居た事は確かに浦山で認めたから左樣云たが「歸路にありましたら御とゞけ申します」と云たこの人足の行動に徵して考へると多分知人の家へでも落して來たのであらう、そして六足切れると云た草鞋は昨日日原を出たまゝのを穿て其上宿屋から一足宛をもらつて歸つて行た實に立派な詐欺師である、前に原島政吉が人足は牛馬同樣に思ふなど云たのも牛馬にも劣るものと思へと云ふ意味であつたであらう、何も吾々は贅澤な旅行するのではないから珍味はいらぬが旅宿は親切正直を旨としてほしいものである例へば山上の如く嘘をならべて人を嚇し人足と共謀して詐欺を行ひ不叮嚀不親切を專一と心掛ける樣な仕方は實ににくむべきものであると思ふ、それに引かへこの關根屋の如きは頗親切で心地がよかつた比較した故も少しはあらう。また旅宿は親切な上正直な人足を便つてほしいものである昨日の人足の名を失したのは遺憾に耐えぬがもし他日日原で人足を求める事があつたら充分注意せねばなるまいと氣が着たから一言しておく次第であります。

河田、武田、山中、小泉の四氏は採集の都合で早朝妻坂峠の方に行かれたが自分は左樣な醉狂者でないから一週間頭痛を病む覺悟がなくばうつかりは乘れない馬車に乘つて羽久禮まで行くと云ふ特志家の小川氏に荷物を托し他の十三人も雨を衝て午前八時此家を出た、馬車の通ふ廣い道を、

平々凡々の處を樂に歩いて大野原、黒谷、皆野を經て荒川を左岸へ渡つた、この邊から砂金が出ると云ふ話、雨は漸くはげしい。

金崎、藤谷淵を經て十二時本野上で書食しエゾスミレ、蛇紋岩等を採集して中野上、野上下、矢那瀬と過ぎる荒川は水量が頗多く下流が戸田附近の如く小さからうとは信ぜられぬ程である、水は多摩川には劣るが流石にまだやゝ清い流は左して早くはない。

午後一時半に羽久禮(ハクレ)へ着た、大宮から七里と云ふが大分近い遲れた人を待合はせて三時六分に上武鐵道に乘て出發した、河田氏等の一行は峠の頂上に至らずに引返し大宮で晝食をして一行の後を追つたが遂に一瀛車後れたとの事であつた、親しく行かぬ處は別に詳しくは書く事は出來ぬ、從て妻坂峠のさまを紹介出來ぬのは殘念である。

この瀛車は青梅鐵道とは較べものではないが客車中に雨が漏つたり、警報器の紐が結んであつて引ても動かなかつたり中々面白い事がある。

それで四時二十分熊谷驛で下車し日本鐵道に乘換えて七時四十分上野驛に着てこの行を終つた。

仙元で滑つたくせでか思はずも筆が滑つて長くなつてしまつた。尙當時の採集品については博物之友第五年第二十七號に詳しく書てあるから知りたい人は就て見られたらよからうと思はれる、用もない記事に紙面をふさげた事を終りに臨で一言謝して筆をおきます。

御嶽採集記

川崎義令

明治三十八年八月二十一日午前九時、細雨を冒して飛驒の國野麥の宿を發した、クサレダマ、ハンゴンサウは三尺にも伸びて黄花をつけ、ヤシヤビシヤク、ホヤは栗の木の中幹に附着して余等の採集に任す羊腸の小徑別に變つたものもない、十一時阿田の鄕に小憩して日和田に向つた、道は彌ゝ細く行人は甚だ稀に、細雨は霏霏として旅裝を霑し、幽禽徒に樹上に鳴いて余等の行を送る、心細いこと此上ない、途中、イブキスミレ、クモキリサウ、コバノフユイチゴ、ハルトラノオ、コタニワタリ、コウヤノマンテンスギ、ヂヤコウサウ、ハナイカダ、ハスノハイチゴ、イヅセンリヨウ等を見て、二時十分漸く日和田峠の頂上に達した、雨は漸く霽れて雲おさまり、乘鞍、御岳は前後に顔を出した、其崇高さ、美しさ、とても筆舌の及ぶ所でない、下りは別にこれといふものもなかつた、三時半日和田について、中切長作方に宿つた。

明れは二十二日、午前六時五十分宿を出て日和田川の南岸を泝ること凡十町、川に別れて南し、小さき坂を上つた、此所から一里許の間は一面平で、御岳の裾野といふべきである、此邊に、ナラ、シラカンバ、と交つてキハダが生えてゐる、此キハダ、これは日和田唯一の材源で御岳登山者が必ず買つて土産とする百草實はキハダエキスの原料となるもので、其所此所に澤山切り倒されてあつた、其他此平原には、ホタルブクロ、ヤブタバコ、ハヘドクサウ、チゴザヽ、ヒメハギ、ツボスミレ、ニガナ、子バリタデ、ノギラン、ミヅヒキ、キクバドコロ、ニガナ、クルマバナ、ノブキ、ノイバラ、ヨモギ、クサソテツ、イタドリ、ヒキオコシ、ケフシグロ、タチフウロ、チダケサシ、ヤマヲダマキ、オタカラカウ、ヘウタンボク、リンダウ、トリカブト、イヌツゲ、タガ子サウ、ツチグリ、ウメヅル、ユウガギク、アキノタムラサウ、オカトラノオ、シホデ、ノリウツギヲトコヘシ、マヽコナ、イボタ、コマユミ、ヒヨドリバナ、ミヅゴケ、ソバナ、シデシヤジン等があり、溪流の岸や沼地にはウメバチサウ、アリノトウ、キバウシ、アカバナ、ツリフ子サウ、アケボノサウ、ミゾホウヅキ、コウガイゼキショウ、ドクゼリ、ミゾソバ、コオトギリ、キツリフ子サウ、ホシクサ、キ、クカイサウ、アギスミレ、ヤナギラン等が生えてゐた、進むに從ひ爪先は漸く上に向き木は段々と茂つて來て、終にツガの林に這入つた、最早此邊では平地のものを交へてゐない、マヒヅルサウ、ヤマハヽコ、ホソバノヤマハヽコ、ハリガ子カヅラ、ツリバナ、マルバイチヤクサウ、シハイスミレ、アスヒカツラ、イハガラミ、ヤマトウバナシラクチヅル、シロモノ、ユキザヽなどが生育してゐた、八時四十分漸く御料局のかり上げに達して小憩したゴゼンタチバナ、コイチエウラン、コフタバラン、コウモリサウ、ツバメオモト、ミヤマカタバミ、ミヤマシキミ、ツルツゲ、ヨツバムグラ、エンレイサウ、ツクバ子サウ、ミヤマシグレ、ジンバイサウ等が足下にあつてノートに記入された。

熊笹をわけて半里計り進むと、日和田川の上流である谷へ出た、此所から一里計り此谷を泝つた、水は氷よりもつめたく足にしみ、岩はグレ〳〵して折々倒れそう、倒れてゐる大木を、或はくぐり、或は乘越えて、段段と進んだ、兩岸はそばだつた山で、トウヒ、ツガ、カツラの木など交つて、空を見せぬまでに生ひ茂り、晝

猶暗い有樣、其凄さ云ふばかりない、然し岸の岩にはタマガハホト、ギス、カモメサウ、イハボタン、イハセントウサウ、ウチハゴケ、エンビセンヲウ、ハクサンヲミナヘシ、ボロギク、バイカワウレン、クロクモサウイチエウラン、ツダヤクシユ、ハルトラノヲが生えてゐて余等を迎えた、谷の究つた所は非常の絶壁であつたが、左へ折れて繼母岳にかゝつた。

熊笹を力に、殆んど道のない急坂を登つたが、餘り變つたものも見えなかつた、案内は二度も三度も方向を間違え、漸く立木の及物跡（これは年に二三回より登らぬから道がない故方向を知らせる爲に前に行きしものが附け置きしもの）をたどつて登つた、相變らず喬木帶で、ミヤマツルリンダウ、シユスラン、バイケイサウ、トウチリラン、セリバシホガマギク、シヤクナゲ位より外には何も見出せなかつた、谷を出てから登ること一里計りで、漸く灌木帶に出た、御料局の刈上げ邊から、ボツ〳〵降り出した、雨は大分ひどくなつて來て、苔滑かな岩は辷つて中々登れない、四つ這になつて段々進むと、木は追々小さくなり、ミヤマナ、カマド、大バユキザ、、クロミノウグイスカグラ、大バノヒヨタンボク、ツマトリサウ、ツガザクラ、アカモノ、コケモ、、イハナシ、ミヤマホツ、ジ、ミヤハハンノキ等となつて、一時三十分漸く草本帶に出たが、霧は大變深し先は少しも見えぬ、足下にあるキバナノシヤクナゲ、ミチスハウ、シナノオトギリ、モミヂカラマツ、ヨツバシホガマ、チングルマ、ミヤマダイコンサウ、キングルマ、キバナノコマノツメ、コメバツガザクラ、コイハカヾミ、イハヒゲ、ツルコケモ、、ハクサンイチゲ、グンナイフウロ、ハクサンフウロ等をおぼろに眺めつゝ三時十分漸く繼母岳の頂上三角臺のある所まで達した、風は彌ゝ強く、霧は益ゝ深く、寒さ甚だ烈しくとても立つて歩くことも出來ぬ、笠を手にしつかともち、全身ぬれ鼠になつてはひながら峰をつたつた、三角臺から六七町來て、俗に高天原といふ邊まで來ると、さあ大變案内者が道がわからない樣になつた、夫れに此寒さではとても行けぬから、歸つて呉れといひ出した、これ迄案内は二三度も歸る、歸らして呉れといつたのを、無理につれて來たのに、今更此所で道が知れぬといはれて、途方にくれてしまつた、霧は彌が上に濃く、硫黄の氣さへ含んで居る、雨は衣服をとほして、寒さ膚にせまり齒の根も合はぬ、案内者は眞青な顔して、ガタ〳〵

震えて居る、時計を見ると、四時十分前、歸るにしても途のない所を五里計り、とても日の中に日和田へつくことは出來ぬ、さすれば途中で凍えねばならぬ、行くには方向が知れず、歸ることも出來ず、進退谷まつて仕舞つた、よく見ると下に二三の足跡がある、此塲合仕方がない、何れは凍死!!終に、死ぬ覺悟で、其足跡をたどつて下ることに決した、されど案内者は歸ることを主張して、容易に動かぬ、終に脅迫して從はせた、其足跡をつけて、二里計り行くと、岩影に新しい木の札が置いてある、手にとつて見ると、陸地測量部のものが、昨日來た事が書き記されてある、そこで考へた、何れ此足跡をつけて行けば、此測量の一行の小屋につけるであらう、たとへ夜に入つても、其小屋までは是非とも進み、一宿を賴もうと、同行の眞野氏及び案内を勵まして進んだ、足跡は又登つて居るので、夫れについて登つて、馬の脊の如き所へ出た、此時俄に霧が薄らいだ、少し先にぼんやりと何か見える、近づいて見ると、鳥居であつた、實に三の池の鳥居であつた、余等は幸に、道を間違えて居なかつたのである、あゝ此時の嬉しさ、俄に生き返つた心地がした。

此所からは、道もやゝはつきりついてゐるのだから、急いで二の池の小屋にかけこみ、ホット一息した、終に今夜は、こゝに宿ることに定めた。

小屋はかなり廣く、而も堅固そうに出來て居る、中には四五人の人參堀が、爐によつてゐた、十二三人の道者は今しも此所を立つて、此雨に石室の小屋へ行つて、宿らうと出かけてゐた、僕等は草鞋のまゝ、爐の側に出て、からだをあたゝめた、今迄はそれほどに思はなかつた衣服のぬれが、身にしみて來た、急いで行李をとき着替を出して着かへ、炬燧を入れさせて、蒲團の中へもぐりこんだ、折から這入つて來たは日出講の頭取で山根といふ、東濃土岐津の人であつたが、夫れが又余等の炬燧へ仲間入をしに來た、話は御岳さんの、有りがたいことから始まつて、御山の草は皆夫々の藥になるといふ樣な事に移つた、夫れで草の名をたづねて見たがとんと通じない、そこで余は胴亂を開いて、どれが何といふ名かと聞いて見た、通ぜぬも道理、彼等は一種獨特の名をつけてゐるのであつた、即ち

オンタデをイタドリ、クモマグサをシラカワサウ、イハヒゲをジヤヒゲ、ミヤマダイコンサウをタンチナ又

はワウレン

といつてゐる類であつた、話をしてゐる中に大分暗くなり、道者も大分ふえて來て、わい〳〵喧いて居る、余等は眞のある飯を漸くかき込んで、再び床に入つた、風は一層烈しくなつたのであらう、しきりと戸をがたつかせて居る、晝の勞は其さわがしさにもかゝはらず、直に眠につかしめた。

次は二十三日わい〳〵とさわぐ聲に目をさました、見るとまだ眞暗である、夫れだのに道者の連中は、已に起きて祝詞をあげてゐる、中には御座とかいふ、催眠術的の事をして居る組もあつた、かれこれしてゐる中に夜は漸くあけはなれた、道者たちは一組々々と出立して、終に三五人をのこすのみとなつた、余等は漸く起き出て、二ノ池の肉をきるばかりの水で顏を洗つた、寒いのもつめたいのも其筈、池の端には雪が澤山殘つてゐるのである、飯を食し、昨日採つた植物を整理して强力に黑澤まで持ち下らしめ、八時三十分小尾を出發し、再び三ノ池邊まで採集に行つた、今朝は幸に雨はやんでゐたが、然し風は中々あらい。

三ノ池の上には、クモマグサ、ミヤマダイコンサウ、ヂムカデ、アキノキリンサウ、アカバナ、ベニバナダイモンジサウ、ヒメウメバチ、イハキキヨウ、チシマキキヨウ、クロクモサウ、イハベンケイ、イハニガナ(?)トウヒレン、イハウメツルコケモ、、イハヒゲ、オンタデ等が岩の間に漸く生育してゐた、此所で思ひのまゝ採集して、再び二ノ池に歸り、三十六童子といふ方を廻つて、頂上に至り、神社に參詣して、十一時三十分黑澤に向つて下つた、下りは植物が見にくいのに、而も五里餘りを夕方までに行かねばならぬ始末であつたから充分に採集することが出來なかつた、夫れに餘り異つたものもなし、たゞネバリノキラン、アリドウシラン、コイチヤクサウ、イハツ、ジ等を喬木帶でさがして、雨のそぼ〳〵降る中を下つて、夕方黑澤の田中新兵衞方に宿つた、あゝ福島を發してから七日目に、宿らしい宿に寢ることが出來た。

守門嶽ニ登ル記（突貫紀行ノ一節）

越後　大平晟

第一　緒言

中越ノ重鎮トシテ、古志（コシ）、南蒲原（カンバラ）、北魚沼三郡ノ境上ニ崛起スルモノ、之ヲ守門（スモン）岳トナス。

予嘗テ、越ノ諸山ヲ探リ、奇拔銳峻ハ之ヲ八海ニ於テ、宏壯秀麗ハ之ヲ苗場ニ於テ、峻秀卓犖ハ之ヲ妙高ニ於テ觀ル、而シテ守門ハ未ダ接セザルナリ、征露第二年ノ六月一日ニハ、日本海大海戰祝捷式ヲ擧行シ、一日ヲ隔テ、我校第四學年及ビ補習科生ヲ率井、村松兵營地方ニ修學旅行ヲナシ中汽車ノ窓ヨリ銀冠ヲ戴ケル守門ノ崇嶺ヲ眺メ、之ヲ探ラントノ念愈々切ナリ。

途今年ハ、高頭君ト立山方面跋涉ヲ計畫セシガ、君ガ前年來、熱誠ヲ注ィデ編纂セル、日本山嶽志、本夏ニ入リテ、猶脫稿ニ至ラズ、是レ予ガ滿腔ノ同情ヲ以テ、之ガ完結ヲ祈ル所ナレバ、立山雄飛ハ之ヲ後年ニ讓リヌ、抑一年三百六十五日、絕エテ山ニ登ラズバ、心安カラザルノ我身、如何デカ、蟄居シテ夏季休養ノ賜ヲ棄ツベキ。

高頭君ハ、予ニ羽前ノ三山ト、羽後ノ鳥海トヲ探ルベキヲ說キ、同方面ニ關スル、精細ナル參考材料ヲ、東京ニ於ケル其編纂部ヨリ寄贈セラル、近ク守門ニ謁センカ、將タ遠ク鳥海ヲ訪ハンカ、彼此ノ交涉委員ハ、予ガ「ポーツマウス」ニ會セリ、偶〻遠征ヲ許サヾルノ事情ニ接シ、予ハ遂ニ守門附近ノ跋涉ニ決セリ、希クバ鳥海ノ山靈予ガ背カザルヲ他日ニ待テヨ。

第二　風雨

題シテ突貫紀行ト云フ、既ニ奇ナリ、今又劈頭風雨ノ二文字ヲ標スルニ至リテハ、益怪ナラズヤ、實ニ此行ハ、風ニ櫛リ雨ニ浴シ、雨ヲ食トシ風ヲ衣トシ、突貫ニ次グニ突貫ヲ以テス、蓋シ山人空前ノ奇行ト稱スベシ。

八月ニ入リテ以來、曇又雨ノ天候モ、日露媾和談判第一回會見ノ當日トイフ、九日ニハ珍ラシクモ俄然雲斂マリ、烈日地ヲ照ラシケレバ、愈天界ニ清遊スベク、旅裝ヲ整ヘヌ。

翌十日、東ノ空ハ旭ノ光輝ケド、西北ノ風腰來リテ、天候何トナク嬬和難ヲ報ズルモノヽ如シ、サレド、久シク續キシ不良天候ノ改革ニハ、此風寧ロ必要ナラメナド、自分免許ノ天氣豫報ヲ信用シ、見逃セントテ來リ居シ從妹新野ナホ子ト、從姪小柳マサ子ニ別ヲ告ゲ、八時校門ヲ出發シ、同四十五分來迎寺發ノ汽車ニ乘リ、九時四十分見附停車場ニ下車セリ。

淫雨行潦ノタメ、長岡以北田圃ノ冠水甚ダシク、恰モ湖水ノ觀ヲ呈シ、見附以北三條ノ間ハ、鐵道濁水ニ沒スル數尺、汽車ノ運轉休止スルニ至レリ。

見附ノ停車場トハイヘド、其實却テ今町ニ近ク、見附町ヘハ二十四町アリ、朝來ノ風ハ益激烈トナリ、剩ヘ雨亦加ハリケレバ、歩度ヲ早メテ見附小學校ニ入リ、喫飯ス、當校ハ半部改築ニカヽリ、新舊構造ノ面目雲泥ノ差モ啻ナラズ、建築法ノ進度ヲ示セル、好標本タルノ觀アリ、午後校長織田石太郎氏ノ來校ニ接シ、茶菓ノ饗ニアツカリ、緩話ハ風雨ノ緩和ヲ待テド、其効更ニ見エザレバ、氏ノ周旋ニヨリテ、腕車ヲ雇ヒ、玄關ヨリ乘リ込ミシハ、正ニ午後ノ三時ナリキ。

見附ハ戸數一千五百餘、橡尾ニ通ズル要路ヲ占メ、商業頗ル繁昌シ、殊ニ近年ハ木綿織、所謂見附縞ノ外、羽二重織勃興シ、凡テノ織物ヲ合スレバ、年額約三十萬圓ニ上リ、古來掛直ノ名ヲ博セシ桐油ハ、産額約三萬圓ナリト云フ。

第三　橡尾郷

見附ヨリ道ヲ南々東ニ取ル、車ハ始終追風ニ送ラレ、順風ニ帆トイフ形式ハ、有リ難ケレド、幌ノ内ニ幽囚ノ身トナリシハ、山人ノ最モ不得意トスル所、風嗷々、雨沱々、僅カニ幌ノ隙間ヨリ視界ニ入ルハ、數十歩ノミ、小貫（コツナギ）ノ部落ヲ過グレバ、谷ハ愈狹マリテ、道ハ高低紆曲シ、橋ヲ渡ル二、丘ヲ超ユル三、最後ノ長キ丘ヲ經、眼界再ビ開ク所、之ヲ橡尾ノ町トス、見附ヲ距ルコト約三里、時ヲ費ス約二時間、約ニヨリテ小林洗次郎君ヲ山城屋（小林宗平）ニ訪フ、君ハ當家ノ養子トナリ、今ハ別家シ、猶當家ノ番頭ヲナスモノ、山城屋ハ當地方有名ノ酒造家ナリ、入浴晩餐ヲ終レバ偶主人宗平氏信州澁ノ溫泉ヨリ歸宅ス、談話數時、九時同家ヲ辭シ、洗次郎君ノ宅ニ宿ス、朝顔ノ盆栽ハ此地ニモ流行セルニヤ、家ノ内ニモ、檐端ニモ、紅白褐紫ノ色ヲ呈シ、花冠夕方猶萎マズ。

十日　陰雨風　朝　片貝　七六度　晝　見付　七四度　夕　栃尾　七四度

樹木ヲ倒セル暴風モ、夜來全ク斂マリテ、十一日ノ朝、空ハ東天微カニ日光ヲ漏シヌ、拂曉洗次郎君ノ案内ニヨリテ、校後ノ寶光院、愛宕山ニ登ル、寶光院ニハ弘法大師、天下一筆ノ涙立不動尊ノ畫像アリ、愛宕山ハ脚下ニ橡尾町ヲ瞰下スベシ。町ハ西谷川ヲ前ニ控ヘ、附近ノ郡落ト共ニ屏風ナセル山脈ノ内ニ圍マレ、自ラ別天地ヲナス、宜ナリ霜臺公ガ幼時難ヲ此地ニ避ケ、他年雄飛ノ素ヲ作リシヤ、西谷川ハ此地ニテ東谷川ト合シ、刈谷田川ノ水源トナルモノナリ、本町戸數約一千、紬ノ産地トシテ、其名高ク近年「アリザリン」染法ヲ傳習シ、織物業組合ヲ組織シ、染織講習所ヲ常設シ、斯業ノ發展ヲ圖リシタメ、明治三十三年ノ如キハ、其産額百數十萬圓ニ上リシガ、爾來凶作ニ次グニ、戰時ニ伴フ經濟ノ緊縮ニ接シ、且ツハ近年各府縣ニ於テ、斯業勃興ノ影響ヲ受ケ、今ハ殆ド半額ニ減ジ、剩ヘ之ガ利潤ノ大部ハ、見附商人ノ壟斷ニ歸スト云フ。

洗次郎君ハ、曾テ予ヨリ教ヲ受ケシモノ、守門山上ノ慰ミニトテ予ニ「ビスケット」ヲ贈リ、且ツ店員ヲシテ予ガ荷物ヲ擔ギ、當地小學校長中川文造氏ノ宅マデ、案内セシム、氏ガ長男ハ、先年守門ニ登リシモノナレバ、探山ノ材料ヲ得ルノ便アラントテナリ、氏當地製産額統計對照表、織物同業組合業務成績報告書ヲ予ニ贈リ、且ツ予ヲ案内スベク、一婦人ヲ周旋セラル、當地ヨリ橡堀マデハ、一里强ナレド、先日來ノ暴雨ニヨリテ、東谷川ニ架セル大川戸橋陷落シケレバ、赤谷ヲ迂回セザルベカラズトハ、橡堀小學校長藤田五太郎氏ノ急報ニヨリテ、知リ得タリ。

當地ノ名物、秋葉三尺坊ヲ觀ル、入口ノ標柱ニハ、「扶桑二社秋葉大權現」ト書セリ、鐵ノ欄干モテ、上ヨリ下ニ中央ヲ區劃セル、急勾配ノ長キ石

段ヲ登レバ、所謂秋葉山三尺坊アリ、額ニ金字以テ

三尺坊大士

勅賜總持樸仙老禑

ト書ス、三尺坊ノ本地ハ觀世音ナリ、境内高爽ニシテ頗ル廣ク、老松亭々櫻柳柯ヲ交ヘ、風景佳ナリ、近時御慶事ノ紀念トシテ有志相謀リ、公園ヲ造レリ、西ニ本莊氏ガ籠レリトイフ鶴城山ノ城址アリ、秋葉山腹ノ禪刹常安寺ハ、謙信公ノ幼時文ヲ學ビ武ヲ練リシ所、公ノ自畫肖像、鬼小島彌太郎ノ陣太刀ヲ寶物トス。

案内ノ婦人ハ、年二十五六、予ガ登山旅行ヲ聞キ、已ガ父ノ富士ニ登リシコト、夫ガ八海ニ登リシコトナド物語リ氣象頗ル快活ナリシ。

九時椽尾ヲ發シ、東谷川ニ沿ヒ、赤谷ヲ紆リ、十時四十五分椽堀小學校ニ著ス、校ハ高等科併置ニシテ、昨年ノ新築ニカヽル、當地ハ、守門山下ノ谷奥ナレバ、予ハ藤田校長ノ好意ニヨリテ、本校ニ宿セシナリ、偶勝田氏ハ妻君ノ重病ニ接シテ、歸鄉シ、宿直員武士俣貞治君代リテ接待セリ、土地ノ舊家植村氏、及ビ增澤幸吉君等來遊ス、增澤君ハ附近ノ學校教員ニシテ、征露ノ軍ニ從ヒ、病魔ノ侵ス所トナリ、歸鄉セルモノ、曾テ守門ニ登リシ由ニテ、其實況ヲ語レリ、時ニ天晴レ渡レリ、室ハ疊新タニ、採光通氣申分ナク、爽快言ハン方ナシ。

校内ニ設備セル据風呂ニ入リ、晩餐後武士俣君ノ案内ニテ、巢守神社ニ詣ヅ、數十階ノ石段ハ甚ダ急勾配ヲナシ、境内廣カラザルモ、樅杉ノ大樹蔚々蒼々タリ、刈谷田姫ヲ祭ル、石段ニ向ヒ入口ノ左方ニ貴渡神社アリ、俗ニ機堂ト稱ス、當地戸數二百五十、寛政年間里正植村某縞紬ヲ創製セシハ、椽尾紬ノ鼻祖ニシテ、今猶養蠶及ビ紬織ノ盛ナルコト、鄉中ノ巨擘タリト云フ。

十二時蓐ニ就キシニ、次日予ヲ守門ニ案内スベク、賴ミ置キシ剛力ヨリ、支障ノタメ辭職申シ出デケレバ、武士俣君ハ起キ出デヽ、周旋シ、辛ウジテ代人ヲ得タリトテ歸校セシハ、午前二時頃ナリキ、君及ビ藤田氏等ノ好意ハ、予ガ深ク謝スル所ナリ。

前東谷校教員安田君ハ、予ガ守門登山ヲ聞キ、同行セントテ、此夜椽堀校マデ來ルベク申込ミシガ、是亦支障起レリト見エ、遂ニ來ラザリシ。

佐藤貞太郎君ヘ發信ス

十一日　晴　朝　栃尾　七三度　晝　栃堀　七七度　夕　同　八〇度

第四　守門岳

十二日午前ノ五時、寢惚眼ヲ擦リツヽ、起キ出ヅレバ、臺所ニテ甲斐々々シクモ、立チ働ケル小使夫婦ハ、膳部モ既ニ用意シケレバ、喫飯結束スル程ニ、ヤガテ案内者山本新吉(三十六歳)ハ、二間許ノ釣竿ヲ肩ニシテ來レリ、カネテ準備セル白米一升五合ニ漬物、毬瑯引キノ小鍋、山鉈、草鞋等ヲ彼ガ背ニセル、半叺俗稱「テゴ」ナルモノニ入レ、六時二十分、椽堀ヲ出發シ、東方東谷川ノ溪間ヲ辿リテ、紆曲上下シ、十時二十分元川瀧ニ達ス。

今年ハ新舊兩暦一致シ、此日ハ盆ノ十三日ノ前日ナレバ、墓場ヤ屋敷掃除ヤラ、買物ノタメ、町ニ通フモノヤラ、田舍ノ往來モ賑ハシク、予ガ案

内者ヲ得ルノ困難ナリシモ、亦大ニ之レニヨレリ、サレド茲ニ二十世紀ノ聖世ニ於テ、猶痛歎スベキ迷信ノ俗界ヲ蔽ヒツヽアルヲ記セザルベカラザルアリ、予ガ椽尾中川氏宅ヲ辭セントスルヤ「貴下ニ注意スベキ事件アリ、ソハ別儀ニアラズ、本年ノ霖雨洪水ノ災難ハ、役人ガ御守門樣ノ上ニ櫓(三角點)ナドヲ立テタカラ、神樣ノオ怒リナレバ、櫓ヲ引摺リ卸セバヤナド、當地方人民ノ流説夥シキ中ナレバ、眞面目ニ守門探檢ナド公言スルニ於テハ打殺サレマスゾ」ト、氏ハ哄笑ヲ以テ送リ、予モ「或ハ名譽ノ戰死ヲ遂グルカモ知レヌ」ト哄笑以テ別レシガ、後案内者雇入ノ段ニ至リテ頗ル其眞相ヲ知リ得タリ、溪間里人ニ逢フコト數回、案内者ハ常ニ彼等ノ問ニ「旦那樣ノ案内シテ岩魚釣リニ行クサ」ノ答ヲ以テセリシハ、後難ヲ防グベキ遁辭ニシテ、今朝彼ガ竿ヲ肩ニセル意味モ、亦始メテ讀マレヌ、實際此溪流ニハ、毛針ヲ用ヒテ岩魚、山女ヲ釣ルモノ多キ由、案内者ハ折角持チ來リシナレバトテ、數度試ミシモ、全ク不漁ニ了リシ。

此溪間木天蓼甚ダ多ク、往々一叢ニシテ、數斗ノ實ヲ得ルコトアリテ、一升ノ價ハ常ニ玄米一升ノ價ニ相當セリト云フ、蔓生ノ灌木ニシテ、春ノ若葉食フベク、實ハ上品ナル辛味ヲ具ヘ、氣根ヲ養フノ効アリトシ、又猫ノ特効藥トシテ、古來著シ、溪間又猕猴桃ナルモノアリ、コレ亦藤生ノ灌木ニシテ、甚ダ木天蓼ニ似タレド、其葉ニ毛アリ、其實肥大、秋末熟シテ食フベシト云フ。

元川瀧ハ高三丈餘、幅約二間、瀧壺徑五六間、壁崖ハ稍黑ミタル火岩成ニシテ、粗大ナル節理ヲ呈ス、櫓ノ古木アリ、右崖上ヨリ蔽ヒカヽル、此所ヨリ辛ウジテ攀ヂ登ルヲ得ベシ、尙溪流ニ沿ヒ、點々タル巨石ノ上ヲ飛ビ渡リ、進ムコト數町ニシテ、河流ト別レ、右方ノ雜木林ヲ縫ヒ、穿チツヽ、漸ク傾斜加急ノ山巒ニカヽル、雜木林ハ檜、楠、榛、文字ノ木、「コブシ」等ヲ主トシ、其間犬榧、椿、「アヲキ」、「ヤドメ」、「ユヅリハ」等之ヲ塡塞シ、巡ノ形トヲ、殆ド無ク、宛然隧道ノ中、唯大體ノ見當ヲ立テヽ、進ムモノナレバ無駄足ヲ運ビシコト、數知レズ、登ルニ從ヒ、樹木漸ク矮小トナリ、眼界稍開ク所、黃蓮採ガ野宿セル遺跡トシテ、焚火ノ餘燼藁小屋ノ狼藉タルアリ、尙進ムコト少許ニシテ、芝生ノ地ニ出デ、巨岩ノ上ニ石像アルヲ發見シ、「不動ノ岩トハ是ナラン、果シテ然ラバ、岩下清泉アリトノコトナレバ、探リ見ヨ」トイヘバ、案内者ハ搜索ノ結果、清泉ヲ發見シ、水筒ニ汲ミ取リ來リテ、予ガ烱眼ヲ讃歎セリ、蓋シ案内者ハ早春結雪ノ候登リシモノニテ、夏時ノ登山ハ始メテナリノコトナリ、時ニ午後二時二十分トス、此邊黃蓮及ビ萬年杉多シ、同四十分前守門ノ項上ニ達ス、項上石楠、イタヤ楓、「マンサク」、小檜、榛、熊笹等ノ身長許リニ生ヒ茂レル裡ニ僅カニ認メ得ベキ二個ノ小石祠アリ、一ハ「巢守大神明治十六年」、一ハ「守門大明神嘉永元年」ト刻シ、相接シテ背中合トナリ居ルハ、古志、北魚沼ノ對抗標ト知ラレヌ。

祠側ノ崖頭出ヅレバ、土人ノ「タゴヂ」ト稱スル長一尺許ノ「高山チガヤ」崖側ニ茂リ亘リ、恰モ青氈ヲ布ケルガ如キ中、深山萱草ノ花、點々橙黃色ヲ呈スルアリ、當歸ノ白簇花ハ、深島齟ノ紫紅花ト、赤土ノ崩レ肌ハ谷間ノ白雪ト相映ジ、亦一段ノ趣味ナキニアラズ、眸ヲ左方ニ放タバ、八十里越ヲ隔テ、三峰並秀富士ニ似タルハ、鐵鑛脈ヲ以テ有名ナル粟ケ岳(四〇〇〇尺)ニシテ、御神樂、飯豐ハ其北々東ニ連リ、會津諸峰ハ其ノ東々北ニ攢マル、首ヲ右ニ轉ゼンカ、近ク面ニ當リ、宛然天ヲモ摩スベク、聳ユルモノ、是レゾ守門ノ本山ナル、本山ハ青雲山ト稱シ、海拔五千七百尺、俗ニ之ヲ奥守門ト稱シ、又大白川守門ト稱ス、前守門ハ所謂樣堀守門ニシテ、古志方面ノ登山者ハ、概ネ此ニ止マルモノナリ、前守門ト奥守門トノ間ニ中

守門アリ。

本山ニ登リテ、青雲ヲ踏マズンバ、未ダ守門登山ノ卒業證書ハ附與スベカラザルナリ、案内者ハ予ヲ以テ、普通登山者ニ擬シ、且又青雲ニ至ル、經路ノ甚ダ覺束ナクヤ感ジケン、稍趦趄逡巡シ、予ヲ動カスベク試ミントセリ、サレド予ガ斷乎トシテ、前進ノ態度ヲ示スヤ、可笑クモ内心ノ困却ヲ包ミテ、頻リニ口先ノ讃辭ヲ呈シヌ。

前守門山上ヨリ呼ベバ、將ニ應ヘントスルガ如ク、甚ダ近ク見ユル奥守門ハ、其里程一里强ト稱スルモ、其間峰傳ヘニ紆曲上下シ、困難ノ程度ハ時間ノ消耗ヲ以テ知ルニ足ル、三時前守門ヲ發シ、熊笹ヲ押分ケ、密樹ヲ踏ミ超エ、進ムニ、或ハ撥ネ返ス楢ニ頰ヲ打タレ、或ハ脚ヲ落シテ枝間ニ挾マレ、双眼鏡、水筒、鞄ハ抑留セラレテ、屢〻「廻レ右」ノ命ニ接シ、莫産菅笠ハ、貫カレテ頻リニ「元ヘ」ニ遭ヒ、熊笹ノ幹ヲ踏テハ滑リテ「折敷ケ」トナリ、概ノ幹ヲ渡リテハ、外レテ騎馬ノ姿勢トナリ、苦聲笑聲交々起ル、殊ニ開闢以來刈リシトイフ例シナキ熊笹ハ、高サ往々丈餘ニ達シ幹徑五分ニ過ギ、枯レ折レタルハ、恰モ鹿柴ノ如ク、行進ノ妨害タルコト夥シ「復タ太閤記十段目」トハ、案内者ノ洒落「顯レ出デタル武智光秀」ナラヌ山本新吉ガ、戴ケル菅笠ハ、天晴名譽ノ戰傷ヲ遂ゲ、唯骨ノミ存シケルガ、後油紙ヲ張リテ、雨ヲ防ギシハ、十段目以上ノ滑稽ナリケリ。

五時中守門ノ靈池、所謂御手洗ニ達ス、池ハ殆ト頂上ニアリテ、長十間幅二間、深尺許、試ミニ杖ヲ以テ、其底ヲ探ルニ、一面ノ盤岩タルコト、猶苗場頂上ノ御田ノ如ク、池中ノ水草及池畔ノ毛氈苔、亦苗場其マヽナリ、附近小池數個アリ、御手洗ノ傍ニ小石塔アリ、左ノ文字ヲ刻セリ。

大山祇命　明治二十四年　高倉村

中守門即高倉守門ハ、頂上緩斜ナル饅頭狀ヲナシテ、頗ル廣ク見渡ス限リ、所謂「タゴヂ」ケ原ハ連亘シ、一大鮮綠絨氈ヲ見ルガ如ク、本山ノ一偉觀トス、「タゴヂ」ノ間黄蓮多ク、又間々予ガ戸隱養路ニ於テ得タル、捕蟲性白花ノ、高山石菖ヲ見ル。

中守門ノ頂上ハ、概予「タゴヂ」、深山菅等ノ草本ニシテ、樹林ハ稍凹窪地ニ占殖シ、高サハ概予半身以上ニ達セザルモ、其株幹ノ蟠錯、其枝柯ノ紛密ハ、下界ニ見ザル所、一町ノ前進ニモ數十分ヲ費ストイフ有樣ナレバ、青雲山頂ノ三角點ハ、既ニ手ニ取ルバカリ、近ク見ユルモ、氣徒ラニ馳スルノミニテ、脚之ニ伴ハズ、加フルニ濃霧屢來リテ、目標タル三角點ヲ蔽遮スルニ及ンデハ、殆ド呆然悒然タラザルヲ得ズ、予ハ尚ホ霧中ニ心標ヲ定メ、剛力ヲ勵マシテ突貫セリ、此時一大危險ハ、忽チ予ヲ襲ヘリ、予ハ死セリ、予ハ萬死スベク覺悟セリ、而シテ予ハ生キヌ、予ハ實ニ萬死ノ中ニ一生ヲ得タリ、予ハ矮林紛密ノ煩累ヲ避ケ、左側ノ崖緣「タゴヂ」ノ上ヲ辿リ、手ニ樹枝ヲ握リツヽ、歩ヲ移シヽナリ、時ノ既ニ晩景ニ迫レルニ苛チ逸リシナリ、コレゾ失敗ノ原因ナル、「タゴヂ」ノ上ハ、甚ダ滑カナリ、斜面ニ於ケル「タゴヂ」ノ上ヲ渡リシ予ハ、忽チ俯シ倒レタリ、辷リ落チタリ、「タゴヂ」ヲ攫メバ、莖稈忽チ切斷シ、大地ニシガミ附ケバ、表土忽チ壞ル、墜下ハ加速動ヲ以テ續行セリ、予ハ守門ニ殉スベク、諦メヌ、幸ナル哉、脚部ヲ下方ニシテ擦下セル、予ノ右足指端ハ、忽チ小突起ナセル岩瘤ニ觸レ、上體少シク左方ニ傾クヤ、左ニ腰挾メル杖ノ尖端大地ニ突キ入リテ、墜下ハ止ミヌ、予ハ始メテ息ツキヌ、嗚呼此刹那、此一刹那ノ心緒、予亦説クコト能ハザルナリ、予ハ十數間墜下セシナリ、脚下ヲ瞰視スレバ、今十間許ニシテ斷崖絶壁、幾百仞ノ深谷ニ陷リシナリ、危イ哉ノ間ハ既ニ超エテ又警フベキナシ、萬死ヲ出デシ予ハ徐々ニ、最モ徐々ニ歩ヲ

移シテ崖上ニ還レリ、啞然タリシ剛力ハ、此時始メテ、「ヨウゴザリマシタ」ノ一語ヲ發セシノミ、時既ニ六時過ギ、靄霧益々深ク、四顧寂寞タリ、忽チ人聲ノ此寂寞ヲ破リテ來ルアリ、頻リニ我等ヲ呼ブガ如シ、我等之ヲ誰何セシモ、無線電信其効ナシ、人聲ハ正シク、三角點方面ヨリ來レリ、三角點ハ既ニ數町ノ近キニアリテ、而カモ殆ド復タ進ムコト能ハズ、遂ニ決心退却シ、御手洗ニ還リ、小矮林ヲ撰トセル窪地ヲ擇ビ、夜營ノ備準ニ取リカ、レリ、剛力ハ鉈モテ生木ヲ伐採シ、予ハ素手ニテ枯枝ヲ折リ集ム、白樺ノ生皮ハ蠟分ヲ含ミテ、焚附ケニハ甚ダ妙ナルモノナレドモ、此邊ノ樹木ハ寸徑以上ノモノヲ得ルコト頗ル難ク、又殆ド白樺ヲ見ザレバ、已ムヲ得ズ熊笹ノ枯枝ヲ以テ、焚附ケニ供セリ、協力分業ハ、山上露營ニ於テ、必至ノ勢ナリケリ、薄暗キ裡、手探リモテ集メタル燃料ハ、一夜ヲ支フベク積ミヌ、唯鍋鈎ヲカクベキ三棒工事用ノ、長キ幹材ヲ得ルコト能ハザリケレバ、數幹ヲ繋ギ合セテ、漸ク辨ゼリ、ヤガテ御手洗ノ天界蒸溜水ヲ以テ米ヲ洗ヒ炊ギシニ、何レモ炊事富番始メテトイフ新兵ナレバ、水加減ヲ知ラズ、先ヅ予ガ指揮ニヨリ、米ノ上一寸程マデ水ヲ入レシニ、水既ニ乾上リテ、米未ダ煮エズ、再ビ三タビ水ヲ入レテ、漸ク飯トナレリ、而モ上出來ノ飯ナリシハ、自分ナガラ感服ニ堪ヘズ、斯ク水ヲ要セシコト、存外多カリシハ、山上火力ノ弱キト、米ノ漸ギ立テトノ爲ナラン。

八時過ギ晩餐ヲ濟マシケルニ、佐渡山方面ニ於ケル電光ハ、漸次賑カニ、雷鳴亦漸次近キヌ、予富士ノ山頂雷電驟雨ヲ脚下ニシ、頭上快晴ノ奇況ヲ語リ、頗ル得意然タリシニ、昏未ダ乾カズシテ、雷鳴近ク身邊ニ轟キ、驟雨既ニ襲來セルニハ、聊カ閉口セザルヲ得ズ、夜風ヲ防グベク、側面ニ張リシ油紙モ、風雨ノ兩敵ニ攻メラレテハ、其効ナク、已ムヲ得ズ、毛布ノ上ニ油紙ヲ捲キ、更ニ莫蓙ヲ纏ヒ、笠ヲ冠リテ佇立シ、雨歇メバ再ビ莫蓙ヲ布キ、油紙ノ皺ヲ設ケ、顏面ニハ笠ヲ載セテ、横臥シ雨來レバ、復佇立シ、臥シテハ立チ、立チテハ臥シ、反復幾十回、一睡ヲ得ズシテ、遂ニ曉ニ至リシモ、雨猶止マズ、唯折々雲間ヨリ漏ル、月影ト、雨中ニ節ヲ守レル篝火トハ、聊カ慰ムルニ足レリ。

元來生木ハ燃エ難キモ、既ニ燃ニ附ケバ、火勢却テ枯木ニ優リ、風雨ニ抵抗スル力强シ、唯思切テ多量ニ積ミ焚カザレバ、容易ニ消滅スルノ患アリ、山上ノ生木ハ、一體能ク燃ユルモノナレド、石楠、椿ハ燃料トシテハ、不良ノ部ニ屬セリ。

十二日　不定　朝　栃堀　七〇度　中守門上　夕　六八度

雨ノ小止ヲ伺ヒテ、朝餐ヲシタヽメ、ヤガテ三角點ニ至レバ、陸地測量部員數名、天幕城内ニ立籠レリ、昨薄暮、予等ヲ呼ビシハ即チコレナリケリ、「知ラヌガ佛」トイフ諺アレド「知リナバ佛」モアルモノヲ、斯クト知リナバ、我々ハ元川溪流ノ優遊ヲ廢シ、飽クマデ三角點ニ到著スベク、方針ヲ執リシナリ、昨夜佇立ノ苦シサニ、「此處ト彼處ノ差ハアレド、守門ノ山上風ヲ衣、雨ヲ食ヒケル生地藏ノオ附合トハ、婆婆ナル哉、婆婆ナル哉、彼等モ定メシ夜モスガラ、我等ヲ評シ居ルナルベシ」ナド語リ合ヒ、部員ヲ以テ我等ト同ク、困迷野宿者ト想ヒシヅ可笑シキ。

青雲山頂ハ、地衣禿ゲテ雄石巖々、僅カニ岩躑躅ト黃蓮ト密叢セルヲ見ル、「黃蓮禿ケ」ノ俗稱アルモ宜ナリ、近ク東々南ニ連リテ、峰頭ノ凸凹セルハ、袴岳トス、西北ノ山腹八十里越ノ沿道ニ於テ、西ニ大池、東ニ雨生池アリ、其間ニ吉平アリテ八十里越山中唯一ノ驛トス、二池ノ下流ハ五十嵐川ニシテ、八木山ノ奇嶂ハ、此流域ノ支溪ニ屬セリ。

快晴ナラバ、蒲原ノ平野ヲ脚下ニ瞰下シ、日本海上ノ展望ヲ縱ニスベカリシヲ、雲霧深ク鎖シテ、雨亦止ムベクモアラネバ、斷念シテ下山ノ途ニ

フクベク、六時出發シ、八時三十分前守門ノ石祠ヲ過ギ、密樹矮林ノ裡、復迷ヒ彷フコト數度、「セィガィ」瀧ノ下流ニ沿ヒ、石ヨリ石ニ飛ビ移リ、滑リ落チテハ双眼鏡ヲ水ニ浴ミシ、岸ヨリ岸ニ漕ギ渡リ、深ミニ入リテハ「ズボン」水ヲ孕ム、十二時山小屋ニ着ス、下駄ヲ作リツヽアル老爺ニ請ヒ焚火シテ濡レタル衣服荷物ヲ乾シ、飯ヲ炊ギテ午餉ヲスマシ、午後二時出發、尙ホ河域ヲ下リ四時三十分貫木ニ達シ、大竹丑太郎トイヘル旅人宿ニ投ズ、此地北魚沼郡ニ屬シ、戸數十餘、椽尾ニ通ズル縣道ニ當レリ。

入浴シテ膳ニ向ヘバ、陰曆十三日ノコトヽテ、予ガ好物ノ赤飯ニ油揚、輪麩及蕗ノ一本煮トイフ御平ハ、筵ニ盆ノ御馳走ト讀マレヌ、慰勞ニトテ酒ヲ剛力ニ遣ハセバ、宿ノ主人モ剛力ト知リ合ナリトテ、共ニ膳ヲ持チ來リ、オ祓ナレバト予ニモ宿ム、木耳ノ三杯醋ト、木天蓼ノ漬物トハ、山間ノ名物、上戸ナラヌ予ガ切ニ歡迎スル所ナリ、前々夜ヨリノ負債タル睡眠ヲ補フベク、八時襟ニ就ケバ、身ノ横ハルト共ニ、心ハ早クモ無覺ノ境ニ入リヌ。

山麓ノ人々ガ、青雲山頂ニ登ルハ、概ネ初春結雪ノ候ヲ用ヒ、夏季ノ登山ハ、殆ド無シトイヘリ、本春初メテ三角標ヲ建設シ、測量部員ハ北魚沼郡入廣瀨村大字横根ヨリ昇降シ、頂上マデ約二里半許、此經路ハ比較的宜シトゾ。

長岡中學教員中村正雄氏ハ、本年吉ケ平ヲ經テ八十里越方面ヨリ登リシトノコトナルガ、栃堀ヨリスルハ、頗ル不可ナルガ如シ。

十三日　雨陰　朝　守門頂上　六四度　夕　貫木　七四度

第五　布引瀧

十四日午前六時起床、昨夜來宿屋ノモノニ賴ミテ、大乾燥法ヲ施セル衣服、其他ノ雜品整理モ、略片附キ、空模樣モ大ニ薄ラギ、旭光微ニ見エケレバ、十時半結束シ、越後一ノ名アル布引瀧ヲ探ルベク出發セントスル程ニ、偶大白川ノ獵夫ナリトテ、カネテ借用セル獵銃ヲ返却スルタメ、來レリト聞キ、我荷物ノ負擔ヲカネ道案内ニ雇ヒヌ、獵夫名ハ淺井寅松、年齡二十六、身ハ稍短小ナレドモ、一種ノ奇骨ヲ帶ベル快漢ナリ。

貫木ヨリ二里トイフ穴澤ニ著キシ頃ハ、快晴トナリ、時既ニ亭午ヲ過ギヌ、穴澤ハ、戸數約百、旅人宿アリ、新築校舍アリ、案内者ハ舊主家ナリトイヘルニ、立寄レバ、年ノ頃五十位ナル、主人盆ノ御酒ノ功德ニヤ、八字髯ハ餘計ナレド、金時然タル素裸ニテ出デ來リ、能クモ廻ラヌ舌ヲモテ「日那樣マアオ寄リナサイ盆ダテガンニ急グコトハアリマセン」ト引キ止ム、「日那樣ドコロカ山男デアリマス」トイヘド、頻リニ予ノ住所身分ヲ尋ネケレバ、名刺ヲ出シヽニ、「私ハ當地ノ學務委員須佐玉吉トイフモノデアリマス、教員樣ト、學務委員因緣ナイトハ云ハレマセン、マアオ寄リナサイ」ト、强イヲ引キ入レ、妻君ヤ二男子ヲ呼デ予ニ紹介シ、早速膳ヲ酒ヨト心ヲ配リヌ、予「天下第一ノ下戸ナリ」ト辭スレバ、燒酎瓶ヲ取寄セ、大皿ノ緣ヨリ緣ニ橋ナセル太キ徳ト、例ノ一本煮ノ鍊、馬鈴薯ノ葛煮等ヲ肴トシ、赤飯マデ攀シ快談涌クガ如クナリシハ、山間人情ノ淳朴掬スルニ堪ヘタリ。

盆ノコトヽテ、沼道村落、善男善女ノ晴衣着タルガ、至ル所案内ノ獵夫ト、戯言談笑ヲ交換スルハ、彼餘程ノ好遊家ト見エヌ。

穴澤ヨリ破（アブルマ）間川ノ右岸ニ沿ヒ、六時入廣瀨村大字大白川ニ著シ、學校ニ隣レル、淺井磯吉方ニ投宿ス、穴澤ヨリ二里强トス、大白川ハ戸數五十

廣瀬谷ノ最奥ニアリテ、六十里越ニ於ケル會津境ノ小驛ナリ、破間ノ元川即チ手石川ト、大白川ト、此處ニテ會ス、磯吉ハ旅人宿ナレド、茅葺ニシテ構造普通農家ノ如ク、内部ノ調度亦旅館ノ體裁ヲナサズ、唯浴室ノ廣ク、新ラシク、清クシテ、引水ノ自在ナリシニハ、豫算外ノ感アリキ。

途中水晶坂ノ銅山ヲ觀ル、鑛夫二十人許、製銅所規模甚小ナリ、係員ノ語ル所ニヨレバ、年額二三千圓ノ收入ナリト云フ、沿道處々鑛脈ノ露出ヲ見ルモ、未ダ有望ノ域ニ達セザルガ如シ。

此夜天晴レ渡リ、峽中ノ明月惜クハアレド、睡魔ニ促サレ、九時夢ニ就キヌ、此地蚊帳ノ要ナシ。

十四日　陰晴　朝　貫木　七〇度　夕　大白川　六四度

十五日ノ朝五時起キ出ヅレバ、珍ラシキ快晴ナリ、守門ノ山上、此天惠ヲ得ザリシヲ、カコウモ是非ナシ、唯驟雨ノ際ハ、大白川ノ溪流激溢シ、布引瀧ヲ探ルコト叶ハザルモ、昨日來ノ晴天ニヨリ、此目的ヲ達スルヲ得シハ亦慰ムベキカ。

高頭式君、新野カズ子、砂山シヅ子ニ發信ス。

七時寅松ヲ案内トシ、守門社ニ詣デ、布引瀧ヲ探ルベク、大白川ノ溪流ニ沿ヒ、隱見セル守門ノ山頂ヲ眺メツヽ、峽谷ヲ辿リテ、北々東ニ進ム、入口左方ノ丘陵地禿ゲ、斷崖絶壁ノ所、空洞アリ、鷹ノ巣岩ト名ク、常ニ鷹ノ巣ノ所ナルヲ以テナリ、右手ニ當リテ嶢崒兀トシテ、其頂富士ニ似タルアリ、近ゲバ怪シク、裂ケ崩レタル火山岩ニシテ、イツシカ芙蓉ノ姿ハ失セヌ。

進ムニ從ヒ、兩崖漸ク逼リテ、峽勢愈狹クナリユキ、清流奔激石ニ觸レ、巖ヲ噛ミ、雪ヲ噴キ飛ヲ飛バシ、急瀉シテ懸瀑トナリ、盤渦シテ碧潭ヲ作ル、溪流幅約四五間河中ノ巨岩怪石ハ溯ルニ從ヒ、愈多ク其高キハ熊羆ノ躍ルガ如ク、虎豹ノ嘯クガ如ク、嚴然タルハ閻魔ノ座スルニ似、兀然タルハ羅漢ノ立テルニ似タリ、其低キハ蟠レル鮫蟒ト思ヒ、群レル鼉鼉ト疑ハシム、但岩石皆圭角ナキハ、峽中轉下ノ交際場裡ニ、所謂圓滿主義ヲ執レルモノニヤ、溪中岩魚釣ニ逢ヘリシコト數々、案内者モ亦丈餘ノ一竿ヲ携ヘ、例ノ馬ノ毛綸ニ、毛針ヲ用ヒ、行々之ヲ投ジテ、予ガ貰飯ノ肴ニセンナド、頗ル勉メタリシモ、是レ全ク無効ニ歸シヌ。

急湍激流ヲ渉ルニハ、爪先ヨリ强ク駛ク、水中ニ突キ込ムヲ可トス、緩ナレバ、脚ヲ浚ハレ、流サル、患アラン。

予、碧流ノ語ニ接スル、久シ、而シテ眞ノ碧流ハ、大白川ノ溪流ニ於テ、始メテ之ヲ嘖ル、鮮綠深碧ナル岩ハ、河床ヨリ兩崖ニ及ビ、上流ヨリ下流ニ亘リ、澄徹徹底ノ水流之ヲ瀆スヤ、碧水ハ碧岩ト相映發シ、滿溪爲ニ碧世界ト變ジ、我等爲ニ碧化シヌ、目覺ムル心地ストノ形容詞ニシテ存センカ、必ズヤ之ヲ此境ニ呈セザルベカラズ、碧岩ハ稜角半透明ナセル一種ノ蛇紋岩ラシク、其風化セルハ鈍綠色ヲ呈シ、稍脆シ、溪中俗ニ星（ホシクソ）糞ト稱スル黑曜石アリ、形概ネ胡桃子大ニシテ、ヨリ大ナルモノ、小ナル者甚ダ少キハ奇ト云フベク、予ガ豆大、米大ノ小物ト、徑五六寸ノ大物トヲ採集セシハ、案内者モ頗ル感賞セル程ナリキ。

九時三十分布引瀧ニ達ス、「來テ見レバ聞クヨリ」ノ例ニ漏レズ、直下百二十丈幅二間ト號セル本瀑モ、高サハ約二十丈、水量頗ル少キモ、薄ク擴ガレル下部ノ幅ハ、兎ニ角二間ヲ許スベキカ、兩崖屈折、削立、相逼リテ屏風ヲ左右ヨリ寄セタル如ク、蟲然聳ユル所、仰イデ一綫ノ天光ヲ見ルノ

○守門嶽ニ登ル記　大平

ミ、瀧壺ハ淺クシテ膝ヲ沒スルニ止マルモ、山腹積雪ノ餘瀝落下スルモノナレバ、冷冽驚クベク、日光時ニ水烟ニ映ジテ、虹霓ヲ描キ、飛沫衣襟ヲ濡ヒ、凜然肌栗セシム、股間ニ達スル冷水ヲ渉リ、數丈ノ巨巖ヲ攀ヂ、進ムコト一町弱ニシテ、又一瀑アリ、水量相似、高サ稍低キモ、深潭藍ヲ湛ヘタルハ、頗ル凄寥ノ感アリ、此瀧溪間ノ盡クル所ニ懸リ、奇ヲ好メル予、怪岩危崖ヲ超ユルコト猿ノ如キ案内者モ、茲ニ至リテハ更ニ一歩ヲ加フベクモアラズ、唯岩燕ノ屢頭上ヲ掠ムルアリ、乃チ引キ返シ、布引瀑側ノ岩上ニ踞シテ、晝飯ヲシタヽム。

案内者ハ、十數年間、熊狩ニ從事セルコトヽテ、初春雪ヲ踏デ熊ヲ驅リ、此溪中ニ追ヒ込メバ、必ズ捕獲シ得ルコト、此溪間ニ於テ崖上ニ攀ヂ登リ得ルハ、唯左崖ニ於テ一ケ所アルコト、熊狩ニ出ヅルニハ、唯氷ト味噌トイフ單純ナル食料ヲ準備シ、一週日乃至十日間モ山宿スルコト、時ニ風雪ニ鎖サレ、飢寒ニ苦メルコト、銃丸功ヲ奏セズシテ熊ノ嘗リ來ルニ逢ヘバ、六尺柄ノ手槍ヲ以テ、之ヲ突クカ、若クバ組ミツキ、短刀モテ之ヲ刺スコト、一組人員三四人ナルコト、同業者中熊ノタメニ、眼球ヲ掻キ潰サレシモノ、下顎骨ヲ抓キ取ラレシモノアルモ、未ダ生命ヲ失ヘリシモノナキコト、熊一頭ノ價大ナルモノ稀ニ百圓ニ上ルモノアルコト、膽ノ價五十圓以上ナルモノアルコト、熊膏草ヲ食フニ至レバ、膽ノ價大ニ低廉トナルコト、肉ハ概ネ獵夫ノ腹ニ葬リ、膽ト皮トヲ取入ノ主眼トスルコト等、コレ彼ガ前後物語レル談片ナリ。

瀧ノ附近ハ、崩角稜々タル火山岩ニシテ、其若葉ヲ食料ニ供ストイフ、岩蕗、深山水菜點綴シ、下流ニハ粘板岩、沙岩等ノ水成層ガ、火山岩ト相錯綜スルヲ見ル。

布引瀧ハ、守門本山南々東ノ溪間ニ懸リ、大白川驛ヲ距ル一里強溪間、凡テ絶壁割立ス、故ニ所謂大白川守門ナルモノモ、大白川方面ヨリハ、攀登スベカラズ、六十里越ト八十里越トノ間ニ於ケル溪間ニハ、布引以上ノ莊大ナル、瀑布アリト、案内者ハイヘリ。

布引瀧ヨリ下流ニ下ルニ從ヒ、峽谷漸ク擴ガリ、兩崖雜樹漸ク加ハリ、楓嶺甚ダ緊リ、水清ク石鮮カナルコト、他ニ多ク其比ヲ見ザル所ナレバ、冷風秋ヲ報ズルノ時、白石ハ紅葉ヲ翳シ、紅葉ハ藍水ニ映ジ、藍水ノ藍ハ碧岩ノ碧ト相須チ、黄、褐、綠ハ、更ニ紅葉ヲ縫ヒ、白沫ハ更ニ白石ヲ綠ドルニ至リテハ、滿溪ハ是レ宛然、天女錦ヲ織ルノ觀アラン。

十時三十分、布引瀧ヲ辭シ、午時磯吉方ニ歸着喫飯シ、宿料ノ三十錢ナリトイフニ驚キ「二度ノ晝飯分ハ」ト問ヘバ「皆デ三十錢デアリマス」ト答フ朝夕二飯ノ外、持飯ヲ加フルニ、叮嚀ナル晝飯ヲ饗シナガラ、猶三十錢トハ餘リノ淳朴ニ感佩料ヲ拂ハザルヲ得ザルナリ、コヽニモ名物ノ木耳、岩魚ヲ賞味セシガ殊ニ鉛筆大ノ薇ノ一本煮ハ、其美味實ニ無類ナリシ、木耳ハ客ノ需メニ應ジデ、販賣セリ、又味噌漬トセル菌ノ見慣レヌニ、其名ヲ問ヘバ「シヤツポタケ」ト稱シ、厚ク白ク、褶アリテ、一塊ノ目方、往々七八貫ニ達ストイヘリ。

鞍掛山に遊ぶの記

高頭式

僕は此二號には『三ッの黒姫山に登るの記』を書くことに豫定して居た、元來黒姫といふ山名は日本全國を亘つて僅に三ッあるのみであるが、ソレが併も僕の國に二ッと僕の國界に近い信州の北端に一ッあるといふに到つては奇といはんければならない、ソレトモ何か因緣のあることであらふか、標高は信州にあるものが一番で一九八二米突、其次が越後の西頸城郡にあるもので一〇九六米突、最も低いのが刈羽郡にあるもので八八四米突である、此の三黒姫山の中で信州の黒姫は多少の記文があるが越後殊に西頸城のものは記文らしきものさへない、信州の黒姫は僕が東京へ往復する途中快晴なれば犀潟邊から豐野邊までの三十八哩間位は終始望見することが出來、刈羽の黒姫はコレモ晴天なれば僕の庭前から分明に其錐形を認むることが出來る、西頸城の黒姫は七八年前糸魚川町の裏から仰いだことがあるが判然と記憶して居ない、僕は近來北越の雪消え即ち四月頃は國に居たことがないので諸山嶽の雪消えが明でないからソレで三黒姫といふのであつた。然るに目下千百米突の妙義山が一點の殘雪を留ぬにもかゝはらず、纔か八百米突の刈羽黒姫が白雪皚々としてトテモ寄りつくことが出來さうにも想はれないのであつて見れば、(近づいたらドウニカ登られるか知らぬが)ソレ以上の標高で一方直に日本海に望み三方は妙高・燒・雨飾・白馬等の高峰峻嶽の天然屏風に取圍まれて居る西頸城黒姫は、今の所到底僕が手際では登攀することが出來ぬ、ソコデ三黒姫の代りに何か別な珍らしい山の紀行といふて見た所が甲州の駒ヶ嶽が好いのであるが、コレは昨年僕と同行した寺崎留吉氏が『中學世界』に記載されたから、同じ時に行つた僕が書いて見た所が碌なものが出來る筈がない、僕の附近で記文のないものは栗ヶ嶽か白山かであるが皆んな眞白で二號の間には逢はない、ソコデ復た雲底の案内記を書いた、三號からスバラシイ高峰深山を綴て塡め合せをしやうと意氣込んで居るから叱責しないやうにして貰ひたい、因に言つて置くが四月三十日に僕の近邊は霜が五六分も降つた。

地學者の所謂雁ケ峰連嶺が東頸城郡から刈羽郡に這入て北々方に走り、刈羽と三島の郡界をなして尙は進んで三島郡の中央を貫いて、郡の終點西蒲原郡の地藏堂町と相對して居る處で盡きるのである、其一小支脈が郡の最南端の塚山村から東北方へ四五里許り延びて上除村で平地に沒してしまふ、其最高峰が約三百米突の升形山であるから無論丘陵といふべきものである、併し三島郡では彌彦火山を除きては三百米突餘の山が一ッもない、雁ケ峰連嶺と併行して魚沼、古志、蒲原の諸郡に蟠蜒して居る幾條の山脈があるが、其間に信濃川が流れて居て所謂越後平原を沖積せしめたのであらう。

僕の住宅は（深澤にあり上除へ約一里升形山のある飯塚へ約一里塚山へ約三里の道程あり）此の山間にあつて後（西北）は里道を界にして雁ケ峰連嶺の小支脈に接し前（東南）は越後平原の南端で、直徑約二里で古志の山脈となるのである、序に亡父碧水の一律一絕を抄出した。

何望越山賦遠征、閑居隨巷寸心淸、當門黃稻傳家地、繞屋蒼松百代城、堂上來賓皆厚意、邑中諸子盡深情、時珍好味常知足、無憾優游卒一生。
水架小橋松掩門、寰區自靜絕塵喧、無能喜我得嘉遯、亦是聖明天子恩。

玆年正月年賀に來た人が或る投機事業に手を出して見てはドウダと僕を煽動したから、僕はコノ詩の意で笑ひ乍ら「我家から我田を見たる御慶哉」と書いたら其人は斷念して歸つた、饒舌の僕はトンダ駄辯を弄してしまつた。

僕の庭前を散步して居ると南東方に二條の山脈が見える（其實は幾條も幾條もなれども）前方のものはオリトラマリン色で殆んど高低なくノロ〳〵とした寢むさうな山脈であるが、後方のものは突兀巍峨と天霄に聳えて淺碧色をなして居て、コレが苗場・八海・中・駒・守門・粟・白・飯豐等の著名な諸山嶽である、併しオリトラマリンの方がイクラ平板で沒趣味であるといつても山嶽國の山であるから、東京の待乳山・愛宕山・道灌山・飛鳥山の比でない、此山脈には金倉山（五六年前まで山猫が棲んで居たといふので有名である）鞍掛山・鋸山がある、就中鞍掛山は水平線的に連亘して居る山脈の上に馬鞍の如くに隆起して見えるから越後富士・三島富士などの烏滸がましい名さへ付いて居る、併し此山が富士形に見ゆるのは僅に半里位の間であつてサウシテ僕

の庭前から最も能く齊整して見ゆるのである。

五月二日　晴　來迎寺發の下り一番瀛車に乘らうといふので朝の八時に家を飛び出した、家から停車場まで約十七町あつて縣道である、鄙編『日本山嶽志』に約十二町と記したのは無論誤謬である、八時四十分來迎寺を發車し信濃川の鐵橋を渡つて直ぐ其次の宮內停車場(海拔約二十五米突)に降りたのが五十三分であつた、僕は此山は初めてゞあるから其登路山容が少しも解らないが、方位からいふと蓬平村の蓬の湯から登れるものと信じて此道を採つたのである、停車前の竹花屋に休憩して車夫に鞍掛山に登るにはドウ行く方が都合が好からうと問ふと、ソンナ山は知らないと答へた、何程此邊からは山勢が馬鞍狀が壞れて圓形をなして居る、鞍掛と呼ぶのは僕等の附近ばかりであらう、アノ山だと指示すると、アレナラ村松の城(當字)だ村松から登られますといふたドコまで車が通ずるかと問ふと、村松まで行けます普通賃金三十錢だがアナタ方なら二十五錢に奮發しますドウカ乘てくださいと、田舍者の正直さは別に小腰も屈めず頭も下げない、僅か一里半かソコイラの道を二十五錢では高いでないかといふと二十五錢では高くムりませんと奧の方で茶屋の女中が取りなした。

九時五分人力車で竹花屋を出發して右折三國街道に出て、役場・學校・攝田屋郵便局の前を過ぎて村松川に架してある太田橋を渡ると左右は平田となつた、九時三十分十日町村に入ると左折して街道に別れて、雨天ならば到底人力車の通行することが出來ぬらしい非常な難道を行くと復た村松川に架してある無名の橋を渡つて川の左岸に沿ふて九時五十分村松の茶店に着いた、コヽデ案內者を傭ふたが案內者が來るまでに早晝食を遣つた、車賃二ッの賃付と飯を一碗喰つたので四錢拂つた。

十時二十分茶店を出發して蓬平道を行つて左に閻魔大王の石像のある處から左方の石磴を登つてインニウ寺に參詣した、大同二年の開基で眞言宗であるさうな、八房ノ梅、球數掛ヶ櫻などが殘花を留めて居た、巨刹ではないが眺望は稍や佳である、夫れから少しく登ると石磴が絕えて藥師堂(約百二十米突)がある、每年五月八日の夜には來拜者が二千人に餘るさうである、コヽから右折して鞍掛登りとなつて杉・稚松・雜樹が亂立路を挾んで居て用水溜の堤が二ッ三ッあつた、十時四十五分樹林に離れたから矚目が次第に宏大になるのである、

左に見ゆる赭色の山側はキメンザハといふ石材を產する處で、信濃川鐵橋架設の時は一尺許の角石目方凡廿貫目なるもの十萬個を切出したといふことである、路が二分して何れも鞍掛の絕頂に通じて居るが右をとるが便である、僕は故意に低き灌木に縋つて一小平坦に松が一本ある處に攀躋した、（約三百三十米突）コノ處に土窟があつて入口は纔に身を容るゝに足るのみであるが、中は疊四枚を敷くことが出來る、右の溪谷にはシャダンザハノオホタキと呼ぶ瀑布があるさうであるが此處からは望見することが出來ない、少しく登つて小蹊に出ると稚松の小林があつた、僕等の村から大木のやうに見ゆるのはコノ小林である、コヽまでは左右溪谷を隔てゝ他の山足を看る一山脚を登るので畑もあつたが、コレカラ右は鞍掛の山側を沿ひ左は雜木林となつてコブシ、山櫻が散點開花して居るのである、路が二分して右を取るのであるが僕は左から廻つて登ることにした、殘雪を踏んで登ると十一時三十分約四百米突の小平坦に達した、前面は溪谷で夏期は樹木が鬱茂して下ることが出來ぬさうである、右折して登れば暫にして嚮の右なる路に合してコトチクボと呼ぶ鞍掛の一山頂（約四百六十米突）に着いた、右に榎が一本あつて其下に高さ六尺長さ二間許の大石があつて一尺許の石地藏尊が安置されて居る、左にも四五の大石が見えた、コヽニ粗朶が數十束積み重ねてあつた、夫れから左右が深谷となつて路は馬脊の如き處に通じて居るが、短かき雜樹が叢生して居るから斷じて危險でない、十二時七分一山頂（約六百十米突）に達し又少しく行くと小塚の上に一細木杭が樹て居る、即ち鞍掛の絕巔オホトチクボであつて標高が約六百二十米突ある、殘雪が數處にあつて岩石が少しも露出して居ない、眺望絕佳長岡市附近に冠たるものであらう、南から東へ延びてゐる鋸山の山脈が薄紫に見えて其上には苗場・八海・中・駒・守門・粟・白・飯豐の諸山が淺碧に幾百條の白皺を現はして居て正東に鋸の主峰が圓形に鋸齒を凸兀せしめて居る、金倉山は最も近く南西に對峙して幾條の殘雪を瑩々せしめ呼べば直に應せんとする形狀である、左右の溪谷は總て雪を以て充され水聲が遠く聽いて居る、西から北には雁ケ峰連嶺が殆んど水平線的に走つて居て荻之城が稍や高く山勢が鏡餅のやうに見えて米・八石・黑姬の諸山も亦多くの雪を斑點せしめて其後に聳えて居る、信濃川は雁ケ峰連嶺に沿ふて小千谷の旭橋、浦の鐵橋を架せしめ澁海川を入れ更に草生津の長生橋を架せしめ、漸々北して曠漠

漠たる沃野千里の越後平原を縦斷して日本海に流れて居る、長岡市街は菜花に包まれて碁布し鉢伏(ハチブセ)山の一本杉と倶に脚下に見久て遙に彌彦(ヤヒコ)の連山が波筑山形に孤立して居る、ソレから日本海通行の氣船と信濃川の白帆と北越鐵道の氣車とを併看することが出來て、神氣快然上越後(カミエチゴ)を小とするの觀がある、イカソサウ、カタコ、タカラコ、蘭などが頂上まで茂生亂發して居て蕨が「早蕨が握り拳を振り上げて山の頭を春風ぞ吹く」の狂歌其儘で一層の興味を添へて居た。

十二時三十分蓬ノ湯に向つて下つた、竹之高地(タケノカウチ)村を左に蓬平村を中に濁澤(ニゴリザハ)村を右に瞰して下ると用水堤が二ツあつた、十二時五十分約三百四十米突の處で路が二分した、左を取つて急峻な阪路を雪を踏んで數町下ると一時に竹之高地に着いた、村松川の上流を渡つて川の左岸に沿ふて行くと、不動堂があつて村松川が三十間許の瀑布となつて居る、此の不動尊は靈驗灼然であるとのことである、瀧口の老杉に巨藤が繚繞して居たから花盛りには定めし艶麗であらう、青山延壽翁の筑波山の詩にある澗泉激石奔雷響、老藤倒谷密雲低は此處の形容詞とすることが出來る、堂前の橋を渡ると路が二分する左を取つて終始村松川を左に瞰して下ると一時二十分此川を徒渉(幅二間許約二百二十米突)して川を右に臨むのである、暫くして一溪が村松川に會する處がある、其支溪を徒渉(幅四間許)して行くと獨木橋がある、コレが此山中の最危險な處であつて町家の婦人などはチト困難であらうか、橋を渡つて川の右岸に沿ふのであるが案内者はコヽをギシャクガフチと呼んで鎌・鉈等を投ずるときは如何にしても得ることが出來ぬと不思議さうに談して居た、又獨木橋を渡つて川の左岸に沿ふて一時三十分に蓬ノ湯に着した。

蓬ノ湯は山間にあるが沸し湯で温泉ではない、三軒の三階作りの湯屋と二三の酒・麥酒・鑵詰・菓子などを鬻ぐ家があつて、村松川の清流と一條の小瀑布が稍や趣があるのみである、湯は何に効があるか知らないが長岡附近からは隨分入湯に行く人がある、今朝來迎寺で友人が居て蓬ノ湯なら長岡の校書が何時も居るから用心しろと戯言したから、今少し話せる處と想つて居たが穢くつて氣が利かぬには驚いた、盛夏は三百人以上の浴客があるさうであるが、目下農家繁忙の時であつて人が行かないから二軒の湯屋は湯が沸いて居なかつた。

三時蓬ノ湯を出立して蓬平村端で無名の橋を渡つて、コレから始終川の右岸に沿ふて濁澤を經て、猿倉山（サルクラ）・金倉山を當前に仰いで行くと山がダン〳〵淺くなつて、越後平原が見えて來ると嚮に過ぎた鞍掛登山口の閻魔堂の前に出て四時二十分村松の茶店に着した、蓬ノ湯から村松まで一里餘である、案内者は賃錢二十錢を受取て歸つた、コヽから宮内停車場へ行く間道がある、村松川の右岸に沿ふて攝田屋の太田橋に出て行くので道程が一里半だといふて居る、僕等は今日の天氣は大丈夫だといふので雨具を用意して居ぬ者もあつた、蓬平を出ると雨がポツ〳〵遣つて來たので早足に村松へ來た、人力車は三國街道の片田（カタダ）まで行かなければないのであるから、僕等は間道を疾走して五時二十分に停車場へ達した、終列車の發車より一時二十分許り前で幸に雨が大降りしなかつたから酷く濡れなかつた。

此山名は山足の村松では城（ジヤウ）（當字）又は橡窪（トチクボ）（當字）或は嶽（タケ）（當字）と呼び、蓬平では本城（ホンジヤウ）（當字）と呼んで居る、村松から頂上まで約一里、蓬ノ湯からは約二十町餘で樹木が殆んどない、長岡市の人々が蓬ノ湯に行くならば、往復の何れかを鞍掛即ちジヤウに取つた方が面白いであらう、婦人でも草履に洋傘で容易に踰ゆることが出來る、併し蓬ノ湯へ入浴專門で行く人にはソンナ詩的趣味のある人があるかないかは疑問である。

蓬平と村松の間に首切地藏があるがコヽには省略することにしやう。

富士紀行

小林すゝむ子

時は三十八年の七月中旬。所謂國鎭無上の嶽、富士山を踏破せんとの約が結ばれた。同行十名のうち、男が七名、女が三名で、何れも快兒の輩のみ……、いよ〳〵出發するまでには、個人的旅行の注意、團體的旅行の步調、あるは身裝携帶品、あるは順路など、案内記も尋ね、經驗家にもたゞし、相互ひに研究談合もして見て、準備の程はなか〳〵に苦心したのである。

一行は同月二十三日の午前六時、新橋發神戸行の列車に搭乘すべく停車場に集合の約束なので、身は午前四時頃本郷の家を出で、都の朝霧から拔けて馳せ參じ、一行と互に旅の空の好ましきを祝ひ合つて、共に列車中の人となつた。新橋から御殿場までは鐵路六十九哩で、約四時間を要するとかや、正六時に搖ぎ出した。汽車は數百の乘客の心身をひきゐて、南に向つて馳せた。これは神戸への直行なので、品川驛に僅か停車したばかり、平沼の驛知らぬ間にすぎ、程ヶ谷まで急行した、尙も藤澤、茅が崎、平塚なんど名にし負ふ大磯、これも咄嗟のまに過ぎ、送り迎ふる野景山景、遠く近く眼に入る眺めも、筆紙につくしがたく、はや國府津についた。海岸は波碎けて白く飛び眞砂を捲いて打ち返すのには、一同讃美の聲を放つた、山北より曲折幾回にして、酒匂の上流を渡り、あるひは谿谷の深き處、碧潭藍に染まるを見、或は水流の逸き所、空翠矢の如く奔るを見、頻りに愉絶快絶を叫んで、八度明暗に出入し何時か小山をすぎ、やがて御殿場についた。

御殿場！此處で一行は下車して麓の道を探るのだ。兎も角豫定は須走口(東口)であるから、驛夫の呼び聲までもなくとりあへず降り立つた。プラットホームで、富岳何れかと屹と見遣つたけれども、雲の衣眞深に引き被いで居て、少しも其相貌を現はして居ない。劈頭に物足りぬ心地がしたけれども、すぐ〳〵停車場構内を出で、巡査に敎へられたる通りに、直ちに馬車の出發點を見出して、車臺に乘り込んで仕舞つた。

出發の刹那水筒に水をみたさうといふので、納女史は馬丁を呼んで「水道の水を入れて下さいな」とは流石に東京の人……おもしろくも又をかしかつた。御殿場附近の村落を措いて其他には、馬車の行く所殆ど人家なく、見渡す限り草原で、千遍一律のありさま……。

柴怒田(シバヌタ)と云ふ處で、珍らしくも鶯の聲を聞いた。聞く人の心々にまかせおきて、裾野になける鶯は、何等の意氣を音に立てるであろうか！唯鶯のみでなく、路の傍まで彩つて居る花や實、虎杖の白花。都草の黃、毒うつぎの薄紅、草莓の深紅、萩、桔梗、女郎花の色々と打ち交つて、種々に容姿を見せて居る。

手折るが人の情か、折れとは花の心か知らねど、馬車は先に行くに任せて、花を集むるものあり、莓をあさるものもありて、何時か長閑き裾野空に、都の遠く離れたのを知つた。

やがて須走に着くと、先にのり合せた米山館の女將が案内で、館に行つた職業柄辭をひくうして迎へ入れるので、一同は導かるゝがまゝに霎時憩ふて、登山の準備を命じた。注文の五人の强力は二人不足して三人ぎり得られぬ、その代り屈强のものですから御心配には及びませんとは、宿の主人の申分であつた。

さていよ〳〵登山となれば、身裝ばかりでなく、登山の心得亦肝要である、それには三人の强力はじめ、主

人まで立ち騒いで何くれとなく世話をやいてくれた。そこで婦人たちは三人ともワラヂをうがつたことのないので、強力に一々はかせてもらふ其おかしさ！。

一行は午后の一時五十分といふに出發し、二町程行つて淺間(センゲン)神社に參詣した、入口の山門には國威震耀の立派な金字が額にほりつけてあつた。社殿で御祓を受けたら、「首根つきぬき」と申されしを聞いて喜んで社前を去り一行の半數五人だけ馬にのつた。もとより乘馬の黑人はない。自分も覺束ない調子で鞍には嚙りついたが、併しこれが談笑の種、愛嬌の泉で、旅路の興の芽、旅情を慰むるの流れはこゝから漸次に發展されたのである。是からはもはや眺めはない、樹立と云つて雜木ののびたものゝみ、道もせの草々これも燒野に生のあるものゝみが茂つて居る……空さへ低く曇つて來た。

靈山の懷はかやうのものにやと思ふたが、全く平凡無味の間をすぎねば高峯の月は見られぬのだ。かよわく遲ばれた二〻足三足が積つて、一里松についた。こは須走から一里隔つたところにあるので此名ありとぞ。馬子曰く、「二十年昔はこの松翠綠滴れる名木であつたが、或惡戲者が此樣に枯らしたのだ實におしいものよ」と。こゝで二十分程休憩して進み、三時四十五分に馬返についた。海面を拔くこと四千四百尺の此地に往復の客を送迎する一軒の茶店がある。晴れて居る日には伊豆、相模方面は海上まで眼に入つて、斜ならぬ好景ださうだけれども、おしいかな霧がたちこめて、咫尺の間も見えなんだ。

十五分許り休んで亦出かけたのではあるが、馬返しに馬は返さないで、尙のりつゞけた四時半に假休(カリヤス)についた、こゝの茶屋では、ちから餅、くず湯、富士の名木しな〴〵賣つて居る。そして全山一等の良水が湧き出ると云ふので、其昔賴朝が裾野の卷狩のせつも、足をとゞめたとの事で、名をかりやすといふのであると茶屋の主人が語つた。

よほど乘り馴れたが、馬はこゝでかへさねばならぬ、他の二人の婦人も、名殘を惜しんだが、さてこれからが徒步の揃となつた。さて馬返しから已に急となつた傾斜は、ます〳〵急となるし、馬の力はかりられぬので、強力は責任は是よりなりとて、衆を制し步法をとき、步を進めた。血氣にはやるものは緩怠であると叫び度いのであつたが、緩步は登山の秘訣とかや、駑馬の鐵路よりも、牛步の健脚が成功するのであると云ふ工合で、強力は主要な諭達訓示を與ふるのであつた。一行は訓示に從つていよ〳〵深く山に入り、五時に雲切神社につき、同二十分には御室淺間神社(中宮)につき、五時半に出發した。山は漸く物寂びて來て、霧は行く方を鎖して居

る。それを蹴やぶつて中食堂までのぼり、用意の辨當を食べて生氣の幾分を養つて、ます〳〵深くわけ入つた。そして六時二十分には太郎坊についた。こゝで金剛杖と鉢卷とを求め、且一行再度の秡を受けて、六時半に出發した。鉢卷に堅めた頭、金剛杖を添へた足、これで岩が根も踏みならすのであるから、遠き前途も患ふるに足らない、行けや〳〵とて進んで、太郎坊を出で僅かにたつたところで樹立もつき、雲や霧さへ晴れて居て、今までの暗境から、急に光明界に變じて來た。一行喜びの眼を擧げると、更に芙蓉の笑へるを見た。すると歩武は自然に伸び、六時五十分全く草木なき處に出た。出ると眼界は實に膨大で、いかにも身は俗をはなれた心地がした。下界は雲霧に蔽はれ、天上は薄靄の大氣につゝまれ、山影何時しか沈澱し來つた、……いよ〳〵暮れて仕舞つては詮術ない、七時四十分に三合目についた。六合目までゆかふと云ふ定めは慮外なので、懸聲に歩調をとり、暗い山路の阮隍をよぢつゝ、八時二十分四合五勺の石室についた。おかしいのは、草鞋こそ脱ぐが、土足其まゝで蒲團の上にまで踏み込むので、又强力はこれが御山の作法だと敎へた。であるから我々も作法の通りにしたが。別乾坤別天地、馴れぬ山路の旅枕には、圓らかに夢を結んだものはなかつた。

明けて二十四日の朝、御來光を拜する主要目的で午前三時半頃床をはなれた。吾人は地文學に於て、或は雨雲、或は乾雲、或は層雲、岳雲など、雲てふ概念の內容を說明されて、春夏の朝、秋冬の夕に、時折之を直觀したのであるが、そは下界の說明感覺であつた、此處に俯して雲の上際を窺ふと、曾て直觀にない奇觀である、この奇觀、凡庸の筆には到底寫し出すことは出來ぬ。

かくて四時半に石室を出た。著しく温度が降つて居るので、大程褞袍をきたまゝで、少し登つて居つた處で、黑ずんだ東雲の雲、其緣が金色をなして、吾人の眼を射つた刹那に、金烏鮮かに現はれ來つて、所謂御來光を拜することが出來た時は、四時四十九分、一同萬歲と唱へて讃詞やまなかつた。

五時には五合目についた。是から疲勞に反比して路は險阻となるのだ。前途遠いでもないが、思ひを山の絕頂に馳せて見ると、幾分困難の度が心の惱となる。五時四十分六合目の石室についた、こゝは歸路の合着點でもあり、須走口登山者の要所である。

曇きに奇觀と言つた雲は、下層に落ち付いて、綿羊の群數千が、東の方に西の方に、南に北に趨る樣である。其雲間に頭をつき出した山や峰は、海波に漂へる島の影とも思はれる。其山の間には、三日月形に水準線を畫して、底から光を投げ上げて居る、八湖中の山中湖が鏡の樣に見え、飽かぬ眺めがなか〳〵にゆかしい。

六合目からは、果して危險な道であつて、七合目までは殆んどナメといふ塲所で、名からして飴に似た樣な

岩の根が脈のやうに道をなして居る。一行は四十五分を費して無事に七合目についた。七合から一時間半を費やして、八合目まで登つたが、此間は熔岩のみちで、さほど危險のない代りに、傾斜は急となつて、踞まつた大きな岩が、今にゆるぎ出しはせぬかと疑はれた。決して心地よい道ではないが、然し赤穗休みと云ふところで、吉田と其近傍一圓を瞰下して、例の雲や霧を通して、川口小袋の湖を見たときには、困苦は忽ちに消え去つた。

八合目、こゝは海面を拔くこと一萬一千七百尺、頂上までは尙七百尺許りはある。氣温は五十四度で風も雲も霧もない、近來稀なる天候であると强力は共に言ひ合つた。一行の休んだ時に柱におもしろい俚謠があつた。

苦勞駿河の富士さへ今日は晴れてうれしき月の池

八時四十分八合目を發して九時半九合目についた。さてこゝまでのぼりつめると、空氣はいよ〳〵稀薄となるし、燒石にたつ陽炎は鼻の先きにちらつく、一行は杖を力に衆を恃みに、五歩十歩に息を入れ、あるはやすみ互にたすけられつゝ、六合目から絶えず續けた懸聲に、脚歩を合せながら、今少しで富岳の絶頂よと、希望の光をかゞやかせ、辛うじてのぼりつめ、伊豆岳に杖をたてゝ、首尾よく踏破の大成功を呼號し、一行全く雲の上人となつたのは、午前十時三十五分であつた。

頂上に茶店は四軒ほどあつたが、一行は米山館の出店とや、東京屋に休んだ。黃な粉附の牡丹餅、粕臭き甘酒がこの名物であるので、そを味ふて、十一時五分に一行の中の五人の者は、御鉢廻(ヌヽチマヽリ)にと出かけた、この時婦人としては自分一人であつた。

初め成就岳に馳せ登つて、劈頭に噴火口を見たが、其壯大と奇觀とに驚いた。さて御はち廻りのみちは、隨分危險な場處であつて、崖下を瞰俯したところで、とても奈落の底は見えぬ、萬一歩を誤りて、砂粒の一つにだにのせられなば、百萬奈落の死地につくので、五人は大に警戒して、硫黃氣の吹出しつゝある穴までも驗し、賽の河原の廣場に出で一息吐いた。

安河原で初めて西影になつて居た活火實永山を見た。

豫て聞て居た銀明水……四斗樽大の桶胴を埋めて、湧き出る水を涵養して居た、然して底には塵芥が積つて居て不快の念にうたれた。銀明水から駒ヶ岳、次が淺間神社の本社である、社殿は海鼠板葺、石圍の淸礎のものだが、甚しく崇高の念を起さしめた。殿內神幣の扉には、國鎭無上嶽の金字が、左右にわかつてほりつけてあつたが、なるほど無上嶽である。

こゝでも金剛杖と鉢卷とに刻印證印をおしてもらつたが、これが眞の奧印であつた。この社殿をぬけて三島

岳によぢ、最高劔ケ峰の頂上に達した。嗚呼ヒマラヤ山の高峰は知らぬ、アルプスの險は見ぬ、けれども帝國の本州中、これ以上には人類のみならず、生物は一として居ない、足の力にて空氣中の高きにいたるは抑これが極限であらう！。巖頭に倚つて觀ずれば、噴火口内底深く、外側の懸崖依然直下の極が知れない、遠く烟りし雰圍氣の層は、富士てふ地殼を一つ殘して十州の山河を壓してゐる。

常人の最も恐ろしとするこの場所に、石室を搆へて懸崖を意とせず、悠々氣界の風雲を觀測せられし野中至氏、並びに夫を扶けて糟糠の勞をさへとられた、令閨の住まはれし跡を訪ひ見ては深く感じ入つた。

これから外院を廻るには、親知らずなどいふ險があるとの事だが、眼下に雲のわだかまつて、下界を眺むる能はねば、内廻りに方向を轉じた、内院へ下り、稍〻廣い場所に出で、千古の雪を嚙み、自分は更に紀念として、「實田小學校職員萬歳」の文字及び國旗二旒の交叉せるをかいて、金明水のある所に行いたが、開山後日の淺いためか番人は居なかつた。これより登つて、久須志が岳に往つた、これが御鉢廻りの歸着點であつた。東京屋へついたのが午後の一時。

さて、富岳の頂上は、已に各種の方向を見盡したので、これより下山の經驗を終へて、それで旅行の終局を見るのだ。去りがたい情を殘して、下山の準備にとりかゝつた準備といふのは外ならぬ草鞋の多數を携へることだ、やがて、所謂須走を辷り始めたところが、面白い〳〵、砂礫と共に流るゝが如き勢は、登るときの苦しみに引きかへて實に心地がよかつた、先きの、九合、八合を逆に過ぎ去ることの速さ、最早七合か、六合――か見ると登つて行くものもあるが、動いて居るのは、此方ばかりの樣に見える、歸心と共に矢の如き一隊は、雲を潛り、霧をわけ、砂を衣とし、石に乘じて六合目に一小休憩の後、草鞋の幾足を履き換へて走りに走つて太郎坊についた……頂上よりこゝに至るまでいつも先驅であつた爲めか壯快も極めて壯快であつた……それより植物採集に衣袂をうるほし、おのがじゝともいふところか、富士の土產のいろ〳〵を買ひ假休まで來た。

さぞや、こゝに馬子はまち居るならんと言ひ交はして下りつゝあつたのだが、いかなる故にか約にそむいて、先客をのせて、下山したとの事、然し一行の全體が全く元氣恢復したので、いざ徒步にて進まんとて勇みに勇み薄暗き樹立の中を唱歌に步を合せつゝ馳するがごとくに下つた、今や須走の驛につかんとする時米山館の下男が三人チョーチン提げてむかへに來た、そこで一行は、淺間神社へ無事に登山の終結をなせしを喜び且は御禮してわかれ愉快に旅館に迎へ入れられた。時は雨の降り出せる宵の七時半であつた。

千島群島の山嶽研究に就て

コハ『日本山嶽志第一增補』に掲ぐる筈なりしも紙數の都合上『山岳』に載せたり、(式)

千島群島は元と我國の屬島なりしものゝ如し、僧西行の歌集『山家集』に載する所の「ひたけもるあさみる時になりにけり蝦夷が千島にけふりこめたり」の如き其一證と見るを得べきものか、然れども往古のこと茫々として今攷ふべからず、明治八年樺太「クリル」交換の朝議決して全島總て我國の版圖に確定せり、爾來三十年の星霜を經たるも極北極寒の地未だ充分の調査を見ず、現今陸地測量部の「輯製二十萬分一圖」の刊行成り樺太を除きては日本全國の平地旅行は殆んど差支なきまでの好地圖(多少の誤謬はあれども)を得たるも、此地圖は山嶽地に至りては山嶽の位置さへ知る能はざる程にして用をなさず、況んや千島の不毛地にして而して風濤險惡濃霧深く鎖して某山某嶽を知るに難きをや余が觀たる千島の地圖は別に博愛館の「五十萬分一日本全圖」ありて該二圖を以て最詳最精なるものとなす、千島群島の得撫島までは去る明治二十四年神保博士の調査せられたるものありて、地勢稍や明となりたれば、得撫の隣島なる知理保以島以北の群島に就て二圖記する所の山嶽を掲載比較す。

五十萬分一日本全圖

- 知理保以島
- プラフトチエルボエフ島

得撫近傍地圖

- 撫耶頓島
- 新知島(南半部)——新知山
- 新知島(北半部)——中央峰

新知近傍地圖

- 計吐夷島
- 宇志知島
- 羅處和島
- 松輪島
- 雷公計島

捨子古丹島
越渇磨島
知林古丹島
加亞蓮古丹島

温禰古丹島
磨勘留志島
珠蓮華島
幌莚島
占守島
阿頼度島

輯製二十萬分一圖

知理保以島
ブラットチエルボエフ島

知理保以島
撫耶頓島

新知島
新知島
カレチウシ山
プレプオスト山

羅處和島
計吐夷島
宇志知島
羅處和島

松輪島
松輪島
雷公計島

捨子古丹島
捨子古丹島
越輕磨島(東少部)
加亞蓮古丹島

知林古丹島
捨子古丹島(西少部)
越輕磨島
知林古丹島

温禰古丹島
温禰古丹島
磨勘留志島

波羅牟知島
珠蓮華島
波羅牟知島(西南部)

阿頼度島
波羅牟知島(北少部)
阿頼度島

島
波羅牟知島(東部)
占守島(南少部)

占守島
波羅牟知島(北少部)
占守島

知理保以以北主要なるものは十八島（占守島は山嶽なきを以て除く）にして、二十萬は十一葉の圖幅を以てし五十萬は三葉の圖幅を以てして何れも僅々二山を記せるに過ぎず、其他は推して知るべきのみ、茲年四月余東京に在り、千島の地理書を觀んと欲して地質調査所と地學協會との文庫を探索したれども一も得る能はざりし、又本郷・神田・下谷・日本橋・京橋・淺草の六區に亘りて古書肆を漁ること二日半にして僅に一の『千島探檢實紀』を求めたるのみ、（稀に鳥居氏の『千島アイヌ』ありたり）今日普通人にして千島研究を企圖

せば帝國書館の所藏書籍に倚るの外道なし、余輩東京に常住する能はざるものは、獨り一の千島山嶽の研究のみならず、毎に專ら其恩澤に浴する能はざるを歎ずるものなり、千島山嶽研究の書目を擧ぐれば。

○北千島調査報文
高岡直吉述、片假名交り、明治三十四年五月北海道廳出版

○勝田函館稅關長千島視察紀要
片假名交り、明治三十三年六月出版

○千島探檢錄
白瀨矗著、平假名交り、明治三十年四月發行

○千島列島
英人エィチ、ヂエー、スノー千八百八十五年(明治二十八年)日本に於て著はす、其譯文は片假名交りにして『北千島調査報文』の卷首に附せり

○千島紀行
横川勇次郎著、平假名交り、明治二十七年七月發行

○千島探檢實紀
多羅尾忠郎著、片假名交り、明治二十六年七月發行、片岡侍從一行の巡回記なり

○千島探檢
笹森儀助著、片假名交り、明治二十六年二月發行

○千島實業地誌
太田代十郎著、片假名交り、明治二十六年出版

○千島聞見錄
岡本監輔著、漢文、明治二十五年五月出版

○千島紀行
佐藤秀顯著、片假名交り、出版年月未詳、此書は明治八年樺太「クリル」の交換の朝議決定し、黑田開拓長官「クリル」諸島を巡回せられたる紀行なり

○(北海道廳地質調査)鑛物調査報文
石川貞治、横山壯次郎合著、片假名交り、明治二十七年四月北海道廳發行

○北海道地質報文
神保小虎著、片假名交り、明治二十五年八月北海道廳發行

○(紗那●振別●擇捉●勇拂)郡役所統計書
明治二十八年八月發行

○北海道志
開拓使編、片假名交り、明治十七年出版、明治二十五年和裝三十五册を洋裝二册に縮册出版せり
猶ほ『日本風景論』『日本名勝地誌』『地學雜誌』等に散見せり詳細の目錄は他日を待ちて掲載するところあらんとす
地圖は前陳二圖の外に

○百萬分一大日本帝國地質圖
明治三十二年地質調査所發行、千島全島の地質圖は此圖を以て最詳なるものとなす

○最新日本地圖
明治三十五年富山房編輯發行

○地方分轄地圖

松島剛著、明治三十二年十月發行、此地圖の特色は府縣に分割して其隣縣の地形をも描出せるにあり、余が『山嶽志』編纂のとき大に益する所ありたり、以上の二圖は詳細といふにはあらざれども、千島群島は他の諸圖よりも比較的精密なり、多分水路部出版の海圖に據りたるものならんも、余は未だ海圖を觀ざるを以て二圖を紹介せしのみ。

登山の導者養成に就きて

日本の山登りで、何が不自由といつて、おそらく案内者の無知、無能、怠惰ほど、始末にいけぬものはあるまい、大抵の登山家で、案内者と口論をしたり、叱言の一つも言はないものは、無からうと推せられる、『山岳』第一號所載の登山紀行を讀んでも、案内者に對する苦情が、大分出てゐる、日本の山岳案内者は、簡單なる荷擔ぎである、決して Guide と呼ぶことは出來ない、その酷だしきに至ると、客が留まらうといふのに、歸らうといふし、客の困難してゐるのを傍觀して、自分勝手な行動を取つてゐる、幾んど雇はれてゐるのか、恩惠的に同道してやるのか、區別がつかないのがある。

元來案内者と一口に言ふけれど、「山岳案内者」是れ已に立派な職業である、クリッケットや、フート、ボールなどに特殊の技術を要する如くに、登山の案内者にも、之を要する、しかも登山家は、登るために食ふてゐるが、案内者は活きる爲めに登らなくてはならぬ、彼に取つてはこの位に、眞面目なる問題は無い筈である、されば何人にても、自己が欲するが故に、直に醫者となり能はざるが如く、案内者亦然りである、故に眞正な案内者は、組合も、規則も、檢査も、特許免狀も有して居らねばならぬ、吾人は、不二山の剛力や、越中立山の中語やに、何等の組合規則を有してゐないとは言はぬが、彼等にいかむの習得が有るは大に疑はねばならぬ、歐洲アルプス邊でも、登山の案内者といふものは、登山の流行らぬ時代から、已に存在してはゐた、即ち山の路さへ知つてゐて、登山に多少の經驗さへあれば、登山客のために、導者として拉せられたものであつたが、近世の感覺でいへば、是等の手合はもう Guide とは、どうしても言へないのである、彼等は他に傍業——むしろ本職を有してゐる、山羊を養つたり、水晶を搜したり、羚羊を狙つたり、甚だしきは保護鳥や、禁制の植物を引きぬいて、密賣をやる、稀に旅客のお伴をして、意外な金錢を儲けることもある

が、寧ろその方は附けたりの觀がある、併しかういふ手合の中から、性質の好い漢子になると、登山客からの聽き嚙ぢりが、眞正の感化となつて、全くの山好きとなり、自費で近傍未拓の山岳を踏破し、新生面を登山史に開くやうにならぬとも限らぬ、アルプスでは、例のヅ、ソッシュールが多額の金を懸けて、全山の最高點白山に第一の登攀者を募つたのが、動機となつてジャックス、バルマットの如き好漢を得た。この案内者などは、この大地質學者に挑まれ、發憤大名を成し（案内者としての）後には登山の客の寵伴者となつて「職業としての案内者」たる第一の實資格を、具備するに至つた、之を一番鎗の功名として、有名な案内者が續々踵を接して起つに至つたのである。

殊に物騷なナポレヨン戰爭が終つてから、アルプスの登山客は盛に殖ゑるし、案内者の需要も所在に起つて來た、實際「アルプス案内者」といふ職業の名目が、公然世に認定せられるやうになつたのは、是から後の事で、彼等仲間同士に組合規約が出來、あやしげな人夫輩は、組合に入ることを拒絶せられ、今から八十五年も前には立派な法文が起草せられ、遵奉せられた、右に據ると、山岳案内者なる資格が、どうして生優しいことでは無いのである。

先づ案内者となるには、今日の力士や俳優のやうに兒童から仕立てられる、十歳になるや、ならずに、彼等は先づ荷擔ぎを志願する、谿谷や、山村を登山客が上下するのを覗つて、小荷物や、寫眞器械や、採集鑵などを持たしてくれと背ろから跟いて來る、長い路を傭はれて、二十錢ほども投げてやれば、悦んでゐる小兒の事だから、隨分道草を喰つて歩くけれど、格別疲れたらしくもない、話して見ると、親兄弟も、これから仕上げたもので、小山の一つや二つは試驗的に登らされたものだといふ、で、自分も天晴れな案内者になりたいといふ大望(?)を抱いてゐて、年輩になるのを樂しみにして、待つてゐるのだといふ、併し未だ〳〵是からの修業が、氣樂ではない。

次の數年間といふものは、跋渉術を懸命に修業するのである、もし荷を擔がせて、高山にでも伴れて行つてやらうといふ、登山客さへあれば、彼等は僅かな賃銀、或は全く無賃でも、隨分進んで應ずるのである、何も見習ひだ、自分の譽れにもなることだから、願つてもない機會を失ふやうな、愚かなことをしない、かくて十八歳にもなると、初めて「荷擔ぎ」の免狀を、公

然形式的に出願に及ぶ、性格體質が適合して、五十封度(ポント)ほどの荷物が、容易に擔げれば、及第する、そこでいくらの收入があるかと言へば、食料客持ちで、一日八時間の登山と見做して、我が二圓五十錢から三圓ほどである、これは我國の登山案内者兼荷擔ぎが、一日一人、時間の制限がなく、平均一圓前後であるのに比べると、高いやうであるが、物價の比例で行くから決して貪に過ぎてはゐない。

併しこの「荷擔ぎ(ポルタア)」といふのは、一切案内者(グアイド)の命令を拱手して受けるもので、案内者から言ひつけられたことは、唯々諾々である代りには、何の責任もない、登山者の都合で、「荷擔ぎ」に又「案内者」の役を兼ねさせようとおもへば（これは無造作な登山者のすることで決して一般的ではない）隨分やらぬことは無いが、これらは、雙方の冒險仕事で「荷擔ぎ」の免狀（檢査をいつ何時受けてもいゝやうに、肌を離さず所持してゐる）は、單に彼が擔荷夫であることを許してあるだけで、他に何も無いのである。

擔荷夫(ポルタア)が、愈よ一人前の案内者(グアイド)にならうといふには二十歳に達しなくてはならぬ、それで出願前には、雪や氷の割裂した惡道を、工夫して超えたり、アルプス一般の地相は素より、別して自分の所在地附近の山岳や、一寸した地質の講釋は、委しく出來るだけの、勉强をしなければならぬ、尤もかういふことは、冬、登山季節でない時分、特定の學校があつて、種々雜多の試問が、黑板に書かれる、オーブレイ、ル、ブロンド女史の『アルプス山中の我が家』といふ文を讀むと、この試驗委員と案内者候補生との押問答が、頗る滑稽的に描いてある、寧ろ誇大に受驗者の無知を刺(そし)つたものらしいが、おもしろいから、一節を譯すと、

試驗委員　問『北の方角を知るには、どうしたら好いか』
候補生　答『お日さまの在ちつしやるところが北です』
問『瑞西の國體は、何だか、知つてるか』
答『王國であります』
問『氷河(グレシア)と堆石(モレイン)との間に罅裂(クレヴアッズ)があるとする、どうして通行するか』
答『跨いで越します』
問『けれどもし濶かつたら』
答『橋でも架けませう』
問『くだらないことを』
答『ぢやあ宅(うち)へ歸つちまひます』
問『いかむ、勿論足場を截つて作らにや、ところで、もし登山客が、凍えて、疲憊する、氷河の上でも、何でも居眠りをしやうとする、そのときはどうする』

答『さうしちや、不可といひます』
問『もし、どこまでも諾かなかつたら』
答『そんなら、ブン毆つてやります』

あはれ、この受驗者不合格になつたさうな、日本に生れなかつた不幸を、嘆いてゐるに相違ない。

かういふのは、例外として、一旦合格して、免狀を受け、規約中の人となり、案内者としての特權を受けると、恰入營の新兵が、歩兵操典一部を讀ませられるやうに小さな手帳を貰ふ、此手帳には、餘白があつて、右の男を伴れて登山した客が、その白紙へ所持人たる案内者の技倆や、信用や、適不適を記入し得るやうに出來てゐる、故に案内者は、褒狀の一枚にても多からむを冀ひ、叱言の一行にても少なからざらむを虞れて、熱心に勉勵するのである、尤も酒に醉つたり、その他大失策をすると、情狀によつては、免狀を召し上げられてしまふが、こんなことは、先づ絶無といつてよいほどだ、又案内者自身も、興奮劑として、少量のブランデイぐらゐは、携へるが、他の酒瓶は成るべく持たぬやうにして、口腹の慾を制するやうに努めてゐる、全體に於て「アルプスの案内者」といへば、性質、勇氣、周匝、殊には體力の剛健では、信用すべき折紙が着いてゐる、この免許の案内者は、獵犬のやうに、いかなる不知案内の、他國の深山大岳に伴つても、路を發見したり、或は一旦辿つて來た路を、記憶してゐることは、鋭敏なもので、實に驚嘆に値ひする特性の一といつても宜い。

それから、これらの案内者が、頽れかゝる、氷山を支へ、身を以て客を保護し、九死の中に一生を得せしめたりした美譚は、一々擧ぐるに遑のないほどで、その中にも、メルキヲルといふ案内者は、アルプス倶樂部の前會長アシウス氏が『貴女の前にて、口にす可らざる如き言語を、發したるを、未だ曾て彼より聽きしことなし』と激賞したほどの、端正嚴格な山岳的人物である、この案内者は、今のシルクハットや、フロックコートを着けて、公衆稠座の中で、卑陋猥褻な話を大聲でする日本の紳士諸君に比べると、少しばかり違うやうである、――人間らしいのと、人間らしくないだけの差だ。その他ベンネンといふ案内者も、チンダル先生が嘆惜して、『導者界のナポレオン』と呼んだほどであるが、是れは天運つたなく、ホウト、デ、クライで最期を遂げてしまつた。

以上擧げた人々は、現今のではないが、現今の案内

者とても、決して祖先を辱しめるものではない、彼等は、單に登山客にのみ、隨伴するに止まらず、遠征の隊伍にも加はるので、加那陀落機に登り、セルカアクスに行く如きは素より、アラスカにも、アンデス山にも、ヒマラヤ山にも、ニウジーランドにも、はては北極遠征にも加はるを辭さない、尤も彼等とて、情の人であるから、始めは家鄕を懷ひ、所謂ホームシックにも罹つたこともあつたが、今はさういふことは無い、就中ジョセフ、イムボーデンといふ案内者は、グラハム氏とヒマラヤ山に登り、人類が到り得た天外の最高線に、足跡と名とを留めてゐる、ズルブリッゲンといふ案内者は、更にえらいので、この人はヒマラヤ山にも、ニウジーランドのアルプスにも、アンデス山にも登り、およそ人類の達し得べき最高點に危立して「山醉ひ」にもならぬ、健硬漢の唯一人で、彼は死ぬ前には、是非天地開闢以來、人間の呼吸のかゝらぬヒマラヤ山の絕巔エヴエレストへ、登りたく、且つ登り得といふ確信を有し、之を人にも語つてゐるといふことである、この人が、かつて或る登山客に伴れられて、ビヨニーアピークを登つて行つたとき、手帖を書いた（どこへ登つても、明細に手帖をつけるのが、この人の習慣である）が、その觀察の緻密明細は、客を駭かせ、竟に或る登山客の手から、其一部を出版せられたことがある、かういふ案内者になつて來ると、案内料も隨分高價である、ひどい山に登るときには、五十圓から、六十圓の收入を得る、最もかういふ種類の案内者は、引張凧になつて、一日十圓ぐらゐ出さなければ備はれないこともあるといふ。

案内者終局の大望は、何かといふに、十人十色ではあるが、先づ案内賃を貯蓄して、宿屋（ホテル）を建てるとか、或は他の職業に轉ずるのであるが、先づ功成り富を作つて退隱すると、高山の宿泊小舍の主人になるか、或は地主の傍ら、昔把つた杵柄で、案内を兼業にするくらゐであらう。

然るに飜へつて、日本山岳の案内者はどうであるかといふと、いづれもアルプスの「荷擔ぎ」程度で、それさへ實は覺束ない、山の名を聞けば知らぬ、辛ければ直ぐ下山すると言ひ出す、度し難い骨頂である、誰か好水夫なくして、日本海の海戰に捷てりと謂ふや、好案内者が出なくては、登山術が發達しない、是に於て登山者養成の途を講じなくてはならぬ。

然れども臭見を以てすれば、案内者の如きは、抑も

末なり、要は、好個の登山者を作るに在るのみ、登山客さへ立派な人が行くやうになれば、自然是に伴うて案内者も感化されるものである、今日でも學者の多く登る山の案内者は、高山植物の名を云々し、地質を云云し、標高の如何をあげつらふものがある、素より聞き囓ぢりであり、且つそれすら稀であるが、自然の氣運は、いつしかそこに到るであらうとおもふ、鎗ヶ岳穂高山、附近の大山峻岳に登る人は、老獵師カモン次の名を耳にするであらう、彼や無知といへども、山登りにかけては、名人である、彼が指導の下、自ら壯年の獵師をあつめて、案内者學校たるの觀がある、かういふのを山岳の、地方々々で、發達させたら、必ず將來の完全なる、案内者のために、或る要素或は基礎を作るであらう、日本に純然たる「職業としての案内者」が出來ないのは、一二の山岳を除いて、一般に登山者が尠ないためであるのと、登山者それ自身が、何々講といふ類の、無知にかけては、案内者に劣らぬ道客輩多きを占めてゐるためである、かのジャスチイス、ウイルス氏が、今から五十二年も前に、夫人と共にアルプスの峻峰、ウエッタアホルン第一の登山客となり、神代ながらの靈峰に立ち、雲霧幻變の中で、金婚式を擧げたといふやうな壯快なことは、日本には未だ聞かない。

アルプス山下には、峰々の第一登山者と、その導者と、二人の登山旅裝のまゝの銅像を、紀念に建てゝある、案内者をまで、優待するの途到れりである、のみならず、高名の案内者のために、傳記を出版するものすらある（The Pioneers on the Alps, 1887）を讀むと、宛如たる立志篇に、なるであらう。日本の案内者で、傳記を作られたり、紀念像を建てられたものは、一人も無い、登山者には、宗教的の意味よりして、無いでも無いが、學術的よりしては、是れも未だ一人も無いやうである、山の高度低きがためか、國民一般が山岳に冷淡にして、登山を好奇の遊戯視するためか、はたその人無きためか、ともかくも、この問題は、吾人愛山家に向ひて、緊要且興味ある答案を要求してゐるとおもふ。

（烏水）

登山の文書

山岳に關する文書の、頻々公けにされるやうになつて來たのは、近代の事で、いづこの國でも、古代はあまり見受けない、日本では、日本の紀元で、第十四世紀のころ、山邊赤人が不二を詠じ、大伴家持が越中立山を詠じたぐらひのものはあるが、いづれも遠望の讃美に過ぎない、十

六世紀、清和天皇時代に、都良香の富士山記といふ文章が、やゝ詳悉してゐる、これも自分の登山紀行ではなく、東國の人などより、聞いた事を、虚實取り交ぜて書いたものらしいが、今の眼で讀んでも、山頂の模樣などは、全く無稽の談ともおもはれない、即ち誰か、その時代に登つた者が、語り傳へたのでなくては、あのやうに書けまいとおもふ、その他歌集紀行の類、皆不二を遥望したときの瞬間の輕觸（ライトタッチ）を試みたばかりで自身の不二登山記といふものが、世に現はれたのは、江戸時代の事である。

併しこれは日本ばかりではない、山岳關係文書の、最も豐富に蒐められてゐるアルプスですら、文書の出でたのは、あまり古い時代からではない、山岳研究の隆盛な歐羅巴ですら、未だ「山岳書籍解題」の完成せられたものを聞かないから、是等の書名を列擧することは、困難であるが、その中で、解題類似の參考書册を、試に擧げやうならば、先づ

Ueber Eis und Schnee. Von Gottlieb Studer. 1869–1871.
Swiss Travel and Swiss Guide Book. By the Rev. w. a. B. Coolidge. 1889.
Landes-und-Reisebeschreibungen. Von A. Weber 1899.

の三種を推すのが至當であらう、三種とも皆瑞西のアルプスだけに關係したものであるが、後の二者は、單に登山ばかりでなく、一切の旅行に屬する文書を蒐めてある、他のアルプス諸山のが見たいならば、アルプス倶樂部の圖書館目錄でも、調べるより致し方がなからう。

登山史として見るべきは

Geschichte des Reisens in der Schweiz. Von G. Peyer 1895.
The Early Mountaineers. By Francis Griffle 1899.
La Montagne a Travers les Ages Par Jean Grand Carteret 1903.

の三種で、後の二者は至つて新版である。

山岳それ自身の歷史には、隨分と詳細なるものが多い、就中アルプス山の最高點モンブランの專屬紀文の中、左の三種を列ねる

The Story of Mont Blanc. By Albert Smith. 1853.
Le Mont Blanc. Par Charles Durier. 1877.
The annals of Mont Blanc. By C. E. Mathews. 1898.

右の中、第一に擧げたものは戲文めいてゐるが、第二第三は、參考に供せらるゝのみならず、傑品と稱せらるべきもので、孰れを優り、孰れを劣れりと判ずるに迷はれる。

それから、最つと古い時代の書籍を渉獵して、個人の登山冒險談等を抄すると、可なりの材料を獲られるが、英語で書かれたものより、羅甸で書かれたものに多く、古くは今より四百年、新らしきも二百年前の書籍で、左の如きものがある。

(1) Stockhornias. Auctore Johann. Muller. 1536
(2) Descriptio Montis Fracti Juxtra Lucernum. Auctore Conrad Gesner 1555.
(3) De alpibus Commentarius. Auctore Josias Simler. 1574.
(4) Itinera per Helvetine Alpinas Regiones Facta. Auctore Johann Jacob Scheuchzer. 1723.

第一はストックホルンの登山記、第二はピラタスの登山記、第三はアルプス登山の危險に就いて、一般的記述を試みたもの、第四はアルプス旅行に遭遇した事件記錄ともいふべきもので、山上に龍の存在を確見したと書いてゐるのがある。

それから後、今より約百五十年前、アルプスの氷河を主題とした、クラシック的な書が出た、それは

An account of the Glaciers or Ice Alps in in Savoy. By William Windham and Peter Martel 1744.

といふのであるが、實際自らこの白皚々の雪山に登つた紀行文を公けにしたのは、是れも前と略ぼ同年代に出た

Relations de Differents Voyages dans Les Alpes du Fancigny. Par M. M. D. et D. 1776.
Lettres Physique et morales sur la Montagne. Par Jean-Andrá de Luc. 1778.

の二書であらう、この時代にはヅ、ソッシュールの登山紀行や、マアクセヲドル、ブウリットのアルプス記事など、數種の書を見るに至つた、その或一書を、英譯したものに

A Relation of a Journey to the Glaciers in the Duchy of Savoy.

By M. T. Bourrit, 1776.

といふのがあるといふことを、附記して置く。

又日耳曼で書かれた本の中には、アルプス山中、美貌と麗色とで有名なユングフラウと、フィンステラアホルンの二峰の、第一番の登山記が見えてゐる、それは

Reise auf die Jungfrau-Gletscher und Ersteigung seines Gipfels.
Herr Zschokke. 1812.

Reise auf die Elsgebirge des Cantons Bern und Ersteigung ihrer höchsten Gipfel. Von Herr Zschokke. 1813.

の二書で、中には佛譯になつてゐるのもあるやうな。

今より百年前から、七十年前に至るまでの、約三十年間といふものは モン、ブランの登山記で、所謂 アルパインリテレーチユーア 山岳文學 の大部を占めてしまつた時代で、これら書籍の解題は、マシウス氏の著はしたものに、讓つて置くが、いづれも獨佛二國の學者の手に成つたものが多い、その中には、冬期の登山記さへ見えてゐる、若し夫れ、モンブラン以外の山岳文書は J.D. Forbes の手に成つたものが多く、是等は散佚傳はらざるの不幸を見むとしたのであつたが、Rev. W.A.B. Coolidge が序文と手引を附け、單行本として出版したので、湮滅を免がれた。

英文で書かれたのは、それから見ると又數年の後、即ち今より五十年前 T.S. Kennedy 主宰の下で John Ball が、アルプスの山峠、ピーク、パス、ゲレシヤー 氷河 を主題として、第一の叢書を、一千八百五十九年に、第二のを一千八百六十二年に出版した、書中收むるところの文字は、諸登山家の作を網羅したものであるが、その外、アルプス登山に就いての有益な參考書は、二三十指を屈するにあまりあるほどで、その書目も解つてゐるが、煩を厭うて、こゝには擧げない、その中には、淑女の登山記あり、「極端より極端までのアルプス」と題するものあり、「雪線以上」を標榜として讀者を呼ぶものあり、「アルプス某山より某山までの山稜橫斷記」を著はすものあり、「アルプス山中の夏季」を詳寫するあり、「冬のアルプス高嶺」を選んで筆を着くるものあり、「意志の在るところ途存す、案內者なくして登りたる「白山」など、おそろしく長い名をつけて大上段に振り冠つたものもあり、或は氷河、或は漂泊、或は煩悶、いづれもアルプスを中心として、種々雜多な題を選んである、その他、アルプスと言はず、一般登山術に關した名著は

Mountaineering, by C. T. Dent

で、この書は、本邦の愛山家も是非讀んで置くべき性質のものである、

以上主として アルプスに關係した專門書類を列擧したものゝ、余が微意は、之を手引草として、アルプス山を研究せよといふよりも、寧ろ本邦にも、早くこの種の述作の、續々刊行せらるゝを見たしといふにあるので、以上は本邦山岳を、主題とした書籍を、誘ひ出すための、刺衝劑として、借りて來たものである、即ちせめて「不二山叢書」でらゐは、日本でも出して欲しく、猶進んでは「白山全集」「立山全集」「御嶽全集」もよかるべく、「飛騨山脈橫斷記」ぐらいは、今年にも欲しいのである、そこで、自分も他を促すばかりで、懷手しても居られまいといふところから、至つて幼稚蕪雜なる拙作紀行文を集めて『山水無盡藏』第一篇と題し本年世に出して見るつもりである、即ち淺間山、鎗ヶ岳、乘鞍嶽、甲斐白峰、飛騨橫斷記、木曾山中などを纏めたもので、聊か山岳文學の三番叟を踏むつもりにおもつてゐる、最も自分のは、山の形骸や輪廓を描くのですが、一生懸命で、文學の領地に入るまでは、何百里の距離があるか解らぬが、その點は他の適才に待つことゝして、自分は簡單に、吾好む所に從ふだけの事をするのである。

次に「山岳案內書」であるが、是れに就いては、自分はアルプスの登山客が、携へてゐる「案內書」を參考として、爾後出版さるべき本邦の「案內記」に道ひ及ぼさうとおもふが、右は次號で述べることにしませう。

（烏　水）

山岳會の設立地

嚮に吾人同志者が、本會を起し、「山岳」第一號を發行したときに、世の中では、吾人が徒に奇を好み、道樂仕事でも始めたやうに、評判を賜はつた向きもある

やうである、尤も道樂といふ文字は、解釋次第によつては、必ずしも甘受を辭さないが、一時の氣まぐれで遊び半分に、山騷ぎをするやうに、思はれては甚だ迷惑する、吾人同志者は、「山岳」といふ自然の中で、最も偉大なる神性を有するものに、向つて愛着の絆を引いたので、永久で、且つ純潔なる事業であると、飽くまで、自信して居るのである、歐洲ではこの山岳會は、盛大になつて、今では文明國の特産の一といつても、よいではなからうか。

所謂歐洲山岳會の中で、最も有力なるものを擧げやうならば

Alpine Journal (London).
Annuaire du Club Alpin Francais (Paris).
Revenue Alpino (Lyon.)
Annuaire de La Societe des Touristes du Dauphine (Grenoble).
Bollettino del Club Alpino (Turin).
Echo des Alpes (Geneva).
Jahrbuch des Schweizer Alpenclub (Borne).
Mittheilungen des Deutschen und Oesterreichischer Alpenvereins (Vienna).
Ammario Della Societa Alpina del Trentino (Trent).

こんなものであらう。極東唯一我が山岳會在焉、先輩諸氏の俠助と同志者諸君の扶掖の下に、次第に隆盛に赴かむとすることは、吾人が、かの屹たる靈性に對して些の面目を有するところである。（烏　水）

再び落機山中の高峰に就て

前號に高野君が、一萬呎以上のもの五十八峰を揭げられしが、近頃 Nell's Map of Colorado に揭載しある山嶽表と比較したるに、甚しき差異あるものあり、亞米利加の如き開化せる國にて、落機の如き人の多く登る山にして、尙此の如きを思はゞ、我が日本の山嶽の高距が、變更常なきは怪むに足らざるべし。今次に揭げんとするは、前記の地圖に附したる表を寫したるにて、此の表に北米政府の實測を基とせるものなりと號するが故に、杜選なるものとも思はれざれば、重複をも顧みざる以所なり。元來高山の高距の測定は種々なる障害ありて、精確には出來難き由、彼のアルペン山の最も精密なる測量さへ、1/500 の誤差を許さゞるべからずとか聞く、されば空氣、溫度、天候等の狀況によりて、測定の度毎に差異を生ずべきは論を俟たず、故に "Among the Rockies" に揭げたるものが誤とも云ひ難く、"Map of Colorado" に載せたるものが正しとも云ひ難し。左に揭ぐるものは一萬三千呎以上のものに限り、其以上は原籍に之れ無ければ記さず、二川の山谷が、高野君のものと異れるのあり、前號校正の際、"Spanish" の高さが一二六二〇－一二七二〇とありしを、獨斷を以て、一二七二〇と改めし外、總て原稿に從ひたりしが、或は Schreibfehler のありしか、夫とも原書の Druckfehler か、予は知らず。（H. T.）

Sierra Blanca.	14,483.	Humboldt Peak	14,045.
Massivo Mt	14,433.	Handies Peak	14,008.
Mt. Elbert	14,421.	Maroon Mt.	14,003.
Gray's Peak	14,411.	Mt. Cameron	14,000.
Mt. Harvard	14,375.	Mt. Rosulie	14,000.
La Plata Peak	14,342.	Capital Peak	13,997.
Torrey's Peak	14,336.	Snow Mass Mt.	13,978.
Crestone Peak	14,333.	Grizzly Peak	13,955.
Mt. Evans	14,321.	Ourray Peak	13,955.
Mt. Lincoln	14,207.	Pidgeon's Peak	13,928.
Uncompahgre Peak	14,289.	Horseshoe Mt.	13,912.
Long's Peak	14,271.	Blane Mt.	13,905.
Quandary Peak	14,266.	Pyramid Peak	13,885.

Mt. Wison .....14,250.
Mt. Antero .....14,245.
Mt. Snefles .....14,249.
Mt. Shavano .....14,239.
Mt. Princeton .....14,190.
Mt. Yale .....14,187.
Mt. Bross .....14,185.
Mt. of the Holy Cross ..14,176.
Old Baldy .....14,176.
Lizzard Head .....14,160.
Goat's Peak .....14,132.
Castle Mt. .....14,15.
Pike's Peak .....14,108.
San Luis Peak .....14,100.
Red Cloud Peak .....14,092.
San Migruel Peak .....14,075.
Wetterhorn .....14,069.
Mt. Simpson. .....14,055.
Stewart Peak .....14,052.
Needle Peak .....14,051.
Mt. Aeolin .....14,051.
Culebra Peak .....14,049.
Sherman Peak .....14,048.
Frusbrum .....13,883.
Mt. Buckskin .....13,861.
Silver Heels .....13,835.
Hague Mt. .....13,832.
Mt. Hamilton .....13,800.
Hanchback .....13,755.
Rocoter Mt. .....13,750.
Ptarmigan Peak .....13,746.
Spanish Peak .....13,718.
Ojo .....13,640.
Trinchera Peak .....13,611.
Mt. Guyot .....13,565.
Star Peak .....13,562.
White Rock Mt. .....13,532.
Aparahoe Peak .....13,520.
Dunn Mt. .....13,502.
Buffalo Mt. .....13,328.
Treasury Mt. .....13,444.
James Peak .....13,283.
Homestake Peak .....13,227.
Whale Peak .....13,200.
Del Norte Peak .....13,081.
Mt. Kendall .....13,038.

ヒマラヤの意義

英領印度の北境、西藏と界を接する所、大山高岳蜿蜒、怒濤澎湃の貌をなし、海拔二萬幾千尺、東西に連亘すること四五十里、稱してヒマラヤ連山と云ふ、最高峰 Everest は高距實に二萬九千二百尺、富岳を二倍して且つ加ふるに大山を以てしても、尙低きこと一百尺、四時雪を冠し未だ嘗て絕ゑず、其の名ヒマラヤは、實に此に起れるものにして、梵語「雪ある所」に因し、譯して「雪山」と云ふ、洵に當れりと云ふべし。(H. T.)

御嶽の小草

其　蜩

既に木曾の峽中に入る鳥居峠に上れば眼界
到る處御料の檜山ならざるはなし
果しれぬ檜の果てや雲の峰
峠を下れば籔原なりそのかみ上松驛に艶名
を歌はれし阿照も今は阿六櫛賣るこの家に
世を詫ぶといふ
馬とめよ櫛ひく背戸の女郎花
福島は仙道隨一の繁華なり
橋涼し水樓の影酒旗の風
その水樓に登る
月涼し欄干に倚る影三五
掛香や名古屋訛りの惡くからず
御嶽に登る王瀧よりす
山青し晝杜鵑晝の月
田の原は御嶽の六合目
青嵐小手をかざして嶺を看る

女人の登山

日にやけぬ護符を貼りたり笠の裏　頂上

われ涼し山を見下ろす山の上　歸途

掌大魚（たなびら）の夏忘らめや木曾の味

山岳の名稱を冒せる植物

植物にして山の名を冠するものに就ては、小島君の日本山水論（初版二二七頁）に三四引例しあり、此の如きは山岳と植物との關係の深きものなることを知るに足るものにて趣味あるものと思はるゝ故、次に錄して同好者の一粲に供せんとす。（H. T.）

◎岩手山

イハテハタザホ（Arabis iwatensis *Makino*）十字花科

イハテタウキ（Ligusticum japonicum *Maxim.*）繖形科

一にナンブタウキとも云へり

◎岩木山

イハキチドリ（Orchis aristata *Fisch.*）らん科

一名ハクサンチドリ、又シラネチドリとも云ふ

◎岩屋山（伊豫）

イハヤシダ（Diplazium japonicum *Makino.*）のきしのぶ科

◎伊吹山

イブキビヤクシン（Juniperus chinensis *Linn.*）ぢつ科

普通略してイブキと呼べり

イブキバウフウ（Seseli Libanostis *Koch* var. daucifolia *DC.*）繖形科

イブキトウダイ（Euphorbia pekinensis *Rupr.*）たかとうだい科

タカトウダイと同一種なりや

イブキトラノヲ（Polygonum Bistorta *Linn.*）たで科

イブキチドリ　らん科

草木圖說卷之十八、五十二に圖說あり、恐らく常のチドリサウならんか

イブキヌカボ（Milium effusum *Linn.*）禾本科

イブキヨモギ（Artemissia vulgaris *Linn.* var. vulgatissima *Bess.*）きく科

常のヤマヨモギなるべし

イブキヒニグチ（Polygonum ibukiense *Makino.*）ゆり科

イブキタイゲキ（Euphorbia pekinense Rupr）たかとうだい科

一名イブキトウダイ、常のタカトウダイと同一

イブキタウキ　繖形科

タウキの一種にして、其味ひ辛くして氣はげしく、藥種に適せず、エチゴタウキ、タンゴタウキともいふ由、予此種を詳にせず

イブキフウロ（Geranium sp.）ふうろさう科

ハクサンフウロの變種か

イブキサウ（Thymus Serpyllum *Linn.* var. vulgaris *Benth.*）唇形科

Franch. et Savatier ——Enumeratio Plantarum Japonicarum

にはメハジキと混同せり、イブキジヤカウサウを云ふが如し

イブキャンバイサウ（Trollius asiaticus *Linn* var. Ledebouvii *Maxim.*）うまのあしがた科

常のキンバイサウなり

イブキシダ（Nephrodium prolixum *Desv.*）のきしのぶ科

イブキジヤカウサウ（Thymus Serpyllum *Linn.* var. vulgaris *Benth.*）唇形科

イイブキシモツケ (Spiraea dasyantha *Bunge.*) いばら科
イイブキキゼリ (Carum holopetalum *Maxim.*) 繖形科
イブキスミレ (Viola mirabilis *Linn.*) すみれ科

◎しなもり山（菰野）

イナモリサウ (Pseudopyxis heterophylla *Maxim.*) あかね科

◎白山

ハクサンイチゲ (Anemone narcissiflora *Linn.*) うまのあしがた科
ハクサンハナスヂホ (Arabis Halleri *Linn.*) 十字花科
ハクサンボウフウ (Peucedanum multivittatum *Maxim.*) 繖形科
ハクサンチドリ (Orchis aristata *Fisch.*) らん科
ハクサンフヂナくゝ (Patrinia palmata *Maxim.*) をみなへし科
ハクサンガヤ (Phyllodoce aleutica *Makino.*) しやくなげ科
アツノガザクラの異名なり
ハクサンヨモギ (Artemisia Schmittiana *Maxim.*) きく科
ハクサンスイゲキ (Euphorbia togakusensis *Hayata.*) たかとうだい科
ハクサンタデ (Polygonum polymorphum *Ledeb.* var. japonicum *Maxim.*) たで科
一名イハクタデ、又オンタデ
ハクサンオホバコ (Plantago Mohnikei *Miq.*) おほばこ科
ハクサンフウロ (Geranium hakusanense *Matsum.*) ふうろそう科
一名アカスマフウロとも云くり
ハクサンコザクラ (Primula cuneifolia *Ledeb.* var. hakusanensis *Makino.*) さくらそう科
一にナンキンコザクラとも云くり
ハクサンサイコ (Bupleurum multinerve *DC.*) 繖形科
一にトウゴクサイコとも云ふ
ハクサンスゲ (Carex canescens *Linn.*) かやつりぐさ科

◎箱根山

ハコネダケ (Arundinaria Simoni *Rivière* var. Chino *Makino*) 禾本科
ハコネウツギ (Diervilla coraeensis *DC.*) すひかづら科
ハコネギク (Aster trinervius *Roxb.* var. viscidulus *Makino.*) きく科
ハコネサウ (Adiantum monochlamys *Eat.*) のきしのぶ科
ハコネシダ、ハコネグサとも呼ぶ

◎女貴山（日光山）

ニヨハウチドリ (Orchis panciflora *Fisch.*) らん科

◎日光山

ニッカウくりスゲ (Carex fulta *Franch.*) かやつりぐさ科
ニッカウカハホリ (Cacalia niko-montana *Matsum.*) きく科
オホカニカハホリの一名なり
ニッカウラン (Veratrum nigrum *Linn.* var. japonicum *Baker.*) ゆり科
古來ショコロサウの別名として知らる、近來らん科のヒメカイランをもかくよべど、正にはあらざるべし
ニッカウハナンネンダサ (Lycopodium obscurum *Linn.*) ひかげのかづら科
マンネンダサの一名
ニッカウハリの一名なり (Prasiola japonica *Yatabe.*)
ニッカハハリの一名なり (Larix leptolepis *Gord.*) まつ科
フジマツマツと呼ぶ
ニッカウオトギリ又カラマツとも呼ぶ (Hypericum nikkonense *Makino*) おとぎりそう科
ニッカウキスゲ (Hemerocallis Middendorffii *Maxim*) ゆり科
ニッカウシダ (Aspidium nippnicum *Fretsav.*) のきしのぶ科
ニッカウシヤクナゲ (Andromeda Polifolia *Linn.*) しやくなげ科
ヒメシヤクナゲの一名
ニッカウヒトトデ (Nephrodium decipiens *Hook*) のきしのぶ科
ヒハハウラボシの一名なりと云ふ
ニッカウモミ (Abies brachyphylla *Maxim.*) まつ科
ウラジロモミを云ふ

ニフカウスミレ　(Viola nikoensis *Makino.* m.s.s.) すみれ科
フモトスミレと同一種なるが如し

◉戸隱山

トガクシデンダ　(Woodsia Yazawai *Makino.*) のきしのぶ科
トガクシヽヨウマ　(Yatabea japonica *Maxim.*)
一名トガクシサウ

◉利尻山

リシリワウギ　(Astragalus secundus *DC.*) まめ科
リシリカンツリ　(Trisetum subspicatum *Beauv.*) 禾本科
リシリキ　(Juncus filiformis *Linn.*) ゐうしんさう科
リシリサウ　(Zygadenus japonicus *Makino.*) ゆり科
リシリシホガマ　(Pedicularis flava *Pall?.*) ごまのはぐさ科
リシリシノブ　(Cryptogramme crispa *R.Br.*) のきしのぶ科
リシリビヤクシヽ　(Juncus communis *Linn.*) ゐつ科
リシリスゲ　(Carex rishiriensis *Franch.*) かやつりぐさ科

◉和田峠（信濃）

ワダサウ　(Kruschenimikowia Maximowiczianа *Fr.et Sav*) なでしこ科

◉大山（伯耆）

ダイセンクハガタ　(Veronica Schmidtiana *Regel.*) ごまのはぐさ科
キクバクハガタの一品かと云ふ

◉立山

タテヤマリンダウ　(Gentiana Thunbergii *Griseb.* var. minor *Maxim.*) りんだう科
コミヤマリンダウの異稱
タテヤマワウギ　(Hedysarum esculentum *Ledeb.*) まめ科
イハワウギの一名
タテヤマウツボグサ　(Dracoce phalum prunelliforme *Maxim.*) ごまのはぐさ科
タテヤマスゲ　(Carex aphyllos *Kükenthal*) かやつりぐさ科
タテヤマキンバイ　(Sibbaldia procumbens *Linn.*) しばら科
タテヤマギク　(Aster dimorphophallus *Fr.et Sav.*) きく科

◉庚申山

カウシンサウ　(Pingnicula ranosa *Miyoshi.*) たぬきも科

◉筑波山

ツクバスゲ　(Carex odontostoma *Kükenthal* var. Sejuncta *Kükenthal.*) かやつりぐさ科

◉那智山

ナチクヽヤク　(Nephrodium decipiens *Hook.*) のきしのぶ科
イハウラボシの一名
ナチシダ　(Pteris Wallichiana *Ag.*) のきしのぶ科

◉男體山（日光）

ナンタイシダ　(Nephrodium Maximowiczii *Bak.*) のきしのぶ科

◉温泉嶽（肥前）

ウンゼンツヽヽ　(Rhododendron serpyllifolium *Maxim.*) しやくなげ科

◉能鄕山（美濃）

ノウガウイチゴ　(Fragaria vesca *Linn.* ?) しばら科

◉鞍馬山

クラマゴケ　(Selaginella Kraussiana *A.Br.*) しはひば科

◉富士山

フジハタザホ　(Arabis serrata *Fr.et Sav.*) 十字花科
フジオトギリ　(Hypericum erectum *thunb.* var. caespitosum *Makino.*) おゝばうりやう科
フジマツ　(Larix leptolepis *Gord.*) まつ科
フジコケシノブ　(Hymenophyllum polyanthos *SW.*) こけしのぶ科
ホソバコケシノブの變形品の名と云ふ
フジテンニンサウ　(Commanthosphace japonica *S.Moore.* var. barleinerris *Makino.*) 唇形科
フジアザミ　(Cirsium purpuratum *Maxim.*) きく科

雜　錄　○山岳の名稱を冒せる植物

◉駒ケ嶽（木曾）
コマガタケスグリ（Ribes japonicum *Maxim.*）ゆきのした科

◉御在所山（伊勢）
ゴザンショスゲ（Carex sp.）かやつりぐさ科
アブラシバの若きものに似たる草なりといふ

◉孤野山
コモノギク（Aster Komonoensis *Makino.*）きく科
一名タマギク

◉手筥山
デバコワラビ（Athyrium microsorum *Makino.*）のきしのぶ科

◉鳥海山
テウカイフスマ（Arenaria chokaiensis *Yatabe.*）なでしこ科
メアカンフスマと同一種なりといふ

◉愛宕山
アタゴホヽヅキ（Schizopetalum soldanelloidea *S.et Z.*）いはうめ科
イハカヾミの一品巨大なるものをいふ
アタゴゴケ（Selaginella Kraussiana *A.Br.*）いはひば科
クラマゴケの一名

◉朝熊山
アサマリンダウ（Gentiana shikokiana *Makino.*）りんだう科

◉霧島山
キリシマサウ（Burmannia. nepalensis *Hook. fil.*）
ひなのしやくじやう科
キリシマシヤクジヤウ（Burmannia nepaleneis *Hook.f.*）
同右と同一種なり

◉清澄山
キヨスミツツボ(Phacelanthus tubiflorus *Sieb et Zucc*) はまうつぼ科
キヨスミコケシノブ（Hymenophyllum olizosorum *Makino*）
こけしのぶ科

キヨスミシダ（Aspidium tsussimense *Hook.*）のきしのぶ科
ヒメカナワラビの一名
キヨスミヒメワラビ（Nephrodium Matsummne *Makino*）
のきしのぶ科

◉湯の峰（紀伊）
ユノミネシダ（Histiopteris incisa *Ag.*）のきしのぶ科

◉妙義山
メウギシダ（Polypodium Someyae *Yatabe*）のきしのぶ科

◉雌亞寒嶽
メアカンフスマ（Arenaria mereckioides *Maxim.*）なでしこ科
メアカンキンハイ（Potentilla Miyabei *Makino.*）いばら科

◉白馬ケ嶽
シロウマチドリ（Platanthera Makinoi *Yabe*）らん科
シロウマワウギ（Astragalus shiroumaensis *Makino.*）まめ科
シロウマナヅナ（Draba shiroumana *Makino.*）十字花科
シロウマフウロ（Geranium sp.）ふうろぐさ科
恐らくハクサンフウロと同種ならん
シロウマアサツキ（Aitun Schoenoplasuma *Linn.* var. orientale *Regel.*）ゆり科

◉白根山
シラネニンジン（Cnidiuma Tilingia（*Maxim.*）繖形科
シラネチドリ（Orchis aristata *Fisch.*）らん科
ハクサンチドリと同種なり
シラネワラビ（Nephrodium dilatatum *Desv.*）のきのしのぶ科
シラネアフヒ（Glaucidium palmatum *S.et Z.*）うまのあしがた科
シラネアザミ（Saussurea grandifolia *Maxim.*）きく科
シラネセンキウ（Angelica polymorpha *Maxim.*）繖形科
一名ヤマセンキウ

◉比叡山
エイザンカタバミ（Oxalis Acetoceelia *Linn.*）かたばみ科

ミヤマカタバミの一名
エイザンゴケ (Selaginella Kraussiana *A.Br.*) しはひば科
一名クラマゴケ、又アタゴゴケ
エイザンスミレ (Viola chaerophylloides *Makino.*)
エゾスミレの一名
以上

日本植物景觀日光植物

三好博士の『日本植物景觀』が、植物學に關係ある各方面の人士に向つて、無類の有益なる出版物なることは、吾人が今更喋々する迄もなき事なるが、同書は屢屢登載さるゝ所の、山地特有物景に至りては、吾人山嶽研究者の、看過すべからざるものなるべし。數月前發兌したる、同書第二集には、日光山の植物景として「磐岩の瀧附近の山林景觀」、「ぶな」、「みづなら及びやまどりぜんまい」、「からまつ」、「松柏科樹林の一部」、「たうひ」、「ししうど」の圖を掲げたりしが、近刊の第五集には、其の續きとして、「日光湯本山林の秋景」、「日光湯本森林の景觀」、「こめつが」、「こめつがの林中の景觀」、「あすなろ」、「からまつ」、「しらかば」、「日光湯瀧附近森林の景觀」を出せり。印刷は例によりて精巧鮮明解說平易にして懇切なり。是によりて山地植物の一般を會得して、而して後山嶽に攀ぢなば、趣味更に加はるべきは、火を睹るよりも明なり、此の圖譜は又單に植物的觀念の上のみならず、秀麗なる山嶽の景色をも收めたれば、此の點より見ても愛山家必備の書と云ふべし。發行所は丸善書店にして、各集正價金壹圓郵稅金拾錢なり

（三脚生）

高山に於ける植物の保護

珍らしき植物は平地にも少なからず、高山のもの必らず稀有の品のみにはあちねども、概括して言はゞ、山地の植物は平地よりも珍らしきもの多く、高山となりては益ゝ平地に自生する品と別種の植物夥しく、殆ど高山植物の語の下に指示さるゝ種類は、總て珍奇の植物なりと普通に解せらるゝに至る。此等の植物は此頃始めて高山に生じたるにあらず、有史以前より常に神秘の樂土に錦繡を織りなせども、吾人の祖先は殆ど之を知らず。唯僅かに所謂ゆる本草家と稱せられし一種の博物家の爲めに幾分の知遇を得たるのみ。

泰西の植物學已に日を逐て盛なる現下の帝國に於ては、高山植物の研究も次第に精密となり、特に此近年に至りては、少なからぬ新發見も續續として之れ有りし如し。又殆ど之と同時に山草を愛育する人偶然にも其數を增し、或る少數の人々が率先して山草野花の觀賞するの價値あるを唱導し、且中に就て高山植物の最も可憐にして且最も淸高の氣韻に富める事を紹介せしより、未だ幾年ならずして、山草野花を栽培せんと試むる人は、意外にも夥しく增加したり。今日に於て高山植物は殆ど遺憾なく世に出でたりと云ふを得べし。

一利一害は如何なる所にも相伴なふものにて、高山植物の此盛運は、同時に高山植物の爲に甚だしく憂ふべき狀況を生ずるに至りぬ。植物學の盛なると高山植物の流行との爲め或る種の珍奇なる品の如きは遠からずして全く絕滅するに至らんとす。其原因を考ふるに、其種類は二箇に

して、各種又細別するとき樣々の原因とならん。

其一は植物學と名乘る方面より來る原因にて、第一には學者が斯學の爲めに必要なる研究を爲す爲めに此等植物の採集を爲すものにて、最余輩が敬意を表する所なれども、到る處の高山に普通なる品は別に彼是言ふにも當らねども、其他稀有の品、或特定の高山のみに限られたる植物の如きに至ては、此眞面目なる學者と雖も、其植物の絶滅を免かれしむる爲めに相當の德義を重んじて採取すべき事當然なり、然るに時として其行動全然之に反し、珍品なれば悉く之を拔て腊葉とせされば飽かざるの士ありと言ふ者あり、特に某外人の如きは、自ら新品を發見したる時自家の必要なるだけ十分に採取し、而して其殘餘は、他人の採集を妨ぐる爲め故意に皆之を拔き捨てゝ絶種せしむと聞く、此の如きは學問の研究に資する者にあらず、斯道の爲めに妨害を加ふる者と稱す可し。

植物の濫採に關して此次に恐るべきものは、隊を組みて採集登山を試むる者にして、修學旅行の如き亦其一例たる事ある可し、此の如き場合には、教師又は監督者等に於て濫採を禁ずるの注意を爲すは勿論なれども、十人の隊を爲すものは一人二本を採るも二十本を得ざれば止まず、而して稀有の品に至ては之が爲めに或は絶滅に至る可く、或は甚だ乏しきに至りて、第二の採集隊來らば全く其根をだに殘さゞるに至る可し。一人發見して珍品なりと聞けば、同行者は未だ曾て自ら見當らず又左程に好まざるものも、同好者の手前强ても之を獲んと希ふは人の情なり、斯くして徒らに珍品を滅するは實に歎ずるに餘あり。

更に最も怖るべきは植物標品を販賣するの目的を以て盛に採集し、腊葉の大々的製造を行ふ一種の學者然たる商賣人なり。此種の人には比較的學問あり又特に植物學の智識を有し、常識も德義も十分に存すれども腊葉が其本業の一部なる商品なる爲め、唯自家の財源とのみ心得て他の事を思はず。此種の人は珍品を濫別し、搜索するに最も堪能なるが故に其植物を害するは最も甚しく、余輩が最も責むる所の種族なりとす。

第二の種類に眼を轉ぜんか、山草愛玩の方面より來る原因にして、要するに移植栽培の目的の爲めに高山植物の採取を爲すの徒なり。單に斯の如く述ぶれば、只移植に止るが故に絶滅の憂なきに似たれども、今日の所謂ゆる山草家は未だ山草の栽培法を研究せず、況んや高山の植物を

や之を移植するの目的は培養にあるとも、其事實に現はるゝ所は植物の虐待なり、植物のなぶり殺しなり。若し眞に高山植物の栽培法の研究を爲し、十分の成功を以て移植せんとせば、種子より發芽せしむるを可とす而して今の所謂山草家にして此方法を實行する人果して幾人かある可きや。故に山草は移植の目的の爲めに採集しながら、終に山上の珍品を大に濫採するの結果に陷る。而して最も不思議なるは新たに思立つ山草家程其濫採の度は益々甚しきが如き事是なり。

余輩が最も恐れ、又最も憎むは此自ら高山に登躋して、自家の爲めに採集する山草家に非ず。山草家、特に自ら登山せず、採集せる山草家又は山草家とまでならずとも世の風潮に誘はれて、漸く山野の草を愛する人々に賣らんが爲めに高山植物の大々的採集を爲す植木屋なりとす。此の種の植木屋は前に述べたる山草家と同じく、一向培養法を知らず、故に自ら培養して後に之を商品と爲し又は、播種して繁殖せしむるにあらず採集し來りて一日も早く之を賣り盡し、枯死せざる前に黃白に代ゆる事のみ力むるの徒なり。既に花戸の本業に背くと雖も如何とも爲すべき道なし。

是等の花戸と雖も自ら登山して採集する者は東京に於て絶無稀有なれども、皆各地の同業者と氣脈を通じ或は特に諸處の山岳を跋涉して採集するを以て專業とする者より高山植物を仕入るゝなり、即ち自ら山を荒さずして、人をして山を荒さしむる者なり。此花戸の植物採集は元來之を本業の商品と爲すが爲めに實に大仕掛にして、其分量を聞く時は、學者も、山草家も驚く可き程なるものあり。例して言へばムシトリスミレを石油の箱に幾箇などゝ云ふが如し。此調子にて濫採せられんには、加何なる高山の御花畑も全く荒寥の地と爲り終らんは必せり。

最後に一種特別なる原因を附記するの必要あり。コマグサに關する木曾御岳登拜者の迷信にして、之が爲めに信州の高山にコマグサ殆ど絶滅せり。元來御岳にてはコマグサの自生少なからざりしに、藥草とか靈草とか稱して其陰干したるを山上にて販賣する爲め、該山には已に絶滅し、乘鞍も之が爲に殆ど取り盡し(前號川崎氏の乘鞍紀行參照)今日にては例の白馬山邊より御岳に輸送せり、之が爲めに白馬山も亦漸くコマグサの絶滅期に近かんとす。此草決して生育の速なるものに非ず。而して一貫

目若干金と云ふ知き大仕掛の賣買が、御嶽に向て盛に行はるゝ以上は、獨り信州のみならず、全國のコマグサ亦或は甚しく稀なるに至らん。

高山植物の種々の原因の爲めに大々的損害を被りて、或は將來に回復する能はざる結果を生ぜん事余輩が獨り寒心に堪へざるに非ず、先輩皆之を憂ひ、學者皆之を恐る。特に理學士白井光太郎氏が言ふ所を左に摘錄せん。(三十六年發行植物博物兩館及び植物園の話)

獨逸國にては植物分類、植物地理の學に重きを置て居るが爲に、山野に自生する草木までが丁重の取扱ひを以て保護せられ居るのである予は獨逸留學中、伯林植物園長エングラー氏以下同行十一人と共に、獨逸と澳國との國界線上の名山「リーゼンゲビルグ」と云ふ山(最高峰の海拔約五千三百尺)に登り、植物採集に從事したることがあるが、此山などは全山の草木に保護が加へてあり、政府よりの特許票を所持する者にあらざれば一草一木と雖も採摘する事を許さないのである、犯すものは採集品を沒收せられ、過料に處せらるゝのであるが、此規則は嚴に遵奉せられて居り、山上處々の飲食店宿泊處の食卓上の挿花が、悉く造り花であるのには大に感服した事である、又我々一行か採集した生植物を、山上の郵便局より伯林植物園に送附せしめんとせしに、政府の特許票を示すにあらざれば取扱ひ難しとて之を拒絕し、如何に陳辯するも承諾せず、人を馳せてエングラー博士所持の特許票を取り寄せ、之を示して漸く其事を濟したる次第なり、是により山中の草木は皆其處を得て、自然の有樣を保ちて蕃殖し、珍奇の草花抔が路傍に咲亂れて、花畑の中を行くが如き場處を見ることが多い、又何處には如何なる珍奇の種類が存在すると云ふことが知れて居り、其所に行けば之を採集することが出來るが故に、恰も天然の一大植物園の如きである、植物界には群生共存と云ふとがあり、多數の植物が一處に生育して共同の生活をなし、互に助け合ひて天然の景色をなすものである、人が之を伐採したりする時は、自然の配合が破れ天然の景色を損し、又稀有の種類などは絕滅して仕舞ふのである、其故に之を保護するの必要があるのである、又一座の山中に生育する草木の種類といふものは、一朝一夕にして此に至たのではない、前世界時代より連綿として居るものもあり、近隣の諸邦より移轉し來りたる者もあり、遠隔の地方より無數の歲月の賣して移轉し來りたるもの、土地の狀況に應して變化したるもの、風の媒介、鳥獸其の他動物の媒介により來りたるもの、南方より來りたるもの、北方より來りたるもの等あり、此等を講究するは、頗る學問上に趣味あるの事にして、古來斧斤の入らざる山中程、草木の種類が多い日本にて云ふ時は日光山の如きは、頗る草木の種類に富んで居る名山であり、日本開闢以來の草木が、其儘保存せられて居るものと云つて宜敷いのであるが、近來は同山植物の保護が大に亂れて、漸々稀有の種類を絕滅すると云ふ有樣が見えるのであるが、是は獨逸のリーゼンゲビルグの如く保護を加へられて然るべき義と愚考するのである、日光山中禪寺湖邊は、十餘年前迄は幽邃の地なりしが、今日では別莊やら人家やらで俗地となりて了つた有樣で其邊の草木は漸々伐拂はれ行くのである、植物學上より見る時は實に慨歎の至りに堪へないのである、日光山中禪寺湖邊には不思議な規定がある、直徑五寸以下の樹木は勝手に伐採して薪炭とするを得る事であるが、此は恰も老人を殘して少年を殺すべしと云ふと一般にして、頗る其當を得ない規定であるのである、人家の稀少なる場合には餘り害もないが、追々人煙が增加するに從ひ漸々多量の薪炭を要する事となり、山が荒れて來るは論を俟たない、予は十餘年以前より屢々日光山に往來し山中の狀況は略ぼ暗熟して居るものであるが、荒澤より馬返しに出づる山道、夫より馬返しより深澤までに至る兩岸の山の樹木は、近年大に伐り拂はれ、昔日の有樣を見ることが出來ない樣になつた、此等は伐り拂ひて炭に作つたものである、中禪寺湖邊は前述の通りの次第、又赤沼原の入口、地獄澤の邊も近年大に樹木を伐り拂ひ、天然の有樣を損した事が甚多い、湯本邊、赤沼原邊は屢々旅客の放火の爲に山相を變し、又谷川の暴漲の爲に草木を損して居る、此等濫伐無規律の結果は、昨年九月に至り大に其効果を現はし、馬返しの人家を破り、大日堂を埋め、滿含の地藏を壞し、神橋を押し流すの大災害を釀成するに至りたるのである、是は決して偶然に起りし次第ではないのである、斯の如く近年に至り古今未曾有の出來事の爲に、開闢以來保存し來りたる草木の種類が、一瞬にして蕩盡されて仕舞ふ樣な事があるは只事ではない、山内草木の保護を

怠りし結果に外ならないのである、中禪寺湖邊の別莊などは、漸々取壞つ可きである、現に予が先年日光深澤河原の岸上にて發見せし稀有の柳などは、此大水にて何處へか押し流され、其形を止めないのである、今にして一山の草木を保護せざれば、數年ならずして日光山の日光山たる眞相を亡失し了るは鏡にかけて見るが如きである。下略

白井理學士は日光の深林に就て樹木の爲めに主として保護の必要を惡ぜらるゝこと深きが如し、然れども余輩は却て高山の矮小なる植物概して草木の物に保護の必要を感ずること最も切なり。然れども我邦の中央又は地方の行政廳は此等の點に於て一向に無頓着なり。而して一般の世人は又更に夢にも斯かる事を心配するものにあらず、今は僅かに一小部分の專門家と道樂家か何の効能なく徒らに氣を揉むのみ、誠に歎ずべきに非ずや。動物虐待防止會は已に設立せられたり。植物保護の團結は何故に未だ成立せざるや。斯道の人何ぞ空しく手を拱して座視するや。

余輩は最後に高山植物に富める地方の人士に此點に關する忠告して此一編を終らんとす。特に山案内となり或は人夫となりて登山する者の如きに向ては、其地の有志より十分の注意を與へて、余輩の精神をして彼等に了解せしめられんことを切望す。高山植物の濫採すべからざるは前に陳ぶる所なれども、特に其地方の爲めに云はゞ、山上に植物の豐富なること、又且珍奇なる植物の存生し、及び百花の魁を延べたる如き美觀あるは、登山者多き原因にして、其土地の利益の源泉なり、濫に之を採り終に之を稀少にし又は絶滅せしめ、或は美觀を減ずるは要するに、登山遊客の減少を來たす直接の原因にして、土地の不利益を招くのみ。況んや高山の植物は概して繁殖遲く、發育も亦遲緩なり。一度御岳又は乘鞍のコマグサの如き狀態に陷らば、又終に回復の時なからん、又況んや或種類の植物にして悉く絶滅するに至らば、永遠に其地方の名物を失ひ遊客の足を他に轉ぜしむるに至らん。余輩は其地方の人士の最も深く此點に注意して、山上の植物の濫採を防ぐの方法を講ぜん事を切望す。

(K. J.)

登山の携帶品

伊東湖川

登山の準備に付ては、父母が愛兒に對するが如く詳細、日本風景論、日本山水論、日本山嶽志等に記載しあれば、我等が敢て記するも面耻しき事なれど、茲に余が經驗したる携帶品に關する一二の意見を述べて同志の實驗を願ふ。

圖囊は雜記帳、鉛筆、小刀、地圖、梯尺、齒磨粉、楊子、其他諸小間物を藏庫するに尤も輕便なるものにして、殊更測圖等をなす時は尤も輕裝に身仕度する事を得るなり。

石鹼は人々の好みに依れども、近來流行するアルボースは、消毒用に尤も功能ある故、露營等せし折蟲害ありし際は、同石鹼を使用せば速かに全癒し、又夏日不潔なる身體を消毒するに尤も適當なるものにして、又價格も廉價なり。外に昇汞ガーゼ繃帶の携帶は必要なりと思ふ。

天幕は其種類多けれども、今回戰役に軍人が使用せし、携帶テントは尤も便利に、且つ容積重量も非常に輕少にして、途中雨雪の襲來に逢ふ時は外套の代理をなし、野宿をなす折は假家の働きをし、休憩の場合には毛布となり、粗造なる屋下に臥す際は家具の代用となるなり。

單獨旅行の折には、炊事具の携帶は尤も必要にして、又地方に依りては、土人甚だ薄情にして渕水を踏むが如き思を爲す所あり、時によりては、自身自炊する方安樂にして、且つ趣味を覺え、行く〳〵今夜の食事は如何にせん、今朝の料理には何を選ばんかと思ふ間に、道は捗取り、疲勞は忘れ、目的地に着して、泔冽なる冷水に米を洗ひ、意の如く上等の飯を出かし、加ふるに土地々々の名物植物を料理して箸を下す時の心地は、金殿玉樓の中に坐食する人の夢にも知る能はざる處、而して此の百味の御式を一度に調理する器物は、是れ又征露の役に使用せし飯盒にして、重量も輕く、容積も小なる故、同志の旅行に缺くべからざるもの其使用法は軍隊テントと共に後日に讓る。

大囊は、防水用のズック製に限るものにして、其製造法は横を一尺二三寸に、高さを八九寸丈にして、平素は近來流行の學校小供の書籍入の如く、肩より或一方の腋下に下げ、其大囊の下部に又一つの革帶を付け

肩の重荷を救補し、若し是れに依て疲勞を感ずる時には、兵卒の背嚢の樣、變更さるゝ樣成し置けば至極便利なるものなり。

新高山探檢順路の高度及び氣温

本欄に掲げたる尾崎白水氏等と行き違ひに、昨年新高山に登山せられし農學士川上瀧彌氏が先月發行の日本園藝雜誌上に公にせられたる紀行中登山路に當れる各地の高度及び氣温表を、尾崎氏の紀行と對比する爲め左に轉載したり。　（一記者）

探檢地の高度及氣温

月	日	地方	海拔高	最低温度（攝氏）	午前六時温度（攝氏）	脈搏數
十月	二十八日	嘉義	一〇〇尺			
		公田庄	二、六〇〇	一八、五（六五）	一九、二	七二
十月	二十九日	鬼仔岑	四、二〇〇			
		竹脚社	二、三〇〇			
		達邦社	三、一〇〇	一三、八（五一）	一五、〇	七八
十月	三十日	梯子山	六、二〇〇			
		水山	七、七〇〇	六、九（四五）	八、九	八〇
		同頂	八、六〇〇			
		岩山	九、一〇〇	—	一四、五	八四
十月	三十一日	鹿林山	九、六〇〇			
十一月	一日	タータカ	八、〇〇〇	七、八（四六）	九、〇	七四
十一月	二日	西山	一一、五〇〇	五、二（四一）	八、二	八〇
十一月	三日	新高山	一三、一二〇			
		秀枯巒溪	一一、一〇〇	一、六（三五）	三、二（三七）八八	
十一月	四日	八通關	八、八〇〇			
		東埔溪	六、〇〇〇	四、八（四〇）	六、三	七二
十一月	五日	東埔社	三、〇〇〇			
		楠仔脚萬社	三、六〇〇	七、五（四七）	一〇、二	—
十一月	六日	牛轠轆	八七〇			

（備考）海拔高度は新高山頂の外は概數。温度の括弧内は華氏の温度にて寺本測候所技手の測定に係る。脈搏は只己れの分のみ掲げたり。

新高山登山の準備と携帶品

同じく川上農學士の紀行中より準備并びに携帶品の一節を拔萃して同好者の參考に供す　（一記者）

同行者の多少に依りて、準備に差等はあれど、山中野宿の覺悟にて、毛布の類は少くも三枚は準備せざるべからず。食料も豫定日數よりも、一二日の餘裕は用意なくて、萬一天候の都合にて無人の深山に困難すべし我の等登路は峰傳ひに上へ〳〵と登りしことゝて、兎角水には不自由勝にて、多人數の同勢故、少し許りの水にては炊事に供しがたければ、わざ〳〵急坂を半里ばかりも降りて野營せし折もありき。少人數の場合には、然て竹筒を多く用意して水を汲み取らせ、山上適宜の處に野宿する方便利なり。天然産の野菜類は、只一度欵冬を味ひたる外には、別に食料とすべきものなく、果物も至て少なく山中莓の種類、須具利の種類の外摘み食ふべきものなかりき。食物にて最も困りしは中食の辨當にて、粘着力なき飯は山中の食としては甚だ不適當なれば、多分の餅米を混ずるか、辨當飯だけは内地米を混ずるか、或は燒麩などの用意よろしかるべし。食料の準備中最も失策せるは、肉類は單に牛肉の大和煮のみを携へたることにて、是は時々生肉を得る折あるべしとの豫想誤れる爲なり野菜も根菜・球菜・玉葱などの用意必要なり。山中最も渇望するものは、此野菜類なり、胡麻鹽を携へたる人ありしが、非常の喝采を受けたりおのれは初雪と云へるかき餅の一種を携へたりしが、是は水なき地に野宿する折に燒き食ふにて意外の賞讃を得たり。

器具類にては別に不自由を感じたるものなきも、湯沸しの器具は、鐵葉製の粗品を携へたるは不覺の至りにて、是は必ず丈夫なる藥鑵の類を用意せざるべからざるものなり。バケツは汁も飯も盛られ、米もとがれ器具を洗ひ又桶代りともなる調法のものにて、洗面器にも汁鍋にも代用

雜報　○ヴエスヴヰアス山の大噴火

出來る便利の器なり。人の心附かぬ品にて非常に調法がられたるは臺灣草履二足を用意したることにて、一行中には此用意を見て不思議のものを持行くものよと思ひたるものありたれど、さて野宿の場所に草鞋を解きたる後、用便に出で行く折などに引掛け行くに都合よく、能き思附きぞとほめぬはなく、日々夜々の勤勞は天晴なりしことなりき。外に用意を要するは蠟燭立なり、贅澤を云へば限りもなきことなれど、なるべく簡單にして荷重にならぬ限りは不自由なく準備すべきものなり、草鞋は第一の武器なれば、念にも念を入るべきが、我等は餘りに念を入れ過ぎて麻にて作れるを携へたるが、之は滑り易くて不便なりき、足袋は強きが上にも強きものを、二三足は用意すべきなり。藥品は不足なかりしも下痢を留むる藥は携へたれど、下劑の用意なかりしは缺點にて、旅行は兎角に秘結し易ければ、之も忘るべからざるものなり。

雜報

ヴエスヴヰアス山の大噴火

伊太利ヴエスヴヰアス活火山は、四月六日より、熾に噴火をはじめ、山下の村落は素より附近の市街にまで大災を被らせ、十四日、始めて天地晦冥を去りて、漸く晴明となり、安んじて山容を仰ぎ見るを得、十六日漸く衰ふるに至りしといふ、當時伯林もしくは上海經由倫敦路透或は桑港電報として、諸新聞紙に散見したるものを一束して左に出だす。

（一）伊太利のヴエスヴヰアス山は熾に噴火しつゝあり多數の村落は燒石を被り頗る危險なり（六日）

（二）伊太利國火山ヴエスヴヰアス山に劇烈なる噴火あり山腹なる數個の村落は沸騰せる燒岩に包まれ多數の人命之が爲めに失はれたるの虞あり伊國政府は救濟を急ぎつゝあり（八日）

（三）ヴエスヴヰアス山の破裂は其後益〻甚しくポンペイ側の山頂崩壞し其反對の側に新火口を生ぜり重なる火口より赤熱せる岩石を噴出し三千尺の高さに達す子ープルスは避難民を以て充滿せり同地の家屋も噴火のため振動するを以て多數の人は夜間市内の廣場に集まりて警戒せり（九日）

（四）ヴエスヴヰアス山の噴火は實に凄まじき光景なり觀測臺を始め山頂に至る鋼索鐵道及び附近の村落は皆破壞されたり

溶岩はポンペー。トレ、アヌンチヤタ。トレ、デル、グレコ及びトルチノ等の各地に逆流しつゝあり（九日）

（五）ヴエスヴヰアス山の噴火は非常の壯觀なり子ープルス市に降り積れる灰は數寸に達し地震頻回なりサンギンセッペ及サンギオウアに於ては住民の死亡家屋の倒壞頗る多し深さ二十呎幅六百呎の溶岩は一時間半哩の速力を以てボルコトレカセー市に浸入しトレ、アヌンチヤタ亦其の害を破れり猶深さ七呎の溶岩はオタジヤナ地方に溢れ灰の深さ亦十二呎に及べり

アオスタ公は被害地の秩序を維持する爲め派遣されたる軍隊の指揮を掌れり

各汽船は皆萬一の場合に備へ居れり而して伊太利艦隊も子ープルスに急航を命ぜられしが、アオスタ公の指揮に屬すべし

又二隻の戰艦は目下トレ、デルグレコの住民を他に避難せしめつゝあり（十日）

（六）ヴエスヴヰアス山の噴火は稍〻緩慢となり『トレ、アヌンチヤタ』に向つて迸流せる溶岩も其後停滯し居れり又灰の子ープルス市に降落することも總みたるが昨夜は猶數回の地震ありたり

伊國皇帝及皇后兩陛下は危險を冒してヴエスヴヰアス山の附近に行幸あり折柄火焰空中に渦卷きて晝猶暗く呼吸塞迫して降り積りし灰は深さ一尺に餘り御料の自働車を進むるに由なき程なりければ御附の人々は此上の御深入然るべからずと勸止したるも兩陛下には些しも動じたる御氣色なく溶岩の一面に漂れる眞中に進みて途にアヌンチヤタ、モトジヤノ及び其他の村々を徧く御巡視あり御自身に食品分配の方法など御指圖ありと承はる（十一日）

（七）一時稍〻緩慢になりしヴエスヴヰアス山の噴火は再び激烈となれり死亡者の多きこと夥しく此處彼處の教會堂や民家の倒壞せるもの數知れず今も熾に硫黃の雨を降らし居れり

伊國皇帝は皇后御同伴にて目下子ープルスに在らせらる

佛國政府は救援の爲軍艦若干を派遣せり（十一日）

（八）ヴエスヴヰアス山は依然劇烈なる勢ひを以て噴火を繼續し同火山を中心とせる十里の間なる全村落を破壞しつゝあり同火山を西北に隔つること九哩なる子ープルス市も亦將に破壞されんとするの虞あり今朝同市の公市場たる大なる建築物は降積したる灰の重量に堪へずして崩壞し其慘狀恰も地獄の如く市場に賣買せる商人二百人は生ながら其下に埋められたり伊國政府は直に步砲兩兵數個聯隊を現場に急派し驚き恐れたる住民の救助に盡力せしめつゝあり昨日九死一生の危險を逃れられたる伊國兩陛下は今又人民の間を奔走して恐怖せる彼等を慰藉されつゝあり幾千の人命は已に失はる火山に近き全村落は其住民と共に熱湯の如き熔岩に包圍され今は只其中に埋られて死するの期を待つの外なき慘憺たる光景は筆紙の能く盡し得る所にあらず歐洲各國は擧て助力せん事を伊國政府に申込みつゝあり

（九）ヴエスヴヰアス山噴火の損害は五億法に上れり死亡者は總計八百名なり

降灰益甚しくポジアマリー村の如きは全部埋沒し溶岩は凝結し始めたり（十三日）

（十）伊太利皇帝皇后兩陛下は子ープルスに於て盛なる歡迎を受けられたり

同市の住民は今や恐慌度を失し群集は泣號して終日宗教的行列を市中に試み居れり、市民一般に假面を着け大眼鏡を懸け塵除外套を着する爲めネープルスは恰も自動車乘りのみの市街かと疑はる（自動車に乘りて疾驅する者此の如き裝ひを爲すが故にいふ）、最も降雨、降灰、降砂は昨夕より稍や減少したり（十三日）

（十一）子ープルスに於ては降雨降灰ともに全く止み空晴れ日輝きヴエスヴヰアスの山影も亦初めて見るを得るに至れり、市民亦漸く堵に安んじ常業に復しつゝあり（十四日）

雜報　○ヴエスヴヰアス山の大噴火

（十二）ヴエスヴヰアス山の噴火は日を追ふて沈靜に歸しつゝあり（十六日）

同山は有名なる活火山なれば、その噴火史を、四月十二日の『東京朝日』より切りて、左に轉載す。

爆發又爆發、非常の慘害を逞しくしつゝある有名の火山ヴエスヴヰアスは伊國西岸子ーブルス市の南方、子ーブルス灣の濱に在り其火山質なることは夙に古代地質學者の認る所なりしも附近の人民は固より之に氣付かん樣もなく紀元幾百年の頃よりか幾多の市街村落は其麓を回りて點在し山の斜面には豐富なる葡萄畑遠くネーブルス灣の水に其影を蘸して只風光佳麗なる山としてのみ世に知られたり、然るに紀元六十三年に至り一大地變漸く始まらんとするものゝ如く之より十六年間、附近の地震ふこと暫くも休ず一年は一年より烈劇を加へて數〻大損害を及ぼしたるが遂に七十九年八月二十四日に至り强烈なる數回の地震を先驅として史上未曾有の大爆發此山に起りたり史家此時の狀を描きて曰く

頻々たる地震は殆ど絶ゑ間なく一回は一回より其强烈を加へ終に轟然たる大爆聲と共にヴエスヴヰアス山は破裂したり此時の震動は平地に在る四輪車さへ爲に顚覆するかと思はるゝ許りにて所在の家屋は皆傾斜倒壞し海水は遠く退きて魚族空しく潛に殘り水蒸氣、噴石其他火山噴出物より成れる怪しの笠雲は山の項に立ち籠め電火閃々其間を縫ひて凄愴の狀いふ可からず燒石、灰の降ること雨の如く三日に至りて天地晦冥日色を見ず漸く晴れたる後に見れば數十里の遠き地方も山野皆雪の如き灰を以て蔽はれたり

と、其慘害の如何に大なりしやはポムペイ、ヘルクラニユム、スタビアの三市全く埋沒せられて倏忽の間に消滅したるを以て之を知るべし此破裂には熔岩の流出なかりしが如くなれども噴火に伴ひたる夥しき水蒸氣は變じて車軸を流すの雨となり噴出せる固形物の大量之に加はりて糊の如き泥水、山の斜面を流れ下れる爲め村落市街は埋められ多數の人畜は生ながら地獄に落つるの慘狀を現はせり古史家の記錄と現在の遺蹟を併せ考ふるに此時の破裂は謂ゆる間歇噴火にして時に起り時に休み其度毎に坑内に堆積せる巨額の噴出物を空中高く噴出したるものゝ如し

此恐るべき大破裂の後約一千五百年間ヴエスヴヰアスの活動は極めて微弱にして時に小噴火なきにあらざりしも殆ど云ふに足らず全山の緣日に深くして山麓の市街村落又々和平を樂めること第一回破裂前と等しかりき、去れど地殃は未だ全く靈さず、千六百三十一年の夏より地震頻繁、日を逐ふて强烈を加へ終に其年十二月十六日に至りて轟然爆發し噴石、降灰、泥の雨、恰も十五世紀前の慘狀を再現せるのみならず此時は十二三條の熔岩さへ西南の方向に流れて海に達せり人民は豫め警戒する所ありしに拘らず死者實に一萬八千に上れり以て其慘狀を想像するに足る、此以後ヴエスヴヰアスは又再び休止することなく且つ時々大活動を起せり千七百六十六年、一千七百七十九年の如き其最大なるものなり而して最近の大破裂は千八百二十二年に起りたり實に今より八十四年前なり

山は數回の破裂に依り屢〻其高さを變じたるも現在の最高所は四千二百呎を出でず、峰項分れて二部となり其北なるをモント、ソムマといふ其頃界線は半圓形の絶壁をして現に噴火口を有する圓錐峰を抱くの狀をなす蓋し此絶壁は現噴火口よりも遙に大なりし古代火口の壁をなせるものなり而して此の絶壁の南半部は其後の噴火に依りて吹飛ばされ今は其の位置に噴火口を有する圓錐峰現出して其噴出物の爲め舊火口の凹所は漸次埋沒しつゝあり學者の推論によれば本火島の高さは曾て現在の二倍に上りたるならんといふ、以て此島の活動力が如何に猛烈なるやを知べし、さなきだに火山少き歐洲各國民は爭ふて登山を試みるより千八百八十年山上に綱索鐵道を敷設し火口を距る百五十呎の地點まで登山客を運搬したるが今や全く破壞せられたること西電既に之を傳ふ蓋し今回の破裂は第一世紀に於けるポムペイ埋沒の時に及ばざるべきも十七世紀の破裂に比すれば慘狀或は甚だしきものあるがばし熔岩の流出の數里に及ぶが如きは本邦の史上に於ても亦未だ見ざる所とす。

八丈島沖の噴煙

直接には、山岳と何の干係もなきに似たれど、四月十四日、伊豆青ヶ島の南東、即ちベヨン子ース岩の北東十浬以内の所にて、海底電線布船沖繩丸の梶浦遞信技師は、熾なる白煙の噴出を認めたり、其時刻は午前十一時頃なりしも、午後に至り怒勢を加へ船員の概測にては千尺以上に達せしものゝ如く、翌十五日、同所附近を去りしまで、少しも歇まず、同岩二十浬内外のところまで、輕石の浮流するを見たりといふ、青ヶ島は、八丈島の南に在り、昔の俗傳に、所謂魚ヶ島にして、ベヨン子ース岩の如きは、草木の毛髪を被らざる新火山岩の、赤裸なる小島嶼勿論無人の荒土なりといふ、此一帶、富士火山糸に屬するに因みて、左に同技師が『東京朝日』の社員に語りたる談話といへるを掲ぐ。

沖繩丸が北緯三十一度五十九分、東徑百四十度七分附近に於て作業中同午前十一時頃該船の位置より西南に向ひて大約十ノット以内の場所、即ち青ヶ島より南微東約二十里に位するベヨン子ース岩の附近に當りて熾に白煙の噴出するを認めたり、船員の概測に據れば噴煙の直徑は大凡三百尺の上に出で空中に立昇る高さは風力及噴出力の如何によりて四百尺乃至千餘尺に達するものゝ如く白色の水蒸氣と想像せらるゝもの絶ゆる間もなく噴出する壯觀は到底筆舌の及ぶ所に非ず、其噴煙たる如何にも勢よく騰上して更に絶ゆる暇なく偶〻小休ある折の外は正面なる岩礁の如き全く白煙に覆はれ漠々として其所在をすら辨知すべからず、斯くて翌十五日同方面を距りしまでは噴煙唧かも歇むことなかりき、此噴出は果して何時の頃より始まりしやを知るに由なけれど去四日同方面に赴きし折は更に斯る現象を認めざりしより推測すれば其後突如として起りしや疑ひなし、一行皆珍しさの餘り近きても見たき思をなしたれど、操業の都合上遂に近づくこと能はざりしが噴出の個所より盛に輕石を浮流するを認めぬ、其浮流する幅員は大約二哩に亘り潮流に從ひて東方に向ふ、之を望めば恰も海岸に白布を展べたるが如く又無數の白泡を浮かべたるに似たり、之が大さは徑一尺の上に出づるものあれば微細にして灰の如きものありて區々一定せずと雖も夥多の氣孔を有するは皆一なり云々

尚ベヨン子ース岩は大なる三個の岩礁及數個の小礁より成り何れも烏帽子の如き形をなせり、其最も高きものと雖も海拔三十尺に充たず素より草木の之に生長するものなく時に洋中を飛翔する鳥類の群集休憩するを認むるのみ、伊豆七島より同方面を經て小笠原島及其以南の各島嶼に至る間は所謂富士帶の火山脈に當れど時に火山の噴出を免れず、這回の如き現象は屢起る所ならんも此海上を航行する船舶さへ稀なる程なれば多くは人の知る處とならずして終るならんか、現に昨夏硫黄島附近に斯る出來事ありて一の新島さへ生じたるも日ならずして流失せしは尚世人の耳目に新なる所なり要するに海中噴火なるものは時々出現する次第なれども陸上の火山と異なり吾人に災害を及ぼすこと極めて稀なるは幸ひなり

附記す、東京府廳は、右の報告に接するや、直に大島島廳の報告を徵したるに、同島附近には何等の異狀を認めざりし旨、四月二十一日に答電ありたりといふ。

本年の富士初登山

英國人ヤングなる人、四月二十五日、午前四時須走

を發して、富士山八合まで登り、午後三時須走に歸着したり、是本年の初登山なり、同氏の語るところに據れば、八合目附近は積雪數丈にして、日中の氣温華氏十六度、携帶食品は皆氷結したりといふ、憾むらくは大和民族中、この種の好漢を出ださず、名山坐がら、毎に、先づ外人の靴底に踏破さるゝを傍觀するを。

淺間山の鳴動及び晩雪

五月七日の朝、信州淺間山鳴動せり、翌八日の夜、上毛及び信州と境を接する諸山に、降雪あり、上毛のものは、吾妻郡に甚だしく、草津温泉附近の諸山は、積雪五寸以上に及び、白根山は白更に一白を加ふ、八日の朝、北信地方の人は、淺間山を始めとして、同山脈一帶に降雪ありたるを發見して奇異のおもひをせりといふ、蓋し淺間山の終雪は、平均四月九日にして、最晩雪は明治三十九年五月一日なるに、本年上記の雪は、更に晩るゝこと九日間、實に未曾有の晩雪なればなり。

近江富士の水晶

滋賀縣第二中學校教諭、岡本牧夫氏は、五月のはじめ、近江國野州郡三上村の三上山、別稱近江富士の山麓に、水晶の鑛脈を發見し、調査に着手せりといふ、因にいふ、この山は「富士」の名を冒せども、火山にあらず、石英質の岩地が、琵琶湖より分離し、上部破壞して、偶ま圓錐形を作りたるものなれば、水晶の如き鑛物を、產することは、有るべしと。

富士山の夏裝

蕉天苔地、滿目を綠盡する中に、流石に時知らぬ富士の高峰は、雪色初夏の空に寒く、五月九日には鶯籠坂峠に降雪あり、麓の卯の花も色を失ふ許にて、寒暖計さへ十五六度に降下せし程なりしが、十二日午後十一時頃より、温暖俄に加はり、西南の風そよ吹くまゝに、高峰の雪も夏の領となり、昨日迄の寒冷忘るゝが如く、寒暖計も五十七八度より、六十度内外を示すに至り、御殿場地方は六十七八度となれり、十三日は終日の暴風雨、富士絶巓の冬と、山麓の夏と、相鬪ふかの想ありしが、夏や打勝ちけん、夜の十一時には雨全く止み、十四日の朝日花やかにさし昇る高峰を眺むれば、去る九日の降雪を終として、滿山の雪裳いつしか其脚部より褰げられしやうに消え、七合目以下六合目

に至る間は、班消の雪僅に冬の色を殘せるのみ、この地の土俗に富士の農男、農馬、五月女と稱する奇觀あり、こは六合目あたりの雪消に伴ふものにて、宛然農夫の馬を追ひ、五月女の笠を被りて畑を行き、苗を植ゆるの奇觀を現出するを、例年の常とせるに、本年は兩三日來の西南風、一時雪を消したる爲、つひにその奇觀を見ずして止みぬ、富士の雪消は例年より二十日ばかり早しと、土人は語れり、やがては登山の期ともなるべく、一年を雪に包まれし山の肌、凉しき夏の想はもの珍らしく打眺めらるゝと、同地よりの通信ありき。（五月十五日報知新聞）

會報

二支部の設立

本年三月中、會則第八條に基き、本會に於て承認を與へたる、新潟横濱二支部の規則、左の如し。

山岳會新潟縣支部規則

第一條　當支部ハ山岳會新潟縣支部ト稱シ山岳會員ニシテ新潟縣内ニ居住スルモノヲ以テ組織ス

第二條　當支部ノ事務所ハ新潟縣三島郡深戈村大字深澤第五十九番戸高頭仁兵衛方ニ置ク

第三條　當支部ニ左ノ役員ヲ置キ支部全般ノ事務ヲ處理セシム

支部長　一名
幹事　二名
會計　一名

第四條　當支部ハ所屬會員ヨリ會費ヲ受領シ又所屬會員ニ配付スル雜誌ノ取次ヲナシ其他諸般ノ事務ヲ取扱フベシ

又支部會員ニシテ團體登山ヲナストキハ相當ノ便宜ヲ與フベク又或

時ハ知名ノ士ニ請フテ登山講話ヲナスコトアルベシ
第五條　當支部ニ屬スル會員ハ當支部ニ關シテ建議スル權利ヲ有ス
第六條　當支部ニ屬スル會員ニシテ住所移轉又ハ改姓改名ノ節ハ其部度必ズ支部事務所ヘ通知スベシ
第七條　本規則ハ當支部所屬ノ會員三分二以上ノ贊成ヲ得ルニ非レバ改正スルコトヲ得ズ

山岳會横濱支部規則

第一條　當支部ハ横濱市在住ノ山岳會員ヲ以テ組織シ、山岳會横濱支部ト稱ス
第二條　當支部ノ事務所ハ、當分横濱市本町四丁目六十七番地高野鷹藏方ニ置キ、當支部ニ屬スル一切ノ庶務ヲ處理セシム、
第三條　當支部所屬ノ會員ハ宿所移轉、改姓改名ノ部度必ズ事務所或ハ委員ニ通知スベシ
第四條　本規則ハ支部委員ノ合議ニヨリ改正スルコトヲ得

横濱支部記事

○委員の選擧　會則第二條により委員二名を選擧し高野鷹藏小島久太當選す

新潟縣支部記事

會則に基き選擧せられたる役員左の如し、

支部長　高頭仁兵衞
幹事　長谷川玄三郎
同　大平晟
會計　山崎彦七

會員動靜

○五月中旬、伊東元帥、東郷大將、上村中將、諸豪の相携へて長野市善光寺の大法會に臨めるは、諸新聞紙の報道せる如くなるが、當時三將軍は、長野中學校へ車を寄せられ、同校を巡覽せられたるが、同校敎諭にして、本會々員たる志村烏嶺氏は三將軍に自身培養の高山植物を一覽に供し、三將軍の懇望に應じて伊東元帥には、白馬岳葱平附近にて氏が採集せられたるキバナノコマノツメを、東郷大將には、同山の絶頂に近きところに生ぜるムシトリスミレを、上村中將には、葱平にて採集せる、ハゴロモグサを贈呈せられたるに、三將軍は、滿足の意を表して、歸館せられたりといふ。

○本會特別會員、子爵松平康民氏は、例年の如く自家栽養の、山草野花を、本郷龍岡町の自邸に陳列せられ去五日九日の午後、及び十日の午前午後、知友もしくは知友の紹介ある同好者の縱覽に供せられたり。

○會員小島久太氏は、六月中自著『不二山』の第四版を發行せらるゝ筈、同書は某氏新作の繪畫及び駿東方面不二裾野の紀行文を新に增補すべしと。

○會員武田久吉氏は、六月初旬より、植物採集旅行として某方面に向ひて、出發せられしと。

○會員高頭式氏は、自著『日本山嶽志』の訂正に着手せられ、本號より別附錄として、揭載しはじめたるが、爾後毎號約八頁の增補を加ふべしと。

○會員田山綠彌(花袋)氏は、六月中に自著、紀行文集『旅姿』を、東京隆文館より發行せらるべし。

○會員清澤巳末衞氏、同遠藤章二兩氏は、前後相踵いて、米國シアトルへ、林業その他の視察のため、渡航せられたるが、遠からぬうち、同國ロッキイ倶樂部(ロッキイ登山會)の組織、事業、現在等に就き、調査を遂げられ、參考として、本會に報告せらるゝ約あり。

次號の本誌

近時學者の注目を惹くに至りたる、信州白馬嶽は、本號に、同山に該博なる志村氏の記文を乞ひ得て載せたるが、殊に本號より、端緒を開きたる、武田、河田兩氏の紀行文は、次號に入りて、益〻精緻を極盡くすべし、同山の壯嚴なる寫眞と兩々相待ちて、この劫初以來の神祕境を、世間に縱目せしむるに至るべし、なほ志村氏は、特に本誌のために、戸隱山を撮影して、寄贈せらるゝの約あり、その他赤石山の記、新高山紀行の續稿をはじめとして、從來世に知られざりし守門嶽を、本號にて精細に紹介せられたる大平晟氏の、中越探山紀行も出づべく、亦地質專門諸大家の寄稿を乞ひ得て、本誌に光彩を添へんとす。

會員諸君に

歐洲のアルプス雜誌を、通覽するに、會員某は、何の名山に登り、云々の新路を發見し、何種の新植物、或は動物を發見せらるゝといふ類の、記事多し、かくの如きは、望むべくして、期せられざるところなるが會員諸君の動靜、及び登山の通知の類は、兩三行にても可なれば、成るべく惠まれむことを乞ふ、是れ蓋しその通知を本誌に掲げられたるによりて、何山には何氏の登られたるといふこと知り得られ、後の同山岳研究者のために、相互通信の交換を開く便にも、供し得らるべければなり。

同時に本誌は、全會員諸君に向ひて、公開せられたる山岳專門雜誌なれば、寫眞及び文章(長短如何を問はず)の寄稿は、切に望むところなり、いつも同じ顏觸れをのみ見るといふ譏は、寧ろ會員諸君全體の上にかゝれるものなることを諒し、奮發以て、微力の編輯員を、助けられんことを乞ふ。

◉山岳會規則

第一條　本會ヲ山岳會ト名ヅク

第二條　本會ハ山岳及ビ山岳ニ隷屬セル森林湖沼溪流高原瀑布植物動物岩石天象等ニ關スル科學文學藝術其ノ他一切ヲ研究スルヲ以テ目的トナシ且ツ全國ニ登山ノ氣風ヲ奬勵シ一般登山者ニ便宜ヲ與ヘンコトヲ期ス

第三條　本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ毎年三、六、十月ニ機關雜誌山岳ヲ發行ス又時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアルベシ

第四條　本會ハ毎年五月、十一月ノ兩度ニ集會ヲ開ク尙ホ必要ノ場合ニハ第五條所定役員ノ決議ニヨリ臨時集會ヲ開クコトアルベシ

第五條　本會ハ會長ヲ戴カズ左ノ役員ヲ置キテ諸般ノ事務ニ當ラシム

幹事。本會ニ關スル一般ノ事務ヲ處理ス

編輯員。本會雜誌ノ編輯ヲ司ル

前記役員ハ人員ニ制限ヲ置カズ又互ニ兼ヌルコトヲ得任期ハ二年トナシ就任ハ特別會員ノ選擧ニヨルモノトス

第六條　本會ハ本部ヲ東京市內ニ置ク

第七條　本會ハ相當ノ會員數ヲ有スル地方ニ支部ヲ設ケ該支部會員ノ選擧セル委員ヲシテ支部ニ屬スル一切ノ事務ヲ處理セシム

第八條　支部ニ關スル規則ハ支部委員之ヲ起草シ本會ノ承認ヲ經テ定ムルモノトス、支部ノ記事ヲ山岳ニ掲グルコトヲ得

第九條　本會會員ヲ分チテ正會員、特別會員及ビ名譽會員ノ三種トス

特別會員ハ本會ノ事務ヲ贊助シ次條ニ定ムル會費ヲ納ムルモノトス名譽會員ハ本會役員ノ推薦ニ係ハルモノトス

第十條　正會員ハ會費年金壹圓トシ特別會員ハ年金參圓以上トナシ何レモ前納スルモノトス名譽會員ヨリハ會費ヲ徵收セズ

第十一條　本會會員タラント欲スル者ハ入會ノ際住所姓名ヲ詳記シ其年度ノ會費ヲ添ヘ書面ヲ以テ事務所ニ申込ムベシ　但シ紹介ヲ要セズ

第十二條　本會會員ニハ山岳毎號一部ヲ頒付ス又本會發行ノ諸出版物ハ實價若クハ無代價ヲ以テ頒付スルコトアルベシ

第十三條　本會會員ハ集會又ハ臨時集會ニ出席シ演說講話ヲナシ又會場ニ會員外ノ知友ヲ同伴スル事ヲ得

第十四條　本會會員ハ本會會務ニ關シテ建議スルコトヲ得

第十五條　本會會員ハ役員ノ承諾ヲ經テ本會所藏ノ圖書ヲ借覽スルコトヲ得

第十六條　本會會員ニシテ本會ノ體面ヲ傷クル行爲ヲナシ若クハ本會員ノ資格ナシト認メタル時ハ役員ノ決議ヲ經テ退會ヲ命ズベシ

第十七條　本會會員ニシテ住所ヲ移轉シ又ハ改姓改名ヲナセシ時ハ其ノ部度必ズ通知スベシ

第十八條　本會會員ニシテ會費ヲ納付セズ或ハ滯納シタル者ニハ雜誌ヲ發送セズ二回以上ノ督促ヲ受ケテ猶納付セザル時ハ會員名簿ヨリ削除スベシ

第十九條　退會ヲ欲スル會員ハ其旨必ズ事務所ニ書面ヲ以テ申出ヅベシ

第二十條　本會ノ規則ヲ變更スルニハ本會役員及特別會員ノ協議ニヨリ出席者ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ以テ之ヲ議定ス

第二十一條　本會ハ既納ノ金品ヲ一切返附セズ

◉會　告

一　會費ハ爲替ニテ拂ヒ込マル可ク拂渡局及ビ受取人ヲ無指定ノ事
爲替拂込ノ便ナキ地ニ限リ郵券代用ヲ許ス　但シ壹錢切手ニテ一割增ノ事

一　本會ニ宛テタル書信ニシテ返信ヲ要スルモノハ必ズ相當返信料ヲ添付スベシ然ラザルモノニハ一切返信ヲナサズ

一　本會事務所ハ當分東京市日本橋區室町三丁目十一番地城數馬方ニ置ク

一　本誌廣告ハ如何ナル種類ニ拘ハラズ總テ山岳ニ關スルモノニ限ル

一　廣告料一行金貳拾錢、半頁金參圓、一頁金五圓

◉投稿規定

一投稿者　何人モ隨意トス

一記事　本會規則第一條ニ規定セル種類ノ記事、論說雜錄等

一用紙　原稿ノ長短ヲ問ハズ半紙大ニ限リ每篇用紙ヲ更ムベシ

一字詰　半紙半枚ニ天地左右ヲアケ十二行二十四字詰トス

一字體　楷書ニテ淨書スベシ、假名ノ種類ハ隨意

一注意　原稿中ノ地名ニハ可成片假名ヲ振ルベシ、又漢字不明ナル地名ハ假名ヲ用ヰ、若シ當字ヲ用ヰル場合ニハ括弧內ニ其ノ旨ヲ記入スベシ郵稅先拂及ビ不足ノモノハ受領セズ

一文體　隨意

一姓名　誌上ノ匿名ハ差支ナシト雖モ原稿ノ一隅ニハ必ズ住所姓名ヲ明記スベシ

一掲載　原稿ノ採否掲載ノ遲速等ハ本誌編輯者ノ決定ニヨル又原稿ハ一切返戻セズ

一原稿寓集所　橫濱市西戶部町八百九十八番地小島久太方ニ置ク

明治三十九年六月十一日印刷
明治三十九年六月十五日發行

定價金參拾五錢

新潟縣三島郡深才村大字深澤
發行兼編輯者　高頭仁兵衛

東京市日本橋區兜町二番地
印刷者　金澤求也

東京市日本橋區兜町二番地
印刷所　東京印刷株式會社

東京市日本橋區室町三丁目十一番地城方
發行所　山岳會事務所

東京市神田區表神保町
發賣所　東京堂